ISインフィニット・ストラトス ボンゴレを受け継ぎし者

ホリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳインフィニット・ストラトス　ボンゴレを受け継ぎし者

【Ｎコード】
Ｎ２４５１Ｕ

【作者名】
ホリ

【あらすじ】
女性にしか動かすことができないＩＳそして世界で初の男性ＩＳ操縦者織斑一夏そこにさらにもう一人のＩＳ操縦者が！

ＩＳ学園入学（前書き）

これが初めての作品です。
文才能力無いですけど温かく見守ってください。

ＩＳ学園入学

第１話　ＩＳ学園

「それではＳＨＲを始めます」

今挨拶したのが一年一組副担任山田真耶先生だ。

しかし女子の視線は先生よりも、　世界で初めてＩＳを動かした男織斑一夏と二人目のＩＳ操縦者黒羽海斗に視線が集中している。

「織斑君…織斑一夏君！」

「はっ、はいっ」

「今自己紹介で織斑君の順番なんだけど…自己紹介してくれるかな？」

「わ、分かりました　…織斑一夏です。よろしくお願いします」

すごい静けさ『もっと何か喋って』とみんな思ってるな…

「…以上です！」

がたたっとこける女子数名

期待しすぎでしょ…

パァンッ！

良い音鳴ったなと思ってたら

「げえっ！　関羽！」

パァンッ！

再び叩かれた……馬鹿？

「誰が三国志の英雄か馬鹿者」

俺と同じこと考えてる…

「諸君、私が織斑千冬だ。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが私の言うことは聞け。いいな。」

一見暴力発言に聞こえるけど、生徒のためを思って言ってるんだよな。

そんなこと思ってるとクラスから黄色い声援が響いた。

「「「「「キャーーーー」」」」」

「千冬様、本物の千冬様よ」

「ずっとファンでした」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです。北九州から」

北九州ねぇ～外国からきた人もいるけど

「…毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。それとも何か？私のクラスに馬鹿者を集中させてるのか？」

本当にうっとうしそうだな

「で？挨拶も満足にできんのか？お前は」

「いや、千冬姉、俺は――」

パァンッ！これで三回目だね。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

また、クラスの女子が騒ぎ出した

…いい加減黙れよ

「そこの男子、その殺気をどうにかできないのか？」

「すいません」

「では、自己紹介を続けろ」

順番が回ってきて

「黒羽海斗。よろしく。」

「お前も満足に挨拶出来ないのか？」

「他に話すことはないからね」

それから皆の自己紹介が終わって

「ＳＨＲは終わりだ。諸君等にはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

すごいこと言うね。まあ、それほど生徒を大切に思ってるんだろうね。

まあ、頑張りますか

ＩＳ学園入学（後書き）

次はオリ主の設定です

主人公とＩＳ設定（前書き）

主人公とＩＳの説明です

主人公とＩＳ設定

～オリキャラ設定～

名前　黒羽　海斗【くろば　かいと】

年齢　１６歳
身長　１７０ｃｍ

体重　５８ｋｇ

容姿　家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮの雲雀　恭弥＋右目に眼帯
　女装させるとすごく似合う

性格　基本あまり喋らない。　キレると一人称が「僕」になる

好きなもの　強い人　小動物　小動物のような人（恋愛的な意味ではない）　自分が仲間と認めた人

嫌いなもの　弱い人　うるさい人　女装

所持品　ＩＳ専用機　トンファー
寮の部屋では弓矢と時雨金時がおいてある

ＩＳの説明

専用機　ボンゴレ（第６世代）武装　大空　嵐　雨　雷　晴　雲　霧のボックス
ボンゴレリング　ボンゴレボックス

鉄砕牙　弓矢　破魔札

大空のボックス　Ｘグローブ
天空ライオン（レオネ・ディ・チェーリ　バージョンボンゴレ）名前はナッツ
嵐のボックス　；　嵐猫Ｖｅｒ．Ｖ　＆ａｍｐ；　ＮＥＷ　ＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ（ガット・テンペスタ　バージョン・ボンゴレ　アンド　ニューシステーマ　シーエーアイ）　名前は瓜
ＳＩＳＴＥＡＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．（スィステーマ　シー．エー．アイ）　「Ｃ．Ａ．Ｉ．」とは「Ｃａｍｂｉｏ　Ａｒｍａ　Ｉｓｔａｎｔａｎｅｏ（＝瞬時武装換装システム）」の略。獄寺の持つ５つの波動（嵐・雨・雷・雲・晴）による炎を組み合わせ、各属性に対応した１６個の匣を戦況に応じて臨機応変に使い分ける戦闘スタイル。

大きなリング状の防御用匣。嵐と雨のリングで開匣している。骨を模したパーツで構成されたリングフレームの中央に透明な障壁が張られているシールド。遠隔操作によって空中を浮遊し、あらゆる方向からの攻撃に対処できる上、フレームを複数重ねることで強力な攻撃にも対応することができる

赤炎の矢（フレイムアロー）
　髑髏をあしらった腕固定型火炎放射器。ダイナマイトを髑髏の口に入れ、口を絞ればエネルギーが集束されレーザーを放つことができる。
＊　嵐＋晴　晴属性の「活性」のよって弾の速度が不規則に加速していく。ちなみに、この組み合わせだけは炎ではなく弾丸のようなものを放つ。名称は「フレイムランチャー」
＊　嵐＋雲　雲属性の「増殖」のよって枝分かれしていくフレイムアローを発射する。名称は「フレイムインフレーション」

＊　嵐＋雷　雷属性の「硬化」によってフレイムアローの破壊力を強化する。名称は「フレイムサンダー」

雨のボックス　；　雨燕Ｖｅｒ．Ｖ（ローンディネ・ディ・ピオッジャ　バージョンボンゴレ）名前は小次郎；　雨犬Ｖｅｒ．Ｖ（カーネ・ディ・ピオッジャ　バージョンボンゴレ）名前は次郎

時雨金時（しぐれきんとき）　普段は鋼鉄製の竹刀だが、時雨蒼燕流で抜いた時のみ刀身がつぶれ真剣に変形する特殊な日本刀

時雨蒼燕流（しぐれそうえんりゅう）

＊　一の型　車軸の雨　－　攻式。刀を両手で持ち突進し相手を突く。車軸の雨とは、雨脚が強い大粒の雨のこと。

＊　二の型　逆巻く雨　－　守式。刀で水を巻き上げて姿を隠し、体をかがめることにより攻撃をかわす。

＊　三の型　遣らずの雨　－　攻式。刀を手以外で操る奇襲技。

＊　四の型　五風十雨　－　守式。相手の呼吸に合わせて攻撃をかわす。

＊　五の型　五月雨　－　攻式。通常の剣術で言うところの中斬りを放ちながら刀を素早く持ち替え、相手の守りのタイミングを狂わせる変幻自在の斬撃を放つ。

＊　七の型　繁吹き雨　－　守式。刀で水を回転するように巻き上げ攻撃を防ぐ。

＊　八の型　篠突く雨　－　攻式。相手の懐に飛び込み鋭い斬撃で突き上げる。

＊　九の型　うつし雨　－　攻式。逆巻く雨の応用で、巻き上げた水に自らの姿を映して相手の注意を引き、その隙を突く。

＊　十の型　燕特攻（スコントロ・ディ・ローンディネ）　－　特式。匣の雨燕を前衛に構え、水をえぐるように巻き上げながら突進する。

＊　十一の型　燕の嘴（ベッカタ・ディ・ローンディネ）　―　特式。雨の炎を纏った時雨金時で、連続で鋭い突きを放つ

＊　総集奥義　時雨之化　―　全てのまとめの型。変則四刀と時雨蒼燕流を使い、相手の攻撃全てに沈静の効果を持つ雨の炎を当てることで、攻撃のスピードを停止に近づけることが出来る。

雷のボックス　雷牛Ｖｅｒ．Ｖ（ブーファロ・フールミネ　バージョン・ボンゴレ）名前はファル

雷角（エレットゥリコ・コルナータ）
電撃角２本の角を頭に装着してから電撃を角に帯電させてから突進する。

晴のボックス　晴カンガルーＶｅｒ．Ｖ（カングーロ・デル・セレーノ　バージョン・ボンゴレ）名前はガリュウ
晴縄　晴の炎により強化された縄で、相手に巻き付けて動きを数秒間封じる。

雲のボックス　雲ハリネズミＶｅｒ．Ｖ（ポルコスピーノ・ヌーヴォラ　バージョンボンゴレ）名前はロールトンファー

霧のボックス　霧フクロウＶｅｒ．Ｖ（グーフォ・ディ・ネッビア　バージョン・ボンゴレ）名前はムクロウ
三叉槍

ＩＳの色は黒
スラスター等は無く飛ぶときは炎の噴射で飛ぶ。
死ぬ気の炎はいくら使ってもシールドエネルギーは減らない
ワンオフ・アビリティー

形態変化（カンピオ・フォルマ）

主人公とＩＳ設定（後書き）

ヒロインに関しては2、３話後に書きます

隣の席の女の子（前書き）

オリヒロ登場！

隣の席の女の子

第2話　隣の席の女の子

一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わって休み時間…何だけど女子たちの視線が相変わらずうっとうしい

「あの、今よろしいですか？」

「ん？君は？」

話し掛けてきたのは隣の席に座っている女の子

名前がわからない…

「私の名前は柊　涼子です。　ＳＨＲの時に自己紹介したんですけど……」

「悪いね自分のことに精一杯だったから。それで、俺に何か用ですか？柊さん」

「涼子でいいですよ。用と言うほどの事ではないんですけど。席が隣ですから挨拶でもと思いまして」

「そう、よろしく。俺は黒羽　海斗呼び方は好きにしていいから」

「はいっ！よろしくお願いします。　ふふっ」

「何がおもしろいの？」

「いえ怖い人だと思ってましたから」

？怖い人？
俺が疑問に思ってたらそれを悟ってか彼女は
「だってＳＨＲの時に殺気を出してましたから海斗さんて怖い人だと思ってました」
あぁ～そういえば殺気出したな～
「その時はごめんね。視線がうっとうしかったからついね」
「そうだったんですか」
キーンコーンカーンコーン
二時間目の開始を告げるチャイムだ。
しかしＩＳ学園でもチャイムは同じなんだな
パァンッ！
なんかまた叩かれてるし
「とっとと席に着け、織斑」
「……ご指導ありがとうございます」
織斑　一夏後何回叩かれるのやら

隣の席の女の子（後書き）

次は一夏と海斗との会話
そしてあの代表候補生が！

女尊男卑（前書き）

代表候補生セシリア・オルコット登場

女尊男卑

第3話　女尊男卑

「――であるからして、ＩＳの基本的運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

まあ、ここら辺は問題ないな

「海斗内容ちゃんと理解してますか?分からないところがあれば教えますよ?」

涼子が授業について行けているか聞いてきた

「大丈夫、問題ないよ」

「そうですか。もし分からないところがあれば聞いてください」

優しいね彼女は

「ありがとう」

「織斑君わからないところがありますか?」

いくら何でもこれくらいは分かるでしょ…

「あっ、えっと…」

あれ?もしかして織斑一夏分からないのか?

「分からないところがあれば聞いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

「先生!」

「はい、織斑君!」

「ほとんど全部分かりません」

はい?織斑一夏全部とはどう言うことだ?

「ぜ、全部ですか?　黒羽君は分からないところありますか?」

「問題ないよ」

この位は出来て当たり前だからね

「……織斑、入学前の参考書は読んだか?」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パァンッ!

これで五回目…

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

捨てる前によく確認しないから

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい、やります」

「黒羽、織斑に分からないところを教えてやれ」

「人に教えるのは苦手です」

「教えられる範囲でいい」

「わかりました」

まさか俺にもくるとは…

二時間目の休み時間織斑一夏がこっちに来た

「えっと、はじめまして君が黒羽海斗だよな。俺は織斑一夏よろしくな」

「よろしく」

「それにしても海斗、災難ですね」

「もういいよ。別に」

「私も手伝いますから」

涼子は本当に優しいよな

「君は？」

そういえば織斑一夏は知らないんだっけ

「私は柊　涼子です。ＳＨＲの時に自己紹介したんですけど……」

「すまん、聞いてなかった」

「まあ、いいですけど」

一夏と涼子が挨拶を交わしてると

「ちょっと、よろしくて？」

「ん？」

「やだ」

「挨拶の途中ですのでまたあとで」

上から一夏、海斗、涼子と返事をする

話し掛けてきたのは金髪の長い髪の女性さらに貴族そして女＝偉いが当たり前みたいな感じの女性だった

「まあ！何ですのそのお返事。私に話し掛けられるだけでも光栄なのに拒否までするなんて失礼極まりませんわ」

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「俺は興味すらないよ」

「私を知らないで、興味すらないとは言ってくれますわね。私は――」

「セシリア・オルコットイギリスの代表候補生さらに入試主席の人ですよ」

「あら、説明ありがとうございますわ」

「なあ代表候補生てなんだ？」

がたたっ　聞き耳を立てていた女子数名がこけた

「一夏、咬み殺されたい？」

「は？え、いや本当に知らないんだよ」

「代表候補生とは国家代表ＩＳ操縦者、その候補生に選ばれた人ですよ。いわばエリートですね」

「そう！エリートなのですわ！」

また復活したよ。

そのまま静かにしててほしかったな

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」
「その幸運に感謝しなきゃね」
「この一年幸せに送れそうですね」

「……馬鹿にしてますの？」

「大体あなた、ＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園には入れましたわね。」

そりゃ男なんだから入れるだろ

「男でＩＳを動かせると聞いていましたのに期待はずれですわ」

「俺に何か期待されても困るんだが」

「まあでも？あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ。」

「その必要はありません。一夏には海斗と私が教えますから」

「それでも教える範囲などたかが知れてますわ。私は入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートなのですから」

「入試ってあれか？ＩＳを動かして戦うって奴」

「それ以外に入試などありませんわ」

「俺も倒したぞ教官」
「俺も倒したよ」
「私も倒しましたよ」

「私だけと聞きましたが？」

「私は非公開ですから」

非公開？何があったんだ？

「っていうことは女子ではってオチか」

「あ、あなた方も教官を倒したって言うの！？」

「ま、まあ、落ち着けよ、な？」

「こ、これが落ち着いていられ――」

キーンコーンカーンコーン

あ、チャイムだタイミングよくなったな～

「っ……！　また後で来ますわ！　逃げない事ね！　よくって？」

「逃げないけど、もう関わらないで」

そう言ったら睨まれた　…怖くないけどね

女尊男卑（後書き）

涼子の性格が書きにくい

決闘の約束（前書き）

主人公とＩＳの設定を少し直しましたワンオフのところ書いてません
んでした

決闘の約束

第４話　決闘

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する。」

この時間は山田先生ではなく織斑先生が教壇に立っている

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

（海斗は代表者になるんですか？）

（いや、やらないよ。あのイギリスの代表候補生はやるんじゃない？　涼子はやらないの？）

（私はやりませんよ。面倒くさいですから。でも、セシリア・オルコットならやるかもしれませんね）

「では、誰かやる奴はいないか？」

「はいっ。織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います」

一夏かまあ、この調子でいけば俺には来ないな。

「候補者は織斑一夏……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて他にはいないのか？」

無駄だよ諦めなよ一夏

「なら俺は海斗を推薦します！」

なんだと？

「一夏咬み殺されたい？」

「海斗諦めましょう。選ばれたからには何をいっても無駄です」

「柊の言う通りだ。選ばれたからには責任を持て」

一夏は恩を仇で返す気なのか？

俺が一夏に向けて殺気を出していたら

「納得いきませんわ！」

例のイギリス代表候補生が立ち上がった。

今更遅いよ、何で最初に立候補しないの

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥じさらしですわ！　わたくしにこのセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

（ねえ、涼子この演説聞かなきゃいけないの？）

（まあ、無視すればいいんじゃないですか？）

（耳障りなんだよね自分が選ばれて当然という態度）

（我慢ですよ、海斗）

「実力からいけば私がクラス代表になるのは必然。いくら入試で教官を倒したからと言っても私には足下にも及びませんわ」

（ごめん涼子、もう限界）

（ち、ちょっと海斗待ったです！落ち着いてください！）

「だったら最初から自分で立候補すればよかったでしょ。　何？自分が代表候補生だから推薦されると思っているほど馬鹿なの？」

「馬鹿とは言ってくれますね。文化としても後進的な国なのによくそんな口がきけますわね」

「イギリスにも大したお国の自慢なんか無いだろ？　不味い料理で何年覇者だよ」

一夏も限界だったみたいだね。

涼子は隣で『もうどうにでもしてください』と言う感じだしね

「あっ、あなたねえ私の祖国を侮辱しましすの！？」

「先に日本を侮辱したのは君だよ？自分のことは棚に上げるんだ」

「海斗…君じゃなくてセシリア・オルコットですよ」

「僕は彼女のような草食動物には興味ないからね」

「草食動物とは言ってくれますわね…決闘ですわ！」

一夏と僕を指さしてたからかに宣言した

「ああ、いいぜ四の五の言うより分かりやすい」

「咬み殺してあげるよ。」

「わざと負けたりしたら私の小間使い――いえ、奴隷にしますわ」

「ハンデはどのくらい付ける？」

一夏すごい自信だね。でも勝てるのか？まあ、僕は彼女にハンデを付けてもいいけど

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、こっちがどれくらいハンデつけた方がいいのかなと」

一夏がそう言った瞬間クラスの皆が笑い出した（涼子　織斑先生　山田先生以外）

「織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女に強いのはＩＳが出来る前の話しだよ」

彼女たちの言いたいことは分かる…けど

「確かにそうだけど、問題はＩＳをどれだけ上手く使いこなせるかだよ。」

「黒羽の言う通りだオルコット、織斑にはハンデをつけなくていいが、黒羽にはハンデをつけてもらえ今のお前では攻撃を当てることすら出来ないだろう」

「な、何でですの！？」

「黒羽の実力は私の全盛期またはそれ以上の実力だ」

その言葉にクラスの皆が騒ぎ出す

「千冬様の全盛期よりも上？」

「公式試合で総合優勝の千冬様より強いなんて…」

一夏は驚愕のあまり

「それは本当かよ！千冬姉！」

「織斑先生だ馬鹿者。　こんなことで嘘ついても私にメリットはない。　それでオルコットどうするんだ？」

セシリア・オルコットは驚きながらも

「か、構いませんわ！　ハンデなしで倒して見せますわ！」

「話しはまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、

第3アリーナで行う。織斑　オルコット　黒羽はそれぞれ用意しておくように。　それでは授業を始める。」

一週間か…それ位あれば一夏に基礎理論は教えられそうだね。後は体力の問題かな？

決闘の約束（後書き）

決闘が終わったら柊涼子の設定を書こうと思います

同居人は女！？（前書き）

この次に涼子が入試試験非公開の秘密を話そうと思います

同居人は女！？

第5話　同居人は女

「うう……」

放課後、一夏が机の上でぐったりしていた

「一夏大丈夫か？」

「大丈夫じゃねえよ。　何でこんなにややこしいんだ？」

疲れた顔で一夏が聞いてくる

「参考書を捨てなければここまで疲れる事はなかったのに」

一夏がここまで疲れるのは分かる。
放課後だから多少視線は減ったけどそれでも精神的に物凄く疲れる
俺と一夏が話していると

「ああ、まだ教室にいたんですね。よかったです」

山田先生がたっていた

「はい？」
「何？」

「えっとですね。寮の部屋が決まりました。」
そう言って、部屋の鍵を2つ渡してきた

……2つ？

「俺達の部屋決まってないんじゃなかったんですか？」

「そうなんですけど、事情が事情ですしなので一時的な処置として無理矢理変更したんです。……そこら辺のことは政府から聞いてますか？」

最後の方は俺達にだけ聞こえるように言ってきた。

「そう言うわけで、寮に入れるのを最優先にしたんです。しばらくすれば個室の方が用意出来ると思いますから相部屋で我慢してください」

山田先生が理由を言い終わると、俺は疑問に思っていたことを聞いてみた

「俺と一夏は同じ部屋じゃないんですか？」

「えっと、それは此方のミスで女の子と相部屋になったんです。すいません。」

そうだったんだと思っていたら一夏が山田先生に聞いた

「荷物は一回家に帰らないと、準備できないんで、今日のところは帰っていいですか？」

「あ、荷物はですね――」

「私が手配しておいた、ありがたく思え。黒羽の方は自分で用意してあるようだしな」

ドアのところに織斑先生が立っていた
俺はこうなるとは思ってたから予め持ってきていたのだ
「……どうもありがとうございます」
「まあ、生活の必需品だけだがな。着替えと、携帯の充電器があれば十分だろう」
大雑把だな。その通りだけど。
「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。……えっと、織斑君たちは使えませんけど。」
「え、何でですか？」
こいつは馬鹿なのか？それとも変態？
俺が一夏に説明しようとしたら織斑先生が説明した
「アホかお前は、まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」
「あー…」
やっと理解したよ。
「おっ、織斑君は女子とお風呂に入りたいですか！？だっ、ダメ

ですよ」

「いや、入りたくないです」
まあ、そうだろうな入りたいなんていったら咬み殺そうとしたよ。

「女の子に興味ないんですか！？それはそれで問題のような……」

この人話聞いてないよ。
廊下の方は女子が何か言ってるし

「織斑君、男にしか興味ないのかしら……？」

「それはそれで……いい！」

「すぐに中学の時の交友関係を洗って！　明後日までには、裏付けもとっておいて！」

……聞かなかったことにしよう

「それじゃあ、私たちは会議があるので、これで。道草せずにちゃんと寮に帰るんですよ？」

ここから寮まで五十メートルぐらいなのにどう道草を食えと言うんだ。

「じゃあ、一夏寮の方に行く？」

「ああ、多分ここよりはマシだろ」

疲れた声で一夏が言う。

まあ、ここよりはね

「ここが、１０２５室だな。海斗は？」

「俺は、１０２６室隣だな。それじゃ」

部屋に鍵を差し込む、あれ？開いてる…

中に入ってみるとまるでホテルの中みたいだった。

「誰かいるんですか？この部屋は私一人だと思ってたんですけど…」

ん？この声は…

そして、シャワー室から出てきたのは

「初めまして私は柊　涼子と言いま……す……」

「え？」

シャワー室から出てきたのは涼子だった。

「か……海斗……」

「涼子……？」

涼子は顔を真っ赤にして

「はわわわ……／／／　い、いいと言うまで、こ、こっち見ないでください！／／／」

「あ、ああ、悪い」

「……そ、それで何で海斗がここに？／／／」

着替えながら涼子が聞いてくる

「何でって、俺もこの部屋だから」

「そ、そうですか。……も、もういいですよ／／／」

そう言われたから振り返ってみると、まだ少し顔を赤くさせてる涼子がいた

「な、何ですか？」

「いや、別に」

バタン！

ズドン！

１０２５室一夏のいる部屋からすごい音がした

「何でしょうか？この音」

「ちょっと見てくるよ」

そう言って、部屋のドアを少し開けてみると一夏が女子に囲まれ

ていた。
……同情するよ助けようとは思わないけど。
部屋のドアをゆっくり閉めて戻る
「どうでした？」
「一夏が囲まれてた。」
「そうですか。それにしても同居人が海斗だとは驚きですよ」
「俺も涼子だとは思わなかった。驚きもあるけど、良かったとも思ってる」
涼子が何故？みたいな顔で見てくる。
「知らない人よりか知っている人の方がいろいろと楽だから。」
涼子は笑顔でそうですかと言った。
「海斗これからのことなんですが」
「ああ、そうだなシャワーはどっちが先に使う？」
涼子は申し訳なさそうに
「私からでいいですか？ダメならダメでいいですけど」
「それじゃあ涼子が先でいいよ。」
「いいんですか？ありがとうございます！」

目をキラキラさせながらうれしそうな顔で言った。
尻尾がついてたら全力で振っていたんだろうな。

「それじゃあ、改めてこれからよろしく涼子」

「此方こそよろしくお願いします」

同居人は女！？（後書き）

同室者は涼子でした
まあ、ほとんどの人が予想していたんでしょうけどね

感想などお待ちしております

一夏の訓練と涼子の謎（前書き）

涼子の秘密を明かします。

長いです

一夏の訓練と涼子の謎

第５話　一夏の訓練と涼子の秘密

入学式翌日朝６時３０分

「ふっ！はぁっ！」

海斗は今朝から刀の素振りをしている

３０分後…

「ふぅ～……そこにいる奴出てきなよ。さっきから気づいてるよ」

覗いている人が木の陰から出てきた

「気配は消してたんですけど、いつから気づいてました？」

「１５分ぐらい前かなそれで何か用？涼子」

「特に用事は、朝からどこに行くか気になりましたから。でも、朝から刀を振っているとは私と勝負しません？」

涼子が勝負を申し込んできた

「悪いけど今日は遠慮しとくよ。素振りのする時間は決まってるからね。　それにこの後は弓矢の練習をするから。」

「そうですか。では、見てていいですか？」

「邪魔しなければ構わないよ。」

「邪魔しませんよ」

海斗は刀で木に円の傷を付け、一定の距離離れると弓を構える

キキッ！（弓を引く音）

ヒュン！（離す音）

バスッ！（木に刺さる音）

「ド真ん中お見事です！海斗」

「ありがとう」

２０分後…

朝の修行が終わって

「海斗、朝食食べに行きませんか？」

「……嫌だ」

「な、何でですか！？」

「もともと食事はあまりとらないんだ」

「ダメですよ！食事はちゃんととらないと」

「嫌だ」

「ムッ……行きますよ！」

ガシッ
涼子は海斗の首根っこを掴んで部屋から出た

場所は変わって食堂

ざわざわ…

（ねえ、あれ黒羽君と柊さんだよね）

（黒羽君て尻に敷かれるタイプなのかな？）

女子たちが俺たちを見てひそひそ話している

「ねえ、いい加減離してくれない？」

「逃げなければ離しますよ」

「分かった逃げな…「海斗？何してんだ？」……おはよう一夏、連行されてきた」

「おはようございます一夏、連行ではありませんからね」

「じゃあ拉致」

「拉致でもありません！朝食を食べに来ただけでしょうが！」

ちょっとした言葉遊びなんだからそこまで怒らなくても

「そうか、なら丁度いい俺たちもこれから朝食なんだ」

「俺達？」

「ああ、向こうに連れがいるんだ」

ふ～ん連れね～

朝食をもらい席について

「なあ……」

「……」

「なあって、いつまで怒ってるんだよ」

「怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

一夏の奴何かやらかしたのか？　まあ俺には関係ないけど

（海斗、私達が同席して良かったのでしょうか？）

（別にいいんじゃない？誘ってきたのは一夏なんだし）

（でも、この空気苦手です）

俺が涼子に我慢だよと言っていると

「だから箒――」

「な、名前で呼ぶな！」

「……篠ノ之さん」

「……」

一夏が名前で呼ぶのを拒絶されてる。……いったい何したんだか隣の彼女も名前で呼ぶなと言っておきながら名字で呼んだらムスッとしてるし。

……何なんだろうね、この人たち

「お、織斑君、隣いいかな？」

「ああ、別にいいけど」

一夏に話し掛けたのはトレーを持った女子3名、一夏が了承すると声をかけた女子が、安堵のため息を漏らし、後ろの女子二人はガッツポーズをしている。周りは何かざわめいてるし。

「ああ～っ、私も早く声かければ良かったな」

「まだ、まだ二日目、焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押し掛けた子もいるって話しだよ」

「何ですって！？」

一夏押し掛けられたんだ…。
俺は部屋知られてないと思うから来てない。来たらきたで追い出すけど。

「うわっ！織斑君て朝すごい食べるんだー」

「お、男の子だね」

「俺は夜少なめに取るタイプだから、朝たくさん取らないといろいろきついんだよ。」

因みに皆の朝食メニューは一夏と隣の彼女は和食セット、ご飯に納豆、鮭の切り身と味噌汁、浅漬けだ。
次に一夏の隣の三人は飲み物一杯に、パン一枚、おかず一皿だけ（少なめ）
涼子は卵とツナのサンドイッチが二つずつだ
俺は鮭と昆布のおにぎりだ。鮭だけにしようとしたら涼子に怒られたので昆布を付け足した

「……織斑、私は先に行くぞ」

「ん？ああ、また後でな」

俺たちも食べ終わったので席を外す

「それじゃ、一夏俺たちも教室に向かってるから」

「ああ、分かった」

食堂からでるとき織斑先生に会ったので挨拶をしておく

「おはようございます。織斑先生」

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

その後織斑先生が食堂で何か言っているのが聞こえた

現在三時間目の休み時間

一夏の周りに女子が群がる。

なぜ一夏の周りだけかというと、俺は初日に殺気を出し更には代表候補生に咬み殺すと言ってしまったから怖いというレッテルを貼られてしまったのである。

「相変わらず、一夏は人気ですね。海斗」

「あまり、興味ないけどね。人が多いと気を使うしね。特に女子には」

「その女子は遠慮ないですけどね」

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った

パァンッ！

一夏が殴られた二日連続

「休み時間は終わりだ。散れ」

何をしたらそんなに殴られるんだ？

「ところで織斑、お前のＩＳだが準備に時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから少し待て。学園側で専用機を用意するそうだ」

専用機ねえ～

それって政府からの支援ってことなのかな？

「ちふｙ……織斑先生、専用機って代表候補生が持つことを許される奴ですよね」

「そうだ、知っていたか」

「海斗に少し教えてもらったから」

織り斑先生がこっちを見てきたので頷いといた

「そう言えば先生、篠ノ之さんは篠ノ之博士の関係者ですか？」

「そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ」

（ねえ、篠ノ之って誰？）

（ハァ、海斗人の名前ぐらいちゃんと覚えてください。篠ノ之

箒、篠ノ之博士の妹で、一夏の幼なじみです。篠ノ之　束については知ってますよね？）

（ＩＳ開発者としか知らない）

（それで十分です）

涼子に篠ノ之について聞いていると

「あの人は関係ない！」

いきなり、篠ノ之　箒が大声を出した。一体なんだよ

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人ではない教えられるようなことは何もない」

姉に比べられるのがいやなんだ。変に期待されるから。分からなくもないかな

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はい！」

山田先生も気になっている様子だが、授業に気持ちを切り替えた。さすがプロ行動が早い

休み時間

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思ってなかっ

たでしょうけど」

また来たよ…この女

「まあ？一応勝負は見えてますけど。さすがにフェアじゃありませんものね。だって私」

「専用機を持っているから…だろ？そんな事ぐらい分かってるさ」

「そうですか。それであなたは訓練機で挑むんですか？」

「君には訓練機でも勝てそうだけど、ご希望なら専用機を使うけど？」

「海斗、専用機持ってたのか！？もしかしてどこかの代表候補生なのか？」

「違うよ。俺にも事情があるんだよ」

「ふん。すごい自信ですけどクラス代表になるのは私、セシリア・オルコットであると言うことをお忘れなく」

いちいち行動がうざい。今更だけど。

「海斗、涼子、箒飯食いに行こうぜ」

「別にいいよ」

「私もいいですよ」

「私は行かない」

篠ノ之　箒だけが断った。

「まあそう言わずに、行こうぜ」

「私は行かないと行っているだろ！ええいっ――」

バタッ！

へぇ、なかなかやるね彼女

「腕上げたな」

「ふ、ふん。お前が弱くなったのではないか？今のは剣術のおまけだ」

おまけね、下手したら日本で彼女だけかもしれないな

「箒」

「名前で呼ぶなと――」

「飯食いに行くぞ。行くぞ海斗、涼子」

「しょうがないな」

「しょうがないですね」

学食に到着

昼食のメニューは一夏と篠ノ之　箒は鯖の塩焼き

涼子と俺はうどん

強制的にうどんにされた…

「そう言えば、篠ノ之　箒」

「……何だ？」

「一夏に稽古を付けてやれ」

「貴様に命令される筋合いなど無い」

「海斗、それではちゃんと伝わりませんよ。えっとですね、篠ノ之　箒さんは剣道をやっているので一夏を鍛えてほしいんです」

「？」

篠ノ之　箒は何故？という顔をしている

「一夏はＩＳについては無知と言っていい。だから基礎と理論は俺たちが教える。篠ノ之　箒は剣道部だ一夏を鍛えるのは丁度いい」

篠ノ之　箒に簡単に説明する。

「ちょっと待て。俺が箒に鍛えられるのに意味はあるのか？」

「ＩＳは乗り手によって性能が上がったり下がったりしますから。生身を鍛えるのは結構重要なんですよ。だから篠ノ之　箒さんお願いしますね」

（それに、一夏と二人きりになるチャンスですよ）

「そ、そうだな！よし！私が鍛えてやろう！今日の放課後剣道場に来い」

何か篠ノ之　箒がいきなりやる気を出した。何を言ったんだ？

放課後寮の部屋

「今頃一夏は篠ノ之　箒さんに鍛えられてるでしょうね」

「多分ね。それより涼子、聞きたいことがある。」

「何ですか？」

「何で、入試試験非公開なの？」

今まで疑問に思ってたことを聞いてみた。

「それは言わなくては駄目ですか？」

俺はゆっくり頷いた。

「分かりました。話しましょう。信じられないでしょうけど、私はこの世界の人間ではありません。　それに気づいたのは今から一年前です。　ある日、私は両親に柊家の人間ではないと言われたんです。」

――「涼子話しがある。……ここに座りなさい」

お父さんが真剣な声で呼んできました。お母さんも苦い顔をして座っていました。

「涼子ちゃん、あなたには今まで黙ってきたけど、今のあなたなら受け止めてくれると信じて話すわ」

そしてお父さんとお母さんは声をそろえて言いました。

「「お前は（あなたは）この家の子供じゃない（の）」」

それを知ったときは何かの冗談だと思いました。

「な、何言ってるの？からかわないでよ」

「ごめんなさい。でも事実なの。でもこれだけは信じて、あなたのことは本当の娘のように育てたことを……」

「それじゃ、私は誰の子なの？ねえ、私は本当は誰なの？」

私の声は今にもかき消えそうだった。

その時、お父さんが口を開きました。その事は更に私を追いつめる言葉でした

「その事なんだが、お前には辛いだろうが、お前はこの世界の子供でもない」

「え？どういう事？この世界の子じゃないなんて」

「お前の持っているＩＳそれはこの世界では存在しない技術なんだ……」

お父さんは辛そうにいいました。お母さんは泣きそうな顔をしていました。

「え？だってこのＩＳお父さんとお母さんが作ったんじゃないの？」

「ごめんなさい。それは嘘なの、あなたが元々持っていたものなの」

「私が……元々持っていた……もの」

お母さんはとうとう泣いてしまいました。お父さんはもう一言、私に希望のあることをいいました。

「この世界にはもう一人お前と同じ境遇の奴がいる。だから、お前にはＩＳ学園に通ってもらいたい。そのＩＳ『フリーダム』と一緒に…」

私と同じ人がもう一人？

「お父さん何でもう一人いるって分かるの？」

「神と名乗る人が夢に出てきたんだ。お前がこの世界の人間ではないと、もう一人お前と同じ境遇の奴がいると」

分からない…私には何も分からないよ……。私は誰なの？本当の両親は？もう一人の人間って？

私が一人自問自答していると、お母さんが優しい声で言いました。

「涼子ちゃん、今すぐ答えを出さなくていい。ゆっくり考えてそ

れから答えを出して」

私はゆっくりうなづいた。

それから半年後……

久し振りにお父さんとお母さんに話しかけた。

「お父さん、お母さん話しがあるんですけどいいですか？」

この半年間まともに口をきいていなかった。両親からずっと逃げていた。

「何だ？」

「何かしら？」

「あのね、私決めたのＩＳ学園に入る。それでもう一人の人間を見つける！」

私は両親に私の気持ちを伝えた。

「いいのかそれで？後戻りは出来ないかもしれないぞ」

「一度決めたことですから後悔しません。それに今ではお父さんとお母さんが私の親ですから。」

お母さんは私に抱きついてきて、お父さんは頭をなでてくれた

「ありがとう涼子ちゃん、こんな私たちを親だと思ってくれて」

「俺はうれしいぞ。涼子がそんな事を言ってくれて」

「私も今まで避けててごめんなさい。でも、お父さんとお母さんは大好きだよ！」

お父さんとお母さんは声をそろえて言いました。

「「ありがとう」」

――――

「とまあ、ここまでが私の過去です。非公開なのはこの技術をあまり人に見せないためです」

「そうだったんだ。それで？もう一人の人間は見つかった？」

「そんな早く見つかりませんよ。手掛かりも何もないんですから。それよりもこの話を聞いて何とも思わないんですか？」

「うん、涼子は涼子だからね。拒絶はしないよ。」

「ありがとうございます。海斗」

コンコン…

「海斗、涼子いるか？ＩＳの基礎について学びに来たぞ」

一夏がドアをノックしてきた　。

「今開けるよ」

ガチャ…

「お邪魔します」

「いらっしゃい、一夏」

「さて、それじゃ昨日の続きからね」

一夏にＩＳの基礎を教える。

涼子のことは黙ってた方がいいしな。

一夏の訓練と涼子の謎（後書き）

涼子はこの世界の人間ではありませんでした。もう一人の人間も後々明かしていきます。

感想など待っています

クラス代表決定戦（前書き）

とうとうクラス代表決定戦です。戦闘は下手ですが許してください

クラス代表決定戦

第7話　クラス代表決定戦

あれから一週間月曜日

「まだか俺のＩＳは！？」

「落ち着きなよ一夏」

「そうですよ。焦ってもいいことなどありません」

「黒羽と柊の言う通りだぞ。暫くすれば来るだろう」

一夏がＩＳが届かないのに焦っている

「お、織斑君織斑君織斑君っ！」

三度も呼ぶ必要ないでしょ。

山田先生が駆け足でやってくる。

「山田先生落ち着いてください。はい、深呼吸」

「はっ、はい！す～～は～～、す～～は～～」

「はい、そこで止めて」

「うっ！」

この二人何してんの…ていうか本気でやるなよ。

「……」

「…ぶはあっ！ま、まだですか？」

まだですかってからかわれてるって気づいてないのか？

……あ

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パァンッ！

一夏は何回叩かれれば気が済むんだ。

「千冬姉……」

パァンッ！

二回目学習しなよ。

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

おお、教師としてあるまじき発言。姉弟だからいいのか？

「あ、忘れてました。織斑君、届きましたよ。織斑君のＩＳ」

「さて、黒羽お前から戦え」

俺からかその間に一夏はフォーマットとフィッティングかな？

「分かりました。俺から行きましょう。」

「織斑、お前は黒羽が戦っている間フォーマットとフィッティングをしろ」

「分かりました。海斗頑張れよ」

「言われなくても。……行くよボンゴレ俺たちの覚悟を見せよう」

海斗がボンゴレを展開する。漆黒に包まれたＩＳ＜ボンゴレ＜

「これが、海斗のＩＳですか」

「なんか格好いいな」

「一夏のと逆か…」

上から涼子、一夏、篠ノ之　箒の順に口を開く

「海斗、天狗状態の代表候補生の鼻をへし折って来てください」

「分かったよ。」

そう言って海斗はピットからアリーナにでる。

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリア・オルコットの機体＞ブルー・ティアーズ＜がライフル、スターライトｍｋ?を構えながら言う

「最後のチャンスをあげますわ。私が一方的に勝つのはもはや自明の理。今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくっ

てよ」

そう言ってスターライトｍｋ?の安全装置を解除する

「君になんかには負けないよ」

「そう?残念ですわ。それならお別れですわね」

そう言うが刹那ボンゴレにレーザーが発射されたが海斗は余裕にかわした。

「踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で!」

「君はここで咬み殺す」

そう言って海斗は嵐のリングに炎灯しボックスに注入しフレイムアローを出す。その時ボンゴレのカラーリングが赤に変わった

「カラーリングが変わった?あなたも中距離型ですか?面白くなりそうですわね!」

「お喋りしてる暇はないよ。」

海斗は嵐と晴を使う

「フレイムランチャー!」

「くっ!ですが私のＢＴで」

セシリアはＢＴで全ての弾丸を撃ち落とす。直ぐに海斗は嵐と雲の炎を使う

「フレイムインフレーション！」

「甘いですわ！」

「そっちがだよ！」

フレイムアローが枝分かれし４機のＢＴを破壊した

「なっ！？無茶苦茶な攻撃ですね…」

海斗はフレイムアローをしまい。霧のリングとボックスを出し三叉槍をだす。

「今度は藍色ですか。どういう仕組みかは分かりませんが、武装は近接武器だけですわね」

「喋っている暇はないよ」

海斗はセシリアに突っ込む

「掛かりましたわね。ＢＴは六機ありましてよ！」

スカートの部分からミサイルを発射する

「それが何？」

海斗はミサイルを切り捨てそのままスターライトｍｋ？を切り、高速でブルー・ティアーズに切りかかる。

「きゃあああ！」

『試合終了！勝負黒羽　海斗！』

「お強いですわね」

「このボンゴレのお陰だよ。ボンゴレは家族のようなものだからね。そう簡単には負けないよ」

ピットに帰る海斗をセシリアは尊敬の目で見ていた。

「お疲れ様、海斗。お見事でしたね」

試合が終わって一息ついていたら涼子が来た。

「あぁ、ありがとう」

「どれ位の実力を出したんですか？」

「１０％から２０％の実力」

「それしか出してないんですか！？本気でやったら瞬殺ですね…。そういえば、何でカラーリングが変わったんですか？」

「あぁ、それはリングとボックスのせいだよ。属性によってカラーリングが変わるんだ。」

「属性？」

「その事については秘密だよ。」

「そうですか。では、帰りましょうか」

翌日のＳＨＲ
そこでは、面白いことが起きていた

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでいい感じですね」

一夏がさっきから暗い顔をしている。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、何でクラス代表になっているんでしょうか」

そういえば、一夏は負けたらしいな。なんかＩＳの特性を理解していなかったからで……

「それは――」

「私が辞退したからですわ！」

ガタンと立ち上がる。
辞退って俺に負けたじゃん。機嫌もいいみたいだし

「まあ、昨日はあなたの負けでしたが、それは考えてみれば当然のこと。なにせ私セシリア・オルコットが相手だったのですから。仕方がないですわ」

負けたくせに

「それで、まあ、私も大人げなく怒ったことを反省しまして、一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたの」

「ち、ちょっと待て、だったらクラス代表は海斗じゃないのか！？」

一夏があわてたように言う。俺はそれにわかりやすく答える

「辞退した」

「何でだ？」

「面倒くさいから、それに勝った方が選ぶ権利あるんじゃない？」

「うっ……」

一夏は何も反論できない

「そ、それでですわね。私のように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳの操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみる成長を遂げ――」

バン！立ち上がったのは篠ノ之　箒だった

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が頼まれたのだかな」

へぇ～これは面白いことになりそうだね。

「あら、あなたはＩＳＣランクの篠ノ之さん。Ａの私に何かご用ですか？」

「ら、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ！」

篠ノ之　箒Ｃランクだったんだ。

「いや、俺的には海斗に鍛えられたいんだが……」

「嫌だ」

「何でだよ。いいじゃねえか」

「　今の一夏は弱すぎる。今俺に鍛えられたら体が持たないかもしれない。だから、あの二人に鍛えてもらえ」

「海斗が言うなら、そうするが」

一夏はおとなしく引き下がった。聞き分けいいな

これから一夏は苦労するな

クラス代表決定戦（後書き）

一応、セシリアは一夏ルートです。海斗のことはまあ、師匠的な存在ですね。

ヒロインとＩＳ設定（前書き）

ヒロイン設定です

ヒロインとＩＳ設定

ヒロイン

名前　柊　涼子【ひいらぎ　りょうこ】

髪の色　銀色

瞳　赤色

性格　基本面倒見がいい（特に海斗は）　キレると海斗ですら逆らえない（千冬は別）　背が低いことを気にしていて指摘されるとキレる

好きなもの　小動物　両親　仲間

嫌いなもの　オカルト系　命を軽く見る人　拒絶されること

異世界から来た少女、両親の提案でＩＳ学園に入学、自分と同じ異世界の人間を探している。前の世界の記憶をすべて忘れている。涼子が異世界から来たことを知っているのはお父さん　お母さん　海斗の三人だけ

所持品　ＩＳ　短剣×２

ＩＳ説明

専用機　フリーダム（第５世代型）

武装　７６ｍｍ近接防御用機関砲×２
ラケルタ・ビームサーベル×２
バラエーナ・プラズマ収束ビーム砲×２
クスィフィアス・レール砲×２
ルプス・ビームライフル
対ビームシールド

装甲　フェイズシフト装甲

涼子がこの世界に来た頃からなぜか持っている（本人も分からない）

ワンオフ・アビリティー　ミーティア

ヒロインとＩＳ設定（後書き）

まんまフリーダムです。

手抜きですみません

クラス代表就任パーティー（前書き）

遅れました。すみません

クラス代表就任パーティー

第８話　クラス代表就任パーティー

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑オルコット　黒羽　柊試しに飛んでみろ」

言われて一夏　セシリア　海斗　涼子はＩＳを展開する。……が一夏がもたついていた

「速くしろ。熟練したＩＳ操縦者は一秒とかからないぞ」

急かされて一夏は集中する。

「来い、白式！」

漸く一夏の展開が終わる。

「よし、飛べ」

そう言った瞬間　涼子は膝を少し曲げて一気に急上昇する。

セシリア・オルコットは普通に急上昇。

海斗は大空のリングとボックスを出してＸグローブを出すその時、ボンゴレのカラーリングが橙色になる。

一夏は皆よりも遅れて続く

「何をしている。ボンゴレとフリーダムはともかく、スペック上はブルー・ティアーズより上だぞ。」

一夏は白式に乗るのは今日が二回目だから全出力を出せと言うのが無理かもしれない。

「そう言われてもな……えっと、前方に角錐を展開するイメージだよな…」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ。」

「そうですよ一夏、教科書通りに覚えようとすると帰って分からなくなる時がありますから」

「そっか、教科書通りが全てじゃないんだな。なあ、海斗はどんなイメージで飛んでるんだ?」

俺の場合は皆と違うから分からないかもしれないけど

「炎の噴射」

「……全く分からないんだが……」

「一夏海斗に聞いちゃダメですよ」

「そうだな」

「一夏っ!いつまでそんなところにいる!速く降りてこい!」

いきなり通信回線から篠ノ之　箒の怒鳴り声が聞こえる。

「何で箒はあんなに怒ってるんだ？」

鈍感だな。一夏は今更だけど

「織斑　オルコット　黒羽　柊急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地上から十センチだ」

「了解です。では皆さん、お先に」

言ってセシリア・オルコットは急降下して完全停止をクリアした。代表候補生は伊達じゃないか

「次は誰行きますか？」

「それじゃ俺が」

一夏が名乗り出て、地上に向かった……ダメだな、これは

ドガァァァン！

大きなクレーターを作った。

「一夏やっちゃいましたね。……どうします？」

「取り敢えず、俺達も降りようか？」

「そうですね」

結果一緒に降りることになった。邪魔な砂埃を吹き飛ばして着地する。　着地したときにハイパーセンサーが篠ノ之　箒とセシリア・オルコットが言い合いをしている声を拾った。

「おい、馬鹿者共。邪魔だ。端っこでやっていろ」

二人をどけると一夏の前に立ち

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは出来るようになっただろ」

「は、はい」

「では、始めろ」

そう言われて一夏は正面に誰もいないことを確かめて、突き出し右腕を左手で握る。　一夏は飲み込みが速いから直ぐに教えることがで来そうだな。

「遅い。0，5秒で出せるようになれ」

厳しいな…でもその通りだからな。

「セシリア武装を展開しろ」

「はい」

結果は一夏より圧倒的に速く。一秒とかからずに射撃可能までにした。

「流石だな、代表候補生。――ただしそのポーズはやめろ。横に

向けて柊に撃つつもりか？」

「あ、すみません」

「いえ、気にしないでください」

「正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれは私のイメージをまとめるために必要な――」

「直せ、いいな」

「――、……はい」

さすがの代表候補生も織斑先生には適わないか

「柊は元から展開されてるな。黒羽は先ほど見たからいいか」

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、は、はい」

別のことを考えていたのか、セシリア・オルコットはすぐに反応が出来なかった。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。ああ、もう！インターセプト！」

いったい何秒かかってるんだか。それじゃ、実戦ですぐに落とされるよ。

「いったい何秒かかってる。お前は相手にも待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入れさせません！ですから、問題ありませんわ」

「ほう。黒羽はともかく、織斑にも簡単に懐を許していたように見えたが？」

「そ、それは……」

まあ、中距離型の機体でも近接は鍛えないと簡単に負ける。セシリア・オルコットは近接戦を鍛えないといけないな。

「今日はここまでだ。織斑グラウンドを片づけておけよ。黒羽達に手伝って貰おうと考えるなよ」

「自業自得だよ」

「がんばってくださいね一夏」

夕食後の自由時間

「海斗行きますよ」

「どこに？」

「食堂集合と言ってたでしょう」

「何で？」

「一夏のクラス就任パーティーをやるんですよ」

「……行ってらっしゃい」

「行きますよ」

ガシッ！

涼子は海斗の無理矢理手を取り部屋から出る。

場所は変わって食堂

「すみません。遅れました」

「おそーい。何してたの？」

「海斗を連れてくるのに手間取っちゃっいました」

「まあ、それならしょうがないか。というわけで、織斑君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでと～」

なぜか俺も強制参加させられた。一夏に関してはめでたくないと言いたそうな顔をしている。

「海斗、ごめんなさいね無理矢理連れてきて。でも、海斗にも出席してほしかったんです。クラスのことですし」
涼子が謝罪してくる。もうあまり怒ってないので気にしてないように言う
「別にいいよ、もう。逃げられないしね」
「ありがとうございます」
「はいはーい、新聞部でーす。話題の男子新入生にインタビューしに来ました」
新聞部の人がきた。……逃げるかな。
「海斗先に言っときますけど逃げちゃダメですからね。」
「まあ、逃げてもいずれはインタビューしますからね」
新聞部の人がこっちに来た。……一夏は終わったんだ。
「それじゃ、ズバリ！隣にいる、柊さんと付き合ってるんですか？」
とんでもない事をいきなり聞いてきた
「何言ってるの？」
「いえ、二人はいつも一緒に行動していると聞いてますが？」
「それは、涼子が他の人より面白いから」

「そうですか。それでは、柊さんは黒羽君の事が好きですか？」

新聞部の人がとんでもない事をきいた

「な、何言ってるんですか！そんな事はありません！」

「そうなの？ふ～んまあいいや。それじゃ、写真撮るから二人ともこっちに来て」

そう言って一夏達のところに連れて行かれた。

その後は、ふつうに専用機持ちだけで写真を撮ろうとしたら、皆写ってきてセシリア・オルコットがキレたりと色々あった。

俺は今部屋にいるパーティーはこっそりと途中で抜け出した

部屋に一人でいると涼子が不機嫌そうな顔で帰ってきた。

「海斗何で勝手に帰ってるんですか？せめて一言声を掛けてください」

「悪いね。でも、皆と楽しそうに話してたから、邪魔しちゃ悪いと思って」

「そうだったんですか。すみません、一人で怒ったりして」

「気にしてないよ。それより、もう一人の異世界の人間探し見つかりそう？」

「いえ、全然駄目です。まずどう探せばいいか分かりませんし」

「方法ならあるよ」

「方法……ですか？」

「うん、この世界とは違う技術を使ったＩＳの専用機を探せばある程度は絞り込めるんじゃない？」

「成る程、確かにそうですね。その方法なら絞り子もそうですね」

「だから、俺も手伝うよ。異世界の人間探し」

「いいんですか？迷惑なんじゃ……」

「別に迷惑じゃないよ。それに面白そうだし」

「分かりました。それでは、よろしくお願いします」

この日海斗と涼子は一緒に異世界の人間探しを始めた

クラス代表就任パーティー（後書き）

海斗も異世界の人間探しに付き合います

転校生（前書き）

来ました中国代表候補生が……

転校生

第9話　転校生

「皆さんおはようございます」

「……おはよう」

朝教室に入り挨拶をする

「おはよう、海斗　涼子」

「二人ともおはよ～。ねえ、二人は転校生の噂聞いた？」

「いえ、知りませんね。海斗は……って、興味ないですよね」

「当たり前だよ」

そう言いながら、席に着く

「はぁ～、相変わらずですね」

涼子が隣で呆れてるけどスルーしとこう

「一夏は転校生気になるんですか？」

「ん？ああ……少しな」

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるだろう」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けてより実質的な訓練をしましょう。ああ、相手なら、この私セシリア――」

「あ、忘れてた。一夏俺と涼子も特訓にはいるから」

セシリア・オルコットの言葉をふさいで、一夏に海斗と涼子が特訓に参加することを伝える。その時セシリア・オルコットが睨んできた

「本当か、それは助かる。ありがとな」

「俺たちが教えるんだから、無様に負けないでよ」

「やれるだけやってみるよ」

「やれるだけでは困りますわ。一夏さんには勝っていただきませんと」

さっきまで睨んでいたセシリア・オルコットがまた喋り出す

「そうだぞ、男足るものそんな弱気でどうする」

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよ」

だが一夏は自信に満ちた返事はしなかった。……一夏の覚悟をいつか見せて貰おうかな

「織斑君、頑張ってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表は一組と四組だけだから余裕だよ」

「――その情報古いよ」

教室の入り口から聞き覚えのない声が聞こえる。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「……？お前鈴か？」

一夏の知り合いかな？まあ、俺の興味を引く対象じゃないかな

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告しに来たってわけ」

（涼子、誰か知ってる？）

（いいえ、知りませんね。一夏とはただの知り合いじゃないみたいですけど）

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？何てこと言うのよあんたは！」

一夏とその代表候補生が喋ってたら

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！

叩かれた

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

？知り合いなのか？

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

ビビってるように見えるのは気のせいか？

「また後で来るからね！逃げないでよ一夏！」

一夏にそう宣言して二組へ向かった。

「なんかよく分からない人ですね」

「そうだね。まあ、興味ないけどね」

「そうだと思いました」

涼子と話していると

バシン！バシン！バシン！バシン！
一夏を囲んでた女子が叩かれた

「席に着け、馬鹿共」

午前中の授業が終わり昼休み

篠ノ之　箒とセシリア・オルコットが一夏に何か言っていた。
この二人は山田先生に五回注意され、織斑先生に三回叩かれている。

「まあ、話しならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ。海斗と涼子も行こうぜ」

「俺はいかｎ……「分かりました」……ハァ」

涼子は俺の腕を無理矢理掴んで学食に移動した。

場所は変わって食堂

「待ってたわよ、一夏！」

どーんと効果音がつきそうなほど堂々と立っていたのは噂の代表候補生だった

「まあ、そこどいてくれ食券出せないし。通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいはね。分かってるわよ」

ちなみに今回の昼食は一夏は日替わりランチ、篠ノ之　箒はきつねうどん、セシリア・オルコットは洋食ランチ、涼子はパスタ、俺はカツ丼（例の如く強制）

さらに、何故かまだ腕を掴んでいる

「ねぇ、いつまで腕掴んでるの？」

「え？だって、逃げると思ってましたから」

「逃げないから離してくれる」

そう言ったら涼子は素直に腕を放した

それからすぐにテーブルに座ることができ、暫く食事をしていたのだが……

「一夏、そろそろどういう関係なのか説明してほしいのだが」

「そうですわ！一夏さん、まさかこの方と付き合っていらっしゃるの？」

痺れを切らしたのか篠ノ之　箒とセシリア・オルコットが一夏に棘のあるような口調で聞く

「べ、べべ、別に私たち話付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。何でそんな話しになるんだ？ただの幼なじみだよ」

幼なじみ？また？

（ねぇ、涼子幼なじみってそんな簡単に集まるの？）

（偶然じゃないですか？アニメやマンガだとよくあるじゃないですか）

（そんなものなの？）

（そんなものなんです）

その時中国代表候補生から興味のある一言を聞いた

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

どうやらセシリア・オルコットと強さの言い合いをしているようだ

「一夏、アンタクラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「あ、あのさぁ。ＩＳの操縦見てあげようか？」

「気持ちは嬉しいけど、俺は海斗に鍛えて貰うからな」

篠ノ之　箒とセシリア・オルコットは何か言おうとしたが、俺の名前がでて何もいえなくなった

「海斗って……誰？」

「そこにいる、もう一人の男だよ」

「ふ～ん、あれがもう一人のＩＳ操縦者。止めとけば、どうせあたしよりか弱いだろうし」

「鈴それはないと思うぞ。お前が海斗と戦ったら負けるだろうから」

「な、何でよ。一夏はあたしが弱いとでも思ってんの！？」

「まあ、海斗よりは格段に弱いと思ってる。だって海斗は千冬姉以上の実力かもしれないから」

「えっ！？千冬さんより強い！？女の尻に敷かれてるような奴が！？」

「馬鹿！？鈴、何言って……」

海斗は殺気を出して静かに立ち上がった。

「ちょ、海斗、落ち着いてください！？ストップ、ストップです！？」

「待たないよ。ここまで言われては黙ってられないからね」

「鈴、謝れ！」

「はぁ？何であたしが謝らなきゃいけないのよ」

「お前が怒らせるようなこと言うからだろ！」

海斗はいつの間にかトンファーを持っていた

「咬み殺す！」

「ああ、もうこうなったら、……海斗ここで暴れたら食堂がめちゃくちゃになって学園の風紀が乱れてしまいますよ！」

ピタッ

海斗は後数センチのとこでトンファーを戻した

「それもそうだね。まあ、彼女は咬み殺そうと思えば何時でも咬み殺せるからね。今日のところは見逃してあげるよ」

海斗は食堂から出て行った

「み、皆さんお騒がせしてすみません。……それでは」

謝罪してから涼子も食堂から出て行った

それから放課後現在第三アリーナにいるのは一夏、篠ノ之　箒、セシリア・オルコット、涼子、海斗の五人

「それじゃ、一夏今日のところは一夏対全員でやるから」

「いや、待っていくら何でもそれは……」

「言ってなかったっけ？俺はスパルタだよ」

「聞いてねぇよ！」

「そう？まあ、いいや。それじゃ、始め」

そして、海斗のフレイムアロー、涼子のビームライフル、セシリア・オルコットのＢＴ兵器、篠ノ之　箒のブレードが一夏に襲いかかる。唯一の救いは武器を変えないことだったが……訓練が終わったら一夏は息切れを起こしていた。

転校生（後書き）

一夏死なないといいけどね

クラス対抗戦（前書き）

ついに始まったクラス対抗戦！

クラス対抗戦

第１０話　クラス対抗戦

一夏と特訓が終わって現在寮の部屋

「海斗、一夏の強さどう思います？」

「一夏は今は弱いけど強くなるよ。……一夏は戦闘の状況判断を冷静に把握してるからね。だからあのセシリア・オルコットをギリギリまで追い詰めることができた」

「成る程、それじゃあ鍛えれば今以上に冷静に状況を把握できるかもしれませんね」

そうだね。と海斗が答えたら隣の部屋のドアが大きな音をたてた。

一夏また何かやらかしたのかな？

「一夏、来週からはクラス対抗戦だよ。明日からアリーナ使用できないから今日が最後だ。内容は最初と同じ一夏対全員だから」

今までの一夏の訓練メニューは射撃の間合いの取り方、近接戦闘での回避、一夏対二人など色々やってきた

「いやだから全員を一辺にあいては無理だろ避けるのだけで精一杯だぞ」

一夏が文句を言ってくるが涼子が理由を話す

「それは最初の段階で一夏の実力を見るためです。今日は今までの特訓をどれだけ理解してるかのおさらいですよ」

「わ、分かった。やってみるよ」

ちなみに今いるメンバーは海斗、涼子、一夏、篠ノ之　箒、セシリア・オルコットのいつものメンバーである。

そして第三アリーナのピットに入ると

「待ってたわよ！一夏」

中国代表候補生がいた。

後ろでは篠ノ之　箒とセシリア・オルコットが顔をしかめていた

「貴様、どうやってここに――」

「ここは関係者――」

「君、何してるの？」

篠ノ之　箒とセシリア・オルコットの言葉を中断させて訊いた

「一夏に用が会ってきたの、一夏関係者だから問題ないわよね」

「だったら、此処じゃなくて別の――」

「はいはい、海斗は私と向こうで準備しますよ」

「まだ彼女との話は終わっていよ」

涼子が海斗を連れて行く。

「海斗がいたら話が進まないでしょ。だからです」

海斗と涼子は一夏達から少し離れて準備を始める。

その時に一夏達がいろいろ言い合っているのが聞こえた。そして、その後に爆発音が聞こえた。見に行くと怒った顔をした凰何とかという人が出て行った。

「何したの？一夏。……それにこのクレーター誰がやったの」

「か、海斗。いや、俺が鈴を怒らせたからこんな事に……」

「鈴て誰？」

「さっきの女の子ですよ」

「ああ、それじゃ彼女をかみ殺そうか」

「待て海斗。悪いのは俺なんだ」

「なら一夏を咬み殺そうか。安心しなよ、ちゃんとＩＳは装備させるから」

その後一夏の叫びがアリーナに響いた

クラス対抗戦当日

海斗が一夏に言う

「相手は第三世代型ＩＳだよ。今までの成果を見せて貰うから」

涼子は機体について言う

「機体は近接格闘型ですから気をつけてくださいね」

「分かった」

篠ノ之　箒とセシリア・オルコットも一夏に激励を送る

「一夏、勝ってこい」

「一夏さん、頑張ってください」

「ああ、行ってくる」

そう言って一夏はピットを後にした

「それでは私たちも行きましょうか。……海斗、どうしました？」

海斗ががアリーナの先をずっと見ていた

「いやな予感がする」

海斗の超直感（ブラッド・オブ・ボンゴレ）が何かを感じる

「気のせいではないのですか？」

「分からない。一応管制室にいくよ」」

そう言って海斗は管制室に向かった、涼子も少し遅れて海斗の後を追った。

場所は変わって管制室

「いやな予感?それを本気で信じろと?」

「信じる信じないはのはそちらの勝手ですけど、俺の勘は良く当たりますよ」

今は管制室で織斑先生にいやな予感がするのを告げた

「まあいい。何かあれば教えよう」

「ありがとうございます」

礼をして何かが起こるまで一夏の試合を見ることにした

クラス対抗戦（後書き）

次回は謎のＩＳ出現

二つの敵とお引っ越し（前書き）

あのＩＳが来ます。
もう一機のＩＳも……

二つの敵とお引っ越し

第１１話　二つの敵

一夏の試合を見てたらいきなりシールドが破壊されて爆風と土煙を上げる

「いったいどうした！？」

「分かりません！何かがシールドを破って侵入してきました！」

織斑先生と山田先生が状況確認をしている

「海斗の勘が当たりましたね。どうするんです？」

「勿論、学園への不法侵入咬み殺す」

「先生、わたくしにＩＳの使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

セシリア・オルコットが入って織斑先生から出撃許可を貰おうとする

「そうしたいところだが、これを見ろ」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。その数値は第２アリーナのスターテスチェックだった

「現在遮断シールドはレベル４になっている、更に扉はすべてロッ

クされている」

「あのＩＳの仕業ですね。海斗で何とかできませんか？」

「許可をくれれば直ぐに出ることができるよ」

「任せていいんだな？」

「はい。行くよ、涼子」

「分かりました」

俺と涼子が行こうとしたら

「待ってください！それなら私も行きますわ」

「オルコット今のお前では黒羽と柊の足手まといになるだけだ」

「しかし！」

セシリア・オルコットはなおも抗議するが涼子が止める

「大丈夫です。一夏も凰　鈴音もちゃんと連れて帰ってきます」

「わ、分かりましたわ。今回はあきらめますわ」

「では、黒羽と柊はアリーナの外から頼む」

「「はい」」

二人は管制室を出た
道中避難を誘導している先生方にすれ違ったりした
海斗と涼子はＩＳを起動する
「行くよボンゴレ」
「出番ですよフリーダム」
すかさず海斗は大空のボックスからＸグローブを出し、飛ぶ。
涼子も海斗と一緒に飛ぶ
「オペレーションＸ」
「単一仕様発動（ワンオフ・アビリティー）！ミーティア」
海斗はＸバーナー発射態勢に涼子はミーティアでを発動する
「Ｘバーナー！」
「フルバースト！」
一斉に打ち不明ＩＳの破った場所に当ててアリーナ内部にいく
「海斗！涼子！来てくれたか」
一夏は海斗と涼子が来て喜んでいる　凰　鈴音はボンゴレとフリーダムを見て呆然としている
「一夏、下がりなよ」

「二人とも下がってください。このＩＳは私たちがやります」

「分かった。鈴、退くぞ」

「う、うん…」

一夏は凰　鈴音を連れて下がる

その時、謎のＩＳがビームを打ってきた

「ＳＩＳＴＥＡＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．！」

海斗は嵐のボックスに炎を注入防御リングを展開する

「海斗どうするんですか？」

「俺が敵の動きを止める。その間に攻撃で破壊」

「分かりました」

プライベート・チャンネルで作戦を伝える

まず海斗は晴のボックスから晴縄を出し相手の動きを封じる

「今！」

涼子はビームサーベルを抜き両腕を切る。海斗は雨のリングとボックスから時雨金時を出す

「篠突く雨！」

海斗は謎ＩＳに篠突く雨でＩＳの機能を停止させる

「終わりましたね、海斗」

「そうだね。……っ！？」

海斗は涼子を抱えその場から離れる。涼子がいた場所に攻撃があたる

「いったい何ですか、あれ」

「！？あれは！……モスカ」

上を見たらＩＳとは思えないような形をしたＩＳだった

「海斗知ってるんですか？あのＩＳ」

「ああ、知ってる……あれはこの世界の敵だぁーーーーー！！！！」

そう言って海斗は敵ＩＳに突っ込んでく

「！？海斗ダメですよ一人で突っ込んでは……」

だが、海斗は雲のボックスからトンファーを出してモスカの腹部を殴りつぶし、頭を吹っ飛ばそうとするがモスカが先に海斗を殴り飛ばす

「くっ！」

「海斗！このっ！」

涼子はビームライフルでモスカに向けて打つがよけられ両手の指先からマシンガンを放つ

「無駄です。私には実弾兵器は効きません」

モスカは腹部にエネルギーをためて打つ

「!?海斗と同じ赤い炎!?」

避けられないと思いシールドで防ごうとするが

「やらせるか!フレイムアロー!」

海斗が嵐の炎で相殺する

「海斗!大丈夫ですか?」

「ああ、心配かけてすまなかった。行くぞ!」

「はい!」

涼子はビームサーベルを抜き、モスカに切りかかる。が、モスカは全身に電磁スパークを張りそれを防ぐ。

「離れろ、涼子!フレイムサンダー!」

フレイムサンダーはモスカの電磁スパークを貫通し左腕を破壊する

そして大空のボックスからXグローブを出す

「オペレーションX」

海斗はXバーナー発射体勢に移る

「涼子敵の注意を逸らしてくれ」

「分かりました。」

涼子はビームライフルでモスカを狙う。
モスカは涼子のビームライフルを避ける

「これでどうですか！」

涼子はクスィフィアスを打ち、避けられるがバラエーナ・プラズマ収束ビーム砲を放つ、モスカは電磁スパークで防ぐが、脚をかすめる

「海斗、チャンスです！」

「ああ！行くぜ、Xバーナー！」

海斗はXバーナーを撃つ、モスカは全ての追尾ミサイルを海斗に向けて撃つ、涼子はミサイルを打ち落とそうとするが数が多くて全てを打ち落とせず海斗に当たる

「海斗ーーーー！！！」

涼子の悲痛な叫びが届いたような気がした

場所　保健室

「……と、…か……と」

誰だ？どこかで昔聞いたことがある

「海斗！」

「う……、り、涼子……」

「海斗、よかった、本当によかったよ～」

涼子は抱きついてきて泣きだした

「心配かけて悪い。もう大丈夫だから。……あのＩＳはどうなった？」

「あれなら――」

「あのＩＳは回収した。おまえ達のおかげで被害は最小限に抑えられた。ありがとう」

織斑先生が頭を下げてお礼を言ってきた

「気にしないでください。私たちはただ学園の不法侵入を許せなかっただけですから」

「そうか、分かった。今日は疲れただろう。よく休めよ」

「ありがとうございます」

織斑先生が保健室から出て行った。

「私たちも戻りましょうか」

「ああ、そうだね」

海斗と涼子も保健室を出る

部屋についたら山田先生がいた。

「黒羽君、柊さん丁度よかった。お引っ越しです」

「はい？」

涼子が意味が分からないと言いたそうな顔をしている

「部屋の調整ができたんだよね」

「はい、そうです。柊さん荷物をまとめてください」

「え！あ、あの、一夏と同室の篠ノ之　箒さんは……」

涼子が慌てたように言う

「篠ノ之さんはもう移動しましたよ。柊さんも早くしてください」

「涼子、あまり先生に迷惑かけてはダメだよ」

「で、でも海斗にちゃんとご飯食べさせないと……」

「え、黒羽君ご飯食べないんですか！？ダメですよ食事はちゃん

ととらないと」

「じゃ、じゃあ夕飯の時に涼子呼びに来てくれ！」

「わ、分かりました」

３０分ぐらいして涼子の荷物はまとめ終わった

「はぁ～、今日は疲れた」

（それにしても、何でモスカが？キングモスカだったから良かったけど、もしゴーラモスカだったら……）

そこまで考えて海斗は首を振り

（寝よう……）

布団に入った

二つの敵とお引っ越し（後書き）

もう一機はキングモスカでした

気づいてるかもしれませんがボンゴレのカラーリングは炎の色で変化します

調査（前書き）

一夏達は出てきません

調査

第１２話　調査

無人機襲撃事件の次の日

俺は今学園の地下五十メートル。レベル４権限を持つ関係者しか入れない場所にいる
何故ここにいるのかというと

――今朝の修行中

「ここにいたか、黒羽」

外で修行していたら織斑先生がやってきた

「織斑先生、何ですか？」

「聞きたいことがある。昨日のＩＳ二機目の方についてだが、何か知っているか？」

「俺に聞かなくてもデータを見ればいいでしょう」

「解析不能のロックがかけられていて開けることができないから尋ねてきた」

ロック？……成る程ね

「自分にもよくわかりませんが、ロックをはずすことはできると思います」

「本当か？」

「多分ですけど、今日中にははずせると思います」

「ならば、今日は一日授業に出席しなくていいからあのＩＳについて調べてくれ」

「分かりました」

――

と言うわけで今ここにいるのだが

「見れば見るほど、殺意がわいてくるな……さて始めるか」

まず俺はモスカに触れ調べる

（微かだが、炎が感じられる……やはり死ぬ気の炎で動いてたんだ）

その後ボンゴレとモスカを繋ぎデータを取る

（属性は嵐、武装は６６６個のミサイル（追尾）、腹部の死ぬ気の炎、棍のような兵器を二つ所持、まあ、こんなものかな……ゴーラモスカとは違って中身は人がいなくても動くみたいだし）

海斗が色々と考えていたら

「調子はどうだ？」

織斑先生が入ってきた

「色々と分かりましたよ。今聞きますか？」

「そうだな。聞かせてもらおうか」

織斑先生が俺の隣に来る

「まず、このＩＳはキングモスカです。モスカの二代目です。
モスカとは対ＩＳ戦闘に作られた機体です。
一番最初に作られたのはゴーラモスカ。動力源は人の命です。ですが、ゴーラモスカには致命的な欠点があったんです」

「その人間が機体に耐えられないことか？」

「その通りです。中の人が死ぬとその時点でモスカは止まります。
生きた人間を必要としないのが第二代キングモスカです。
キングモスカはゴーラモスカよりスピード、パワーが格段に上です。下手をすればＩＳと操縦者は死ぬでしょう」

「この学園に対抗できる奴はいるか？」

「専用機持ちが三、四人いればなんとか倒せると思います」

「そうか、ご苦労だったな。今日のところは休んでいいぞ」

「分かりました」

「黒羽、何故そこまでモスカについて詳しいんだ？」

部屋を出ようとしたら織斑先生が聞いてきた

「……前に、戦ったことがあったから。
ゴーラモスカとキングモスカをね……」

「そうか。ゴーラモスカに乗ってた奴はどうなった？」

「生きてますよ。記憶は殆ど無くしてますがね……。だから、俺はモスカをモスカを作った奴を許さない」

そう言って部屋から出ていった

そう言って部屋から出ていった

現在寮の部屋

コンコン……

「誰？」

「私です。涼子ですけど、入っていいですか？」

「鍵開いてるから入っていいよ」

ガチャッとゆっくり音をたてて涼子が入ってくる

「失礼します。……海斗今日一日授業に出席しませんでしたけど、どうしたんですか？」

「調べ事、あまり気にしなくていいよ」

「私じゃ、海斗の力になれませんか？」

「え？」

「海斗は私の力になってくれるのに、私は海斗の役に立ってません……。私は邪魔ですか？」

涼子が泣きそうな顔で聞いてくる

「いきなり何？」

「だって、連絡したのに電話もメールも返ってこなかったから！私は邪魔なのかなって……」

いきなり大声を出したかと思ったら直ぐに声が小さくなった

「邪魔だと思ったら、部屋にはいれないよ。それに襲撃事件の時に涼子がいたからあのＩＳを倒せた。だから、役に立たないとも思ってない」

「本当ですか？」

「本当だよ」

「じゃあ、何でそんなに辛そうなんですか？」

「！？　それは、あのＩＳを見たからかな」

「なんで……」

「悪いけど聞かないでいてくれると嬉しい」

「分かりました。その代わり、その辛そうな顔はやめてください」

「分かったよ。……それじゃ、食堂行こうか？」

なるべく明るい声で食堂に誘う

「はい！行きましょう！」

そして、部屋を出て食堂に向かった

その後、一夏達と食堂で会ったり、涼子の部屋の場所を聞いたりした

再び寮の部屋

（モスカのことは置いといて、今日はシャワー浴びて早く寝よう）

そう思い海斗はシャワー室でシャワーを浴びて布団に入った

調査（後書き）

次回は新しいオリヒロが出ます

記憶をなくした少女（前書き）

新たなるオリヒロ登場！

そして今回から誰か視点をつけてみました

記憶をなくした少女

第１３話　記憶をなくした少女

６月の頭
俺は今久し振りに自宅に帰ってきた

「ただいま」

「お帰りなさい、海斗様。」

家に入ると、一人の女性が出迎え、抱きついてくる

「ただいま、恵美。久し振り、それと離してくれる？」

「分かりました。でも、帰ってくるなら連絡してくださいね」

「こっちも色々たて込んでてね。出来なかったんだ」

「そうですか」

「それで、何か思い出せた？」

「いえ、何も……すいません」

「謝る必要はないよ。ゆっくり思い出していこう」

「はい！」

リビングに入って椅子に座る

「俺がいない間に何か変わったことはある？」

「ん～、特にはありませんでしたね」

「そう。ありｇ……「あっ！ありました」……本当？」

「はい、えっと１ヶ月ぐらい前に金髪で緑色のコートを着た若いお兄さんと後ろに黒いスーツを着た人達が訪ねてきましたよ」

「その人は何て？」

「えっと……海斗様は居ますかと聞いてきました。まあ、居ないといいましたけど」

金髪で緑色のコートを着た人ねぇ。誰だ？

「他には？」

「えっと……頭にウサミミを着けた女性が訪ねてきましたよ」

「頭にウサミミ？いくら恵美でもふざけてるなら咬み殺すよ」

「本当ですって！ウサミミを着けた女性が来たんですよ」

「知らないからいいや」

「いいんですか？知らないままで」

「だって名前知らないでしょ？」

「いえ、自分から名乗りましたよ。えっと、たしか束と名乗ってました」

「うん、知らないからいい」

「そうですか。……良かった」

「何か言った？」

「気にしないでください。独り言です」

そう言って向かい側の椅子から立って隣に座る

「こうやって二人で居るの久しぶりですよね」

「そうだね。一人で寂しかった？」

「はい……寂しかったです。でも、明日からまた一人なんですね」

「なんなら、ＩＳ学園に入る？」

「そう簡単に入れるんですか？」

「入れると思うよ。恵美には俺が持ってるＩＳを使ってもらうから」

「海斗様が持ってるＩＳ……ボンゴレですか？」

「違うよ、ボンゴレを作る元になった機体『ヴァリアー』だよ」

「ヴァリアーですか？私に動かせるんでしょうか」

「大丈夫、恵美ならできるよ。それじゃ早速初期化と最適化を始めよう」

そして恵美はＩＳを手に入れた

現在の場所職員室

あの後直ぐに初期化と最適化をして終わったら急いで学園に戻ってきて織斑先生にお願いしている

「それで、どうでしょうか織斑先生」

「黒羽と同じ力を持つＩＳか……上の奴らなら喜んで入れるだろうが……」

「駄目ですか？」

「よし、こっちで手続きをしておこう。直ぐに学園の必要な物が届くだろう。その星野は学園までの道のりを知っているのか？」

「ええ、知ってます。ありがとうございます」

そう言って職員室から出た

現在寮の自室

（明日から恵美が学園に来る。それにしても、金髪の緑色のコートを着た男とウサミミを着けた女性か、俺に何のようなんだ？）

「あまり考えすぎはよくありませんよ」

「いつの間に入ってきたの？」

何故か寝ころんでいたらベッドに涼子が座っていた

「ノックしても返事がないので、勝手に入りました。それとも私がいたらダメですか？」

「ま、涼子だからいいかな」

「え？私だから？」

「うん、涼子じゃなかったら追い出してたね」

「そ、そうですか。私だから……／／／」

涼子が何か顔を赤くして下を向いている

「それで何？」

「え？」

「いや、え？じゃなくて何か用があってきたんでしょ？」

「あ、そうでした。何か面白い噂が立ってますよ」

「面白い噂？」

「はい、学年別トーナメントで優勝したら一夏か海斗と付き合えるという噂です」

「ふーん、どうでもいいよね」

「海斗も関わってるんですよ！？」

「うん、分かってる。でも俺が優勝すれば何の問題もないよね」

「そうですね」

（それに海斗が万が一負けても私が優勝すれば）

「何か言った？」

「いえ何も。それじゃ、伝えたいことは伝え終わったんで部屋に戻りますね」

「分かった。おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

涼子が部屋から出ていく

（俺も寝るかな……）

海斗も眠りについた

～涼子ｓｉｄｅ～

海斗の部屋から出て自室

（海斗は気にした様子ありませんでしたね。女性に興味ないんでしょうか？）

「はぁ～、海斗は人の恋愛に関しては鋭いのに、自分のことになると鈍感なんですよね」

誰もいない部屋で一人呟く

「そういえば、海斗が笑ってるとこ見たことありませんね」

そう、入学してから今まで海斗が笑ってる姿を見てないのだ

「どうしたら笑ってくれるんでしょう」

涼子はこれじゃ笑いませんね。などと呟いていた

（こんな時間ですかもう寝ましょう……）

考え事を中断して眠った

記憶をなくした少女（後書き）

次回はフランスとドイツの代表候補生……と行きたいところですが、
オリヒロとＩＳの説明が先です

ヒロインとＩＳ設定２（前書き）

ヒロイン設定です

ヒロインとＩＳ設定２

ヒロイン

名前　星野　恵美【ほしの　めぐみ】

髪の色　朱色

瞳の色　紫

性格　一人になるのを嫌い基本的には海斗と一緒に行動している。涼子の事をライバル視している（海斗のことで）

好きなもの　海斗　仲間　海斗の女装姿

嫌いなもの　海斗に害をなすもの　虫

ゴーラモスカに乗せられたせいで記憶を失った少女、周りには記憶がないことを隠している。自分の両親も知らない
ゴーラモスカの事件には海斗も関わっていて（ゴーラモスカを破壊するため）そこで恵美を助け出し記憶を失っていることに気づき（海斗は自分のせいだと思っている）一緒に住むことになった
海斗の提案でＩＳ学園に通う事になる
海斗ほどではないが超直感を持っている

所持品　専用ＩＳ　ナイフ

ＩＳ説明

専用機ヴァリアー（第６世代型）
武装　二丁拳銃　近接ブレード　ナイフとワイヤー　電気傘（パラボラ）所持リング　大空　嵐　雨　晴　雷　霧のヴァリアーリング
霧のヴァリアーリングはハイパーセンサーに映らないようになるか分身を生み出す（両方は不可）

所持ボックス
大空　白の天空ライオン（天空嵐ライガー）

嵐　嵐ミンク

雨　暴雨鮫

晴　晴クジャク

雷　雷エイ

海斗から貰ったＩＳ憤怒の炎は使えるが海斗がロックを掛けているボンゴレと同じくスラスターはなく脚から大空の炎を噴射して飛ぶナイフに関しては無限に出せる

単一仕様（ワンオフ・アビリティー）
天空嵐ライガー

ヒロインとＩＳ設定２（後書き）

幻術に関しては恵美は自分の分身しか使えないようにしようと思います

三人の転校生（前書き）

とうとう来ます。フランス、ドイツの代表候補生とオリヒロが……

三人の転校生

第１４話　三人の転校生

月曜日の朝
海斗は今銀髪の眼帯を着けた女性の腕を掴んでいる
こうなった理由

――

カキンッ、カキンッ

現在朝７：３０
朝の修行で海斗と涼子が朝からＩＳを使わないで模擬戦をしている

「なかなかやりますね」

「涼子こそ思った以上だね」

海斗が使っている武器はトンファー
涼子が使っている武器は真剣である

涼子が剣を上から一気に振り下ろす

海斗は片方のトンファーで受け止めもう片方のトンファーで殴りかかる、が涼子は咄嗟に後ろにジャンプし攻撃をかわす

海斗は涼子に一気に近づき右から殴りかかる、涼子はそれを屈ん

で避け脚払いを仕掛ける、海斗は後ろに跳ぶが体勢を立て直した涼子が左側から切りかかるが海斗はそれを防ぐ。
そんなこんなで時間が過ぎて

キーンコーンカーンコーン
現在時刻８：２５

「「あ」」

海斗と涼子が一緒に声を出す

「今日はこれくらいだね」

「そうですね。それで遅刻確定ですけど走りますか？」

「当然でしょ。下手したら織斑先生の制裁が来るからね」

「じゃ、急ぎましょうか」

海斗と涼子は走り出した

――

そして、教室に入ったら銀髪の眼帯を着けた女性が一夏を殴ろうとしていたのを止めた

「こんな公共の場で人を殴ろうとするのは良くないよね」

「くっ、離せ！」

女性は捕まれた腕を振り解こうとする

「次同じ事をしたら咬み殺すからね」

そう言い女性の手を離す

「貴様、名前は？」

「そう言う君こそ何？」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「俺は黒羽　海斗」

名前をいったら女性は空いてる席に座った

「さて、落ち着いたところで、黒羽　柊何故遅れたか後で聞かせてもらうからな。……ではＨＲを終わる。各人は着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

手を叩いて織斑先生が行動を促す。

「黒羽、織斑、デュノアの面倒を見てやれ同じ男子同士だ」

「デュノアって誰？」

デュノアっていう人のことを聞こうとしたら。金髪の髪を後ろで丁寧に束ねている男性が反応した

「僕だよ。えっと、君は黒羽君で――」

「悪いけど後でいいか？女子が着替え始めるから。行くぞ海斗」

一夏が紹介を止めて急ぐようにいう

「そうだね。それじゃ、行くよ」

海斗はデュノアの手を取り教室を出た

出る寸前に恵美にアイコンタクトで『また後で』と伝える

「一夏今日はどこが空いてる？」

走りながら一夏に聞く

「確か第二アリーナが空いてたぞ」

「分かった。なるべくはや……「転校生発見！」……予想より早いね」

ＨＲが終わって情報を先取りするために皆いち早く教室を出たのだろう

（まずいね、囲まれた）

「織斑君と黒羽君の黒髪もいいけど、デュノア君の金髪もいいわね」

（一夏、俺が煙幕を張るから一気に走って）

（海斗達はどうするんだ？）

（デュノアは俺が抱えていく）

（分かった）

一夏との作戦が決まり実行に移す

「デュノア、ちょっとゴメンね」

「え？……ひゃっ！」

「一夏走れ！」

ボンッ！

煙幕を張るのと同時に走るように言い、デュノアを抱えて走る

現在第二アリーナ更衣室

「何とか撒いたか？」

「……何とか撒けたね」

「ええっと、その、降ろしてもらっていいかな？／／／」

「ああ、そうだね。デュノアこれから先こんな事があるから気をつけてね」

「あ、うん、分かった。それと、僕のことはシャルルでいいよ」

「俺は黒羽　海斗。呼び方は好きにしていいから」

「俺は織斑　一夏。一夏って呼んでくれ」

「うん、よろしく海斗、一夏」

「うわ！時間やばいな！早く着替えちまおうぜ」

一夏が言った後時間を見たら本当にギリギリだった

「みたいだね、着替えようか」

そう言って一夏と海斗は着替え始める

「わあっ！？／／／」

シャルルは顔を赤くして後ろを向いた

「何？早く着替えないと遅れるよ？」

「き、着替えるよ？でも、その、あっち向いてて……ね？」

「別にいいけど」

「人の着替えをじろじろ見る趣味もないからね」

シャルルから視線をはずし着替えに戻る

着替え終わり一夏の方を見たらまだ着替えてる最中だった、シャルルの方は着替えが終わっていた

「へぇ、着替えるの早いね」

「うわ、ホントだ何かコツでもあるのか？」

「い、いや、別に……」

「そんな事より、一夏俺たちは先に行ってるから。行くよ、シャルル」

そう言って更衣室を出てく

グラウンドに向かう途中でシャルルがこっちを見てくる

「何？」

「うん、海斗のＩＳスーツ皆と全く違うと思ったから」

海斗のＩＳスーツは普通のＩＳスーツではなくマフィアの着るようなスーツのである

「俺のＩＳは特別だからこのスーツなんだよ」

「へぇ～、そうなんだ」

現在グラウンド

俺とシャルルはギリギリ間に合ったが一夏が遅刻してきた　一夏、

シャルル、俺は一組の一番端に並ぶ

「海斗様、遅かったけど何かあったんですか？」

「ちょっとね……。色々あって」

前にいる一夏はセシリア・オルコットと何か話している

「そういえば今更ですけど海斗のＩＳスーツって珍しいですよね」

今度は涼子が話しかけてくる

「本当に今更だね。まあ、二組の女子は不思議そうに見てるみたいだけど」

さっきも言った通り海斗のＩＳスーツは珍しいので二組から不思議な視線が送られてくる。

最初は織斑先生にふざけているのか。と、言われ殴られそうになった

一夏、セシリア・オルコットが話していると凰　鈴音も加わっていた

そんなに大声を出すと織斑先生に……と思ったらこっちに来ていた

バシーン！と良い音が鳴り響く

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

織斑先生が今日の内容を言う

「今日は戦闘を実演してもらおう。丁度活力があふれんばかりの十代女子もいることだしな。――凰！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！？」

セシリア・オルコットがとばっちりを受ける

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出ろ」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

二人してブツクサ言っている

「お前ら少しはやる気を出せ。――アイツにいいところを見せられるぞ？」

「やはりここは、イギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

二人のやる気が途端にあがる。織斑先生何言ったんだ？

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でもかまいませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるな馬鹿共。対戦相手は――」

キィィィン……。

「あああああーっ！ど、どいてください～っ！」

山田先生が降ってくる

海斗はボンゴレを展開しXグローブを出し片方の手を後ろにして炎を噴射し、もう片方の手で山田先生を受け止める

「気をつけてよね。山田先生」

「はい、すみません。ありがとうございます」

ボンゴレを解除して涼子と恵美のところに戻る

「さすが海斗、お見事です」

「海斗様、ボックスの開匣速度上がりました？」

「ありがとう涼子。まあ、少しだけどね」

涼子と恵美と話してるとシャルルが話しかけてきた

「ねぇ、海斗あの時海斗のＩＳの色が変わったけどなんで？」

「今は話せないけど、気が向いたら話すよ」

「うん、分かった」

シャルルと話してたら織斑先生が話し始めた

「お前たちの対戦相手は山田先生だ」

「え？あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「山田先生はこう見えても元代表候補生だ。今のお前たちならすぐ負ける」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

負けると言われてセシリア・オルコットと凰　鈴音は瞳に闘志をたぎらせる

「では、はじめ！」

号令がかかり、三機とも飛翔する

「手加減しませんわ！」

「本気で行くわよ！」

「い、行きます！」

戦闘が始まり、先制攻撃をしたのはセシリア・オルコットと凰鈴音組だが回避される

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をして見せろ」

「あっ、はい。山田先生の使用されているＩＳはデュノア社製＜ラファール・リヴァイヴ＜です。第二世代開発最後期の機体ですが――」

シャルルが説明を始めるが海斗は考え事をしていた

（ボンゴレを展開したとき、炎の炎圧が下がっていた……。昨日見たときにはそんな事はなかったのに何でだ？）

「海斗？どうかしましたか？」

「えっ？あ、うん、ちょっと……」

海斗が考え事をしていたら涼子が話しかけてきた

「相談にのりますよ？」

「大丈夫だよ。……終わるね」

海斗が考え事をしていたら涼子が話しかけてきた

「相談にのりますよ？」

「大丈夫だよ。……終わるね」

爆発が起こり、煙の中から二つの影が地面に落下した

「凄いですね、山田先生二人相手に殆ど無傷です。……海斗様？」

海斗が織斑先生のところにいく

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

「織斑先生、俺を山田先生と戦わせてもらえますか？」

「駄目だ。これ以上模擬戦闘に時間を割くわけには行かない」

そう言われて海斗はおとなしく下がる

織斑先生が手を叩きみんなの意識を切り替える

「次にグループになって実習を行う。専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰、黒羽、柊、星野がリーダーをやれ。では、別れろ」

織斑先生が言い終わるや否や女子は真っ先に一夏とシャルルに群がる

セシリア・オルコット、凰　鈴音、涼子、恵美にも多少なりとも人が集まる

海斗とラウラ・ボーデヴィッヒには人はいなかった

「織斑君一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えて～」

と一夏班

「デュノア君の操縦技術をみたいなぁ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループに入れて！」

とシャルル班

「な、なぁ、なんで海斗のところには行かないんだ？」

「そうだね、何か理由でもあるの？」

一夏とシャルルが疑問に思ってか、女子に聞く

そしたらひとりの女子が答える

「だってなんか恐いし。噂では最強で最凶の不良って言われてるんだよ」

「そうなのか？俺専用機を持ってなかったら海斗のところに行くけどな」

「う～ん、僕も海斗がそこまで恐いとは思わないけど」

女子が一夏とシャルルに言われて悩んでいる

ちなみに海斗は今にも暴れそうな涼子と恵美を取り押さえている

「この馬鹿者共が……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通りだが、黒羽お前はデュノアと一緒のグループに、星野は柊と一緒のグループになれ。もたついたらＩＳを背負ってグラウンド百周だ！」

織斑先生の声に生徒がビックリしてすぐに分かれる。海斗はシャ

ルル、恵美は涼子のところにいく

「最初からそうしろ馬鹿者」

ため息をもらす織斑先生。女子は何かぼそぼそ喋っている

「海斗、よろしくね」

「こっちこそよろしく、シャルル」

シャルルと簡単に挨拶をすませる

ちなみに女子は俺がいるのか、何もしゃべらない。……そっちの方が楽だけど

「皆さん、訓練機を一班に一体取りに来てください。数は＞打鉄＜が三機、＞リヴァイヴ＜が三機です。早い者勝ちですよー」

そう言われてシャルルと相談した結果、＞リヴァイヴ＜になった

「何から始める？」

「そうだな。……まあ、歩行と停止でもやる？」

「うん、僕はそれでいいよ」

シャルルと一緒にやることを決める

ちなみに女子は今だに沈黙している

「それじゃ、早速始めるよ。いい？」

「は、はい！」

海斗が始めることを言うと女子は全員声を揃えて返事をする

「それじゃ、最初の人は誰？」

「あ、はい！出雲　灰李です」

「さて、始めるよ。早く乗って」

「海斗、そんなに急かさなくても。ゆっくりやればいいんじゃない？」

「ん、分かったよ。ゆっくりでいいから、怪我しないでね」

出雲　灰李は「はい」と言ってＩＳに乗り込む……が直前で足を滑らせる

「きゃっ！？」

まだＩＳに乗ってないのでそのまま地面に落ちていく。

誰も間に合わないと思った

……が、地面にぶつかることはなく、不思議に思って目を開ける

「緊張しすぎ、肩の力を抜きなよ」

「え？黒羽君……？」

海斗が受け止めていた。海斗は彼女を立たせる

出雲　灰李は下を向いて怒られると思って緊張している

「だから、緊張しすぎ何度も言わせないで。目立った外傷はないけど、痛いところは？」

「え？だ、大丈夫です」

「そう、なら安心だね。次は気をつけてね、次も助けられるかわからないから」

そう言って彼女の頭をなで緊張を解く、彼女は顔を赤くしながら「はい……」と頷く

「さて、それじゃもう一回やろうか？」

「……は、はい」

そして彼女はもう一度ＩＳに乗る
今度は無事に乗れて海斗は安心する。
出雲　灰李の歩行を見ながらシャルルが話しかけてきた

「最初はだめかと思ったけど、流石海斗だね。僕は目を背けたのに……」

「気にしなくていいよ。彼女は無事だったんだから」

「うん……」

シャルルは気を落として返事をする

その後彼女は歩行と停止を終え、ＩＳを降りる

「どうだった？思ったよりも簡単だった？」

「は、はい」

シャルルは彼女に話しかける。彼女はシャルルの言葉に返事をした後海斗をチラッと見て頬を赤くして女子達のところに戻った

「黒羽君とデュノア君どうだった？やっぱり、黒羽君怖かった？」

「二人とも優しかったよ。黒羽君が不良だって言う噂は嘘なのかもしれない」

「そうなの？」

「うん、先輩のような感じかな？実際に話せばわかるよ」

「次の人は誰？」

シャルルが次の順番の人を呼ぶ。その声に女子は「あ、はい」と返事をし、海斗とシャルルのところにいく。

そして、次の人がやって戻ったら「先輩って感じがした」と答えた。その後のＩＳの歩行と停止はスムーズに行き、海斗とシャルルの班が最初に終わった。

途中一夏たちのところが騒がしかった気がする

三人の転校生（後書き）

う～ん……

内容がグダグダだ……

そんな事より、次回は「はい、あ～ん」の回です皆さん待っててください！

昼食（前書き）

思い浮かばなかったので何となくで書いてみました

昼食

第１５話　昼食

「……どういうことだ」

昼休み、いつものメンバー＋シャルルは屋上にいた
女子は噂の転校生事、シャルル目当てで学食に向かった。よって屋上には誰もいない
因みに、遠くから俺と恵美と涼子、それに何故かシャルルも一夏達を見ている

「何で涼子達はこっちに来てるの？」

「海斗こそなんでこっちにいるんですか？皆さんと一緒に食べればいいじゃないですか」

「俺はＩＳの調整」

「？何か悪いんですか？」

「炎圧がちょっと……」

「なら、私は海斗様の力になれるかもしれませんね」

「私は海斗がちゃんとご飯を食べるか見張ってないといけませんから」

「僕は向こうにいると嫌な予感がするから」
嫌な予感ね……あながち間違ってないよ
「海斗様炎圧の何が悪いんですか？」
「基準値より下回ってる。今までそんなことは一度もなかったのに……」
「海斗、炎圧って何？」
シャルルが話についていけず聞いてくる
「ああ、炎圧って言うのは、炎の出力だと思ってくれてかまわないよ」
「海斗、教えちゃっていいんですか？」
涼子が不安そうに聞いてくる
まあ、これはコアのようなものだからあまり教えたくはないけど
「シャルルだからいいかな？」
「え？僕だから？」
「うん、誰にも言わないと信じてるから」
その時シャルルは苦い顔をして俯いた
「デュノアさん、どうかしたんですか？」

恵美が心配そうに聞く

「え？あ、うん、大丈夫だよ。それと僕のことはシャルルでいいよ。そのかわり僕も二人のこと、名前で呼んでいいかな？」

「いいですよ」

「私もかまいません」

シャルルは、「ありがとう」と言う

「それじゃ、お昼にしましょう」

そう言ってみんな頷き、購買で買ったパンを出す。

海斗以外は……

カタカタ……

じーー……

カタカタ……

じーー……

海斗はＩＳをパソコンにつなぎ、ＩＳの調整をする

涼子と恵美は何か言いたそうな顔で海斗を見る

「二人して何？」

海斗が視線に耐えきれず訊く

「「何で何も出さないんですか？」」

見事にハモった二人を見てシャルルはクスクスと笑っている

「買う暇がなかった」

「そうなんですか」

涼子は納得したが恵美は納得してなかった

「海斗様、買う暇がなかったのではなく買う気がなかったのでは？」

「何をもってそんな事が言えるの？」

「頼めば買えましたよね？なんで頼まないんですか？」

「その考えが浮かばなかった」

「嘘はやめてください！また倒れたらどうするんですか！」

恵美が大声を出す。近くにいた涼子とシャルルは驚いた顔をしている

向こうにいる一夏達も何事かとこっちを見てくる

「海斗様は自分のことに関して無神経すぎます。もっと自分を大切にしてください」

「ごめん。悪かった」

「分かってくれればいいんです。では、早速買いに行きましょう」

恵美が手を掴んで引っ張ろうとするがシャルルが待ったをかける

「ちょっと待って、だったら僕のをあげるよ。少し買いすぎちゃ

ったから」

「いいんですか？」

「うん、僕はこんなに食べないから」

「ありがとうございます。シャルル君」

恵美が礼を言う。俺も後に続いて「ありがとう」と言うシャルルは笑って「どう致しまして」と言ってくる

こうして、屋上での昼食タイムは終わった。

途中一夏たちの所が騒がしかったりした。

……シャルルの勘すごいな

昼食（後書き）

別々で昼食……

すげぇ難しい、慣れないことはするもんじゃないけど、やりたくなるんだよね

新たなる同居人（前書き）

今回は特訓と同居人

新たなる同居人

第１６話　新たなる同居人

放課後、アリーナで一夏の訓練をしている

「一夏、今日は俺と一対一で戦ってもらう」

「分かった、俺も前よりは強くなったんだ。一撃ぐらい当ててやる」

「その意気だよ。涼子は篠ノ之　箒達を頼む」

「わかりました。それでは皆さん行きましょう」

そう言って、涼子達は少し離れて訓練する

「一夏始めるよ」

「おう！」

海斗は雨の匣展開し時雨金時を出す

一夏は雪片弐型を展開し構える

「それじゃ、始め！」

合図と同時に一夏が先に動く

（守式四の型　五風十雨）

一夏の縦横無尽の攻撃を確実にかわす

「確かに剣捌きは上手くなってる。……でも、甘い！」

一夏に刀を振るう

一夏は防御に移る、がその手に刀はなかった

「刀が消えた！」

「違うよ」

海斗は刀を滑らせて持ち手を変えて斬る

（攻式五の型　五月雨）

「うわっ！な、何だよ今の……」

「余所見はよくないよ」

海斗は一夏の懐に飛び込む

（攻式八の型　篠突く雨）

「うわっ！」

一夏が体勢を完全に崩した

「ここまでにしよう。最初と比べればすごいよくなったよ、後は守りと攻めのタイミングを見極めることだね」

そう言って海斗は涼子の方を見る
涼子達もちょうど終わった所だった

「お疲れ涼子、それにみんなも。今日はこれくらいにして戻るよ」

現在　寮の部屋

海斗はドアを開けようとして止まる

（人の気配がする……恵美じゃない、涼子はさっき部屋に戻ったから涼子じゃない）

海斗はドアノブに手をかけ開ける

「誰かいるの？」

「え？か、海斗？」

「シャルル、なんでここにいるの？勝手に入っていいなんて言ってないよ」

「いや、僕もこの部屋なんだ」

「ふ～ん、そうな……「海斗様、夕飯の時間ですよ。食堂に行きましょう」……恵美、分かったすぐいく」

ドア越しから恵美が食事に誘ってくる

「シャルルも行くでしょ？」

「うん、行こう」

そう言って部屋を出て恵美と合流途中で一夏と涼子に会ったので一緒に食堂に行く

現在食堂

テーブルで同席してるのは海斗、一夏、シャルル、恵美、涼子の五人だ

「よかったです。海斗がご飯食べるようになってくれて」

「まあ、いつも強制的に連れて行かれるから。半分あきらめてるんだよ」

「でも、それは自業自得ですよ」

「って言うかなんで海斗は飯を食わないんだ？」

涼子が色々言ってたら、一夏が訊いてくる

「さあ？自分でもわからない。ただ食べなくても平気だと思ったからかな」

一夏が「いや、平気じゃないだろ」と言ってきたけど何か言った

ら恵美と涼子に何か言われるかもしれないので、聞き流した

その後、女子が増えてきたのでさっさと食べ終わり部屋に戻った

現在寮の部屋

「それじゃ改めてよろしく、シャルル。何か飲む？」

「よろしくね海斗。まかせるよ」

そう言われて食後の休憩に日本茶をいれ、シャルルに渡す

「ありがとう。……紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「じゃあ次飲むときは、ほかのも飲んでみる？」

「海斗お茶いれることできるの？」

「まあね。お茶は好きだから」

そう言って海斗はパソコンに向きクラス代表戦のデータを見る

「海斗それ何？」

「クラス代表戦のデータだよ」

「……それって普通持ち出し厳禁だよね？」

学園のＩＳデータは悪用されないために普通は厳重に保管されて

いるのだ

「特別に許可もらったから」

「でも僕がいるんだけど……」

「大丈夫じゃない？それより何でだん……「海斗様！」……何？」

突然恵美が入ってきたのでパソコンを切る

「これ着てくだ…さ……い？」

恵美が俺とシャルルを交互に見る

俺とシャルルは恵美が持ってきてる者を見る

「シャ、シャルル君？どうしてこの部屋に？」

「僕もこの部屋なんだ」

「そんな事より……その手に持ってるもの何？」

恵美が持ってきたものそれは……メイド服だった……

「あ、これは海斗様に来てもらおうと……」

「海斗女装趣味があったの？」

「ないよ！全くない！」

「そうですよ。私が好きで着せてるだけですから」

恵美は笑顔をシャルルに向けて言う

「……」

シャルルは声がでなくなった

「言っておくけど、それ着ないから」

「えぇ～～！何でですか！似合うじゃないですか！」

「時と場所をわきまえろ！」

「分かりました、今回は諦めます。ですが、いつか着てもらいますからね！」

そう言って恵美は部屋から出ていった

残ったのは微妙な空気だけだった

「……寝ようか？」

「……そうだね」

そして、海斗とシャルルは眠りについた

新たなる同居人（後書き）

海斗が女装しそうな所まで持ってきました

存在（前書き）

サブタイトルが思いつきませんでした……
そしてこのサブタイトルも関係ないかな？

存在

第１７話　存在

転校生が来て三日目
現在昼休みで食堂に来ている

「はぁ～」

「海斗様どうかしたんですか？ため息ついてますと幸せ逃げますよ」

「幸せなんてこないよ。……ボンゴレの調子が戻らないから」

「ＩＳの調子が悪いなら学園で見てもらえばいいのではないか？」

恵美と話してたら篠ノ之　箒が話に参加してきた

「それが出来れば苦労はしないんだけどね……」

「出来ないのか？」

「俺の使うＩＳはほかとは全然違うから」

「何が違うんだ？」

今度は一夏が訊いてくる

「詳しくは言えないけど、大体わかるでしょ」
「まあ、黒羽さんのＩＳは武器も違いますからね」

「って言うかリングと匣だけなのになんであんなに強いのよ」
セシリア・オルコットと凰　鈴音も入ってくる

「匣の中にはそれぞれ武器があるからですよ。私もリングと匣持ってますよ」

「マジか！って言うことは海斗と同じくらい強いのか？」
一夏が驚いた声で言う

「海斗様に比べて私は全然弱いですよ」

「そう言えばこん中で一番強いのって誰？」
今まで話を聞いていたシャルルが訊いてくる

「海斗だろ」
「海斗様ですよ」
「海斗です」
「黒羽だな」
「黒羽さんですわ」
「黒羽よね」

上から一夏、恵美、涼子、篠ノ之　箒、セシリア・オルコット、凰　鈴音の順で言う

「へぇ～、海斗ってそんなに強いんだ」

「自分ではまだまだと思ってるけどね……」

暫く雑談してたら

「ねえ、海斗」

「何？」

「海斗って放課後に一夏の訓練してるんだよね？」

「そうだけど、それで？」

「僕も加わっていいかなって思って……。それに僕、専用機持ちだから力になれると思うんだ……ダメかな？」

（シャルルが加わるのか……別にいいかな。それに、みんなの覚悟もみれるかもしれないし）

「うん、分かった。一夏もいいよね？」

「ああ、いいぜ。頼むな、シャルル」

「うん、任せて」

一夏の承諾もとれたし、後はシャルルの実力を見なきゃな

「あ、あの！海斗様、私も訓練に参加してもいいですか……？」

考え事をしていたら恵美が話しかけてきた

「いいよ。恵美はまだ＞ヴァリアー＜をちゃんと扱えないから俺が見なきゃならないからね」

「見てくれるんですか？」

「当たり前でしょ？」

「ありがとうございい……「でも！」……はい？」

恵美が礼を言おうとして止める

「今日は俺は訓練に参加できないから」

「どうしてですか？」

「確認したいことがあるから……シャルルに」

「？僕に？」

「そう、だからシャルルも今日の訓練には参加できないよ」

「う、うん分かった」

この後普通に食事を食べ終え教室に戻った

場所は変わり会議室

寮の廊下を歩いていたら織斑先生に連れてこられた

「ここなら誰にも話は聞かれないだろ。座っていいぞ」

そう言われて椅子に座る

「さていくつか質問するが構わないか？」

「答えられる範囲でいいなら」

「では、一つ目だが……お前のＩＳあれは何だ？」

何で今更になってそんな事……

「何故今になって聞くんです？上から探りをいれろと言われたんですか？」

「違うな、私が興味あるからだ」

「そうですか……正直言って自分でも分かりません」

「分からないだと？」

「はい。そもそも＞ボンゴレ＜は親父から渡されたものですから……」

「お前のお父さんから……」

「ええ、アイツはこれを渡したら俺の前から消えました」

「死んだのか？」

「アイツが死ぬはずない。だってアイツは俺の事を実験台にしてるだから！」

そうだ元々アイツがいなければあの人は……

「自分の息子を実験台に……」

そこで海斗は喋りすぎたことに気づいた

「すいません、今のことは忘れてください……」

「だが……「お願いします！！」……分かった」

「ありがとうございます……」

「今日はもう休んでいいぞ。また後日話を聞かせてもらう」

「……はい」

そう返事して海斗は会議室から出た

場所は変わり寮の部屋

「ただいま」

海斗は会議室の事を忘れなるべく普段通りに部屋に入る

「お帰り、海斗。織斑先生と何話してたの？」

「秘密だよ。……それより、話しの事なんだけど」

海斗は真剣な表情でシャルルを見る

「何で男装してるの？」

その瞬間シャルルはビクッと肩をあげた、だけどすぐに冷静になる

「な、何言ってるの？海斗。僕は男だよ」

「そう、なら俺の思い過ごしかな？」

海斗は大人しく引き下がる

「そうだよ。可笑しな事言うね海斗は。あ、あははは……」

「ごめん変なこと聞いて……」

「気にしなくていいよ」

「うん、本当にごめん」

その後暫く、無言でいたら……

ガチャ！

いきなりドアが開き誰かが入ってきた

「海斗様今日こそは着てもらいますよ！」

「うわっ！」

恵美がいきなり飛びついて海斗を押し倒した

「何がいいですか？メイド服ですか？セーラー服ですか？巫女服ですか？ナース服もありますよ？」

恵美が自分のバックから色々な服を取り出す

「毎回思ってたけど、どこで手に入れてるの？」

「秘密です！それよりどれがいいですか？」

「着ないよ。それにどいてくれる？」

恵美は海斗に跨って身動きがとれない状態にある

「ちょ、二人とも落ち着こう」

シャルルが止めにかかる

「恵美をどかしてシャルル！」

「女装した海斗様見たくないんですか！？」

海斗と恵美がほぼ同時に喋りシャルルは困惑してる

「男の女装した姿なんて見たくないでしょ！」

「他の人のは見たくありませんけど、海斗様のは見ないと損ですよ！」

シャルルは悩んだすえ

「ごめんね海斗、女装した姿見てみたいな」

そう言って海斗に近づく

「やっぱそうですよね！」

現在海斗は一人で食堂にいる

理由は落ち込んでじゃなくて逃げてきたのである

恵美がどいた瞬間に恵美の腕を引っ張りベッドに引き戻し、シャルルもベッドに倒してドアから逃走した

「ハァハァ……ここまでくれば……平気……かな」

そして海斗は食堂を見回し一人で食事してるラウラ・ボーデヴィッヒを見つけた

その周りに人はいなかったなのでその席に座る

「やあ」

「何故となりに座る？」

「君しかいないから」

「……馬鹿にしてるのか」

「俺と同じだと思ったから」

「貴様と同じにするな！」

「一人のところが同じだよ。今は違うけど昔の俺と同じだ。それじゃ大切なものをなくす……」

「や、やっと見つけましたよ、海斗様」

「め、恵美……。なんでここに？」

「いろんな所探したんですよ！なんで食堂にいるんですか！？」

「ここならばれないと思ったから」

「確かにここにいるとは思いませんでしたよ……。疲れました……」

そう言って背中に寄りかかってきた

「黒羽　海斗こいつは誰だ？」

黙ってみてたラウラ・ボーデヴィッヒが聞いてくる

「星野　恵美です。転校初日に自己紹介しましたよ」

恵美が自己紹介したらラウラ・ボーデヴィッヒが俺たちを見て

「まさかお前たちが黒羽　海斗と星野　恵美とはな……」

そしてラウラ・ボーデヴィッヒは目つきを鋭くして

「貴様達のような悪魔は私が殺してやる！！」

そう力強く言って出て行った

「何なんですか！？いきなり悪魔だなんて！？」

「恵美……気にしなくていい……」

恵美は何か反論しようとしたが海斗の顔を見て何も言えなくなった

その後そのまま夕食を取ろうとしたら涼子が来て三人で夕食を取り部屋に戻った

部屋で一息ついてたらシャルルが戻ってきた

「ああ！海斗！部屋に戻ってるなら言ってよ」

「どこにいるか分からないし……」

「そ、そうだけど……。それでも探しに来てよ！」

「分かったよ、次からは気をつける」

「次は信じてるよ。それじゃ、疲れたから僕は寝るね」

「俺も寝る、疲れたし。お休みシャルル」

「お休み海斗」

明かりを消し眠りにつく

存在（後書き）

伏線です
過去に関しては後々明かします

……この作品面白いでしょうか？
正直自信ないです……

海斗の怒り（前書き）

海斗がキレる

海斗の怒り

第１８話　海斗の怒り

転校生が来て五日がたった
ラウラ・ボーデヴィッヒに殺すと言われたが今のところ実害はない
そして今はグラウンドで一夏のコーチをしているのだが……

「こう、ずばーっとやってから、がきんっ！どかんっ！という感じだ」

「何となく分かるでしょ？感覚よ感覚。……はあ？なんでわかんないのよバカ」

「防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ」

「一辺死ねば平気強さも発揮するだろ」

「一夏、頑張ってください……」

「正直に言わせてもらうが……全然分からん！そして海斗！死んだら強さも何もないだろ！」

一夏へのコーチは海斗、篠ノ之　箒、凰　鈴音、セシリア・オルコットの四人で涼子は一夏に哀れみの言葉と視線を送る

「いや、本当に死ぬんじゃなくて死ぬ気になれって事」

「……どうやって？」

「一夏を死ぬ寸前まで追い込む」

「……」

一夏は言葉がでなくなった

「海斗様！」

「のわっ！め、恵美！何？」

恵美がいきなり海斗の背中に飛びついた

「私の＞ヴァリアー＜見てくれる約束じゃないですか？」

「分かった、分かったから離れて」

恵美は素直に離れる

「それでどうするんですか？」

「そうだな……。とりあえず＞ヴァリアー＜の展開からかな？」

「分かりました」

返事をして＞ヴァリアー＜を展開する

「できましたよ」

「それじゃ俺と一戦交えようか？」

「ダメです！私初めてですし、海斗様と戦ったら機体にどれだけ負担がかかるか」

「大丈夫ちゃんと加減するから」

「海斗それなら僕と戦わない？」

「ん？別にいいよ」

シャルルが模擬戦を頼んできたので戦うことになった

「それじゃ、始めるよ？」

「ああ、全力で来い」

そしてシャルルは近接ブレードブレッド・スライサーを展開して切りかかる

海斗は雨のリングに炎を灯し注入、雨の匣から時雨金時を出して迎え撃つ

「カラーリングが変わるの本当なんだね」

シャルルは急上昇して海斗から距離を離す

（攻式　三の型　遣らずの雨）

海斗は時雨金時をシャルルに向かって蹴り、急上昇する

「刀を蹴った!?海斗のやることは予想外だね」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

だがそこは代表候補生、簡単にやられはしない。

向かってくる時雨金時をシールドで防ぎ、アサルトライフルを持ち撃ち放つ

「武器の呼び出しが早い?」

「うん、これが僕の得意技高速切替(ラピッド・スイッチ)だよ」

「へぇ、君面白いね」

海斗は時雨金時を匣に戻し、大空のリングに炎を灯し、大空の匣に注入してXグローブを出し、グローブに炎を纏い横に払い炎の壁を作りそれを防ぐ

「海斗こそ十分に早いよ。それに炎の壁なんて凄いね」

「ありがとう」

Xグローブから炎を出し加速する

シャルルも近づけまいとマシンガンを出し撃ってくる

海斗は咄嗟に避け、さらに加速しシャルルの後ろをとる

そのまま思いっきり殴りつけシャルルはアリーナの壁に叩きつけられる

「くっ!でもまだ終わらないよ!」

シャルルは叩きつけられた体勢のままショットガンを構え連射しようとする

「させない！」

ショットガンを持つ手を押さえて動きを封じる

その時にシールドを外し、パイルバンカー《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》を出す

「これで終わりだよ！」

「腕は二つある！」

そう言って海斗は右手のグローブをパイルバンカーにあて、集中する

（零地点突破初代エディション）

そしてパイルバンカーが凍りつき使用不可になる

「海斗、今何したの！？」

シャルルは焦った声で言うが海斗は返答しないでグローブの炎を最大にしてシャルルに向かって放出する

「海斗、最後のあれ何？」

模擬戦が終わり、シャルルが納得できないような顔で聞いてくる

「教えない、一つ言えることは死ぬ気とは逆の状態だということ。……それより一夏俺がシャルルの攻撃を何故避けられたか分かる？」

一夏は急に話を振られ驚いてたが聞かれたことはちゃんと答えた

「それは、海斗が射撃武器の特性を理解してるからだろ？」

「正解。じゃ、一夏がセシリア・オルコット、凰　鈴音に勝てない理由は？」

「射撃武器の特性を理解してないから……？」

「その通り」

「一応理解してるつもりだったんだが……」

「それは知識として理解してるだけだよ。実戦では知識だけじゃ勝てないから」

納得してなかったシャルルが一夏に教えるため考え事を中断した

「一夏にも射撃武器があればいいんだけど……。白式って後付武器（イザ）（イコラ）が無いんだよね？」

「ああ。どうも拡張領域が空いてないらしい」

「それは一夏が使っている単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）の所為だね」

「海斗ワンオフ・アビリティーって何だ？」

「一夏の使う《零落白夜》がこれにあたる」

「へぇ、そうなのか」

「そうだよ。各ＩＳが操縦者と最高状態の相性になったときに発生する能力のこと。普通は第二形態（セカンド・フォーム）から発現するんだけど」

シャルルの言葉を引き継ぐように話す

「白式は第一形態なのにそれがある、前例もないしね。それにその能力が織斑先生と同じなのが不思議だ」

「姉弟だからじゃないのか？」

「それはあり得ない。さっきシャルルが言ったけどＩＳと操縦者の相性が重要なんだ。再現なんて出来ない」

「そうなんだよね。まあ今は考えてもしょうがないから、はい一夏」

シャルルが考えを打ち切りアサルトライフルを渡してくる

「え？他の奴の装備って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾（アンロック）すれば、登録してある人全員が使えるんだよ。――今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて」

「お、おう」

一夏が初めての武器に若干緊張している

「か、構えはこうでいいのか？」

「えっと……脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

シャルルは一夏の後ろに回り一夏の体を誘導する

「海斗様」

「ん？何？」

一夏とシャルルのやりとりを見てたら恵美が話しかけてきた

「ちょっと変なところが……」

「変なとこ？」

「アニマル匣が使えないんです」

「ああ、そう言えば言ってなかったね。アニマル匣は炎の大きさと匣の中にいるアニマルの意思が大切なんだよ」

「意思？」

「そう、兵器と言っても生きてるし心もある。その子達は恵美と出会ってから少ししか立ってない。しばらく一緒にいればその子達も心を開いてくれるよ」

「そうですか、分かりました」

アニマル匣について説明をしてたら周りがざわめいた

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いたけど……」

皆が見てる方を見ると、ドイツの代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒがいた。

「黒羽　海斗、星野　恵美」

開放回線（オープン・チャンネル）で声が飛んでくる

「武器に炎を灯すやり方は分かる？」

「はい、そこら辺は大丈夫です」

こっちも忙しいので関わらないようにする

「貴様等聞いているのか！？」

「匣の開匣の仕方を見せるからちゃんと見ててね」

海斗は嵐のリングと匣をだす

「まず炎をリングに灯して……」

「無視し続けるなら……」

ラウラ・ボーデヴィッヒはＩＳを戦闘状態へとシフトさせレールカノンを発射体勢にする

「こちらに意識を向けるまでだ！」

「匣に炎を注入する」

ラウラ・ボーデヴィッヒはレールカノンを撃つ

誰もが間に合わないと思ったが

「ＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．」

海斗は防御リングを発動し、レールカノンを防ぐ

「何！？」

「これで一通り説明は終わりだよ。……さて、人が教えてる最中に攻撃するなんて失礼な奴だな。ドイツの人間は人を待つことも出来ねぇのかよ。用件は何だ？」

海斗は殺気を撒き散らしながらラウラ・ボーデヴィッヒを睨んだ

「っ！私と戦え！」

海斗の殺気を浴びながらも、軍人であったので怯む程度ですんだ

「ああ、いいよ。たたきつ……？」

叩き潰すと言おうとしたら誰かが海斗のＩＳを掴む

「や、やめて……くださ…い…か、海斗」

掴んでたのは涼子だった

震える声で泣きそうになりながら海斗を止める

「何で？喧嘩を売ってきたのは向こうだ」

「た、確かに……そう……ですけど……」

その後も何か言おうとしたが

『そこの生徒！何をしている！学年とクラス、出席番号を言え！』

「……今日の所は引こう」

ラウラ・ボーデヴィッヒは戦闘状態を解いてアリーナゲートへと去っていった

「か、海斗、大丈夫？」

「俺よりか大丈夫じゃないのは……」

海斗は周りをみるシャルルもグラウンドを見ると人は少なくなったが、気絶してる人や、震えてる人、泣いてる人たちがいた

「彼女達だね」

「一夏達は？」

「一応大丈夫、意識もはっきりしてるし」

「そう……。何か、ごめん……」

海斗は謝り下を向く目に入ったのが未だに震えてる涼子がいた

「涼子も……ごめん……」

「……っ、海斗の……ばかぁ、怖かった……です」

「それじゃ、先に戻るから……」

そう言って海斗は戻った

ガンッ！

海斗更衣室で苛立ちをぶちまけていた

「くそっ！何やってんだ俺は！これじゃ昔と変わらないじゃないか！」

ガンッ！ガンッ！

ロッカーを二、三発殴る

手が痺れるがそれを気にする余裕はなかった

その時更衣室の扉が開き一夏が入ってきた

「海斗……」

「……何？」

着替えながら一夏が何か言おうとするが直ぐに口篭もる

「用がないなら部屋に戻るから……」

暫くしても一夏が何も言わないので、更衣室をでるため一夏の横を通り過ぎようとするが

「海斗、この手どうしたんだよ」

ちょうど着替えが終わった一夏が腕をつかみ手をみる

「ロッカーに八つ当たりしてた……」

海斗が先ほどまで殴りつけてたロッカーを見る。一夏も海斗と同じ場所を見て海斗の手をみる

「何やってんだよ……」

「もう大丈夫だから気にしないで」

「そこまで言うのなら信じるけど……」

「あのー、織斑君とデュノア君と黒羽君はいますかー?」

「織斑と黒羽はいます」

ドア越しに山田先生が呼ぶ

「入っても大丈夫ですかー?まだ着替え中だったりしますー?」

「大丈夫ですよ。着替えはすんでます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

ドアが開いて山田先生が入ってくる

「デュノア君は一緒ではないんですか？今日は二人と実習していると聞いていましたけど」

「まだアリーナの方にいます。もうピットまで戻ってきたかもしれませんけど、大事な話なら呼んできましょうか？」

「では、二人から伝えておいてください。今月下旬から大浴場が使えるようになります。時間帯別ではなく週に二回使用できるようにしました」

「本当ですか！」

一夏が山田先生の手を取る

「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生！」

「い、いえ、仕事ですから……」

「いやいや、山田先生のおかげですよ。本当にありがとうございます」

「そ、そうですか？そう言われると照れちゃいますね。あはは……」

「一夏、興奮しすぎ」

「だって風呂には入れるんだぜ。もう俺、感激で……」

「……一夏？何してるの？」

シャルルが更衣室に入ってきた

「先生の手を握って何してるの？」

「あ、いや。なんでもない」

（機嫌悪そうだな……）

「何イラついてるの？」

「え？海斗……何で？」

不思議そうな顔でこっちを見てくる

「先に戻ったんじゃ……」

「色々あったんだよ。……それより、今月下旬大浴場が使えるって」

「そうなんだよ、シャルル！」

「そう」

ＩＳを解除してタオルで拭き始める

「そういえば織斑君にはもう一件用事があるんです。白式の正式な登録に関する書類なので、職員室まで来てもらえますか？」

「わかりました」

一夏と山田先生が出て行く

「それじゃシャルル。俺、寄るところがあるからシャワー先に使っていいよ」

「うん。わかった」

海斗は更衣室を出ていった

海斗の怒り（後書き）

ラウラと海斗が戦っても勝負は見えてるんですよね～

キレた海斗と戦ったらラウラ死ぬかも……

さて、次はシャルルの秘密が明らかに！

海斗も強引になる！？

お楽しみに！

シャルルの秘密（前書き）

シャルルの秘密が明らかに

海斗の秘密を一つ明かします

シャルルの秘密

第１９話　シャルルの秘密

更衣室から出た海斗は現在屋上にいる

「……よし、誰もいない」

海斗は携帯を開き電話をかける

『もしもし？』

「ああ、海斗だけど……」

『海斗か！珍しいなお前から電話寄越すなんて』

電話の主が驚いたような声を出す

「頼みたいことがあるんだ」

『これまた珍しいな。お前が頼みごとなんて……』

「実は……、フランスのデュノア社に【シャルル・デュノア】という人間がいるか調べてほしいんだ」

『デュノア社に関しての名簿ならあるから少し待ってくれ』

「頼む……」

そして電話の遠くから『デュノア社の名簿持ってきてくれ』と言う声が聞こえた

『えっと、だな……そんな人物はデュノア社に存在しない……』

「やっぱりそうか……」

『なんだ感づいてたのか？』

「まあ、多少はね……。次に調べてほしいことだが……」

『ちょっと待て、まだあるのか？』

電話の主が電話に出たときより、驚きの声を出す

『いつもなら自分で解決するのにどうしたんだよ』

「こっちじゃ手出しがあまり出来ないんだよ。……それより頼みごとだけど、ドイツの上層部について調べてほしい」

『ドイツ？イタリアじゃなくて？』

「ああ、転入してきたドイツの代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒが、俺と恵美について何か知ってるみたいなんだ」

『なるほどな……。ただ一人の代表候補生が、お前たちの秘密を知るはずないからな……』

「それが出来るとしたら上層部の人間しかいない……」

『ＯＫ任せろ。時間はかかるが、なるべく早く情報を渡す』

「頼んだよ。……それじゃ、また今度な」

『海斗……。無茶はするなよ……』

「分かってるよ」

『ならいいんだ。じゃあな』

海斗は電話を切り屋上から出て行く

海斗は寮の部屋に戻ってきて、シャルルが居るか見る

（シャワーか……。シャルルには悪いけど、問題は解決させてもらうよ）

海斗は洗面所兼脱衣場に入り……

ガチャ！

シャワー室を開けた

「か、か、か、かい、と……？」

「やっぱり、女だったんだな……」

「ひゃあ！？」

シャルルは声を上げて、身体を隠す
だが海斗はシャルルの手首を思いっきり掴む

「……」

「い、痛い！痛いよ、海斗！」

「なんで嘘ついた！！」

「！？」

シャルルは驚いた顔でこちらを見る

「そ、それは……」

「俺は一度聞いたはずだ……。女じゃないのかと……」

「……」

シャルルは黙って下を向く

ダンッ！

海斗はシャルルをシャワー室の壁に叩きつけ、話さすまで離さないようにする

「お前は……お前は、裏切られた人の気持ちが分かるか！！」

シャルルは目を見開き海斗を見る

「……海斗、喋るから……服、着させて？」

「分かった……」

海斗は手を離しシャワー室から出る

（ごめんな、シャルル……。これしか方法が思いつかなかったんだ……）

海斗はタオルを取り出し水に濡らす

ガチャ……

「あ、上がったよ……」

シャルルが脱衣場から出てきた。
格好がいつものスポーツジャージ姿だが、今まで胸を隠していたコルセットをはずしている

「そこに座って」

「うん……」

シャルルがベッドに腰掛け海斗がシャルルの手首を取る

「！か、海斗……何を……」

海斗は黙って水で濡らしたタオルを手首に巻く

「ごめん、痛かったよな……」

「ううん、海斗が怒るのも分かるから……」

暫くの間沈黙してると、シャルルが口を開く

「僕が男のフリしてる理由はね、実家にそうしろと言われたからだよ……」

「いいのか？話しても」

「元々、喋る約束だからね」

「俺が誰かに喋るかもしれない。それでもいいの？」

「海斗は裏切られるのが嫌いだから、喋らないと信じてる」

「分かった。それなら誰にも喋らない……。勿論、恵美と涼子にも」

「ありがとう。……それでね、僕は愛人の子なんだよ」

海斗は特に驚いた様子を見せない

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でＩＳ適応が高いことが分かって、非公式ではあったけどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルの目からはほとんど光を感じさせないほどに曇っていた

「父にあったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別

邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときはひどかったなぁ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

あはは、と愛想笑いをつなげるシャルル

海斗は怒った様子も悲しみの表情も見せずに只々話を聞いている

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

海斗は一瞬指を動かしたが、何も言わずに聞く

「それでデュノア社でも第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でＩＳ開発許可も剥奪するって流れになったの」

「それじゃ、男装の理由は……」

「そう、注目を浴びるための広告塔だよ。それに――」

「俺と一夏のデータと機体のデータ……」

「うん、それに涼子のデータも取って来いって……」

そこで海斗は初めて苛立ちを見せた

「まさか、涼子に手を出したりはしてないよな……？」

「う、うん。してないよ……」

シャルルは肩を震わせ答える

「なら、良かった」

海斗は殺気を抑え、安堵のため息をもらす

「とまあ、こんな所かな。何か聞きたいことはある？あれば答えるけど」

「お前はこれからどうなる？」

「わからない。海斗にばれちゃったし、本国に呼び戻しじゃないかな？そして、代表候補生をおろされて、よくて牢屋行きかな？」

諦めたようにシャルルは言う

「抗おうとしないのか？」

「僕に抗うことなんて出来ないよ。便利な道具なんだから……」

パシンッ！

海斗はシャルルの頬を叩く

「海斗……何でいきなり……」

「自分で自分のことを道具なんて言うな！なんでそんな悲しい事言うんだよ！」

「だって僕はあの人の道具……」

パシンッ！

また海斗はシャルルを叩く

「道具って言うなと言ったよね」

「だって、僕には他にどうしようもないんだ！今まで利用されてるのは分かってた、でも捨てられたくなかったんだ！」

シャルルがしがみついて来た

「シャルル……。道具にされてた気持ちは分かる」

シャルルは顔を上げて……

「それは、同情……？」

「違う、俺も同じだから……。扱いは酷いけどね」

そう言って海斗はシャルルをベッドに腰掛けさせる

「シャルルに俺の秘密の一つを明かすよ」

海斗は左目のカラーコンタクトを外す

「海斗……カラーコンタクトしてたの？」

カラーコンタクトの下は青い目だった……

「秘密は眼帯の下だよ」

海斗は右目の眼帯を外す

「！！海斗その目どうしたの！？」

普通の人間には存在しない目が海斗にはあった
右目が赤く、漢数字の六が書いてある目がそこにはあった

「これが俺の秘密だよ。そしてこの力が道具とされ、何人もの人を殺した……」

「……っ、酷いっ……なん、で……海斗が……」

シャルルは泣き出した

「だから、シャルルの気持ちはよく分かる。痛いくらいに……」

「う……、くっ……」

声を押し殺してシャルルは泣く

「泣きたいのなら、好きなだけ泣けばいい。思いっきり、気が済むまで……」

「うわあああああ！！！」

「お前は無理しすぎだ……」

「落ち着いた？」

「う、うん……／／／」

シャルルは思いっきり泣き、その恥ずかしさからか顔を少し赤くしている

「そっか。それで、ここに残りたいか？」

「いいのかな？ここにいて」

「少なくとも、俺はいいと思うけど？」

「本当？」

「ああ」

「もし、本国から何かしら介入が来たら……」

「それは無理だな。
ＩＳ学園特記事項にこう書かれている『本学園における生徒は在学中ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、外的介入は原則として許可されない』とね」

「すごいね海斗。特記事項は五十五個もあるのに」

「いつかは風紀委員長又は、生徒会長だからね。これくらいは……」

「海斗なら慣れるよ。……ありがとう、海斗」

シャルルが抱きついてくる

「仲間のためだから……」

「ベッドに入って」

海斗はシャルルをベッドにいれる

「え？何で？」

「誰か来る」

コンコン……

「！？」

シャルルはすごい驚きようである

「か、海斗、夕食まだですよね？だったら一緒に……」

涼子がドアの外から声をかける。実習時間のことでまだ声が震えている

（海斗なんで分かったの？）

（超直感があるから）

ガチャ

ドアが開き涼子が入ってくる

「やあ、涼子」

「か、海斗。大丈夫ですか？」

「俺は平気だけど、シャルルが風邪っぽいみたいなんだ」

「大丈夫ですか？」

「う、うん……」

すごい、さすが男装で騙しただけある。

仮病も完璧だな

「そうですか。海斗を借りてもいいですか？夕食は後で海斗に持って行かせますから」

「けほっ、けほっ。ど、どうぞ」

部屋から出て歩いてると恵美がいた

「涼子ちゃん、やっぱり海斗様の所に行ってたんですね？部屋にいないからまさかとは、思いましたけど」

「恵美さん……。すいません」

「次は許しませんからね？」

「はい」

「？まあ、兎に角、早く食堂行くぞ」

なにを許すのか今一分からない海斗だが食堂に行く様に促す

「はい」
「えぇ」

二人は返事をして何のトラブルもなく食堂に着く

「ハア～、ただいま」

「お帰り海斗、どうしたの？」

「今日の午後のことが噂になってるんだよ。『黒羽　海斗が一人の生徒にキレて、周りの人にも被害を出した』とね」

「間違ってないけど、アレはしょうがないんじゃない？」

「明日は織斑先生から呼び出しがあるな。……そんな事より食事もらってきたよ」

「ありがとう。いただくよ」

トレイをテーブルに置く、こっちに来たシャルルの表情が固まった

「どうかした？」

「な、何でもないよ」

「何かあったら呼んで」

海斗はパソコンを起動させる

「い、いただきます」

そう言って食事に手をつけるが

「あっ……」

ぽろっ

「あっ、あっ……」

ぽろっぽろっ

隣から情けない声が聞こえる

様子を見ると魚の身を摘めないシャルルがいた

「どうしたの？」

「いや、ちょっと……」

「箸ダメなの？」

「ダメって言うか、苦手なんだ。練習してはいるんだけどね」

「他の食器もらってくるよ」

食事が進まないと判断した海斗はドアに向かう

「い、いいよ、そんな。なんか悪いし……」

「もしかして、遠慮してる？」

「べ、別に遠慮はしてないよ……」

「してるよ。シャルルはさ他人に頼るのが恐いの？」

「そんな事は……」

「大丈夫、心配するな。俺はお前の味方だから。……そうだな、俺から頼ったらどうだ？」

「うん。じ、じゃあ、あの……」

「何？」

「え、えっと、ね。……海斗が食べさせて」

「何で？」

「だ、だって海斗が俺を頼れって言うから……ダメ？」

シャルルが上目遣いで言ってくる。

「自分で言ったことは責任を持つよ。箸貸して」

シャルルから箸を受け取り、落とした身を摘む

「はい、あーん」

「あ、あーん」

（まさか、ここで『はい、あーん』を使うとは……）

シャルルは頬をわずかに赤くしている

「どう？」

「うん。おいしいよ」

「そう、良かった。次は？」

「じゃ、じゃあ、次はご飯がいいな……」

「分かった」

今度はご飯を摘みシャルルの口へと運ぶ

「あーん」

「ん……」

ぱくっと料理を食べるシャルル

「海斗、なんか手慣れてるね」

「前によくやってたから」

「そうなんだ。……次は和え物がいいな」

「分かった」

そしてだんだんと言葉数も少なくなり、結局最後まで海斗が食べさせた

（なんか疲れたな……。明日は休みだし久しぶりにゆっくり寝ようかな）

シャルルの秘密（後書き）

ダメだこれは、酷すぎる

それでも前向きに行くそれが自分だ！

さて次回は

学年別トーナメントの相方を……

と行きたいんですが、日曜の休日を書こうとしてます

皆さんお楽しみに！

悪い夢と知らせ（前書き）

遅くなってすみません

それと読者の皆さんにアンケートを取りたいんです詳細は後書きの方で

悪い夢と知らせ

第２０話　悪い夢と知らせ

――――

暗い。暗い。暗い

海斗は何もない真っ黒な空間の中にいた

（ここは…どこだ?俺は寮の中で寝てたはずだ。まさか、夢の…中…なのか?）

海斗は暗い先で何かの気配を感じて歩き出した

（何だ、この感じ……すごく嫌な感じがする）

暫く歩いてるとそれが何か認識できた

「……っ!?　な、何で!」

海斗は真ん中に立っている一人の人物に驚きを表している

その後、その人物の周りに何かあったので周りを見渡した

「何だよ……これ……。全て死体……なのか?」

その人物の周りは数え切れない位の死体で埋め尽くされていた

そして真ん中に立つ人物は死体を見回して……笑い出した

「ハハ、ハハハハハハハ！アーッハハハハハハハ！いい！面白い！死ぬときの抵抗、命乞い、雄叫び！全ていい！」

海斗はその人物を見て何も言わない。
正しくは言えないのである
その人物が……海斗自身だから

「うっ……、ああ……、俺が……お…れ…が…」

海斗が狂った海斗から目を逸らす
目を逸らした先には守ると決めた人が死体となって転がっていた

「そん…な、まさか、……嘘…だろ……？まも…るって、や…く…そく……した…のに……」

狂った海斗が守ると決めた人の所による

「特にこいつは面白かった。正気に戻れ？ククッ、俺は正気だよ！今もこうして自我を保ってるしな！ハハハ、アッハハハハハハ！」

狂った海斗は守ると決めた人を蹴飛ばした
そこで海斗は夢だと分かっても叫ばずにはいられなかった

「う、嘘だ…嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ。やめろ、やめろーーーーーーーーーー！！！！！！」

―――

「海斗！」

「！？」

目が覚め、声がした方を向いたらシャルルがいた

「シャ、シャルル……」

「海斗、大丈夫？すごく魘されてたよ」

「大丈夫じゃ、ない……。気分が悪い」

「もう一度寝る？」

海斗は時間を確認する。時刻は２：００を回った所だった

「起きてる。……ごめん、起こして」

「気にしなくていいよ。シャワー浴びてきたら？汗凄いし、それに少しは気分が楽になるかもしれないよ」

「ああ、そうする。ありがとう」

海斗は着替えを持ってシャワー室に行く

暫くすると海斗があがる

「……」

「海斗、上がったんだね。気分はどう？」

シャワーから出た海斗は少しだけ顔色がよくなった

「少しはマシになったかな。本当にごめん、こんな時間に起こして」

海斗謝罪してベッドに座る

「だから気にしなくていいよ。嫌な夢は誰でも見るし」

「分かった。……俺は平気だから寝てていいよ」

「ううん。僕も起きてるよ。海斗が心配だから」

シャルルは海斗の横に座る

「どんな夢だったの？」

「あまり覚えてない。……唯一つ言えることは、俺が人を殺した」

「殺した？海斗が？」

「うん。酷い夢だった」

シャルルはその後何も言わず、海斗を自分の胸に寄せる

「何？」

「無理しなくていいよ、海斗」

「……」

「海斗は今、苦しいでしょ？それとも辛い？」

「……両方」

海斗はシャルルのジャージの袖を掴む
シャルルは海斗の頭をなでる

「すまない、シャルル。もう少しの間このままでいさせて」

「……うん、分かった」

それから一時間位たって、時刻は３：３０過ぎ

「ありがとう。だいぶ楽になった」

「それならよかった」

海斗はシャルルから離れる
シャルルは少し残念な顔をする

その後は気ぶんを紛らわすために、お茶を飲みながら雑談した

現在午前９：００
海斗は今自宅の前で立ち止まっていた
「おかしい……。人の気配がする。ここは俺と恵美しか住んでないのに……それに血の匂いがする」
海斗はなるべく気配を消し、音を立てないようにドアを開ける
「っ！？」
海斗は廊下に出来てる血を見て首を振る
（マズい。夢でのことが……）
海斗はゆっくり、血を踏まないように歩く
「脱衣所？」
海斗は脱衣所のドアを開ける、が誰もいなかった
（？服？…血まみれだ）
脱衣所を後にしてリビングのドアを開ける
（！誰かいる。……キッチンか）
トンファーを出しいつでも攻撃できるようにする
海斗が少し顔を出すと包丁が飛んできた
包丁は海斗の顔を正確にねらってきた
「なっ！？」

咄嗟にトンファーを前に出し包丁を弾き投げた人物を見る

「あっ、お前は」

「黒羽様っ!?」

そこにいたのは血まみれのバスタオルを羽織った女性だった

「何でレガーメファミリーのリディア・スティールさんがこんな所にいるんだ」

彼女に包帯を巻きながら聞く

「黒羽様、フルネームじゃなくてリディアと呼んで」

「分かったよ。リディア何でここに?」

「例の会社で潜入捜査してた」

「何でお前がそんな事するんだよ。ボスだろ」

「そうだけど、他の人にそんな危険なことはさせたくない」

「相変わらずだな、仲間に傷ついてほしくない気持ち。……こんなに傷だらけの理由は?」

「正体がばれた。みんなと合流しようとしたけど先回りされた」

「そして逃げ回ってたらこんなに傷だらけになったのか」

「……（コク）」

リディアが頷く、その時に　体が僅かに震えてるのが感じ取れた

海斗は優しく声をかける

「まあ、よかったよ、生きててくれて。同盟を結んでるのに俺が何も出来ずに死なれるのは嫌だからな」

「心配かけてすいません」

「こうして生きてるからいい。でもそんなに向こうは強かったのか？お前ならある程度の敵は蹴散らせるだろう」

「数がハンパない。それに全員戦いになれてる様子だった。もう少し戦力があれば何とかなった」

海斗は薬品や包帯などをしまう

「白兵戦も出来るのか、向こうは……。何か情報は？」

「ある。ＩＳを展開させない兵器を開発してた」

海斗はリディアの横に座り、腕を組む

「ＩＳを展開させない兵器……か。厄介だな。他には？」

「ない……。役に立てなくてすいません」

「いや、ちゃんと役に立った。その情報だけで十分だ」

「ならよかった。それじゃ、私は戻る」

「動いて平気か？」

「うん、ありがとう」

リディアはソファから立ち頭を下げる

「どう致しまして。……そうだ。リディアこれ渡しとく」

海斗は一つのリングを渡す

「御守りだ、持ってて」

「分かった。ありがとう、黒羽様」

リディアは玄関に行きドアを開け外にでる

海斗は家の中で考え事をしていた

（何で向こうはリディアの動きが分かったんだ？それに、ＩＳが展開できなくなる兵器……。まだ情報が足りない）

海斗は家の中から必要なものを持って自宅を後にした

現在ＩＳ学園午後５：３０

「海斗どこに行ってたんですか？」

「自宅に帰ってた。必要なものがあったから」

「そうですか。あの、海斗……」

「何？」

「夕食が終わったら、時間空いてます？」

「特に用事はないかな」

「本当ですか？それなら、夕食食べ終わったら時間を見計らって部屋に来てください」

満面の笑みでそういってくる

「分かった。後で行くよ」

「お待ちしてますね」

涼子は部屋に戻る

自室に戻ろうとしたら織斑先生が部屋の前に立っていた

「何か用ですか、織斑先生？」

「黒羽ちょっと来い」

それだけ言って織斑先生は歩き出す
海斗も後からついて行く

現在学生寮の外

暫く歩いてたら織斑先生が足を止めた

「黒羽、昨日のことだが……」

「！……迷惑をかけてすみません」

「全くだ。お前の出した殺気で何人が保健室行きになったか」

「……」

あの時の自分の行動を思い出し海斗は下を向く

「暫くは遠巻きな視線が来るが……」

「分かってる。自分の行動が、周りの人にも被害を出したことは……。そしてその後にどんな目に遭うかは」

「分かってるなら、いい。これからは自重しろ……馬鹿者」

「はい」

そして寮に戻ろうとする

「誰が戻って言いと言った？本題はここからだ」

海斗は歩みを止めて織斑先生に向き直る

「黒羽、デュノアと模擬戦をしたときに不可思議な技を使ったそうだな？」

（不可思議な技？……ああ、零地点突破ね）

「確かに使いましたよ。それが？」

「その力を――――」

現在寮自分の部屋

「はぁ～、無茶言ってくれるな、織斑先生も」

誰もいない部屋で呟く

部屋に戻ってきたらシャルルが居なかった

「まあ、使うつもりはないけど……」

（反則技……か。分かってる、この力を使いすぎるのは良くないことは……）

今日の夢を思い出す

（大切な人を守る力なのに大切な人を殺す。俺なら本当にやりそうだな……）

天井に掌を出し握ったり、開いたりする

「……止めよう、こんな事考えるの……」

ベッドから起きあがり、時間を確認する

（7：10……そろそろかな？）

コンコン

「海斗いますか？いるなら食堂に行きましょう」

「分かったよ。今行く」

扉に向かいドアを開ける

涼子と恵美がドアの前に立っていた

「お待たせ、二人とも。それじゃあ、行こうか？」

そういって食堂に歩き出す

食堂に着いてから、周りの女子が遠巻きにこっちを見ては何か話している

心地良いものではないのでさっさと食べ終わり食堂を後にする

現在涼子と恵美の部屋の前

コンコン

「はい？」

「海斗だけど、約束通り来たよ」

「開いてますから入ってください」

ドアを開け部屋の中に入る

「海斗様、お待ちしてました」

「それで用事は？」

「ありません」

「なら、帰るよ」

そう言って立ちドアに向かおうとするが服を掴まれた

「待ってください。私たちは海斗に元気になってほしいんです」

「昨日のことなら、もう気にしてない」

引き離そうとしたら恵美も服を掴む

「嘘吐かないでください。知ってますよ、海斗様が昨日から元気

がないの」

「いつも通りだよ」

「大抵の人は騙せますが、私たちは騙せません。……ですので、海斗様を元気付けようと思ったんです」

「恵美さんと考えたんです。迷惑じゃありませんか？」

海斗は、少し考えた後

「ううん。迷惑じゃないよ、ありがとう」

そう言って笑みを向ける

「私初めて海斗の笑顔みました」

「嬉しいときに笑う事なんて殆どないから」

「なら海斗、今日はたくさん笑ってくださいね」

そして、海斗を元気付ける為にプチ宴会が始まった

現在自室

プチ宴会が終わり部屋に戻ってきた

「海斗、どこ行ってたの？」

「涼子と恵美の所。シャルルこそ今までどこに？」

「え？それは……」

シャルルは目を逸らし言葉を濁す

「デュノア社に定時連絡？」

「……うん。で、でも！海斗たちのことは何も話してないよ！」

シャルルは慌てたように話す

「俺のだったら教えてもいいけど」

「何で？」

「機体の情報を教えても、その武器を真似できないし、対策も出来ないから」

「そう、なんだ。ありがとね、なんか迷惑掛けてばかりで」

「気にしなくていいよ。俺は眠いから寝るね」

欠伸をしながらベッドに倒れ込む

「お休み、海斗」

「スゥ～……」

すでに海斗は寝ていた

「僕も寝ようかな？」

シャルルもベッドに入る

とある会社

「ドイツの方はどうだ？」

一人の若い男性が聞く

「どうやら、あの事件に関わっていたものがいるみたいです」

「スパイとして入っているのか、それとも……ドイツもあそこと手を結んだかだな」

「ボスその事なんですが、先日転入した代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒとＩＳについても探らせましたが驚愕の事実が……」

マフィアスーツを着た三十代後半の男性が資料を見せる

「なっ！これは……！この情報は本当なんだな？」

「間違いありません。どうしますか？」

「――――を呼んでくれ」

「了解です、ボス」

数分後呼んだ人物が入ってきた

「何かご用でしょうか？」

「呼んですぐに悪いが、日本に行ってほしい」

「日本ですか？」

「学年別トーナメントが始まるまでにこれを海斗に渡してほしい」

「！？これは……！分かりました、海斗殿にお渡しします」

そう言って人物は出て行った

「俺たちも近い内に日本に行くかもしれないな」

ボスと呼ばれた男性は静かにそう呟いた

悪い夢と知らせ（後書き）

アンケートなんですが一夏達にリングと匣を持たせるかについてです

1．当然持たせるだろ！
2．持たせる必要はない！

このどちらかを選んでください。尚、1．を選んだ方は属性の方もお願いします

注．大空は無しでお願いします

新たな問題とパートナー（前書き）

アンケート終了は福音戦が終わった時にします

新たな問題とパートナー

第２１話　新たな問題とパートナー

～～恵美ｓｉｄｅ～～

朝の教室

「ねぇ涼子ちゃん、海斗様がどこに行ったか知りませんか？」

「多分、朝の修行だと思います」

教室で涼子に海斗がどこに行ったか聞く

「ねえねえ、涼子さんに恵美さんあの噂知ってる？」

セシリアと鈴音を含めたクラスメート数人が話しかけてくる

「何の噂ですか？」

「学年別トーナメントで優勝すると、織斑君か黒羽君と付き合えるんだって！」

恵美と涼子は特に驚いた様子もない

「それって、二人とも知ってるんですか？」

「本人は知らないみたい。女子の中だけの取り決めらしいよ」

「でも、人気があるのは織斑君なんだよね～」

別のクラスメートの女子が言ってくる

「まあ、黒羽君は怖いから、織斑君がいいって言う人が多いみたい」

その言葉に恵美と涼子は待ったを掛ける

「何言ってるんですか？海斗は怖くないですよ」

「そうです！むしろ優しいんですよ！」

二人の力説に女子達は何かを思い出したように言う

「そう言えば、恵美さんと黒羽さんってどういう関係何ですの？」

セシリアが急にそんなことを聞いてくる

「え？」

「そう言えば、二人はよく一緒にいるわね」

鈴音も聞いてくる

「あっ、それ私も聞きたい！」

「私も私も！」

他の女子も聞きたがっていた

「え、えっと…その……い、一緒に住んでる仲です」

頬を赤らめながら言う

「「「「「え？」」」」」

「「「「「えぇ～～～～！？」」」」」

クラス中の女子が急に詰め寄ってくる

「そ、それは本当なの！？」

「嘘！同棲！」

「もしかして付き合ってるとか！？」

「何騒いでるんだ？」

女子に質問されてたら一夏とシャルルが入ってきた

「大変、大変だよ！恵美さんと黒羽君が一緒に住んでるんだって！」

「「えぇ～～～～！？」」

一夏とシャルルもかなり驚いていた

「うるさいよ」

噂の張本人の黒羽　海斗が入ってきた

～～海斗ｓｉｄｅ～～

朝の修行が終わり部屋に一度戻り、教室に向かう
シャルルには事前に先に行くように伝えてある

「ふわぁ～」

「「えぇ～～～～!?」」

教室から一夏とシャルルの声が聞こえる

（……うるさい）

海斗は眠そうな顔をして教室に入る

「うるさいよ」

少し不機嫌そうに教室に入ったら女子に囲まれた

「黒羽君、恵美さんと一緒に住んでるって本当!?」

「もしかして二人は付き合ってる!?」

など色々聞かれ、海斗は恵美をみる

「話したの？」

「ダメですか？」

「別にいいけど」

短い会話をしてたら

「どうなの海斗！」

「どうなんですか！」

「「「「黒羽君！」」」」

別に隠す必要もないと思い。真実を話す

「一緒に住んでるよ」

「「「「「「えぇ～～～～！？」」」」」」

クラスの殆どが騒ぎ出す

海斗は時計を見て

（もうすぐ始まる……）

女子達をかき分け席に着く

バシン！バシン！バシン！バシン！

「もうＨＲは始まっている。さっさと席に着け」

席に座ってない（主にドアの近く）生徒達を出席簿で叩き、席に座らせる

午前中の授業が終わり昼休み
この時を待ってたかのように、女子は一斉に（一部は恵美に）向かってくる

「黒羽君！お昼一緒にどう！」

「偶にはいいよね！」

（どうせ一緒に住むことになった経緯とか聞かされるんだろうな……）

そう思いながら、海斗は考えるが……

「私は別にいいですよ。皆さん一緒に行きましょう」

恵美が了解を出してしまう
海斗はしょうがないと思いながら皆と一緒に食堂に行く

食堂

「それで黒羽君、恵美さんとは付き合ってるの？」

「一緒に住むことになった経緯は？」

「いつから出会ったの？」

一遍に女子が聞いてくる

（って言うか、俺のこと怖がってたんじゃなかったの？）

そう思いながらも質問には答える

「一度に言われても困る。一人ずつお願い」

女子は少し話し合い、終わったら一つ目の質問を聞く

「それじゃ、まず私から黒羽君と恵美さんはいつ出会ったの？」

「三年くらい前かな？出会ってすぐに暮らし始めた」

「な、何で！？」

「秘密」

一つ目の質問をした女子はガッカリして下がった

「では次の質問です、二人は付き合ってるんですか？」

目がギラギラしている。他の女子も同様だった

「別に付き合ってないよ」

「恵美さん、そうなんですか？」

「はい、付き合ってません」

恵美もハッキリと言う

「そうなんだ、付き合ってるわけじゃないんだ」

ガッカリしてる女子やホッとしてる女子がいた

「ちょっと待った～～！」

質問が終わったと思ったら、女子生徒が食堂の入り口からこっちに来る

「まだ質問は終わりません。ここからは新聞部副部長黛　薫子が質問します。夜はどう過ごしてるんですか？」

その質問に女子一同は顔を赤くした

「さ、さすが新聞部、どんな質問も恥ずかしがらずに」

「そ、尊敬します！」

一部の女子は新聞部の人に尊敬している……らしい

恵美の方を見ると顔を真っ赤にしている

「な、なななな、何言ってるんですか！？／／／」

「いやいや、男女が一緒に暮らすのに何も無いわけ無いじゃないですか」

ニヤニヤしながら恵美に言う

「う～～……／／／」

恵美は真っ赤にしながら俯いた

「それで黒羽君どうなの？」

恵美は無理だと判断して、海斗に聞いてくる

「どうって言われても、……一つだけハプニングはあった」

「どんな？」

「やりすぎて、死にそうになった事がある。いつもならそこまでやらないんだけど……」

「「「「……／／／」」」」

女子一同＋新聞部の人＋一夏とシャルルはさっきよりか顔を赤くしていた

「か、か、海斗様～！／／／」

「な、何？」

いきなり大声で叫ぶ

「その言い方は誤解を招きます！／／／」

「？どこが？修行であんなにやったら死にそうになるでしょ」

「「「「え？」」」」

女子一同＋新聞部の人＋一夏とシャルルは驚いた顔をする

「海斗修行のことなんですか？」

「それ以外にある？」

「い、いえ、確かにそうですよね」

その後、女子は恥ずかしさから逃げていった生徒がたくさんいた

昼休みの騒動が終わり放課後

～～恵美ｓｉｄｅ～～

海斗に先に行くように言われ
恵美は第三アリーナに向かっていた

（涼子ちゃんは用事があるみたいですし。……海斗様が来るまで、武器の使い方のおさらいでもしましょうかね）

一人で何やるか考えてたら、アリーナから声が聞こえた

「……量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか脳のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

アリーナから聞こえた声はラウラ・ボーデヴィッヒだった

恵美はその声に不快を抱くがアリーナにいる別の二人の声が聞こえた

「ああ、ああ、わかった。わかったわよ。スクラップがお望みなわけね。――セシリア、どっちが先やるかジャンケンしよ」

一つは凰　鈴音の声で

「ええ、そうですわね。わたくしとしてはどちらでもいいのですが――」

セシリア・オルコットの声だった

「はっ！二人がかりで来たらどうだ？一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬と悪魔と一緒につるむようなメスに、この私が負けるものか」

その言葉に恵美が初めてキレた。

（海斗様を侮辱するんだ……。海斗様を悪く言う人は誰であろうと――）

「叩きのめします」

ヴァリアーを展開してグラウンドに出る

「――今なんて……「ここは私にやらせてください」……え？」

「恵美さん、悪いですけどこの方の相手は……」

ドカッ！ドカッ！

恵美は鈴音とセシリアを壁まで殴り飛ばす

「すいません。ですが、海斗様を侮辱した人を許すわけにはいきません」

「ふん、たった一人で来るとはな」

「関係ありません。始めましょう」

「かかってくるがいい」

～～海斗ｓｉｄｅ～～

「海斗、今日は何をするんだ？」

「とりあえず、模擬戦、シャルルは一夏とよろしくね」

「うん、わかった」

「今日使えるのは、ええと――」

「「第三アリーナだ／ですよ」」

「「わあっ！？」」

廊下で三人で歩いていたが、後ろから二人の声が飛び込んできて、

一夏とシャルルは驚いた

「二人とも驚きすぎ」

「そうだ、失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりのことでびっくりしちゃって」

「あ、いや、別に責めているわけではないが……」

ペコリと頭を下げるシャルルに、篠ノ之　箒も気勢を削がれてしまった

「海斗、何で驚かないんですか？」

「気配で気づいてた」

「ずるいです」

涼子は不満そうな顔をする

「兎に角、第三アリーナに向かうよ」

これ以上何か言ったら、また言い返されると思い話を逸らす

「そうだな。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いてれば模擬戦も出来るだろう」

皆でアリーナに向かってると、だんだん慌ただしくなる。廊下を走っている生徒が走りながら口にする

「ドイツの代表候補生と星野さんが戦ってるんだって！」

その言葉を聞いて海斗は一気に観客席に走り出す

「海斗！」

一夏が呼ぶが無視して駆け込む

ドゴォンッ！

爆発のあった方向に視線を向ける。煙の中から二機のＩＳが出てきた

「恵美！」

海斗は恵美が向いている方向に視線を向ける。そこには、漆黒のＩＳ＞シュヴァルツェア・レーゲン＜を駆るラウラ・ボーデヴィッヒの姿があった

「海斗、これは一体……」

「分からない。恵美があんな感情を出して戦うことは殆ど……！？」

「どうしました？海斗」

話を中断した海斗を涼子は不思議に思い問いかける

「武器に炎が灯せてない」

「え？」

～～恵美ｓｉｄｅ～～

「ロイヤルイクスプローション！」

ナイフをいくつも出し、＞シュヴァルツェア・レーゲン＜に向かって投げる

ラウラ・ボーデヴィッヒは右手を突き出してナイフの動きを止めた

「無駄だ。この＞シュヴァルツェア・レーゲン＜の停止結界の前ではな」

肩に搭載されたワイヤーブレードを射出し、複雑な軌道を描きながら恵美に飛翔する

「そんなもので！」

近接ブレードを出しワイヤーブレードを弾く

そして新たにパラボラを出し相手の周りに飛ばして傘を開く

「これなら避けられません！レヴィ・ボルタ」

「そんなもの」

両手を突き出し全てのパラボラの動きを止めた

「動きが止まった！」

恵美は一気に向かいブレードで斬ろうとするが、超直感で後ろに下がる
ワイヤーブレードが恵美のいたところを通り過ぎる

恵美が下がった瞬間にラウラ・ボーデヴィッヒが突撃を仕掛ける。

「『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』！」

恵美は瞬時加速に驚き隙を作ってしまった
ラウラ・ボーデヴィッヒは両手首のプラズマ刃で切りかかる

ガギンッ！
＞ヴァリアー＜にプラズマ刃があたり衝撃が届くが雷の炎を全身に纏い特性の硬化で衝撃を抑える

「まだ終わりません！」

そう言って一気に離れナイフを飛ばす
ラウラ・ボーデヴィッヒは避けるがナイフが不規則に曲がり追撃する

「なんだと！？」

ラウラ・ボーデヴィッヒはプラズマ刃でナイフを弾く
弾いた後に瞬時加速で空いた距離を縮め　ながらレールカノンを

発射する

「あたりません！」

避けようとするが何かに捕まれたように動けなくなる

「なっ！？動けない」

「これで終わりだ！」

至近距離でレールカノンを発射する

恵美は目を瞑り衝撃を待つ

（海斗様……！）

海渡に祈りを向けて

だが、攻撃が来ないのを不思議に思い目を開ける

そこには……ハリネズミと海斗がいた

「助っ人登場」

～～海斗ｓｉｄｅ～～

海斗はこのままじゃ危ないと思い

＞ボンゴレ＜を展開する

「海斗、いったい何を……」

シャルルが何するか聞いてくるが、海斗は答えず拳を握る

「極限太陽（マキシマムキャノン）！」

アリーナのシールドに拳をぶつけてシールドを砕く

（頼むよ、ロール！）

海斗は雲のリングに炎を灯し雲のアニマル匣を開匣する

雲ハリネズミ（ロール）はラウラ・ボーデヴィッヒと恵美の間に入りレールカノンを防ぐ

「助っ人登場」

「くっ！貴様！」

「か、海斗……様」

ラウラ・ボーデヴィッヒはこっちを睨みつけ

恵美は安堵した顔でこっちを見る

「さて、選手交代だ。こっからは俺が相手だ！ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「いいだろう、掛かって来い！」

「涼子は恵美を頼む！」

「分かりました」

涼子は＞フリーダム＜を展開して恵美を連れて離れる

ラウラ・ボーデヴィッヒはワイヤーブレードを飛翔させる

「ＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ！」

いつの間にか匣を開匣させ防御リングで防ぐ

「これならどうだ！」

ラウラ・ボーデヴィッヒはレールカノンを発射する

「果てろ！フレイムアロー！」

レールカノンとフレイムアローがぶつかり相殺する

海斗は雲のリングに炎を灯し、匣からトンファーを出す

ラウラ・ボーデヴィッヒはプラズマ刃を展開して切りかかる

ガギンッ！ガギンッ！

二人は防ぎ、防がれを繰り返していると

「そこまでだ！」

二人の打ち合いは人物の声により止める

「全く、何の騒ぎかと思えば……」

「織斑先生……」

ストップを掛けたのは織斑先生だった

「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

ラウラ・ボーデヴィッヒはＩＳを解除する

「黒羽、星野、お前たちもそれでいいな？」

「別にいいよ」

「分かりました」

そう返事をする。織斑先生はその言葉を聞いて、アリーナ内の全ての生徒に向けて言った

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

織斑先生が強く手を叩き、解散を促した

現在保健室

恵美に怪我がないか調べるために保健室にやってきた。検査は終わってるのだが

「……」

「……」

保健室には重い空気が流れていた
最初に口を開いたのは海斗だった

「何が言いたいかわかる？」

「……」

怒気を含んだ声で話しかける。恵美はずっと下を向いている

「怪我がなくて良かったけど、何かあったらどうするの？」

「……」

海斗の怒りに一夏、シャルル、セシリア、鈴音は何も言えなかった。だが、涼子は口を出す

「海斗、恵美さんにも何か事情があったんですよ」

「それは分かってる。けど、戦ってるときも相手に隙を見せたよね？」

「！……」

あの時のことを思い出したのか、下を向きながら肩を震わせる

「それに、武器にも炎を灯してなかったよね。何で？」

「……」

何か言おうとしたがすぐに口篭もる

「はぁ～、もういいや」

「え？」

海斗が咎めるのを止めて驚く

「そんなに俺と口をきくのが嫌なんだね」

「そんな事ありません！」

「何も話さないくせに？」

「それは……」

「人を心配させといて、何も言わないんだから俺も何も訊かない」

海斗はドアに向かおうとする

「ま、待ってください」

海斗の腕をつかみ動きを止める

「離してくれる？何も話さないんだから、部屋に戻ってもいいでしょ？」

「違います！違うんです！」

「何が違うの？」

「それは、その…えっと……」

必死に何か言おうとするが、言葉が見つからない

「なら訊くけど、何でラウラ・ボーデヴィッヒと戦うことになったの？」

「彼女が、海斗様を悪く言うから……」

「具体的には何て？」

「悪魔って、そう言ったんです……」

「そういえばそんなこと言ってたわね」

凰　鈴音が口を開く

「悪魔……か。それだけ聞ければもういいよ」

「本当ですか？」

「ああ。本当だ」

そう言いながら、海斗は恵美の頭に手を置き

「怪我がなくて本当によかった」

頭を優しく撫でる

「ごめんなさい、海斗様」

恵美も謝る。後ろにいる涼子達は笑みをこぼす

ドドドドドッ！

「？何の音だ？」

廊下からこちらに近づいてくる

ドカーン！

豪快な音と共にドアが吹き飛び、女子が流れ込んできた

「織斑君！」

「デュノア君！」

「黒羽君！」

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

「？」

「「「「これ！」」」」

女子一同が学内の緊急告知文が書かれた申込書を出してきた

「えっと……『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――」

「ああ、そこまででいいから！とにかく！」

一夏が読むのを遮り手を一斉に出してくる

「私と組もう、織斑君！」
「私と組んで、デュノア君！」
「お願い、黒羽君！」

いきなりの仕様変更で一年の女子は先手必勝とばかりに勇み迫ってきている

「え、えっと……」

シャルルが困った顔をしている

（ここでシャルルが誰かと組んだら、訓練もするだろうから女だとバレる可能性が高いな……）

そう考え海斗は

「俺はシャルルと組むよ」

海斗はシャルルと組むことを皆に言う
シャルルは一瞬驚いた顔でこっちを見て

「う、うん、そうなんだ。ごめんね、みんな……」

シャルルも話にのってくれた

「そっか……」

「でもまだ……」

「織斑君がいる！」

そう言って一夏に詰め寄る

「頑張れ、一夏」

「頑張ってね、一夏」

海斗とシャルルは一夏にエールを送り恵美と涼子を連れ保健室を後にする

後ろからは「裏切り者ーーー！」と聞こえたが、敢えて聞こえないフリをする

夕食後部屋に戻るなり、シャルルが話しかけてくる

「あ、あの、海斗っ」

「何？」

話しかけてきたシャルルはなぜか勢いがあった

因みに、恵美達は学年別トーナメントのペアを組み、色々相談す

ることがあるから先に部屋に戻った

「あの、遅くなっちゃったけど……助けてくれてありがとう」

「助けた？何を？」

「その、ほら保健室で。ペアを組むことを言い出してくれたの、嬉しかったよ」

「気にしなくていいよ。事情を知ってるのは俺だけだし、そっちの方がばれる確率は低いし」

「うん。でも、ありがとうって言わせて」

「それじゃ、俺は、どう致しましてかな」

現在寮の部屋

そこでは困ったことが起きていた

着替えをどうするかだ

「俺外にいるよ」

「え？何で？」

「何でって、俺がいたら着替えられないでしょ？だから、暫く外にいる」

「で、でも、それだと男同士なのに着替え中に外にでてると変に思われちゃうでしょ？」

「それもそうだね。どうしよっか……」

「だったらさ、互いに背中を向き合いながら着替えるのは、どうかな？」

シャルルがそう提案してくる

「他に案が思いつかないから、それでいこう」

特にいい案が思い付かなかったのでそれでいく事になった

上着から順に脱いでいく

じーーー

「……」

じーーー

「何？」

後ろからの視線に耐えきれず、口を開く

「ふえっ！？な、なにかな！？」

「こっち見てないで、さっさと着替えたら？」

「……海斗、後ろに目付いてる？」

「付けてないよ、ふざけたこと言ってないで早く着替えたら」

海斗は呆れたようにシャルルに言う

「う、うん。そうだね」

（海斗って後ろで女子が着替えてても何とも思わないのかな？……それとも、僕に魅力がないのかな）

考え事をしてたシャルルはズボンに足が引っかかり、体が前に倒れる

「きゃああ！？」

倒れると思い目を瞑るが、肩をつかまれ前とは逆に後ろに引っ張られる

「大丈夫か？」

「か、海斗……ありがとう」

シャルルを自分の方に寄せ体勢を戻す

「あ、あの、海斗……その、見られてると恥ずかしいんだけど……／／／／」

「ん？ああ、悪い」

海斗は肩から手を離し、後ろを向く

「着替えが終わったらいってね」

「う、うん／／／」

シャルルは殆ど下着姿同然の格好だったので、見られてるのがこの上なく恥ずかしかった
だが海斗は何でもないように振る舞っていた

「……もういいよ／／／」

そう言われてシャルルの方を向く、シャルルは若干顔を赤くしている

「……なあ、シャルル」

「な、何？」

「俺を殴れ」

「どうして？」

いきなり海斗がそんな事を言ってくる

「見られたくないのに、見てしまったから。だから、俺を殴れ」

「それ以外の選択肢はないの？」

「シャルルが満足するなら何でもいいよ」

そう言われてシャルルはどうしようか考える

「海斗これから僕が言うことを拒んだらダメだよ？」

「分かってるよ」

「海斗の女装姿、学年別トーナメントが終わったら見せて？」

「はい？いや、待って、いくら何でもそれは……」

「拒まない約束だよね？」

「うっ……。……分かった、学年別トーナメントが終わったら見せてやるよ！」

海斗はやけになる

シャルルはそれを聞いて笑いながら念を押す

「約束だよ」

「……ああ」

海斗もどうにでもしてくれといった感じだった

「……寝る」

一言そういってベッドに入る

「お休み、海斗」

「……」

海斗はすでに寝ていた

～～シャルルｓｉｄｅ～～

「お休み、海斗」

「……」

（寝たのかな？今日は大変だったから疲れたんだね）

シャルルは海斗の寝顔を見ながら

「海斗は誰にでもあんな感じなの？」

シャルルは必死に恵美を助ける海斗を思い出しそう呟く

「もし、それが僕でも、海斗は助けてくれる？」

海斗の頬を撫でながら寝てる海斗に問いかける

「って、寝てる海斗に訊いても意味ないのにね」

海斗から離れ自分のベッドに入る

「お休み、海斗」

シャルルも眠りについた

新たな問題とパートナー（後書き）

次回は学年別トーナメントの話ではありません
悪しからず

使者（前書き）

やってしまった……
あのキャラを登場させてしまった

使者

第２２話　使者

シャルルとペアを組んで五日が過ぎて土曜日

「海斗はどこのチームが一番強いと思う？」

「恵美と涼子のチームが決勝まで確実にあがる」

確実と言いはる海斗にシャルルは疑問を抱く

「ボーデヴィッヒさんじゃなくて？海斗が二人にそこまで言えるのはＩＳの性能？」

「違う。あの二人は強い特に恵美は……」

「でも恵美はボーデヴィッヒさんに負けてたけど……」

シャルルはそう言うが、海斗は否定の言葉を述べる

「恵美が負けたのは感情的になったからだ。涼子は恵美の感情を抑えることが出来る」

「信頼してるんだね」

「ああ、あの二人は色々してくれたから信頼できる」

「海斗は僕のこと信頼してくれる？」

シャルルが恥ずかしそうに言ってくる

「してるよ。俺に秘密明かしてくれたんだから」

コンコン……

シャルルと部屋で話してたら誰かがノックした

「はい？」

「山田ですけど、黒羽君居ますか？」

山田先生がドア越しに呼びかけてくる

「何ですか？」

「黒羽君に面会希望の方がいます」

「分かりました。すぐにいきます」

海斗が部屋の外にでる

「お待たせしました」

外で待ってた山田先生と面会室に向かう

「海斗殿、お久しぶりでございます」

「久しぶりだな」

面会室のドアを開けると礼儀正しく挨拶をする

「黒羽君、この方は？」

「親戚のバジルです」

「バジルと申します」

バジルが礼儀正しく山田先生に挨拶する

「黒羽君の副担任の山田真耶です」

山田先生も挨拶する

「それでは黒羽君、面会時間は１９：００までですからね」

「分かりました。ありがとうございます」

山田先生が外にでる

「まさか、電話じゃなく直接来るとはね。予想外だよ」

「学年別トーナメントを控えてるのにわざわざすみません」

「気にしなくていいよ。……それより、あれ（・・）持ってきた？」

「はい」

バジルは鞄からファイルを取り出し海斗に渡す

「……これはラウラ・ボーデヴィッヒの？」

「はい、それを届けるように言われました」

「ふ～ん。……！これは！」

海斗は読み進めていく内にとある所で目が止まる

「……遺伝子強化試験体Ｃ－〇〇三七？」

「人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれたみたいですね」

「戦うためだけに生まれてきたのか……。可哀想だな。それに、あの眼帯の下『ヴォーダン・オージェ』別の言い方をすれば疑似ハイパーセンサーか……。やりたい放題だな」

次に＞シュヴァルツェア・レーゲン＜についてみてると

「ＶＴシステム？」

「それについては此方も中身までは調べられませんでした」

「そうか……念の為注意はしてるか」

全て読み終わりファイルをバジルに返す

「ありがとう。だいたいは分かった」

「海斗殿の為なら力を貸すのは惜しみません」

「ありがとうな。ドイツの上層部についてはどうなっている？」

「未だに調査中です」

「了解。……そろそろ時間だな。今日は大変だったろ？」

時間を見ると６：５０頃だった

「正直少し疲れました」

「だろうな。宿は取ってあるんだろ？」

「はい。この近くのホテルに」

「そうか。それじゃ、またな」

海斗は部屋から出ようとする

「海斗殿、伝言を預かってます」

「伝言？」

「はい。無茶しすぎるなと」

「分かってるよ。お前も無茶するなと伝えておいてくれ」

「分かりました。それでは」

「ああ、じゃあな」

海斗は部屋から出て山田先生を呼びに行く

現在７：３０

バジルと面会時間が終わり部屋に戻ってきた

「嫌な予感がするな……」

海斗は何かは分からないが、何かを感じ取る

ガチャ

部屋に入ると誰もいなかった

「シャルルは飯かな？」

（それよりも、ラウラ・ボーデヴィッヒについてだ。あいつは何とも思わないのか？あんな身体にされて）

海斗は椅子に座り考え込む

その時

『♪ゆずれない～　ものを一つ　たった一つで　強くなれる♪』

携帯の着信が鳴る

ピッ

「もしもし」

『よう、海斗』

電話をしてきたのは頼み事をした男性だった

「何？」

『いや、バジルはそっちについたかなと』

「ちゃんと来たよ。資料も確認した」

『そうか……中身を見てどう思った？』

「ムカついた。まさかあんな事する人間がまだいたんだね」

『俺たちは動いた方がいいのか？』

（今手を出されても、感づかれるかもしれないな）

「悪いけど、もう少し待って、せめて学年別トーナメントが終わるまで」

『分かった。動いて欲しいときには連絡くれ』

「了解。それじゃ」

海斗は電話を切る

「はぁ～、学年別トーナメント……か。警戒はしとくか」

その後、海斗はシャルルと部屋に来た恵美と涼子に叱られるのであった

使者（後書き）

皆さんどうも、ホリです

出してしまいました。あのキャラ
もうこうなったら、なるようになりやがれです

アンケートはまだまだ続いてます。意見をください

学年別トーナメント（前書き）

やっと学年別トーナメントに持ち込めた

さて今回はあの力を使います

学年別トーナメント

第２３話　学年別トーナメント

バジルが来てから二日後の月曜日。学年別トーナメントの日がやってきた

現在更衣室には一夏、シャルル、海斗の三人しかいない

「海斗、今戦い相手は誰？」

「ラウラ・ボーデヴィッヒと戦いたい」

シャルルは驚いた顔をする

「恵美と涼子と戦いたいんじゃ……」

「いや、今はラウラ・ボーデヴィッヒと戦いたい」

海斗はこれだけは譲れないと言うような感じだった。シャルルはそれ以上聞こうとはせず、海斗の援護に回ろうと考えていた

「しかし、凄い人だなこりゃ……」

着替えが終わった一夏が観客席の様子を見る

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「ふーん、苦労なこった」

シャルルの説明に対し、一夏はあまり興味がないような返事をする

海斗は観客席を見ながらおもう

（この中にあの会社の人間もいるのか……）

海斗は拳を握り締める

「海斗、どうしたの？」

握り拳を見ながら聞いてくる

「いや、何でもない」

「そう。海斗、周りを見失わないでね」

「大丈夫だよ。そこまで俺は愚かじゃない」

心配してくれるシャルルにそう言う

「いつの間にかかなり親しくなってないか？」

一夏が俺とシャルルのやりとりを見て言ってくる

「気のせいだよ。……対戦表が決まるね」

海斗がそう言ったら、一夏達はモニターを見る。それと同じにモ

ニターはトーナメント表へと切り替わる

「え？」
「あ」
「ワォ」

上から一夏、シャルル、海斗とそれぞれの反応を見せる

一回戦の相手はラウラ・ボーデヴィッヒと篠ノ之　箒が相手だった

「まさか初戦で当たるとは」

「海斗、勝算は？」

「７０，４％ってところ」

その勝率のパーセンテージにシャルルは驚く

「以外と低いね」

「長引けばこちらが負ける。……行くよ、シャルル」

「あ、うん」

「頑張れよー」

シャルルが海斗の後ろをついて行く
一夏は後ろからエールを送る

更衣室から出てピットにやってきた

海斗はカラーコンタクトを外す。海斗の目は黒から青に変わる

「海斗、何を……」

「この力を使う」

眼帯を外し、六道の目を使う

「！ダメだよ、そんな事したら向こうは……！」

シャルルが焦りながら、使うのを止める

「クフフ、問題ありませんよ」

海斗の口調が突然変わる

「海斗、口調が……」

「ああ、これですか。この力を使うと何故かこの口調になるんですよ」

「そ、そう。……でもその目が他の人に見られたら」

「幻術で隠しますから、何の問題もありませんよ。見えるのは僕とシャルル、そしてラウラ・ボーデヴィッヒの三人です」

「ボーデヴィッヒさんにも？」

「クフフ、彼女の力をみたいですからね。それじゃ、行きますよ」
海斗は＞ボンゴレ＜を展開、シャルルも＞ラファール・リヴァイブ・カスタム？＜を展開する
「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」
「クフフ、こっちも同じ気持ちですよ」
ラウラは海斗の口調変化に少し驚くが、すぐに冷静になる
試合開始まで五秒、四、三、二、一、――試合開始
「叩きのめす」
「いきますよ」
海斗は霧のリングに炎を灯し、霧の匣から三叉槍を出す
海斗はラウラ・ボーデヴィッヒに切りに掛かるが
ラウラは右手を突き出しこちらの動きを止める
（成る程、これがＡＩＣですか……。確かに厄介ですね……）
「武器を展開してすぐに攻めるとは、単純だな」
「クフフ、それはどうでしょう。停められるのは予想してましたよ」

「なら、これはどうだ？」

リボルバーの回転音が轟き、こちらをロックオンする

（クフフ、そちらも単純ですね。こちらは二人いるんですよ）

海斗は慌てずにいた

「させないよ」

シャルルが海斗を飛び越えると同時に六一口径アサルトカノン《ガルム》による爆破弾を浴びせた

「ちっ……！」

肩のカノンを射撃によりずらされ、砲撃を外す

シャルルはそのままたたみかけようとする。ラウラは急後退をして間合いを取る

「逃がさない！」

銃身を正面に突き出し突撃体制へと移る。左手にアサルトライフルを呼び出す。

「私を忘れてもらっては困る」

追撃を遮るように打鉄を纏った篠ノ之　箒が現れる。シャルルの放つ銃弾を弾き斬りかかる

『シャルルそのまま篠ノ之　箒を抑えてくれ』

『了解』

シャルルに箒を抑えるようにプライベート・チャンネルで頼み、ラウラに向き直る

「こちらも始めましょうか」

「来い！」

ラウラはプラズマ手刀を展開し連続で斬りかかろうとするが、海斗の目が六から四に変わり、ラウラとすれ違う

刹那、＞シュヴァルツェア・レーゲン＜を切り刻んだ

「！？くっ、何をした！」

「クフフ、斬っただけですよ」

ラウラは自身のシールドエネルギーが減っていることに驚く。が海斗の武器を確かめてからこう言った

「貴様の武器はその槍のみ。ならば近づかせなければいいだけだ」

ラウラはワイヤーブレイドをこちらに飛ばす

「確かにそうですが、ラウラ・ボーデヴィッヒ、もしＩＳが飛べなかったらどうしますか？」

「何をバカなこと！」

海斗の目が一に変わる

（第一道　地獄道）

三叉槍をグラウンドに叩いた時、ラウラの周辺の地面が割れ下に落ちる

「そんなもの……！？」

＞シュヴァルツェア・レーゲン＜が飛べなくなって驚きを隠せない

「何だと！」

そのまま落ちると思ったが、景色が一気に元に戻る

「な、なんだ……今のは」

「クフフ、幻覚を見てたんですよ。ＩＳが飛べなくなる幻覚をね」

「なん、だと……」

「さあ、止まってる暇はありませんよ」

海斗がラウラに斬りかかる、ラウラはプラズマ手刀で何とか防ぐ

「これならどうだ」

ラウラはＡＩＣで動きを止めた

「おやおや、またその技ですか」

「これで、終わらせてやる！」

ラウラはレールカノンの発射態勢にはいるが……

（第一道　地獄道）

地面から蔓が延びレールカノンを使えなくする

「くっ！」

「クフフ、降参しますか？」

「ちっ……！図に乗るな！」

ラウラは海斗から離れワイヤーブレイドを飛ばしてくる

「惰弱な……」

（第四道　修羅道）

飛んできた二本のワイヤーブレイドを切る

「クフフ、無駄ですよ。こちらは二人いるのですから」

「何？」

「シャルル……」

「任せて」

アサルトライフルをラウラに向けて撃つ

「!?」

ラウラは咄嗟に避けようとするが、弾が掠る

「篠ノ之　箒はどうなりました?」

「お休み中」

「クフフ、それでは後は彼女だけですか」

「うん、ここからだね」

海斗は霧のボンゴレリングと霧のボンゴレ匣を出し

「さあ、行きますよ。ボンゴレ匣　開匣」

匣から霧フクロウが出てくる

「なっ……生き物を出すなんて」

「クフフ、ただの生き物ではありませんよ。……ムクロウ形態変化（カンビオ・フォルマ）」

ムクロウの形態が変わりレンズになる

「D（デーモン）・スペードの魔レンズ」

海斗は魔レンズで幻術のリアリティを上げる

「行きますよシャルル、援護を頼みます」

「分かった」

海斗はラウラに向かう

「やらせるものか！」

ラウラは二本のワイヤーブレイドを飛ばしてくる

「こっちだってやらせないよ」

シャルルはワイヤーブレイドをショットガンとマシンガンで弾き

海斗に道を開ける

「僕と君では力の差がありすぎる」

三叉槍でラウラに斬りかかるがラウラはプラズマ手刀で防ぐ

「クフフ、君は僕を抑えるだけで精一杯故に――」

シャルルが海斗の後ろまで来る

「二人を相手には出来ない」

真後ろまで来たシャルルは加速し、ラウラの後ろに回り込む

「なっ……！『瞬時加速』だと！？データにそんなのは書いて……」

「今初めて使ったからね」

シャルルはショットガンを後ろから浴びせる

「くそっ！だが、私は負けない！」

ラウラは急上昇して距離を取るが

「僕の前からでは逃げられませんよ」

（第四道　修羅道）

今度は海斗がラウラの後ろに回り込み地面に向かって蹴った

「任せましたよ、シャルル」

「うん」

シャルルは盾の中に隠してた《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》通称――

「『盾殺し（シールド・ピアース）』……！」

ラウラの表情に焦りが見える

ズガンッ！

「ぐううっ……！」

ラウラの腹部に、パイルバンカーの一撃が叩き込まれる
シャルルは容赦なく打ち込む。
そして、＞シュヴァルツェア・レーゲン＜のエネルギーが尽きたとき、異変は起こった

学年別トーナメント（後書き）

来たーーーー！
六道輪廻！使い方があってるか分からないけど、使ってみたかった

アンケートは続いてます。感想もくれると嬉しいです
さて次回も楽しみにしてください

異変と理由と居場所（前書き）

遅くなってすみません

今回は話がつながってるか不安です

異変と理由と居場所

第２４話　異変と理由と居場所

シャルルがパイルバンカーをラウラに撃ち込み始めたとき、海斗の超直感が何かを感じる

（何だ、この感じ……何かが……何なんだ！）

海斗が苛ついてたらあるキーワードを思い出す

『ＶＴシステム』

海斗はシャルルに待ったをかける

「シャルル！それ以上はやめろ！」

「海斗、何言って……「あああああああっ！！！！！」……！？」

ラウラが絶叫し、シャルルが＞シュヴァルツェア・レーゲン＜からでる紫電に吹き飛ばされる

「シャルル！」

海斗はシャルルを受け止める

「海斗、ありがとう」

「ああ、それよりも……」

海斗は＞シュヴァルツェア・レーゲン＜を見る。シャルルも同じ場所をみる

「えっ！？」

シャルルは驚きで声を上げる、海斗も声を出すほどではないが多少驚いている。何せ＞シュヴァルツェア・レーゲン＜がどろどろにとけ、ラウラを包み込んでいたから

海斗は三叉槍をしまい、二つの雨の匣とリングを出す
一つ目の雨の匣を開匣させ時雨金時を出す

「海斗……戦うの？」

「ああ、戦わなきゃ止められないだろうから」
（それに、ＩＳ程の高性能機を騙すのには力を使いすぎた。速攻で片づけないと体が持たない）

その時＞シュヴァルツェア・レーゲン＜だったものはラウラを完全に包み込むと全身を変化、成形させていく
海斗は危険だと判断し、雨のボンゴレ匣を開匣させる

「来い、小次郎！」

海斗はボンゴレ匣を開匣させ、雨ツバメこと小次郎を出す

「これは、ツバメ？」

「ああ、名前は小次郎だ」

成形が終わり、そこに立っていたのは、黒い全身装甲（フルスキン）のＩＳに似た『何か』だった

ボディラインはラウラを表面化したもので、最小限のアーマーが腕と脚につけられている。頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしていた。武器は手に刀が一つ握られていた

海斗は時雨金時を構え刀を見据える

（武器は刀が一本だけ……っ！？）

海斗が構えた瞬間ＩＳ（仮）が懐に飛び込んでくる

海斗はすぐに防御に移る

ガギンッ！

刀がぶつかり合ったときに海斗は確信した。やっぱり機械なんだなと、そして同時に怒りも沸いた

（誰のデータかは知らないけど、その人の一回、一回、刀を振る時の気持ちを機械に任せるのは許せねえ）

「シャルルあいつは俺がやる。手を出すなよ」

「何で、僕も戦えるよ」

「他人の、刀を振る誇りを汚すような機械は許せねえんだ。だから俺が倒す、この時雨蒼燕流で」

ＩＳ（仮）が再び斬りかかる上から落とすように、海斗は反応が間に合わず斬られる

「海斗ーーー！」

シャルルが声を上げるが、海斗の姿は水と化す
そしてＩＳ（仮）の後ろに現れる

（攻式九の型　うつし雨）

後ろからＩＳ（仮）を斬ろうとするが受け止められる

ガギンッ！刀が交差したときＩＳ（仮）の動きが止まる

「鮫衝撃（アタッコ・ディ・スクアーロ）！いくら機械でもかなりの衝撃を喰らわしたんだ、１０秒は動かねえよ」

海斗は小次郎を呼び寄せる

「そして、１０秒もあればお前を倒せる！」

小次郎を前衛に持ってきて、海斗は再び刀を構える

「これで、終わりだ。燕特攻（スコントロ・ディ・ローンディネ）！」

海斗はＩＳ（仮）を斬ると中からラウラが落ちてくる
ラウラは助けを求めていたかのような視線を向けてくる

「おっと、大丈夫か？」

ラウラは何も言わず気を失った

「海斗、終わったんだね」

「ああ、終わっ……た……」

（やべ、マジで力を使いすぎた。体が動かねえ）

海斗はそのまま気を失った

「……ここ、は」

「保健室だそうだ」

海斗が目を覚まし、声のした方を向くとラウラが此方を見ていた

「無事だったんだ」

「ああ、先ほどまで教官もいた」

「そうか……なあ、何で俺達を狙ったんだ？」

「……軍からの命令と自分のためだ」

ラウラは言おうか迷ったが話すことに決めた

「私の部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』はドイツの中でも強い方の部類だった」

金色の瞳と赤色の瞳のオッドアイでこちらを見ながら話を続ける

「だが、一人の人間により、私の部隊はやられてしまった」

「それが、俺か……確かにドイツにいたときはどこかの軍に教われた。だがあれは正当防衛と言うやつだ」

「私達にも詳しいことは聞かされていない、作戦内容は『黒羽海斗を捕まえてこい』そう言われただけだ。最初は腑に落ちずにお前を捕まえようとした、その時に我々はやられた。ただ悔しかっただけだったんだ」

ラウラは保健室の外に顔を向ける

「俺を狙う理由は分かった。だが、恵美を狙う理由は分からないな」

「それは、私が知りたい。一緒にいるから同じ部類に勝手に私は入れていた」

ラウラは視線を下に向け、シーツを握りしめる

「だが上の人たちは違うのだろうな。私はただ道具のように扱われただけだ、だから『ヴォーダン・オージェ』の実験体にもされる事に異論を唱えなかった」

海斗は『道具』と言う言葉を聞き悲しくなった

（シャルルも自分のこと道具と言った。でも、ラウラ・ボーデヴィッヒは違う、本当に道具のように扱われてたんだ。なら俺は……）

海斗が何か言おうとしたらラウラが先に話しかけてきた

「黒羽　海斗はどうなんだ？」

「？」

海斗が「何で俺？」と言う顔をしている

「学年別トーナメントの時から気になっていたが、その目は私と同じではないのか？」

「ん、まあね。でも俺は強制だったみたい」

「みたい？どういう事だ？」

「目を覚ましたらこの目になっていた。その前日を思い出しても特に変わったことはなかった。だから寝てるときに何かあったと考えてる」

この事を聞きラウラは諦めたように言う

「私たちは道具なんだな」

「考えたくないけど、多分そうなんだろうな」

「私はこれからどうすれば……」

「ふつうに生きたらどうだ？」

「生きられるのか？こんな私が……」

「生きられるさ」

「私が生きていて意味はあるのか？」

「意味が見つからないなら探せばいい」

「見つけられるだろうか、私が」

「見つけられないなら、俺も一緒に探してやる」

海斗は優しくラウラに言った

ラウラはその言葉を聞いて嬉しくあった。織斑先生の次に自分を一人の人間として見てくれて、自分のために一生懸命になってくれて、ラウラは窓の外を見てる海斗のことを見ていた

暫くして日が沈みかけて海斗は眼帯をつけて

「俺は戻るけど、ラウラ・ボーデヴィッヒはまだ寝てるんだろ？」

「ああ、それと私のことはラウラと呼んでくれ」

「分かったよ。お大事にラウラ」

海斗は保健室から出て行った

一人残されたラウラは暫く保健室のドアを見ていた

現在時刻７：５０　学生寮の廊下

海斗はそのまま部屋に戻ろうとしたが

「海斗様、何で六道輪廻なんか使ってるんですか！」

「声がでかい。て言うか何で分かったの？幻術で隠してたのに」

「あれくらいの幻術なら見破れます。伊達にいつも特訓されてませんから」

恵美は胸を張り自慢げに言う

「ちゃんと特訓の成果は出てるんだ」

「当たり前です。それよりも早くしないと食堂しまっちゃいますよ」

「今更言っても間に合わないと思うんだけど？」

「大丈夫だと思います」

「海斗、もう動いて大丈夫なの？」

「平気だよ。それより一夏何してんの？」

「一夏君生きてますか？」

床に倒れている一夏に海斗は何があったか訳を聞く、因みに一夏は「う、ぐ……」と言ってるので一応生きていた

「一夏の鈍感ぶりが発揮したんだよ」

「ふーん、呆れるね。相手は？」

「篠ノ之さん」

「大変ですね、彼女も」

恵美は箒が出て行ったであろう場所をみる

「いい加減腕離してくれない？」

「嫌です。心配かけたんですから、これくらいは許してください」

暫くして一夏が復活した

「か、海斗体は平気なのか？」

少し辛そうな一夏が聞いてくる

「大丈夫だよ」

「ん？海斗、その目どうしたんだ？」

一夏は海斗の青い目を見る

「カラーコンタクトを外した。元々はこの目なんだよ」

「そうなのか」

海斗達は四人で座れる席に着く

「学年別トーナメントはどうなったの？」

「中止だって、でも個人のデータを取るために一回戦は行うらしいよ」

シャルルが簡単に説明する

「私たちは勝てるでしょうか」

「涼子もいるんだから大丈夫だよ」

そう言って海斗は携帯を取りだし電話をかける

「耳塞いどいた方がいいよ」

「まさか……」

「「？」」

恵美は予測が出来て耳を塞ぐ、一夏とシャルルはよく分からないようだった

「……もしもし」

海斗が電話したとき

『う〝ぉぉぉい、てめぇから電話とは珍しいなぁ』

電話口から大きすぎる声が聞こえた

一夏とシャルルは耳を押さえるのが遅れる

「うるさい、用件がある」

『あ〝ぁ、なんだぁ』

「どこかの馬鹿が、ＶＴシステムを使ったみたいだからよろしく」

『う〝おぉおい、ちょっと待てぇ何で俺たちなんだぁ』

「暴れるの隙でしょ？スクアーロ」

『まあいい、やっといてやる』

「よろしく、それじゃ」

海斗は電話を切りため息をつく

「ね、ねえ海斗、誰なの今の？」

シャルルが聞いてくる

「知り合い。……耳が痛い」

海斗は耳の様子を確かめる

「彼は相変わらずですね」

「ああ、本当に困る」

「あ、織斑君、デュノア君、黒羽君。ここにいましたか……ってどうしました？」

耳を押さえてるのを見て不思議そうに聞く

「何でもありません。用は何ですか？」

「あ、そうでした。朗報です！」

山田先生が両手を握りしめてガッツポーズした

「なんとですね！ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！そうなんですか！？てっきりもう来月からになるものとばかり」

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があったので、もともと生徒たちが使えない日なんです。でも点検自体はもう終わったので、それなら男子の皆に使ってもらおうって計らいなんですよー」

（拙いな、シャルルの招待がバレる。これだけは阻止しなくては……）

「？」

考え事をしてる海斗を見て恵美は不思議そうな顔をする

（気絶させるか……。特訓をきつくすると言って脅すか……）

どちらも酷いが海斗の頭ではこれくらいしか思い付かなかった

「それでは早速お風呂にどうぞ。今日の疲れも肩まで浸かってスッキリしてください」

どんどん話が進んでしまい海斗はシャルルに耳打ちする

（一夏を気絶させるから先に行ってて）

（う、うん、分かった……）

「あれ？織斑君はどうしました？」

風呂場につき山田先生が一夏が居ないのを聞く

「何か体調を崩したみたいです」

「そうですか、デュノア君はもう中にいるので、入ってきてください」

山田先生が脱衣所のドアを開ける。脱衣所にシャルルがいた

「海斗、一夏は？」

「伸びてる」

「そう、なんだ……」

海斗がふつうに言うので苦笑いで返す

「それはそうと、早く入って来なよ」

「海斗は入らないの？」

「俺はシャワーでいいよ」

「でも海斗疲れてるでしょ？」

「問題ないよ」

「海斗、これは僕からの好意何だけどな……」

「分かった。有り難く受け取るよ」

海斗はシャルルから見えないところに行き、服を脱ぐ

「……」

海斗は湯に浸かってからずっと風呂の天井を見つめていた

「……」

カラカラカラ……

「……」

脱衣所のドアが開く音をしても海斗はただ天井を見上げていた

「お、お邪魔します……」

「ん……」

シャルルが入ってきても海斗は心ここにあらずといった感じだった

「海斗どうしたの？」

海斗らしくない返事にシャルルは疑問を持っていた

「ん……」

海斗は聞いていないようで返事だけを返す

「！海斗その傷……」

「……」

シャルルは湯船に浸かり海斗のそばまで行き体を見て驚く

海斗の身体には無数の傷があった。だが、海斗は返事をしないで天井を見つめていた

「痛く、ないの？」

「……昔の傷だから痛くない」

海斗が口を開く

「……」

シャルルは海斗の背中に触れる。傷を優しく撫でるように

「何か用があるんでしょ？わざわざ入ってきたってことは」

それに対し海斗はなにも言わないで、入ってきた理由を聞く

「あ、うん……。大事な話なんだけど……。海斗はあの時言ったよね。『ここに残りたいか？』って」

「言ったような気がする。それで？」

「僕さここに残るよ。みんなと、海斗と出会って分かったんだ。ここが僕の居場所なんだなって」

海斗はシャルルの覚悟を感じ取った

「シャルルが本気でその覚悟があるなら、俺は全力でお前を守る」

「あ、ありがとう／／／」

「シャルル・デュノア！」

「は、はい！」

海斗がいきなりシャルルの名前を呼んでシャルルは驚く

「お前の覚悟確と受け……「違う」……何が？」

海斗がシャルルに言おうとするがシャルルが止める

「僕の名前はシャルロット・デュノアお母さんがくれた、本当の名前……」

「そうか。なら、改めて……シャルロット・デュノア！」

「はい！」

今度はしっかりと返事をする

「お前の覚悟確と受け取った。お前の生きたいようにしろ」

「はい」

シャルル改めシャルロットは海斗の背中に体を預ける

「海斗、僕の生きる道を見ててね」

「ああ」

それから暫くして海斗が先に上がり、シャルロットが上がる

「それじゃ、戻ろうか？シャルロット」

「うん」

山田先生にお礼を言い、部屋に戻って寝た

異変と理由と居場所（後書き）

シャルロットとして学校にはいるのは次回にします

まだアンケートに答えてない方は『悪い夢と知らせ』の後書きにありますのでお願いします

感想もお願いします

波乱の予感（前書き）

皆さん先に謝ります
すいませんでしたーーーーーー！！！！！
取り敢えず見てください

波乱の予感

第２５話　波乱の予感

シャルロットの覚悟を受け取った翌日
朝シャルロットに「先に行ってて」と言われたので男は海斗と一夏だけだ

（ラウラもいないな。まだ体の調子が戻らないのか？）

海斗はラウラに精神汚染が始まっていたのではないかと心配になっていた

「み、皆さん、おはようございます……」

山田先生が教室に入ってきた。足取りは何故か重そうにしている

「今日は、ですね……みなさんに転校生を二人紹介します。えっと、一人はすでに紹介が済んでいるといいますか……」

（転校生？二人の？）

海斗は疑問に思う。クラスのみんなも今月になって転校生の多さに疑問を持つ

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

疑問に思うだけで特に興味が引かれるようなことはなかったが、入ってくるときに聞いた声の方をみる

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

やってきたのは女子の制服を着たシャルロットだった。クラスの全員が呆気にとられる

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はぁぁ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります……」

（あれ？もう一人の転校生は？）

海斗は別段驚いてなくもう一人の転校生が気になっていた。だがクラスの奴らはそんな事より

「え？デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、黒羽君、同室だから知らないって事は――」

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

教室が一斉に喧噪に包まれる

バシーン！
教室のドアが蹴破られたかのような勢いで開く
「一夏ぁっ！！！」
凰　鈴音が烈火の如く怒り一色の顔で入ってきた
「死ね！！！！」
ＩＳアーマー展開し両肩の衝撃砲がフルパワーで開放される
「鈴！それ洒落にならん！俺マジで死ぬ！」
一夏は行き成りのことで慌てる
（ここで死人を出して風紀を乱されては困る）
「お、おい海斗！」
海斗はそう考え、一夏の前に立ち（そのときに一夏が何か言っていたが聞いてない）ＩＳを展開しようとしたら何かが割って入ってきた
ズドドドオンッ！
「……ラウラ？」
割って入ってきたのはラウラだった
専用機＞シュヴァルツェア・レーゲン＜を纏いＡＩＣで衝撃砲を相殺した

「ラウラ、ＩＳ直ったんだ」

「……コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

「まあ、助かった。――さて、凰　鈴音学園内での無許可ＩＳ展開及び学園の器物破損かみ――っ！？」

かみ殺すと言おうとするが、ラウラに引き寄せられ唇を合わせた

「……」

海斗はやられた瞬間は驚いたが、その後は特に何の反応も示さなかった

クラスの全員は口をあんぐりと開けている

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「……は？」

海斗訳が分からなかった

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故にお前を私の嫁にする」

「はぁ～……」

ため息を吐くことしか出来ない海斗だが刹那、目の前に一本の短剣が通る

「か～い～と～？」

「危ないよ」

完璧に怒ってる涼子に対して海斗は当たり前のことを言う

「一度逝ってください」

今度は短剣の刃をこちらに向け向かってくる

「なっ！？」

本気でかかってきた涼子を避け、窓からの逃亡をはかるが

シュッ！

カキンッ！

何かが飛んできてトンファーで弾く、飛んできたものを見るとナイフだった

「命中率が上がったね。今の当たれば大怪我間違いなしだよ」

ナイフを投げた相手をみる

「大丈夫です。海斗様ならかわす又は防ぐと分かってましたから」

恵美は笑顔のまま海斗に言い張る

「落ち着け……って言っても聞く耳持たないか」

「よくお分かりですね」

恵美はナイフを三本だし投げる
海斗はそれを弾き、恵美に体を向けたまま後ろに下がるが

ぽすっ
誰かとぶつかり後ろを見る

「にこっ」

「……？」

笑顔のシャルロットがいた
海斗はシャルロットの笑顔が分からず首を傾げる

「海斗って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。びっくりしたな」

ぷちっ
何かが切れる音がした

「ふぅん、あれを僕がやったって言うんだ。君たちの目は節穴だね」

海斗が切れた

「君たち全員かみ殺す！」

海斗は涼子、恵美、シャルロットを相手にして勝った

「なにをしている」

バシーン！
海斗の頭が何かを襲う
「……」
不機嫌な海斗が見ると後ろには織斑先生と――
「海斗殿、おはようございます」
――バジルがいた
「え？」
「「「「「え？」」」」」
クラスのみんなが固まった
「あ、忘れてました。もう一人の転校生のバジル君です」
「バジルと申します。皆さんよろしくお願いします」
「「「「「えーーーーー！！！！！」」」」」
波乱の予感……
現在学生寮
シャルロットの部屋割りが決まらず、今日で最後の夜になった

因みにバジルは一夏と同室になった

「海斗って、バジル君と仲良いの？」

シャルロットがバジルとの関係について尋ねてくる

「親戚みたいな感じ」

シャルロットは目を覚ました後、涼子、恵美と共に謝りにきたので怒ることはなくなった

「でも海斗バジル君が来て驚いてたよね」

「何の連絡もないからな……」

バジルがＩＳ学園にきた理由は『海斗殿が暴れないために監視するため』と言ったら何故か許可が下りた。因みにバジルはＩＳを動かせません

「まあ、理由は気にくわないけどね。それを許した先生方も」

「あはは……。でもそしたら、一緒の部屋の方がよかったんじゃない？」

「大丈夫だろ。四六時中監視ってわけにもいかないし。第一シャルロットがいるんだから、俺と同室は無理だろ」

「そうだね」

その後も暫く雑談し、時間がある程度経ち布団に入り眠りについ

た

波乱の予感（後書き）

すいませんでしたーーーーーー！！！！
言い訳にしかなりませんが、バジルは一応重要キャラなんです
こんなのでもまた次を見てください

アンケートと感想もお願いします

注※アンケートでやっぱりこっちと変えたい人がいれば変えてくださっても構いません

誘い（前書き）

話がおかしくなってるような気がする……

誘い

第２６話　誘い

～～シャルロットｓｉｄｅ～～

「はぁ～……」

放課後の廊下、シャルロットが手に今月の学校行事・臨海学校について書かれたプリントを持ちため息を吐く

「何でこんなことやってんだろ、僕」

シャルロットは歩みを止め窓の外から見える夕日を見ながら呟く

夕日を見ていたら、手の上にあった重みが軽くなる。不思議に思い横を見ると

「……海斗？」

「何？」

海斗が運んでいたプリントの半分を受け取っていた

「どうしたの？」

「手伝ってる」

「いや、そうじゃなくて。街に出かけてたんじゃ……」

「何でだろうね。俺も分からないけど確かなのは、シャルロット

がいないから暇だった」

何の躊躇もなくそんな事を言う海斗

「僕がいないから？」

「お気に入りが近くにいないと落ち着かないんだ」

「お、お気に入り……／／／」

シャルロットは自分の顔が真っ赤になってるのに気づく

「これからは俺の側にいてもらうよ。永遠にね……」

海斗がシャルロットに近づく

「ん……」

目が覚めた

「――あ、れ？」

ぼーっとした頭で状況を確認する。

場所はＩＳ学園一年生寮の自室。時刻は早朝六時半

「……夢…かぁ……。海斗があんな風に言うはず無いもんね」

はぁ～、とため息を吐きもう一度夢の内容を頭の中で再生する

「……／／／」

シャルロットは顔が真っ赤になる

（が、学校の廊下で、なんて……）

胸に手を当てると、ドキドキと早鐘を打っているのが分かった

（ぼ、僕は何を考えてるんだろうね……）

先月の学年別トーナメント以降、本来の性別に戻ったシャルロット・デュノアは、海斗とは別の部屋になっている

偶にこんな夢を見ては、隣のベッドに海斗の姿を求めて視線をやる

「あれ？」

隣のベッドにルームメイトの姿がない

起きてどこかに行ったのではなく、最初からそのベッドは使った形跡がない

「……まあ、いいや」

ルームメイトよりか、今は夢の続きと考え、今すぐ眠りにつけば、続きがみれるかもしれないと考え眠りについた

～～海斗ｓｉｄｅ～～

「……！」

「……」

海斗が寝てるとき、すぐ近くから何か言い争ってる声が聞こえる
海斗は眠りを妨げられるのが嫌いなのですぐに目を覚ます

「海斗様と寝るなんて……海斗様は眠りを妨げられるのが嫌いなんですよ」

「だが、気持ちよさそうに寝ていたぞ？」

「目覚めは最悪だけどね」

二人の肩がビクッと跳ね上がり、声をした方を向く
……そこにはトンファーを装備した、如何にも不機嫌な海斗がいた

「君たち僕の眠りを妨げるとどうなるか分かってる？」

「「……」」

恵美とラウラは冷や汗を流しまくりさらに恐怖で震えていた

「かみ殺す！」

海斗のトンファーが二人を襲い、抵抗できずにやられた

「さて、話を聞こうか」

幾分かストレスを発散した海斗はここにいる理由を聞く

「私はただ一緒に寝ていただけだ」

その時に恵美が何か言おうとしたが、後ろから拘束するとすぐに大人しくなる

「何で何も着てないの？」

「夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたからだ」

「そう。でもこれからはそう言うことをしてはいけないよ」

「？何故だ？」

「ラウラが女だから、とだけ言っとくよ」

海斗は恵美を離し

「恵美は何でこの部屋に？」

ここにいる理由を聞く

「朝食を誘いに来ました」

「何で？」

「海斗様は最近になってまた食事を抜かれてるんじゃないかと思いましたから」

海斗は否定しないと言うより出来ないでいた。バジルが転校して以来電話でＩＳ学園に入れた理由や、ＶＴシステムを使った会社はどうなったかなど、色々やっていて食事を取っていなかった

因みにＶＴシステムを使った会社は何故か消滅していたと連絡があった

「分かったよ。ラウラは部屋に戻って着替えて来なよ」
海斗はクローゼットから服を取りだしラウラに渡す
ラウラは受け取り服を着る

「海斗、また後でな」
「ああ、分かった」

軽く挨拶し、ラウラは部屋から出た

「ふぅ～、なんか朝から疲れた」

「すいません。朝から……」

「もういいよ。……あ、恵美」

「何ですか？」

「おはよう」

「おはようございます！海斗様！」

海斗が朝の挨拶をし、恵美は久し振りにおはようと言う言葉を聞いて嬉しかった

「あの、海斗様」

「何？」

「ラウラちゃんの、えっと、その、裸を見てどう思いました？」

「よくやるよね、あんな事。彼女もだいぶ変わってきた証拠だね」

海斗は部屋の扉を見ながら言った

「そう言われてみればそうですよね。あの時のラウラちゃんがこんな事をするなんて思いもしませんでした」

恵美も同意するが

「でも、キスされたのに何で抵抗されなかったんですか？」

「さあ？初めてじゃないからかな？」

恵美はそのとき絶望した。海斗が他の人としてたんだと思ったから。だが、ふと気がつく自分もしたではないかと

「もしかして、海斗様の初めては…私ですか？」

「うん、そうだよ。でも事故だからと言っても、恵美の初めてを奪ったのは悪かった」

何ともないように言う

「いえ、気にしないでください。それを切っ掛けで海斗様の女装姿が見れるようになったんですから」

「それもそうだね。でも、女装はしないよ」

「いつかしてもらいます」

その後海斗は着替え終わり、ラウラと合流し、食堂で朝食を取り、教室に向かった

シャルロットが遅刻で教室に入ってきた、しかもＩＳの無許可部分展開と言う規律違反を犯して珍しく思った

時間は過ぎ放課後

現在教室にはシャルロットと海斗が掃除をしている

ＩＳ学園は、掃除など生徒にさせないのである。理由は『わずかな時間もＩＳ教育に回した方がいい』とのことだからだ

教室の掃除は生徒への軽い処分として扱われている

「ごめんね、海斗。手伝わせちゃって」

「いや、いいよ」

暫く、なにも喋らずに掃除をしていたら

「ん、んん～……」

シャルロットが机を運ぶのに苦労していた

「俺がやろうか？」

「へ、平気だよ。一応これでも専用機持ちなんだし、体力は人並

みに――」

言葉を続けたシャルロットが重量に負けて足を滑らせる。海斗はとっさに後ろから支えた

「おっと、だから言ったでしょ？こうなることは分かってるんだから。代わって」

「う、うん……。あ、ありがとう……」

海斗はすぐにシャルロットから離れる

「……別によかったのに……」

「よくないでしょ、ケガしたらどうするの？」

「あ、うん、そうだよね……」

シャルロットは支えていた体勢のことを言っていたのだが、海斗は机運びだと勘違いしていた
その後は特に喋らずに掃除をし、早く終わる

「まあ、こんなものかな」

「そうだね」

海斗とシャルロットは掃除が終わったかを確認する

「シャルロット、行くよ」

「うん、ちょっと待って」

職員室で報告するために、海斗は鞄を持ち教室を出る、シャルロットも鞄を慌てて持ち教室を出る
担任の織斑先生に掃除の終わりを告げ、廊下を歩いている
その時にふとあることに気づき海斗に尋ねる

「海斗は臨海学校どうするの？」

「どうって？」

「水着とかだよ」

「必要ない」

「いやいや、必要だよ！？海にまで行って何するの！？」

「主に修行」

「海にまで来て！？」

「え？普通でしょ？海に来たら修行常識だよ？」

「誰が海斗にこんな常識教えたの？」

「俺の家庭教師。いや～あれは辛かった。海に投げ込まれ、水中で酸素ボンベなしで鮫と戦ったんだから」

「……」

「どうした？」

「もしそんな目にあったら僕海に行けないかも」

「そうか？俺は平気だけど……」

「海斗の環境適応能力が高すぎるんだよ……」

シャルロットは呆れたように言う

「でもどこかにいい場所あるかな？」

「海斗、泳ごうよ」

「そうだな、泳ぐのも修行の一つかな。そしたら水着買わないとだな。あのときの水着は鮫に食いちぎられたし」

「なら、今度の日曜日に僕と、その、買い物に行かない？」

「そうだな。そうするか」

普通なら突っ込むであろう場所をシャルロットは海斗にとってはこれが普通なんだな、と結論づけ買い物に誘うことを優先した。海斗も断る理由がないので了承する

誘い（後書き）

なんか最近一夏たちの出番が少なくなってる気が……出番増やさなきゃいけないよね

さて次回は海斗の兄貴分（？）がやってきます

感想をくれるとうれしいです

アンケートの方もお願いします
それと属性は書かなくても構わなくなりました
悩んでた人たちにはお詫びします

次回もよろしくお願いします

買い物と兄貴分（前書き）

遅くなってすいません

書くの忘れてましたすいません

買い物と兄貴分

第27話　買い物と兄貴分

週末の日曜　天気は快晴、買い物日和なのだが……

「……」

「だから悪かった」

シャルロットが不機嫌な顔でこちらを見る

「……」

何も言わずこちらをずっと睨みつける

「だからあれは誤解なんだって」

「……信じられない」

やっと言葉を発するが信じてもらえない

「……海斗は僕より他の女性が良いんだね」

(ああ、もうこいつは)

「あのな、それだったら今俺はシャルロットと出掛けてないぞ?」

「……でも……「シャルロット!」……!!」

「行くよ」

海斗はシャルロットが何か言おうとしたが遮り、無理矢理手を取りショッピングモールへと足を運ぶ

「ちょっ、海斗！」

「いいから、行くよ。わざわざ恵美達の誘いも断ったんだから」

「え、な、何で？」

「あの時『僕と』って言ったでしょ。だからだよ」

「海斗、そんな事まで覚えてたの？」

「当たり前でしょ。機嫌直さないと俺は帰るよ」

「……」

ぎゅっと、シャルロットの手を握る力が強くなったのを感じ、海斗は歩くスピードを少し落とす

暫くして店の中に入る

「か、海斗」

「何？」

「えっと、さっきはごめんね。行き成り機嫌悪くして」

「もう気にしてないよ。俺自身にも非があったんだし。それより買うもの買うよ」

「うん。……ありがとう」

海斗は最後の言葉が聞こえたが、聞こえていないふりをして歩を進める

「ここが水着売場か……」

二階に上がり、水着売場までやって来た

「ここからは別行動だね。俺は向こうに行ってるから」

「あ……」

海斗が手を離す、シャルロットは残念そうな顔をしていた

「どうしたの？」

「ううん。何でもないよ」

「そう？なら後で」

「うん、分かった」

頷いてシャルロットは女性側の水着売場に向かう。海斗は男性側の水着売場に向かう

（水着ねぇ……。バジルは水着持ってるのか？）

海斗は黒の水着を買い、分かれた場所に向かう

「決まったの？」

「ううん。ちょっとね、海斗に選んで欲しいなぁって思って」

「別にいいよ」

「ありがとう」

女性用の水着売場に足を踏み入れる

日曜日なので当然女性客も多く、海斗は注目を集めていた

「そこのあなた」

「水着の候補はあるの？」

「え、う、うん。あるよ」

海斗は自分に話しかけられてるのに気づいてるが、いつかのラウラと同じ様に無視をする

「ちょっと、聞いてるの？」

「俺衣服とかよくわからないから、参考にならないかもしれないよ？」

「大丈夫だよ。似合うかどうか言ってくれれば」

「分かった」

女性客がまだ話しかけてくるが、それでも無視をし続ける。シャルロットも海斗にあわせて無視をする

「あなた自分の立場が分かっていないようね。警備員呼ぶわよ」

女性客が警備員を呼ぶ、と脅してきたが、海斗は平然としてあることを言う

「そしたら君を社会的に抹殺する」

「あなたにそんな事が出来るのかしら？」

「出来ないと思ってるならやってあげるよ。……君の黒歴史を世の中にばらまいてあげる」

「ふん。そんな脅し通用するもんですか」

女性客はそう言って逃げ出した

「ごめんね海斗。嫌な思いさせちゃって」

「構わないよ。彼女は一週間以内に社会から消えるし」

「海斗本気でそんな事できるの？」

「出来ないと思ってる？」

「……海斗ならやりそう」

シャルロットは海斗を見ながらそう言った

「それで、どれにしたの？」

「えっと、それじゃあ見てくれる？」

「ああ。……！」

海斗は遠くの方で見知った顔があったので驚く、シャルロットはそんな事を知らずに試着室の中に入る

シャルロットは海斗を試着室の中に引っ張り込もうと考えたが、かみ殺されると思いやめた

シャルロットが試着室の中に入り暫くしたら、水着姿のシャルロットが出てきた

「ど、どう？変じゃない……？」

「悪くないよ。似合ってる」

「本当！じゃあこれにするね！」

嬉しそうな顔をして試着室のカーテンを閉める

海斗は後ろを向き

「そこにいるのは分かってるよ。出てきたら」

物陰から恵美と涼子が姿を現す

「何時から気づいてました？」

「随分前から。もう一人いなかったか？」

「あれ？そう言えばラウラちゃんがいませんね」

「途中ではぐれてしまったんでしょうか？」

二人は周りを見渡すがラウラらしき人物はいなかった

試着室のカーテンが開き、シャルロットが出てくる

「お待たせ海……斗」

「シャルロット、どうした？」

「な、何で、恵美と涼子がいるの？」

シャルロットが二人がいるのに驚く

「そりゃずっと後を付けてきたからだよ」

「気付かなかった……」

（あぁ～…せっかく海斗と二人きりで出掛けられたのに）

シャルロットは落ち込み始めた

「シャルロット早く会計するよ。恵美と涼子はどうするの？」

「私達はすでに買ってありますよ」

手にぶら下げていた袋を掲げる

「準備が良いな。それじゃ、この後時間もあるしどこか行くか？」

「いいですよ」

「私も構いません」

「僕もいいよ」

みんなでどこに行こうか考えながらレジに向かってると

「おわぁっ！」

誰かが転んだのでそっちを見る

「「あ……」」

海斗と恵美が声を合わせる

シャルロットと涼子は転んだ人物に近づく

「大丈夫ですか？」

「いてて……。ああ、大丈夫だ」

「相変わらずだな、ディーノ」

海斗は転んだ人物の名前を呼ぶ

「ん？海斗か！久しぶりだな」

「私もいますよ。ディーノさん」
「恵美も久しぶりだな」
「えっと、海斗この人は？」
シャルロットが訊いてくる
「コイツはディーノ。俺の従兄弟だ。それでこっちがＩＳ学園で同じクラスの柊　涼子とシャルロット・デュノアだ」」
「ディーノだ。よろしくな」
「柊　涼子です。よろしくお願いします」
「シャルロット・デュノアです。よろしくお願いします」
三人が挨拶を交わす
海斗は先ほどから疑問に思ったことを訊く
「なあディーノ、部下たちはどうした？」
「ん？ああ、途中ではぐれちまった」
「携帯は？」
「あ～……。どっかに落としたみたいだな」
「……ドジ。はい、いくら何でも携帯番号は忘れてないでしょ」

そう言って携帯をディーノに渡す

「ああ、悪いな」

携帯を受け取ると電話をかけ始める
その間に海斗たちは会計を済ませる
会計を済ませると、ディーノがこっちに来る

「サンキュー、海斗。助かった」

「それは言いんだけど、何でここにいるんだ?」

「ちょっと、用事があってな。海斗たちは何だ?」

「俺たちは臨海学校の準備で来たんだよ。ディーノはこれからどうするんだ?」

「ロマーリオ達と一階の入り口近くで待ち合わせるつもりだ。お前たちはどうするんだ?」

「俺達はどっかで何か食べてくつもりだけど……」

「何だったら俺たちと食うか?飯もまだだし」

ディーノが食事の誘いをしてくる。一人で決めるわけにも行かないので皆に訊く

「どうする?」

「私は別に構いませんよ。ディーノさんに会うのも久しぶりです

から」

「私も構いません。みんなで食べた方が楽しいですし」

「僕もいいよ。海斗の知人なら優しいから」

みんなが了承する

「だってよディーノ、みんないいみたいだ」

「よし。なら、さっさとロマーリオ達と合流しないとな」

そう言って一階を目指す
みんなも後ろからついてくる

その後、ロマーリオ達と合流し、昼食を食べ終わりディーノ達と別れた

翌日

「みなさんにお知らせです。今日から新任教師がこのクラスに来ます」

「「「「「「え？」」」」」」

クラス一同は同じ反応をした。何せ、今まで転校生は来ても新しい先生が来るなんて誰も思わなかったから。さらに二人も先生がいるのに一組に新たな先生が来ると知れば驚きも隠せない

「では、入ってきてください」

教室のドアが開き一人の男性が入ってくる

「今日からこのクラスの教師を勤めるディーノだ。みんなよろしくな」

「「「「「えーーーーーーー!!!!!」」」」」

クラス全員（バジル以外）はかなり驚いている

「お前は静かにしろ」

織斑先生の一言で全員黙り込む

一通り自己紹介してＳＨＲが終わり織斑先生、山田先生、ディーノが教室から出ていく

海斗はバジルに近づき

「なあバジルは知ってたのか？ディーノがＩＳ学園に来るの」

「はい、海斗殿には言わなくてよい、と仰ってました」

「あいつの用事はこれのことだったのか」

「驚きですよね、ディーノさんが来るなんて」

「本当に」

このやり取りが終わった瞬間に女子が周りを囲む

「黒羽君たちはあの先生のこと知ってるの？」

「どんな関係？」

「俺と恵美から見れば従兄弟だな」

「拙者から見ればディーノ殿は兄です」

「あの先生は臨海学校に来るの？」

「たぶん行くだろうな」

その後も女子に質問され続けチャイムが鳴りやっと解放された

放課後

「ディーノ俺訊いてないけど、ここに来るの」

「昨日言うの忘れてた」

「忘れるなよ。臨海学校には来るのか？」

「行くぜ。海斗の面倒を見るんだしな」

「は？」

海斗は訳が分からなかった

「海斗を止めに来た、って言ったら快く入れさせてくれたぜ。海

斗は何やらかしたんだ？」

「特にこれと言ったものはないけど」

海斗は思い返しても変なことはしてないと思った

「ま、別にいいけどな」

「バジルをここに入れた理由は？」

「ＩＳ学園を内側から調査するためだ」

「何で？」

「もし何があってもすぐに対処出来るし、海斗一人だと無茶するだろ」

「悪かったな」

そう言って海斗は学生寮に、ディーノは教師寮へと別れた

買い物と兄貴分（後書き）

改めて遅くなってすいません

ディーノを新任教師としてＩＳ学園に入れました
ディーノは十年後という設定です

アンケートでみなさんの意見をください
感想も書いてくれるとありがたいです

次回の更新も楽しみにしてください

臨海学校　午前（前書き）

今回は臨海学校の話です

臨海学校　午前

第２８話　臨海学校　午前

「海っ！見えたぁっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げる
臨海学校初日、天候にも恵まれて無事快晴。陽光を反射する海面は穏やかで、心地良さそうな潮風にゆっくりと揺らいでいた

「わ～～。海、綺麗ですね」

隣に座っている涼子が目を輝かせながら窓から見える海を見ている

「涼子は海初めて？」

「はいっ！初めて来ましたけど、思ったよりも綺麗ですね」

「涼子ちゃん、子供みたいですね」

後ろの席から恵美が顔を出して言う

「いいんじゃないかな。少しぐらいはしゃいでも」
恵美の隣に座ってるシャルロットが言ってくる

「はしゃぐのはいいけど、羽目を外さないようにね」

「はいっ！」

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

織斑先生の言葉で全員がさっとそれに従う。

程なくして目的地に到着した

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「「「よろしくお願いしまーす」」」」」

織斑先生の言葉の後、全員で挨拶をする。

この旅館には毎年お世話になっているらしく、女将さんが丁寧にお辞儀した

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

三十代くらいで、しっかりとした大人の雰囲気を漂わせている。

「あら、こちらが噂の……？」

女将さんが海斗、一夏、バジル、ディーノを見て織斑先生に尋ねる

「ええ、まあ。今年は男子が三人に、男性教師が一人で浴場分けが難しくなってしまって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子たちじゃありませんか。

しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「黒羽　海斗です。よろしくお願いします」

「バジルと申します。短い間お世話になります」

「ディーノです。よろしくお願いします」

「お、織斑　一夏です。よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

そう言って女将さんはまた丁寧なお辞儀をする

「問題児ばかりでご迷惑をおかけします」

「あらあら。織斑先生ったら、生徒さんには厳しいですね」

「いつも手を焼かされていますので」

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女子一同は、はーいと返事をするとすぐさま旅館の中へと向かう。

とりあえず荷物を置いて、そこからなんだろう

「なあディーノ」

「何だ？」

「俺たちの部屋はどこなんだ？何も訊いてないけど」

「あー、お前等はみんなとは別の部屋だ」

「織斑、黒羽、バジル、お前等の部屋はこっちだ。ついてこい」

ディーノから説明を受けてると、織斑先生から呼びかけが来る

「えーっと、織斑先生。俺たちの部屋ってどこになるんでしょうか？」

「黙ってついてこい」

一夏はそれに大人しく従い黙った

暫く歩いてると

「ここだ」

そう言って一つの部屋の前に立ち止まる

「最初は女子と同じ棟でもよかったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押し掛けるだろうと言うことになってだな」

はぁ、と織斑先生がため息をつく

「結果、教員室の隣にしたという訳だ」

「ディーノはどっちなんですか？」

海斗は織斑先生に尋ねる

「無論、この部屋だ。教員室も女だけだからな」

部屋の中に入ると、広々とした間取りになっていて、外側の壁が一面窓になっている。そこからは海もばっちり見渡せる

「おおー、すげー」

一夏が部屋の中を歩き回っている

「ああそうだ、大浴場も使えるが男の俺たちはは時間交代だ。本来なら男女別になっているんだが、一学年全員だからな。俺達のために女子が窮屈するのはおかしいということだ。だから、一部の時間帯使用可能だとよ」

「わかりました」

ディーノが説明をして、一夏が返事をする

「ここからは自由時間だ。遊んできたらどうだ?」

「ディーノ先生は行かないんですか?」

「俺は他の先生との連絡なり確認と色々とあるからな」

「ではディーノ殿は来ないのですか?」

「用が終われば、泳ぐくらいはするさ」

そう言ってディーノは部屋から出た。行くところは多分教員室だろう

「それじゃ俺たちも行こうぜ」

「悪いけど一夏先に行っててくれ」

「何でだ？」

「バジルにちょっと確認したいことがあるから」

「わかった、先に行って待ってるぜ」

一夏が部屋を出る

「さてバジル、お前水着はなんだ？」

「拙者はこれです」

バジルがバックから出したのは意外にも普通の海パンだった

「よかった」

「何がですか？」

「いや、何でもない。それじゃ行くか？」

「参りましょう」

海斗とバジルが部屋を出たとき

ドカーーーン

何かの音がしたので走り出す

暫くすると一夏とセシリア・オルコットの姿が見えた

「一夏、何してんの？」

「うおっ！海斗か、ビックリさせるなよ」

「これは何？」

海斗が近くにあるニンジンらしきものを見る

「あー、これはだな……」

「成る程ね、どうやら不法侵入者が紛れてようだ。なら、探し出して咬み殺そう」

海斗はニヤリと笑いトンファーを出す

「ちょっと待て海斗！」

「何？」

「えっと、これは千冬ね……織斑先生の知り合いが来てるんだ」

「だからと言って、勝手に入ってくるなら咬み殺さないといけな

いでしょ？」

「織斑先生が許可してるからいいんじゃないか」

「なら、これは破壊してもいいよね」

海斗はニンジンらしきものの側によりトンファーを構える

「海斗、これは学園の教師に任せた方がいいんじゃないか」

「やれるなら、今やった方がいいでしょ」

「もし誰かに見られたら、海斗の立場が危うくなると思うけど」

海斗は暫く思案して、トンファーをしまう

「まあ、今回はいいや。二度目は必ず破壊する」

そう言って海斗は別館の方に向かった

「それでは織斑殿、オルコット殿、拙者も行きますので、また後で落ち合いましょう」

「あ、ああ……」

「わかりましたわ……」

一夏とセシリアは別館の方をただ何となく見ていた

更衣室で着替えて浜辺に出る。一夏とは着替えてる最中に入ってきたので、今は一緒にいる

「バジル、準備運動」

「わかりました」

バジルは海斗の考えを察して、準備運動を始める
同じく海斗も準備運動をして海に向かう

「一夏」

「何だ？」

「スタートの合図を頼む」

「？ああ、わかった」

一夏がスタートの合図を始める

「それじゃ位置について」

海斗とバジルは位置に着く

「なになに？黒羽君とバジル君が勝負するの？」

「黒羽君頑張って～！」

「負けるなバジル君～！」

後ろから女子の声援が来るが気にしない

「よーい」

海斗とバジルがスタートの体制に入り

「ドン！」

ほぼ同時に泳ぎ出す

結果だけ言うと海斗が僅差で勝った

「ハァハァ、海斗殿速いですね」

「ハァハァ、バジルこそ前よりかスピード上がってるよ」

「あ、ありがとう、ございます」

「ふふっ、二人ともお疲れさまです」

恵美がこちらに近づいてくる、その後ろには涼子もいた

「海斗とバジル君速いですね。驚きました」

「鍛えてるからな。（……鍛え方は普通じゃないけど）」

「？どうしました？」

「いやなんでもない」

「？」

涼子は頭に？マークを浮かべてる。恵美は大体察しがついているようで苦笑いしていた

「あ、海斗。見つけた」

シャルロットの声がしたのでそちらを振り向く

「シャルロットとラウラ……なのか？」

「そうだよ。ほら、出て来なってば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

やっぱりラウラか、と海斗は確信して同時に何してんだ？、と疑問が浮かび上がる

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから、海斗に見てもらわないと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあってだな……」

「もー。そんな事言ってさっきから全然出てこないじゃない。一応僕も手伝ったんだし、見る権利はあると思うけどなぁ」

海斗はここまで来て何かは推測だがわかった

（水着を見せるのが恥ずかしいのか？）

「うーん、ラウラが出てこないんなら僕も海斗と遊びに行こうかなぁ」

「な、何？」

「うん、そうしよ。海斗、行こっ」

シャルロットは手を取り、波打ち際まで向かう

「ま、待てっ。わ、私も行こう」

「その格好のまんまで？」

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

バスタオルをかなぐり捨て、水着姿のラウラが陽光の下に現れる

「わ、笑いたければ笑うがいい……！」

黒の水着でしかもレースをふんだんにあしらったものだった。さらにいつも飾り気のない伸ばしたままの髪は左右で一対のアップテールになっている

「おかしなところなんてないよね、海斗？」

「うん、いいんじゃないか。似合ってるよ」

「なっ……！」

ラウラは褒められると思ってなかったみたいで、一瞬たじろいだあとカーッと赤面した

「しゃ、社交辞令ならいらん……」

「お世辞じゃないよ。可愛いのは本当だし」

「か、かわいっ……！？」

ラウラはさっきよりか顔を赤くした

「ね、ねえ、海斗僕のも似合うかな？」

「ああ、似合ってるよ」

「ほ、本当？ありがとう」

シャルロットも少し顔を赤くする

「海斗様～～」

ドンッと恵美が後ろから抱きついてくる

「だから毎回危ないから後ろから抱きつくのは止めろ」

「別にいいじゃないですか」

海斗はため息をつく

「それより、向こうで一夏君たちがビーチバレーやるらしいですよ」

「少し見てこうかな」

海斗は一夏たちがいるところを見る

「海斗殿も一緒にどうですか？」

バジルからやらないか声がかかる

「どうする？」

「僕は別にいいよ」

「ラウラは？」

ラウラに訊くために振り向いて目を合わせた瞬間、顔を赤くして脱兎の如く逃げ出した

「おい、ラウラ！戻ってこい！」

戻ってくるように声をかけたが、それよりも早く別館へと消えていった

シャルロットと恵美はぽかんとしていたが海斗は

「速いな、今度競争してみるか」

などとどうでもいいことを考えていた

「海斗殿どうするんですか？」

「俺は見てるよ。シャルロット行ってくれば」

「うん、わかった」

シャルロットは一夏たちの所へ走り出した

「恵美は行かないの？」

「私も見てるだけでいいです」

「ならいいけど」

一夏たちのビーチバレーを観戦してたら

「海斗、恵美お前等何してんだ？」

後ろからディーノが声をかけてきた

「一夏君たちの勝負を観戦してるだけですよ」

「面白いのか？」

「普通」

「普通です」

ディーノに言葉を返したとき女子が騒ぎ出す

「ディーノ先生格好いい！」

「織斑先生もきれ～」

「かっこいい～！」

「海斗たちは昼飯食べてきたらどうだ？」

女子の言葉を聞き流し、ディーノの話を聞く

「そうですね。海斗様行きましょう」

「いいよ。行こうか」

「涼子ちゃんもお昼行きましょう」

恵美が涼子に昼一緒にどうか訊く

「はい。わかりました」

ビーチバレーを違う場所で観戦してた涼子がこちらに駆け寄る

「では、行きましょうか」

「ん」

「はい」

海斗達は昼を食べに行く

臨海学校　午前（後書き）

どうでした？
今回は初日は午前午後に分けて書いてます

アンケートはもうすぐ締め切ります。まだ投票してない方は『悪い夢と知らせ』の後書きを見てください

感想もお待ちしてます

臨海学校　午後（前書き）

臨海学校午後編です

ちょっと遊びであのゲームを出してみました

臨海学校　午後

第２９話　臨海学校　午後

時間が過ぎ、現在７：３０
大広間三つを繋げた大宴会場で、夕食を取っていた

「海斗様」

「何？」

静かに食事をしていたら左隣に座っている恵美が話しかけてきた

「この後合宿恒例のアレやるんですか？」

「ん～、そうだな。ディーノとバジルを入れてやるか」

「アレって何ですか？」

海斗はディーノ、バジルに後で声をかけなきゃな、と考えていたら右隣に座っている涼子が話しかけてくる

「俺たちがいつも外泊するときに必ずやるんだけど。涼子もやるか？」

「いいんですか？」

「途中で逃げ出せないけど、それでもいい？」

「？いいですけど……」

涼子は逃げ出す、と言うのがあまりわかってなく了承した。
シャルロットとラウラも誘おうかな、と考えてると周りの女子が騒ぎ出した

「……うるさい」

瞬間小さく呟いた海斗の言葉を聞き恵美は顔を青ざめる

「恵美どうしたの？顔、真っ青だよ」

恵美の左隣に座るシャルロットが恵美の顔色が悪いことを指摘する

「だ、大丈夫、ですよ」

シャルロットに大丈夫だと伝える、その時救世主が舞い降りた

「お前たちは静かに食事することができんのか」

織斑先生が来た、恵美は今の瞬間織斑先生を神だと思った
そして他の女子は

「お、織斑先生……」

「どうにも、体力があり余っているようだな。よかろう。それでは今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな。五十キロもあれば十分だろう」

「いえいえ！とんでもないです！大人しく食事をします！」

慌てて各自の席に戻っていく。それを確認した後、織斑先生は一夏の方をみた

「織斑、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「わ、わかりました」

そして織斑先生は部屋を出ていった

その後は特に問題もなく静かに食事をしていた

食後に男たちは温泉に入った後、部屋に戻る途中で恵美と涼子と合流し、一緒に部屋まで行く。部屋の中に入ると何故か織斑先生がいた

その時恵美から「神様……」と小さく呟いていたが意味が分からずスルーした

「ん？女を連れ込むとはな、よくやるもんだ」

「はい。連れ込むというか、遊びに来ました」

「何で織斑先生がここに？」

「俺が呼んだんだ」

「ふーん」

特に興味もなく部屋に置いてある机に座る。その後にディーノ、

恵美、バジル、涼子の順番に座る

「一夏、この机暫く借りるよ」

「ああ、いいぜ。さて、千冬姉」

一夏から了承を得る、そして机の上にトランプを置く

「それじゃ始めよう」

「待て海斗。今回は涼子もいるんだ、ルール説明した方がいいだろ」

「そうだね。ルールを説明するよ」

「あ、はい」

「今回のゲームはボンゴレ式トランプゲームだ。やる種目は……ババ抜きだ」

種目を発表したとき涼子以外の三人が驚く

「ちょっと待て海斗！涼子は初心者何だぞ、下手すれば」

「ディーノさん、初心者だからって優しくしてはいけません」

「涼子殿、気をつけてください」

ディーノの反論に恵美が待ったをかけ、バジルは涼子に声援を送る

「まだルール説明は終わってない」
海斗が言うと静かになる
「ルールは普通のババ抜きと同じだが、カードが揃わなければペナルティーを受ける。自分の直感と相手を騙す心理作戦がものをいうから」
「そのペナルティーというのは？」
「派手にはできないから易しくしたぞ。それじゃカードを配るよ」
海斗がシャッフルして皆にカードを配る
配られたカードを手に取り、揃ってるやつを捨てる
「逝くよ」
その言葉に皆が頷く
「スタート！」
枚数が一番多いバジルが涼子の所からカードを一枚引く
「やった！」
バジルは揃ったカードを机に捨てる
「次は私ですね」
涼子が海斗のところからカードを引く

そして恐る恐るカードを確認した

「ふぅ～……」

揃っていたようでカードを机に捨てる

海斗はディーノからカードを一枚引く

（よしっ！）

海斗は心の中でガッツポーズをし、カードを捨てる

ディーノが恵美からカードを一枚引く

「げっ！揃わなかった」

「ディーノ、ペナルティー」

そしてディーノの頭上からタライが落ちてきた

「って～～～！」

「タライ？」

涼子はなぜタライ？と思っている

「これが今回のペナルティー、タライだ」

織斑先生と一夏がこちらを見たが気にしなくていいと、バジルが伝えていた

そしてディーノを後目に恵美はバジルからカードを引く

「……」

恵美が沈黙する

「アウトだね」

コクと頷き頭上からタライが落ちてくる

「あう～～～」

恵美が涙目になる

因みにタライは吊されているので落ちてきた後すぐに天井に戻る

そして暫く地獄のババ抜きでみんなが疲労困憊していると

「海斗どうした？」

海斗は席を立ち一本の紐を引く

そして廊下からガンッ！ガンッ！ガンッ！と音が鳴ると同時に

「「「いった～～～～！！！！！」」」

と声がする

「何してんの」

ドアを開けると頭を押さえている、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音がいた

「な、何でタライが……」

「設置した」

「どこから降ってきたのだ……」

「真上の天井」

「何でわたくしがこんな目に」

「盗み聞きしてたから」

三人の疑問に答えると、織斑先生が後ろからやってきて

「何をしているか、馬鹿者どもが」

「は、はは……」

「こ、こんばんは、織斑先生……」

「さ……さようなら、織斑先生っ！！」

三人が脱兎の如く逃げ出そうとするが、すぐに捕まった。鳳鈴音と篠ノ之箒は首根っこを取られ、セシリア・オルコットは浴衣の裾を踏まれて終了

「盗み聞きは感心しないが、ちょうどいい。入っていけ」

「「「えっ？」」」

予想外の言葉に目を丸くする三人

「ああ、そうだ。他の二人――ボーデヴィッヒとデュノアも呼んでこい」

「は、はいっ！」

首根っこを開放された凰鈴音と篠ノ之箒は駆け足で呼びにいく

海斗は机に戻り地獄のババ抜きを再開する

「さて、続きを始めるよ」

疲れてるが続ける気力は残っていた

現在の状況はディーノ、恵美、バジルが上がり、海斗二枚、涼子一枚の勝負が続いている

「こ、今度こそ」

涼子は海斗から二枚のうち一枚を引く。その時に海斗の顔がニヤリと笑ってるのが見え涼子はもう一枚のカードに変えるが

「うそ……」

涼子の顔が一気に青ざめる

「アウト……だね」

海斗がニヤリとして言ってくる

ガンッ！とタライが落ちてくる

「あ、ああ……」

頭を抑えながら顔を歪ませる

タライが落ちてくるのを見てセシリア・オルコットは「あれは、何の遊びでしょうか？」と一夏に訊いていた

海斗は涼子からカードを一枚引く

「う……」

「海斗、アウトです」

涼子が言ったと同時にタライが落ちてくる

「くっ！」

片手で頭を抑え、もう片方の手は支えとしている

涼子は海斗からカードを一枚慎重に引く。そして恐る恐るカードを見る

「あ、ああ……や、やりました！」

涼子がカードを机に置く、海斗は絶望した

涼子は海斗の方を向き

「海斗、楽しかったですよ。またやりましょうね」

「ああ、そうだ「ガンッ！」っ～～～～！！」

そうだねと言おうとしたがタライが頭に直撃し頭を必死に抑える

「いててて……。それにしても懲りないよね。彼女たちは」

海斗は立ち上がり再び紐を引く

ガンッ！ガンッ！ガンッ！ガンッ！と音と声が一つ増える

「「「「「いった～～～～！！！！！」」」」」

海斗がドアを開けると篠ノ之箒、凰鈴音、シャルロット、ラウラの四人が頭を抑えていた

「すっかり忘れてたわ……」

「馬鹿？」

「不覚だった……」

「聞き耳を立てることが問題」

「何でタライが……」

「設置した」

「きついな、これは……」

「特別製だから、普通のよりか痛いよ」

「またやってるのか、馬鹿者ども。まあいい、入れ」

四人おずおずと部屋の中に入る

「織斑先生、外を散歩してきます」

「あまり遅くなるなよ」

「なら拙者も」

「俺も行くぜ」

海斗たちが部屋を出る

「お前はもう一度風呂にでも行ってこい。部屋を汗臭くされては困る」

「ん。そうする」

そして一夏も部屋を出る

「……」

残った女子五人は黙っていた

恵美と涼子は頭が痛くそれどころではない

「おいおい、葬式か通夜か？いつものバカ騒ぎはどうした」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

「私は頭が痛くてそれどころでは……」

「右に同じです……」

「貴様等は自業自得だろ。しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう」

そう言って織斑先生は冷蔵庫から清涼飲料水を取ってくる

「ほれ。ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶でトマトジュースにココアだ。それぞれ好きなのを持ってけ」

そう言われて交換することなく綺麗に行き渡った

「い、いただきます」

全員が缶に口を付ける

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの！？」

「それはありませんね。缶には細工された後はありません」
「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ」
織斑先生は冷蔵庫から缶ビールを取り出す
「何で海斗様たちの部屋に缶ビールが？」
「私が飲む用だ」
「勝手に入れたんですか？」
「勝手に入れた」
プシュッ！と音を立てて飛沫と泡が飛び出す。それを唇で受け取り、そのままゴクゴクと喉を鳴らした
「もしかしてこれが口止め料ですか？」
「察しがいいな。その通りだ」
そして女子五人は「あっ」と声を漏らし飲み物を見た
「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」
二本目のビールを出し音を響かせ話を続ける
「お前ら、一夏のどこがいいんだ？」

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけですので」

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

しれっとそんな事を言う織斑先生に三人は詰め寄った

「「「言わなくていいです！」」」

「冗談だ。――お前たちは黒羽のどこがいいんだ？はっきり言うがあれは不良だろ」

「た、確かに僕も最初はそう思いましたが、海斗は優しいです」

シャルロットは海斗と一緒にいて優しさに気づいた

「ほう。だがさっきもタライで攻撃されただろ？」

「そ、そうですけど。あの厳しいところも好きというか……」

最後の方は恥ずかしくて籠もる

「で、お前は？」

「つ、強いところが、でしょうか……」

「あいつより強いやつは他にもいるだろ」

「海斗より心が強い人はいません」

「そうか。星野と柊はどうなんだ？いつも一緒にいるだろう」

「海斗は厳しいです。ですが優しすぎるところもあります」

「例えば？」

「自分のことより他人を優先するところですね。そこを直してほしいです」

涼子が答えた後に恵美が答える

「わかりません」

「わからない？」

「はい、確かに海斗様は好きです。ですが……」

『記憶がないからなぜ好きなったかわからない』恵美は確かに海斗が好きだが本当に好きなのか偶にわからなくなってしまって怖くなっている

「何か事情があるようだが、気にしないでおこう」

「ありがとうございます」

「お前等の気持ちはよくわかった。だがな女ならな、奪う気持ち

で行かなくてどうする。ここにいる全員がライバルなのを忘れるなよ」

そう言って三本目のビールを口にする織斑先生

臨海学校一日目の夜は過ぎていった

臨海学校　午後（後書き）

何となくやってみました。ボンゴレ式ゲームどうでしたか？楽しんでいただけたなら幸いです

そして恵美が記憶喪失だという設定忘れてました。だからここら辺で一度設定を出しとこうかと思いました

次回は臨海学校二日目ですお楽しみに

アンケート、感想どちらもよろしくお願いします

緊急事態（前書き）

やっと書き終わりました
今回は天才科学者が登場します

緊急事態

第３０話　緊急事態

合宿二日目
今日は午前中から夜までＩＳの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。特に専用機持ちは大量の装備が待っているのだから更に一苦労である

「ようやく全員集まったか。――おい、遅刻者」

「は、はいっ」

織斑先生に呼ばれて返事をしたのは、ラウラだった。理由は寝坊で、集合時間に五分遅れでやってきた

「そうだな、ＩＳのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ＩＳのコアはそれぞれが相互情報交換のための――」

ラウラがコア・ネットワークの説明をしているとディーノが耳打ちしてくる

「昨日言われた侵入者だが、まだ見つかってない」

「どういうこと？この敷地内には必ず行るんだ。キャバッローネの力で探し出せるでしょ」

「既に部下を数人敷地内には忍び込ませてる、がそれでもまだ見

つかってない」

「もう少しそちらの部下を派遣できないか？」

「そうしたいがバレたら色々とまずい。これ以上は潜入させられない」

「黒羽、ディーノ先生、何をしてる」

どう対策を煉るか考えていたら織斑先生に呼ばれた

「黒羽、専用機持ちは専用パーツのテストだ。ディーノ先生は他の生徒をお願いします」

みんなは既に準備に取りかかっていた

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

「お前には今日から専用――」

「ちーちゃ～～～～～ん！！！」

砂煙を上げながら人影が走ってくる

「……束」

織斑先生が呆れながら名前を言っていたが海斗は警戒心を強めた

コトコト……

ポケットに入れてた匣が動いた

（ということは、アレが昨日の侵入者か……だったら）

「果てろ！」

海斗はダイナマイトを人影に向かって投げる

ドドドドドッ！と爆発音がなる

バシーン！

「何をしている馬鹿者」

「不法侵入者を退治しただけですよ」

頭を抑えながら織斑先生に答える

「ちょっと君、束さんを殺すきかい？」

「まだ立てるんだ。なら更に痛みつけてあげよう」

「止めんか馬鹿者」

バシーン！と再び殴られる

「ちーちゃん！やっぱりちーちゃんは束さんの事を愛してるんだ――ぶへっ」

織斑先生に飛びかかろうとした侵入者が片手で掴まれる。手加減をする気がないくらいに指が食い込む

「黒羽、こいつは一応関係者だ」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

織斑先生の拘束から抜け出す侵入者もとい関係者

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったぁ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！箒ちゃんひどい！」

頭を抑えながら訴える関係者

「で、君何？織斑先生が言うから関係者何だろうけど、何者なの？」

「珍妙奇天烈なこと言うね君。ＩＳの関係者なら、一番はこの私

をおいて他にはいないよ」

そろそろ限界の海斗はトンファーを構える

「おい束。自己紹介くらいしろ。下手すれば殺されるぞ」

「えー、めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

ぽかんとしてた一同も、目の前にいるのがＩＳの開発者にして天才科学者・篠ノ之束だと気づいた。二人をのぞいて

「それって自称天才じゃないの」

「おや？君は束さんのこと知らないのかな？」

「知らないね。そして知るきもない」

「黒羽、篠ノ之　束と言う人物を知らないか？」

「誰？」

「海斗様、私を見られても困ります。私も知らないんですから」

「……」

その瞬間静寂が生まれた

バシーン！バシーン！

「常識だぞ、馬鹿者」

「というより、海斗最初の時知ってましたよね」

「覚えてない。興味のない人間は忘れるんだよ」

「あ！思い出しました！この前家に来たウサミミの女性！」

恵美が突然声を出す

「本当なのか？束」

「ん～。そう言えば誰かの家に行ったね～。えへへ、忘れてたよ」

笑って言う天才束

「それで、頼んでおいたものは……」

ためらいがちに篠ノ之　箒がそう尋ねる

「うっふっふっ。それは既に準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

その言葉に全員が空を見上げる

ズズーン！

金属の固まりが砂浜に落下してきた

銀色をしたそれは、次の瞬間正面らしき壁がばたりと倒れて中身が見えた

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！全スペッ

クが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

真紅の装甲に身を包んだ機体は太陽の光を反射している。海斗はそれをじっと見ていた

「さあ！箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！私が補佐するからすぐに終わるよん♪」

そう言って作業を始めた

「早い、天才と言うだけのことはあるね」

「そうですね。見た目も近接特化型ですが、天才科学者の事です。何か他にも装備があるでしょう」

「だね」

海斗達が話してるときにある程度作業が終わったのか、並んだディスプレイを閉じていく

「あとは自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いっくん、白式見せて。束さんは興味津々なのだよ」

「え、あ。はい」

一夏が白式を展開する

「データ見せてね～。うりゃ」

白式の装甲にコードを刺す篠ノ之　束

「ん～……不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろ？見たことのないパターン。いっくんが男の子だからかな？」

そう言って他のディスプレイも見終わったら

「さて、君のＩＳも見せてもらえるかな？…ＸＩ世」

最後は海斗にしか聞こえないくらいの小さな声で言う

「無駄だよ」

「束さんに不可能は無いのだ」

「……」

「悪用はしないよ」

海斗はボンゴレを展開する

「それじゃあ失礼して」

白式と同じようにコードを刺すが

「解析不能？……なんでだろ。束さんが解けないなんて……」

解析不能の文字が出てきた

「だから言ったでしょ。無駄だって。これ外してくれない？」

篠ノ之　束は反論せず、大人しくコードを抜いた
その様子は落ち込んでるようにも見えた
それを見て海斗は篠ノ之　束に近づき

「機会があれば」

それだけ言って離れた
篠ノ之　束は一瞬海斗の方を見た

「こっちはまだ終わらないのですか？」

篠ノ之　箒が話しかける

「んー、もう終わるよー。はい三分経った～。あ、今の時間でカップラーメンができたね。惜しい。んじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ道りに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

篠ノ之　箒が試運転するのを見ながらディーノを呼ぶ

「ディーノ」

「なんだ」

「篠ノ之　束がこっちの情報を持ってる」

その言葉を聞きディーノは顔をしかめる

「どういうことだ。俺たちの情報が漏れてる？」

「たぶん彼女が独自のルートで探りを入れたんだ。男である俺が何でＩＳを動かせるのか調べるために」

「成る程、どうするんだ」

「今の所は害がないから何もしないけど、彼女が何かしら仕掛けてくれれば殺す」

「殺す前に情報を聞き出すのが先決だろ？」

「そうだね。ま、兎に角、これ以上秘密が漏洩しないようにそっちで手を打ってくれないか」

「分かってるよ。一応注意はしておく」

そしてディーノは少し離れ連絡を取り始める

「ロマーリオか？ディーノだが」

『ボス！大変です！先ほど……』

ディーノの様子を見ていたら

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

山田先生が慌てた様子で織斑先生に駆け寄る

「どうした？」

「こ、こっ、これをっ！」

渡された小型端末の、画面を見て織斑先生の表情が曇る

「特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた――」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ……」

織斑先生と山田先生が何か言っている

ディーノの焦った声も聞こえた

（何かが起こってる。ただ事じゃなさそうだな……）

「海斗殿」

考え事をしていたらバジルに呼ばれる

「いったい何があったのですか」

「分からない。兎に角ディーノの情報を待つしか……」

「全員、注目！」

バジルと話し合っていたら織斑先生が皆に呼び掛ける

「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテス

ト稼働は中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

その言葉に女子一同はざわつく。そして……

「海斗、バジル、恵美、ちょっと来い」

連絡を取り終えたディーノが呼ぶ

『ここからはイタリア語で話すぞ』

真剣な顔つきでディーノは言った

イタリア語と言っても声は最小限に小さくしている

『現在ハワイ沖で試験稼働中だった機体『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が暴走している』

『原因は？』

『不明だ。それにもう一つ悪い知らせがある。その他にも複数のＩＳが確認されている』

『機体は？』

『まだわからない。複数の機影が確認されたとしか情報が入ってこなかった』

『こっちに向かってるんだな？』

『ああ。恐らくはあの会社だろ』

『なら、俺たちで倒すしかないな』

「黒羽、バジル、星野、ディーノ先生、何をしている。速く集合しろ！」

「はい！」

海斗と恵美はいやな予感が頭をよぎった

緊急事態（後書き）

ここでオリジナルとして他のＩＳを入れてみました。何のＩＳかはお楽しみです

感想お願いします

アンケートも締め切り間近です。よろしくお願いします

作戦会議（前書き）

今回は作戦会議です
戦闘はしません

作戦会議

第３１話　作戦会議

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間では、専用機持ち全員と教師陣が集められた

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあとたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

その説明で一夏と篠ノ之　箒以外の専用機持ちは厳しい顔つきになっていた。特にラウラの眼差しは真剣そのものだった

「その後、衛生による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった。教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

（そうなると俺と恵美意外が福音の対処をすることになるな……）

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

「はい」

早速、手を挙げたのはセシリア・オルコットだった

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

そして専用機持ちの面々と教師陣は開示されたデータを元に相談を始める

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしと柊さんのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

（学園の方ではまだ確認されていない。ということは、霧属性のＩＳを持っている奴がいると考えて良さそうだな）

皆が意見を交わしてる中海斗は福音よりもう一つの複数のＩＳが気になっていた

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを越えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

「つまりは、一夏か海斗と言うことになりますね」

「え……？」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか。海斗は特に問題はないだろうけど……」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるＩＳでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちょっ、ちょっと待ってくれ！お、俺が行くのか！？」

「「「「当然」」」」

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無

理強いはしない」

皆が一夏を見る

「やります。俺が、やって見せます」

「よし。黒羽、お前はどうするんだ」

織斑先生が海斗に訊く

「……俺はこの作戦に参加しない」

その言葉に凰　鈴音が声を出す

「あんたもしかして恐いの？」

「違う。俺にはやることがある」

「何をやるんだ？」

今度はラウラが訊いてくる

「ディーノ」

「ああ。わかった」

ディーノが織斑先生の隣に立ち皆に言う

「海斗、恵美、バジル、俺は別のＩＳの破壊でこの任務には参加できない」

「別のＩＳ？」

「学園の方では確認はされていないが、福音が監視空域より外れる前に複数のＩＳが此方で確認した」

ディーノの後に海斗が続く

「どんなＩＳかは分からない。だが、確実にあの時の機体よりかは性能が上だ。だから俺はそっちを対処することとなった」

あの時と聞いてクラス対抗戦の時に来たＩＳを思い出す　「何故こっちでは確認されてないのにわかる？」

織斑先生の疑問を海斗が答える

「向こうは多分特殊な何かを使ってる」

海斗はまだ話すときではないのでリングの事を伏せる

「なら、そっちは黒羽達に任せていいんだな」

「はい。だけど、恵美は置いていきます」

それに恵美が反論する

「何故ですか！私も一緒に！」

「駄目だ。もしかしたら別働隊がいるかもしれない。だから待機だ」

「……わ、わかりました」

恵美は渋々了承する

「では、織斑先生。準備があるので部屋を出ます」

「わかった。何かあったら言え、出来ることなら協力する」

「ありがとうございます」

海斗達は部屋を出る

「柊」

「は、はい」

突然呼ばれて涼子は驚く

「お前は黒羽の援護に行け」

「え……？どういうことですか？」

「複数のＩＳ、そしてあのＩＳ以上となると黒羽一人では苦戦を強いられるだろう。星野が行けないなら柊が行くべきだろう」

「なら、僕も」

「私も」

シャルロットとラウラが自分も行くという

「駄目だ。クラス対抗戦の事はお前たちも知っているだろ。あのIS以上なら柊を行かせるのが適任だ。それに今のお前たちが行っても黒羽の邪魔にしかならん」

「……」

シャルロットとラウラは黙り込む

「わかりました。海斗の援護に回ります」

涼子は部屋から出る

「海斗！」

「涼子、作戦会議はどうした？」

涼子は織斑先生から援護に回るように言われたことを伝える

「流石に今回は涼子でも辛いよ。最悪待っているのは”死”だ」

「わかってます。でも、一人より二人の方が勝つ確率は上がりますよ。恵美さんが行けないんです。連れて行ってください」

涼子は頭を下げて頼み込む

「駄目！」

答えたのは海斗ではなく恵美だった

「私が行けないのに涼子ちゃんが行くのはズルいです」

「あのな恵美、ズルいかどうかの問題じゃないんだ」

「なら何で私は駄目なんですか？」

「だから、別働隊がいる可能性もある。恵美は待機だ」

「なら涼子ちゃんでも……」

「もし精密度Ａが来たら俺か恵美しか対処できない。だから、恵美は待機いいな」

「なら、絶対に生きて帰ってきてください！これが守れないなら私もついて行きます」

そう言って恵美は海斗の手を握る

「ん～、ま、頑張るよ」

「頑張る…ですか。海斗様らしいです」

「許可してくれるね」

「はい。頑張ってくださいね」

「話は終わったみたいだな」

ディーノがタイミングを見計らって話しかけてくる

「さっきロマーリオから連絡があった。ＩＳの数は四機だ」

「そうか」

「どうします？アレレベルが四機、辛いですよ」

「わかってる。けどやるしかない。ディーノとバジルは新たな情報が入り次第連絡を、恵美は待機だが、万が一俺達に何かあったら頼む」

「わかりました」
「任せろ」
「了解です」

それぞれが返事をする
そして海斗と涼子はＩＳの整備を始める

作戦会議（後書き）

謎のＩＳが四機……咄嗟に思い付いた数だけど何とかなるかな？

感想お待ちしてます
アンケートの方もお願いします

それでは次回もお楽しみに

中に眠る人物（前書き）

やっと投稿……最近書くのが遅くなってる気が……

中に眠る人物

第３２話　中に眠る人物

「それじゃ、行ってくるよ」
「行ってきます」

現在浜辺で海斗と涼子はＩＳを展開している

因みに福音の暴走を止めるのは一夏と篠ノ之　箒になったと連絡をもらった

「海斗様、涼子ちゃん、生きて帰ってきてくださいね」

「ああ」

「わかりました」

「海斗殿、織斑殿と篠ノ之殿は十分後に作戦を開始するようです」

「了解。こっちが終わったら援護に行くと伝えてくれ」

「わかりました」

「行くぞ」

「はい」

海斗と涼子は飛び立った

「恵美殿、拙者達も戻りましょう」

「ええ、わかりました」

バジルと恵美は旅館に戻った

「涼子」

目標まで飛んでいたら海斗が涼子に通信を開く

「何ですか？」

「今回の敵は恐らく強い。最初も言ったが、下手したら〝死〟だ。戻るなら今のうちだぞ」

「今更何言ってるんですか。大丈夫です。戦えますよ」

「すまない。何かあったら全力で守るからな」

「フフッ、期待してます」

会話をしているとＩＳのセンサー反応がでる。数は……三つ（・・・）

「涼子」

「はい。確認しました。ですが、報告では四つの筈ですが」

「ああ。多分姿を消してる（・・・・・）んだろう。もう一機はどこから来るか分からないから慎重に行くぞ」

「はい」

その時、ＩＳが此方に向かって攻撃してきた

「ミサイルか……」

海斗は嵐のリングに炎を灯して匣を開匣する

「拡散フレイムアロー」

ミサイルをすべて撃ち落とす

「久しぶりだなぁ。黒羽　海斗ぉ！」

新たな反応が出てそちらに目を向ける

「誰！？」

「私は黒羽　耕造。そこにいる黒羽　海斗の父親さぁ」

「俺は一度たりともお前を親だとは思ってない！」

「私も同じだぁ。お前は息子ではない。私の人形だぁ」

その言葉に今度は涼子が反応する

「海斗は人形じゃありません！」

「人形さぁ。その証拠に私が命令すれば人間を殺すんだからなぁ」

「俺はもうお前の指図には従わない！」

「そうかぁ。ならば、ここで朽ち果てるがいぃ！」

「お前がなあ！」

海斗は黒羽　耕造に突っ込んでいった

「海斗、援護し……！？」

涼子は海斗を援護しようとしたが三機のＩＳに阻まれる

「そこの女は私が作った＞カラミティ＜、＞フォビドゥン＜、＞レイダー＜を相手にしてなぁ」

「涼子！」

「余所見とは余裕だなぁ！」

「ぐっ」

黒羽　耕造はボウガンの矢を放つ

海斗は体を掠めた

「！？絶対防御が発動しない！？」

「くくくっ、このボウガンは特別製でなぁ、掠りでもしたら絶対

防御を発動できなくできるんだよぉ」

海斗は目を見開き驚く。だが、エネルギーは削られていなかった
ボウガンの矢が連続して放たれる

（数が多すぎる。攻撃に移れない！）

その時頭に声が響く

『危ない。後ろ！』

海斗が後ろを向くと＞レイダー＜の破壊球（ミョルニル）が迫っていた
海斗は上昇することでそれを避ける
再び頭に声が響く

『三本のボウガンの矢が迫ってるよ』

「フレイムランチャー」

ボウガンの矢を撃ち落とす

「流石だなぁ。私の予想以上だぁ」

そう言われるが海斗自身も驚いていた

（この声正確に敵の位置を把握してる。……それに聞き覚えもある）

それは次の言葉でわかることになる

『海君、私と変わって！』

この呼び方で海斗は確信した

（もしかして……さっちゃん？）

『うん！そうだよ。理由は後で話すから今は私と変わって』

（分かった。さっちゃんを信じる）

海斗は目を閉じ意識を手放す、その瞬間暴風が海斗を中心に吹く

「一体なんだぁ！？」

これに関しては黒羽　耕造は知らないみたいだった

「くっ、何なんですか？一体」

風が止むとそこには海斗ではなく、女性に変わっていた

「何者だぁ。私の人形をどこにやったぁ」

「今は寝てるよ。私の中でね。さ、始めましょうか。そこのあなたも宜しくね」

女性は涼子に向き、そう言う

「あなたは？」

「私は、冥茄（めいな）　皐月（さつき）。海君の体を借りてるの。あ、理由は訊かないでね」

そして黒羽　耕造に向き直る

「知らないぞぉ！私の人形を返せぇ！」

「嫌。返してほしかったら私を倒しなさい」

こうして二対四のバトルが再び始まる

中に眠る人物（後書き）

新たなオリキャラ登場！
次回はどうなるか見物です

投稿が遅くなってきてますが次はなるべく速くします
それではまた次回～

感想、アンケートお願いします

勝利か、敗北か……（前書き）

勝利はどちらが掴むのか？
敗北を刻まれるのはどちらか？

では本編へどうぞ

勝利か、敗北か……

第３３話　勝利か、敗北か……

「嫌。返してほしかったら私を倒しなさい」

ニヤリと黒羽　耕造に向かって挑発的な笑みを浮かべる

「上等だぁ！ここで殺してやるよぉ！」

黒羽耕造はボウガンの矢を連射する

「武器の能力は知ってる。当たらなければいいだけ」

雨のリングに炎を灯し、匣を開匣し時雨金時を出す
そして矢を弾きながら黒羽耕造へと向かう

「当てるっ！」

「甘ぁい！」

冥茄　皐月は鮫衝撃（アタッコ・ディ・スクアーロ）を使う
黒羽耕造は刀を展開し、それを防ぐ

「！？炎が……吸われてる……！？」

雨の炎が吸われてる事に驚いていると、刀で斬りかかられる

それを咄嗟にかわし、後ろに下がる

「危ない。触れただけで吸収……。厄介ね」

「死ねぇ！」

矢に雨の炎を纏い発射する

嵐のリングに炎を灯し、匣を開匣する。ＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．の防御リングで防ごうとするが――

「無駄だぁ！」

「かはっ！」

――防御リングを貫き、体をも貫く

「体が、動かない……！」

痛みで動けないのではなく、雨の鎮静の効果で動きが鈍くなっていた

「もう動けないだろぉ？死ねよぉ！」

（ごめんね、海君。助けるって言ったのに……）

矢が貫く事を覚悟したが痛みが来なかった。見るとそこには涼子の姿があった

「大丈夫ですか？」

「あ、あなた……どうして……」

「アナタは海斗と同じ身体を共有してるからですよ」

そう言いながらボンゴレの手を引き速く上昇する
そこにはフォビドゥンの誘導プラズマ砲（フレスベルグ）が通る
その間に大空のリングに炎を灯し、体中を巡るようなイメージをして鎮静を中和する

「私もいるんだぁ！」

二人は空を見上げ凡そ二十はくだらない程の矢が降ってくる

「動かないでくださいよ」

そう言って涼子はフルバーストで矢を撃ち落としていく

「さよならだぁ」

今度は矢ではなく刀を投げてくる

「そんなもの！」

「駄目ぇーー！」

あの刀が実体兵器以外通さないのと感じ取った。皐月は多少動けるようになったので涼子の手を引き離れる

「！戻ってくる！？」

『さっちゃん！』

「海君っ！？出てきちゃ駄目！」

その呼びかけも無意味に終わり、皐月は強制的に意識を切り離され、海斗が戻ってきた

「涼子、衝撃に備えろ！」

「え、海斗！？」

海斗は涼子を蹴り飛ばす。刀は海斗の腕を突き刺した

「くくくっ、いい気味だなぁ！」

海斗は刺さった刀を無理矢理引き抜く

「女を狙えぇ！」

黒羽耕造がそう言うと三機のＩＳは涼子に飛びかかる

「止めろーーー！！！」

海斗が叫ぶと三機のＩＳは止まる

「なら、もう一度私の人形になれぇ。そうすれば女は助けてやる」

「ぐっ。わ…かっ……た」

痛むで顔を歪ませながら答える

「海斗、何…言ってるん……ですか?そんなの、駄目に、決まってるじゃ……ないですか」

涼子はかなり驚いていた。自分の所為で海斗が捕まるのが信じられなかった

だが、海斗は涼子に何も言わずに黒羽耕造へと向かう

「変な事すれば女を殺す」

「海斗……」

海斗は黒羽耕造に攻撃のチャンスを伺っていたが、見破られ涼子を殺させないために考えを捨てる

「よ〜し、いい子だぁ」

そして海斗達はその場から離脱しようとしたが、黒羽耕造が止まり

「ああ、そうだぁ。追撃されないようにＩＳを破壊しなくちゃなぁ」

「なっ!?ふざけるな!約束が違う!涼子は狙わないはずだ!」

「私が狙うのはＩＳだぁ。ＩＳを狙わないとは言ってないがなぁ!」

黒羽耕造は涼子に向けて矢を放つ

「涼子ぉーーーー！！！！！！」

海斗は叫びながら、涼子に向かう

「あ……」

涼子は突然のことに動くことができず、目を瞑った
だが、来たのは痛みではなく何か生暖かい物だった。ゆっくりと目を開けると

「だ、い……じょう…ぶ……か……？」

血まみれで背中に矢が刺さった海斗が涼子を抱きしめていた

「に、げ……ろ……。なる…べく……遠く、へ……逃げ……ろ……」

声に力が入らず途切れ途切れに言う

「嫌…です。逃げるなら、一緒に……」

「くっ」

海斗は最後の気力を振り絞り、雷のリングに炎を灯し、匣を開匣する

「ファル、たの……む……」

ファルと呼ばれた雷牛は涼子を背中に乗せ旅館の方角に向かう

「降ろしてください！海斗が……！海斗が！」

ファルが固定しているので降りる事ができず、何とか降りようとする

「嫌。嫌ぁ。海斗ぉーーー！」

泣きながら叫ぶが声は海斗に届かない。そして海斗が完全に見えなくなった

「駄目だなぁ。お前は人を殺すのであって、助ける存在では無いのだがなぁ」

「し、るか……よ……」

「もういいや。死んじゃえ」

海斗が矢を引き抜いて投げ捨てた瞬間に矢が爆発した

「い……きろ…よ」

そして海斗は海の中に消えた……

旅館内、風花の間

「黒羽と柊に通信は繋げないのか！？」

「駄目です！オープンチャンネル、プライベートチャンネル、どれも繋げません！」

「海斗様……。涼子ちゃん……」

一夏と篠ノ之　箒の二名が作戦続行不可能で撤退しているが、海斗と涼子には通信が繋がらず焦っていた

「海斗、涼子！応答しろ！、繋がってくれ……！」

ディーノも連絡をしているがなかなか繋がらず苛々していた。その時――

ドカーーーン！

大きな爆発音が聞こえた

「一体なんだ！」

「わかりません！此方からでは何も確認できません！」

「……っ！？」

「どこに行くつもりですの？星野さん」

恵美が部屋を出ようとしたらセシリア・オルコットが止める

「決まってるじゃないですか。海斗様と涼子ちゃんを探しに行くんです！」

「少しは落ち着きなさいよ！今焦ったってどうしようもないでしょ！」

「でも、ただ待つなんてもうできません！」

「私も同じだ。これ以上待つことなど……！」

「織斑先生、僕達に捜索許可を！」

「やむを得ないな……。これよりお前たちに黒羽、柊両名の捜索に……「待ってください」……どうした星野？」

恵美はポケットの中にある匣が動いているのに気づいた

「バジル君、ディーノさん」

「拙者の匣も動いてます」

「外に行くぞ！」

ディーノ、恵美、バジルは走って外にでる。織斑先生達も急いで後を追った

外にでると、一夏と篠ノ之　箒と別方向から血まみれの涼子がやってきた

「織斑君！篠ノ之さん！涼子ちゃん！」

恵美がヴァリアーを展開して涼子に駆け寄る。一夏達は凰　鈴音とセシリア・オルコットが受け止めていた

「恵美さん……。海斗が……海斗が、死んじゃう！」

「落ち着いてください。取り合えずば体の傷を治しましょう」

だが涼子は首を横に振る

「違います。これは私の血じゃなくて、海斗の血なんです」

「え？」

「だから、海斗を助けに……」

「涼子ちゃん？涼子ちゃん！」

「気を失ったみたいだな」

「ディーノさん、海斗様の捜索を……」

「今は涼子を休ませるのが優先だ」

「でも！……」

何か言おうとしたがディーノの悔しそうな顔を見て苦しいのは自分だけではないと感じ、涼子を休ませるのを優先した

戦いは敗北という形で終わった

勝利か、敗北か……（後書き）

海斗が負けた
ＩＳ学園の完全な敗北が決まりました

感想お待ちしてます
アンケートは今回で締め切らせてもらいます。少し予定が速いですがすいません

次回も楽しみにしてください

精神世界と創始者そして神（前書き）

今回は戦いありません。そして彼に会います

精神世界と創始者そして神

第３４話　精神世界と創始者そして神

「……う……」

「起きた？大丈夫？」

「……さっちゃん……か？」

目が覚めるとそこには皐月がいた

「ここは……？俺、死んだのか？」

「ううん、生きてるよ。ここは精神世界。知ってるよね」

「精神世界……。ならなんでさっちゃんが？ここは俺しかこれないはずだけど……」

「多分だけど、今は同じ体を共有してるからじゃない？」

海斗はふ～んと頷くそして一度あたりを見渡す

「懐かしいな、ここも。もう一年半ぐらいは来てないな……」

海斗は皐月の方を見て尋ねる

「さっちゃんは、俺を恨んでる？」「恨まないよ。あれは海君がやりたくてやったわけじゃないんだから」

「でも自我はあった。さっちゃんに恨まれても仕方ないよ」

「だ～か～ら～、恨んでない！海君は私の大事な、初めての友達なんだから」

皐月は海斗の頬を掴み、横に引っ張る

「ちょ、いひゃい、いひゃいよ」

すぐに皐月は手を離す

「はい、これで仕返しはしたよ」

「え？」

「だから、もう気にしないでね」

「でもこんなの……」

海斗は抗議しようとするが

「私が言いといったんだから言いの！海君は気にしすぎ」

「それじゃ、これだけ訊かせて？さっちゃんは何で今出てきたの？」

「それは秘密。女性は秘密を明かさないものなの」

「そうなの？」

「そう」

そしてしばらくの間は雑談していた

旅館、とある一室
現在時刻、１６：００

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

気絶した後直ぐに部屋に運ばれ、目を覚ましてから涼子はずっとこの調子だった

「涼子ちゃん……」

恵美も何度か声をかけているが全く聞いていない

「恵美少しいいか？」

ディーノが恵美に声をかける

「何ですか？」

「俺たちはこれから海斗の捜索にでるつもりだが、どうする？」

「海斗様は生きてるんですか？」

「まだわからないが、可能性はある」

「そうですか。ですが……」

恵美はほっとしたが、すぐに不安な顔で涼子の方を見る。その間も壊れた人形のように「ごめんなさい、ごめんなさい……」と呟いている

ディーノは涼子の顔を見て

「涼子、これから海斗の捜索に行かないか？」

その言葉に涼子は涙を流しながら此方をみる

「海斗が、生きて……るんですか……？」

「可能性としては限りなく低いが、０じゃない。涼子さえ良ければ道案内を頼みたいんだが？」

「行きます！行かしてください！」

願ってもない言葉に涼子はすぐに決断する。少しでも生きてる確率がある、それだけで十分だった

「なら支度しないとですね。すぐに出発しますよ」

場所が変わり浜辺

「でも移動はどうするんですか?私と恵美さんはＩＳがあるから平気ですけど、ディーノさんは……」

「大丈夫だ。問題ない」

ディーノの言葉に?マークを浮かべる。少ししたらバジルが走ってきた

「ディーノ殿、もう少しで到着するようです」

「そうか、サンキューな」

「あの何が……「ボス～～！」……?」

何が来るのか訊こうとしたが、誰かの声に遮られた。そちらを見ると二台のボートが此方に来ていた

「お疲れロマーリオ」

「え?あの、ここは関係者以外立ち入り禁止じゃ……」

「大丈夫ですよ。さ、行きますよ」

ディーノ、バジル、恵美とボートに乗る、涼子も少し遅れてボートに乗る

「どこに行くつもりですか?ディーノ先生」

これから出発しようとしたが誰かに呼び止められた

「ラウラちゃんこそ、待機命令が出ているんじゃないですか？」

話しかけてきたのはラウラ・ボーデヴィッヒだった。その後ろには篠ノ之　箒、凰　鈴音、セシリア・オルコット、シャルロット・デュノアがいる

「そんな事は分かってるわ。でも一夏の敵（かたき）を討ちたいの」

凰　鈴音が言う

「敵……ですか。馬鹿何ですか？」

「馬鹿ですね」

「馬鹿だな」

「馬鹿です」

上から恵美、涼子、ディーノ、バジルの順に言う

「馬鹿とは何だ！」

馬鹿と言われて篠ノ之　箒が怒る

「今回の作戦は戦死の可能性もあったんです。一夏が生きて帰ってきた、それじゃ駄目なんですか？」

涼子の言葉にセシリア・オルコットが言い返す

「では、ディーノ先生方はどこに行くつもりですの？学園の関係者ではない人たちもいるみたいですし」

そう言ってロマーリオ達をみる

「俺達は海斗の捜索に出掛けるだけだ」

「ならそちらも命令違反ではないか？」

「俺達は最初に行ったはずだ、この作戦には加わらない、とな。織斑先生もそれで納得したぜ」

ラウラが尤もな事を言うがディーノは気にしていないように言う

「海斗は……生きてるの？」

そこでシャルロットが驚きながら口を開く

「多分だがな。可能性としては限りなく低いが、０じゃない」

涼子に言った台詞と同じ事を言う

「安心してください。拙者達はお主達を止めません」

「どういう事よ」

凰　鈴音が訳が分からないかった

「ディーノ殿も先程言ったではありませんか。作戦には加わらないと」

そこでラウラはピンときた

「私達に命令する事も出来ないという事か……」

バジルは頷く。今度は恵美が口を開く

「福音を倒すの頑張って下さいね」

「そっちも海斗を見つけてきてね」

「任せてください。では皆さん今度こそ行きましょう」

ディーノ達は頷きボートを出発させる

「私たちも行くぞ」

ラウラの掛け声に四人が頷く

再び精神世界

「そう言えば、何でここから出られないんだ？」

ふと疑問に思ったことを口に出す

「言われてみればそうね。なんか閉じこめられてる見たい」

皐月も言われてから気づいた。もう何時間もここにいるのだが、精神世界から出れない

「……ばれた」

いきなり声がしたのでそちらを見る。そこには先程までいなかった少女がいた

「誰だ？」

「……神」

「神？……」

「……その顔、信じてない」

海斗が身構えながら少女を見る

「そりゃそうだろ、行き成り神なんて言われて信じられるか。しかも小さい女の子何だから」

少女は小さいと言われてムスッと来た

「……約束、破った」

「は？」

「……小さいって言わない約束した」

「……悪いが俺はお前とは初対面の筈だが？」

「……む、記憶が無くなってる。……これは予想外」

何かぶつぶつ言ってるが海斗は気にしないことにした

「ねぇ海君。この子と知り合いなの？」

「いや知らない」

本気で海斗は知らないみたいだった

「……二人ともふざけてる様子はない」

「で？君誰？」

「……神」

「そうじゃなくて……。名前だよ、名前」

「……名前、イリヤ」

「イリヤね。じゃあ、親も心配するから帰ったら？」

「……む、子供扱いした。……こう見えても貴方より年上」

「には見えないけどね」

海斗はイリヤを見ながらそう言う

「……当たり前。……そもそも時間軸が違う。……そして神は余り成長しない」

「海君、話だけでも聞いてみたら？」

「そうだね。この世界にこれる時点で本当に神の可能性もあるし」

イリヤはどこから出したか分からないが、ロッドで海斗の頭を叩く

「……何度も言ってる、私は神」

「分かったよ。信じるよ」

「……嘘つき。……全く信じてない」

叩くのを止めため息をつく

「……まあいい。……始めに言う、あなた達この世界の人間じゃない」

「は？何言ってんだ？そんな……「……柊　涼子」……涼子がどうかしたのか？」

「……彼女も、この世界の人間じゃない」

「何で知ってるんだ？」

「……神だから」

今まで黙ってた皐月が口を開く

「私も、なの？」

「……（コク）。……実際、あなたはこの世界に来ないはずだった。……時間がないから詳しいことは言えない」

「時間がない？」

「……この世界にあなた達を留めて置きすぎた。……まずはこれ見て」

イリヤが手を横に振るうと二つの穴が開く

「……今、馬鹿達が戦ってる」

その穴から見えるのは福音と戦ってるラウラ達だった

「……こっちはあなたを捜してる」

もう一つの穴は何かを捜してるディーノ達だった

「捜してる？俺をか？」

イリヤは頷くと穴を閉じる

「……あって欲しい人がいる」

「時間がないんじゃないのか？」

「……大丈夫。……出てきて」

そう言うと一人の男が出てきた

「誰だ？」

「俺はボンゴレ？世」

「?世?」

「ボンゴレの創始者だ……。まさかこんな所で会えるとは……」

「……?世。彼にアレ渡して」

?世は懐から箱を出し、此方に渡してくる

「これは……リング?」

「アレニーレリング……。ボンゴレを支えてきた物だ」

「でもこれ大空が無いが……」

海斗がリングを見ると数は六つ、その中に大空は含まれていなかった

「それは代々ボンゴレを支援してきた。適格者はⅩⅠ世(ウンディチェーズィモ)が決めればいい」

「勝手に決めていいのか?」

「本当に助けになると思うのならな……」

そう言って?世は消えていった

「ありがとう。?世」

海斗は?世の消えたところを見ながら礼を言う

「……私も力貸す」

イリヤが突然言ってくる

「何をしてくれるの?」

「……貴方のＩＳ＜ボンゴレ＜直す」

「本当か!?ありがとう!」

「……神だから」

えっへんと胸を張る神

「……後、皐月の魂を外に出しとく。……これで海斗といつでも会話できる」

「でもそしたら私の魂はどこかにさまようような気が……」

「……ちゃんと海斗と繋ぐ心配ない」

「ならよかった」

ホッとした皐月は海斗を見る

「分かってる。イリヤ俺達はもう行く」

「……ん。頑張って」

イリヤは空間に穴をあける

「ここから出るのか？」

「……（コク）」

「イリヤ、またね」

海斗達は現実世界に戻っていった

「……また、いつか」

精神世界と創始者そして神（後書き）

?世登場!神も出してみました

相変わらずの駄文ですみません

アンケートは結果リングを持たせることになりました。友達に訊いたところどっちでもいいと言われた時はすごく困りました……

ではまた次回

感想お願いします

守るもの（前書き）

今回は海斗が福音に挑みます。ワンオフ・アビリティーも使います。
何が形態変化（カンビオ・フォルマ）するのかは本編で

守るもの

第３５話　守るもの

海斗は精神世界から帰ってきた

「目が覚めた」

「！？」

海斗は声がした方を見る

「おはよう、黒羽様」

「な、何でリディアがここに……」

『知り合い？』

（レガーメファミリーボス、リディア・スティールだ。敵じゃないよ）

『なら大丈夫だね』

頭の中で皐月がいきなり話しかけてきて少し驚いた

「跳ね馬から篠ノ之　束がいると聞いたから」

「そうか。今篠ノ之　束なら旅館にいるよ」

『海君、教えちゃっていいの？』

（大丈夫、リディアは同盟結んでるから）

皐月が心配そうに尋ねてくるが問題ないと答える

「ありがとう。身体痛まない？」

身体の傷の心配をしてくるが海斗は大丈夫だと言う

「リディア悪いが俺行くところがあるんだ。手当してくれてありがとな」

「気にしなくていいけど、行かせない。その傷で出歩くと傷が広がる」

「大丈夫。俺頑丈だから」

「説得力ない」

海斗の傷を指さしてはっきり言う

「でも行かないと……」

「行かせない」

「だから」

「行かせない」

「だ」

「行かせない」

「……」
「行かせない」
「何も言ってない」
「言わなくてもわかる。どうしても行きたいなら条件」
「何？」
真剣な表情で此方を見る。海斗もリディアを見返す
「今度黒羽様の家に泊まらして」
「は？」
予想外の条件に海斗は素っ頓狂な声を上げる
「駄目？」
「いや別にいいが」
「ありがとう」
『なっ！？海君！？』
海斗が別にいいと答えたら皐月が怒り出した
（別に問題ないよね？）
『あるよ！！海君の家に泊まるなんて私認めない！！』

（皆を助けるためなんだ。他に案もないし、別に構わないだろ？）

『確かにないよ。けど……。う～、一日だけだからね』

（何日も泊める気はない）

何とか皐月の了承を得た海斗は少しばかりホッとした

「ここを真っ直ぐ行けば旅館の方に行ける」

「分かった、ありがとう。……あ、これ俺の電話番号、泊まりにくるなら事前に連絡よこして」

海斗は番号の書いた紙をリディアに渡す

「うん、ありがとう。気をつけてね」

「ああ、じゃあな」

海斗は外に出た。仲間を助けるために……

～～ディーノｓｉｄｅ～～

現在海斗の捜索で海の上に来ていた

「それじゃ頼むぞ」

「任せてください。ボス」

部下二人が海の中に入る

「アーロ！」

「アルフィン！」

恵美は匣から暴雨鮫（スクアーロ・ディ・ピオッジャ）を出し、バジルは匣から雨イルカ（デルフィーノ・ディ・ピオッジャ）を開匣する

「では私たちも行きましょう」

「はい」

恵美とバジルは海の中に入る

「私も……！」

「ダメだ」

涼子はディーノに止められる

「どうしてですか！？私はＩＳ持ってます！」

「だからだ。ＩＳを許可無く使用することは許されないのを知っているだろ」

「分かってます！分かってますけど！」

「落ち着け。あいつ等なら何かしら手がかりを掴んでくれるはずだ」

四人が戻ってくるのを待つ
暫くすると四人が戻ってきた

「どうだった？」

「これといったものは……」
「こっちもだ」
「私の方も血の匂いが広がりすぎて……」
「拙者の方も手掛かりは何も……」

それを聞いて涼子は泣き出した

「や、やっぱり……海斗、は……うぅ……」

「俺が何だって？」

「「「「「「え？」」」」」」

～～海斗ｓｉｄｅ～～

「よっ。輪廻の果てより戻ってきたぜ」

海斗はＩＳを解除してボートに乗る

「海斗～～～！！」

「泣くなよ、言っただろ？帰ってくるって」

飛びついてきた涼子の頭を撫でながら優しく言葉をかける

「ったく、心配かけさせんなよ」

「悪かった。ま、もう平気だから」

安堵した顔でディーノは言ってきた

「海斗殿傷はもう良いのですか？」

「少し痛むがある程度は動ける」

傷の心配をしてくれるバジルにちょっと痛いことを伝える

「馬鹿。馬鹿馬鹿馬鹿！死んだかと思いました。生きててくれてよかったです。海斗様、お帰りなさい」

「ただいま、恵美。約束は守ったからな」

「はい」

馬鹿と言われたが今はその言葉が優しく感じた

『海君、感動の再会のところ悪いけど……』

（ん？ああ、そうだな）

海斗は皐月の言葉で思い出し、皆に訊く

「あいつ等は？」

「そうだ！海斗実は……！」

ディーノからラウラ達が独断で福音を倒しに言ったのを聞いた。
海斗はイリヤが見せたのは本物なんだと実感した

「それじゃ、早速出撃しますか。ディーノ、バジルは旅館に一度戻ってくれ、ロマーリオさんたちは取り敢えずここから離れて、恵美、涼子は俺と共に福音を咬み殺しに行くよ」

（さっちゃんは俺のサポートをよろしく）

『「「「「「了解」」」」」』

海斗が指示を出すと全員がそれに従う

「あいつ等の覚悟を見るぞ＞ボンゴレ＜」

「行きましょう＞ヴァリアー＜海斗様を支えるために」

「私達も行きますよ＞フリーダム＜空を翔ましょう」

三人はＩＳを展開して飛びたつ

「俺達も旅館に戻るぞ」

「はい！」

ディーノ達は旅館に戻る

「ここから離れるぞ」

ロマーリオ達はすぐにその場から離れた

～～一夏ｓｉｄｅ～～

「うおおおっ！」

第二形態（セカンド・シフト）した白式を駆り、二段階瞬時加速（ダブル・イグニッション）をしながら福音に再戦を挑んでいた

『状況変化。最大攻撃を使用する』

福音の冷たい機械音声がそう告げると、それまでしならせていた翼を自身へと巻き付け始める。それはすぐに球状になって、エネルギーの繭にくるまれた状態へと変わった

一夏は危険だと直感が告げる

福音は回転しながら一斉に開き、全方位に対して嵐のようなエネルギーの弾雨を降らせる。それはつまり、福音のダメージを受け、回復していない鈴達にも攻撃が及ぶといいことだった

（くっ！守りきれるか――！？）

一夏はすぐさま仲間の盾に走ろうとするが、砲撃が全てのエネルギー弾を撃ち落とした

「な……何だ？」

そちらに目を向けると援軍がいた

～～海斗ｓｉｄｅ～～

暫くすると戦闘の光が見えた

『海君！あれ！』

（ああ、見つけた！）

皐月が海斗に言い、確認すると海斗は直ぐにプライベート・チャンネルを開く

『恵美、霧のリングを使って、合図したら上空から頼む』

『了解です！』

恵美は直ぐにその場から離れ、上空に行く

『涼子はワンオフ・アビリティーを使用してくれないか？』

『任せてください！』

涼子はワンオフ・アビリティーを使用する

海斗は大空のリングに炎を灯し、匣に開匣させＸグローブを出し構えをとる

「オペレーションＸ」

［了解しました。ライトバーナー《柔》の炎、三十万ＦＶで固定、レフトバーナー《柔》から《剛》に変換しつつ、炎エネルギーグロ

ーブクリスタルに充填」

（今までは出力を抑えてたが此処からなら大丈夫なはずだ）

ＸＢＵＲＮＥＲの発射態勢に入りながらそう考える

クラス対抗戦の時はシールドの壁を破壊するだけだったので、そこまで大きな出力は必要なかった。だが今回は遠距離且つなるべく大きな炎を出さなければならないので、サポートが必要不可欠なのだ［ライトバーナー三十万ＦＶ、レフトバーナー二十五万ＦＶ、炎圧更に上昇、二十八万、二十九万、三十万ＦＶ。ゲージシンメトリー、発射スタンバイ」］

「涼子！」

「ミーティア、マルチロックオンシステム起動！ターゲット、エネルギー弾幕ロックオン！準備完了です！」

海斗は一度だけ頷き、福音がエネルギー弾を放った時に攻撃を仕掛けた

「ＸＢＵＲＮＥＲ！！！！」

「フルバースト！！！！」

＞ボンゴレ＜からは橙色の巨大な炎が、＞フリーダム＜からは赤、緑、黄、桃色の光とミサイルが発射された。それらはエネルギー弾を全て撃ち落としていく

「恵美！」

「炎の蕾（ボッチョーロ・ディ・フィアンマ）！！！」

霧の炎を消し、上空に姿を現した恵美は二丁拳銃から福音に向かって旋回しながら炎を連射する
福音は一瞬たじろぐが最初に翼を掠めるだけで後はすべて避けた
恵美は驚きながらも海斗の隣に戻る

「大事な友がやられるのを黙ってみてるなんて――死んでもきれねぇ！」

「「「「「海斗！／黒羽（さん）」」」」」

福音は敵と見なし、海斗達にエネルギー弾を放つ
海斗は大空のリングに炎を灯し、ボンゴレ匣を開匣する

「ボンゴレ匣開匣！ナッツ形態変化（カンピオ・フォルマ）！防御形態（モード・ディフェンサー）！」

「ガオォォォ！！！」

ナッツと呼ばれた天空ライオンは姿を変える
それと同時に海斗達にエネルギー弾が当たる。一夏達は海斗達がやられたんではないかと心配になる。福音も直撃した時に終わったと思った。だが――

「なめんなよ」

爆炎の中から声が聞こえた

「？世のマント（マンテッロ・ディ・ボンゴレ？世）」

マントを羽織った海斗がそこにいた。恵美と涼子は海斗が守ってくれると信じていたからその場から動かなかった

「恵美、涼子大丈夫か？」

「はい。問題ありません」

「此方も傷はありません」

どこも損傷していないのを確認すると二人に指示する

「なら、恵美は皆の回復を、涼子は恵美の護衛を頼む」

「「了解！」」

福音は移動を始めた恵美と涼子にエネルギー弾を浴びせる

二人はそれを気にせず、仲間の元へと向かう。……海斗を信じて

海斗は晴のリングに炎を灯し、ボンゴレ匣を開匣する

「ガリュウ形態（カンピオ・フォルマ）！！　ナックルの極限（マキシマム）ブレイク！！！　極限（マキシマム）イングラム！！」

海斗は二人に向かっている攻撃を拳で撃ち落としていく

その内に恵美は晴のリングに炎を灯し、匣を開匣する

「クーちゃん、お願い」

クーちゃんと呼ばれた晴クジャクは身体から黄色の炎を出しラウラ達の傷、エネルギーを回復させる

「これは……！」

「傷が治ってますわ……」

「それだけじゃないみたい」

「エネルギーも回復するなんて、コレがリングと匣と言うものの力か……」

「暫くすれば半分くらいは回復します。私ではこれが限界です。すみません」

「ううん。半分も回復してくれれば十分だよ」

恵美の自分の力が及ばないことに悔いるが、シャルロットは気にしないでと言う

皆を守っていた海斗にある変化が起こっていた

「ぐっ……！」

『！？海君！まさか、傷が……！？』

（ああ、傷が広がってきたみたいだ……。早々に決めなくちゃ行けないな）

海斗の傷が広がり始めてしまった

『なら私に変わっ……（駄目だ！）……どうして！？』

（此処でさっちゃんの姿を晒すわけにはいかない。わかってるだろ？）

『……っ！なら、限界と判断したら無理矢理変わります』

（……解ったよ）

全員は福音を見るとある変化が起こっているのに気づいた

「？何だ？あれ……」

「何なんだ。アレは……！？」

「な、何よ。アレ……」

「一体、何が起こってるんですの……？」

「あれって、まさか……」

「海斗、アレは……どう言う事だ？」

「あの光って……海斗と恵美さんと同じ……」

「海斗様……確認しました。アレは……」

「死ぬ気の炎……何だろ？」

上から一夏、篠ノ之　箒、凰　鈴音、セシリア・オルコット、シャルロット、ラウラ、涼子、恵美、海斗の順に口を開いた

恵美は海斗の言葉に頷いた。そして、全員はあり得ないものを見ている目で福音を見ていた、何故なら……福音の翼に死ぬ気の炎が纏っていたから

守るもの（後書き）

まさかの福音に死ぬ気の炎……。原作ブレイクしまくりだなま、あまり気にしないのが自分です

ではまた次回

感想、指摘があればお願いします

海上決戦（前書き）

今回も戦闘です
戦闘描写が苦手ですが頑張って書きました

海上決戦

第３６話　海上決戦

「死ぬ気の炎……モスカとは違うな……」

『モスカ？』

（今は説明してる暇はない。サポート、頼んだぞ）

『うん、任せて！』

福音の翼には緑の炎が纏っている

「な、なあ海斗、アレは一体……」

「悪いな一夏、俺にもわからない。ただ一つ言えるのは気をつけろ、これだけだ」

「……きますよ」

恵美がそう言ったら福音がエネルギー弾を撃ってきた

「全機回避しろ！間違っても当たるなよ！」

そう言うと皆が回避行動に移る

全員が回避し始めるとエネルギー弾が近くの島に当たり岩などを

貫通した

「何だ、あの破壊力は！？」

「箒！余所見をするな！」

篠ノ之　箒が島を見てその破壊力に驚いていると、海斗に注意された。名前で呼んでるので海斗も十分に焦っていた

（どうする？あの翼を叩き折るのも硬化で難しいだろうし……）

『！！海君、あの子！』

皐月が呼んだ方を見ると攻撃を迎え撃とうとしている奴がいた

「ちっ、あの馬鹿！」

海斗がその人物に向かう

「避けきれないなら、落とすまでだ！」

海斗は雨のリングに炎を灯し、匣を開匣させ時雨金時を出す

（守式　七の型　繁吹き雨）

海斗は海水を利用して水のドーム状のものを作り攻撃を防いだ

「ったく、大丈夫か？」

「海斗……」

「馬鹿、あれはもう死ぬ気の炎何だ。一夏のそれは意味がない」

一夏は雪羅に目を配らせるがすぐに逸らし、福音を見る

「俺はどうすればいいんだ？」

「俺が隙を作る、そこをお前が叩け」

「わかった」

一夏に零落白夜で落とすよう伝える

「ねぇ、海斗……福音の様子が、おかしいよ」

シャルロットがに言われて福音を見るとインディゴの色に変わっていた

「う……嘘だろ？複数使えるのかよ……」

福音が藍色で纏った、エネルギー弾を放つ

海斗は直ぐ、霧のリングに炎を灯し、ボンゴレ匣を開匣させる

「ボンゴレ匣開匣！ムクロウ形態変化（カンピオ・フォルマ）！！」

ムクロウが姿を変える

「D・スペードの魔レンズ」

海斗は一つ一つの弾を見る

「幻覚と有幻覚……この量は迎え撃つのは難しいな。恵美、使え

！」

「！わ、わかりました」

その言葉に一瞬躊躇いが生まれるがロックを外し、ワンオフ・アビリティーを使用した

海斗も匣を開匣させる

「出てきてください。ベスター」

「出番だ、ナッツ！」

「「ガオオォォォ！！！」」

ベスターと呼ばれた天空嵐ライガー（リグレ・テンペスタ・ディ・チェーリ）とナッツと呼ばれた天空ライオン（レオネ・ディ・チェーリ）はエネルギー弾を見据える

「「咆哮」」

海斗と恵美が言うと

「「ガアアァァァ！！！！」」

辺りが震動するような程の雄叫びが聞こえた。それと同時にエネルギー弾が石化し、砕け散った

「す、すげぇ……」

「あ、あれだけの攻撃を……」

「一瞬で……」

「ありえませんわ……」
「あれが、海斗達の……」
「本当の力……」
「海斗と恵美さんは一体……」

「お前ら呆けっとするな！」

「まだ福音は動いてます！気を抜かないでください！」

二人が注意してると福音の翼が紫に変わり先程よりも多量の攻撃を危険と判断した海斗と恵美に放つ
海斗は雨のリングに炎を灯し、三つの匣を開匣させる

「ボンゴレ匣開匣！小次郎！形態変化（カンピオ・フォルマ）！！次郎は匣に戻ってくれ」

小次郎と呼ばれた雨ツバメＶｅｒ．Ｖ（ローンディネ・ディ・ピオッジャ　バージョンボンゴレ）は時雨金時と合体し、時雨金時は長刀に変わる
次郎と呼ばれた雨犬Ｖｅｒ．Ｖ（カーネ・ディ・ピオッジャ　バージョンボンゴレ）は海斗に小刀三本を渡し匣に戻る

「朝利雨月の変則四刀」

（守式　四の型　五風十雨）

三本の小刀の炎圧を利用して攻撃をかわしていく

一方恵美は二丁拳銃を使いながらかわし、自分に当たりそうなのを撃ち落とす

「面倒くさい。時雨蒼燕流　総集奥義」

海斗は変則四刀と時雨蒼燕流を使い、エネルギー弾に雨の炎を当てる

「時雨之化」

「弾の動きが止まった……？」

「違いますわ。よく見ると僅かに……」

「動いてる……」

「スピードを遅くしたのか……」

福音は海斗に向かって突っ込んでいく

「気をつけろ海斗！奴は零距離攻撃をするつもりだ！」

福音は海斗を包み込むが、海斗の姿は水と化した

（攻式　九の型　うつし雨）

後ろから現れた海斗は二本の小刀を福音に投げつける。雷の硬化で硬くした翼で受け止め、海斗は福音を通り過ぎる。すると海斗の後ろからいつの間にか出した次郎がいた。次郎は二本の小刀を拾うとその場を離れる

「合わせろ！」

「はい！」

海の中から海斗が出てきて、上空からは涼子がラケルタ・ビームサーベルを抜き福音に切りつけるが、それをかわされる。それを予測していた海斗は次郎から受け取った小刀で急加速する

「特式　十一の型　燕の嘴（ベッカタ・ディ・ローンディネ）！！」

福音に連続で鋭い突きを放つ

「一夏、今だ！」

「うおおおおっ！！」

一夏は福音の胴体へと零落白夜を突き刺した
福音は押されながらも一夏の首に手を伸ばす

「させないよ」

「散ってください」

海斗は右の涼子は左の手を落とす
そこで福音は動かなくなった

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……！」

一夏が息を切らしてるとスーツだけになった操縦者が海へと墜ちていく

「しまっ――！？」

「大丈夫です。息はありますから、生きてます」

「ナイス、恵美」

『終わったね、やっと』

（ああ、助かった。ありがとう）

『海君、かっこよかったよ』

他の皆を見ると戦いが終わって笑顔がこぼれていた

「海斗、お帰り」

「私にあまり心配をかけさせるな」

「ただいま、心配かけて悪かった」

『むぅ～……』

（どうした？）

『何でもない！』

シャルロットとラウラから言葉を貰い何故か怒っている皐月を不思議に思い旅館に戻っていった

海上決戦（後書き）

戦闘中は皐月の声は出ていませんがサポートはしていました

福音に死ぬ気の炎は難しかったです。何使えばいいのかわかりませんでしたが頑張りました

ではまた次回

感想・指摘等ありましたらお願いします

休息（前書き）

昨日に投稿しようとしましたが途中で寝てしまいました
申し訳ありません

では本文へ

休息

第37話　休息

「作戦完了――と言いたいところだが、お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

「黒羽、星野、柊はディーノ先生から聞いている、よって罰は無しだ」

「ありがとうございます」

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。け、けが人もいますし、ね？」

「ふん……」

怒り心頭の織斑先生に対して、山田先生はおろおろわたわたしている。さっきから救急箱を持ってきたり、水分補給パックを持ってきたりと忙しそうにしている。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。――あっ！だ、男女別ですよ！わかってますか、織斑君、黒羽君！？」

一夏はわかってますと言う顔をしている。海斗は何も言わず部屋から出ていこうとする

「診断に遅れるなよ」

「……わかってます」

織斑先生から注意を受け部屋から出て行く

『海君、どうしたの？』

（……）

『海君？』

パリンと何かが砕けた音がした。そしてドサッと海斗が倒れた

『え？海君！？海君！海君！』

（ああ、限界か……。ま、B級リングにしては保ったな……）

霧の幻術で誤魔化せた傷はリングが砕けたことにより、海斗から止めどなく血が流れ出した

「！？　おい海斗！大丈夫か！？待ってろ、直ぐに千冬姉を呼んでくる！」

（……この声、一夏か……。騒がなくても死なないよ）

部屋から出た一夏は通りかかり際に海斗が倒れてるのに気づき、直ぐに織斑先生を呼びに来た道を引き返す
一夏の声を最後に海斗は意識を手放した

「……っ！」

「無理に動くな。傷に響く」

「織斑…先生……」

「全く、織斑がすぐに呼びに来たから良かったが、あのまま放っておいたら死んでいたぞ」

「死に何かしませんよ。って言うか死ねる身体じゃありませんから」

「……。はぁ、どうやって傷を隠してたんだ？あの傷は酷かったぞ」

織斑先生は敢えて違うことを聞いてくる

「幻術で……」

『海君！それは言っちゃ……！』

（織斑先生は信用できる人だ、それに誰かに喋ったら殺すだけだ）

『殺せるの？』

（当たり前だ、俺はマフィアのボスだ）

『わかった。海君を信じる』

皐月は話すのは問題だと言うが、海斗は織斑先生になら言っても問題ないと判断した。仮に話したら消すだけだと言う

「……あまり面倒かけさせるな。馬鹿者」

幻術と言う単語には触れないところ海斗は安心した

「すいません。……自分は部屋に戻ります」

「傷はどうした？」

「もう平気ですよ」

そう言って海斗は自室に戻る
残った織斑先生は一人呟く

「お前が死ねば悲しむ奴はたくさんいるぞ」

海斗が寝てる間に泣きじゃくっていたシャルロット、ラウラ、涼子、恵美を思い出した

自室に戻らず海斗は一人旅館の屋根の上にいた。ここなら誰も探しに来ないと思ったからだ
現在７：３０過ぎ今は旅館の中で皆食事中だ

『ご飯食べないの？』

「今日は流石に食べる気になれない」

誰もいないので海斗は心の中ではなく口に出して喋る

「さっちゃんは信じてる？」

『あのイリヤと名乗ってた神様のこと？』

「ああ、イリヤが本当に神なのか半信半疑何だよな……」

『でも精神世界に入ってきたり、空間に穴を開けたりしたから信じるしかないよね』

「そうなんだよな。それにしても、何でイリヤは俺達をこの世界に連れてきたんだろうな」

『相手は神だからね。私達が考えてもわからないと思うよ』

「向こうの世界の事気にならないの？」

『気にならない、って言うと嘘になるかな。でも今は海君と一緒だからそこまで気にしてないよ』

「ありがとう。……今ここから見てる月も、俺達の世界の月も同じなのかな？」

海斗は空を見ながらぽつりと呟いた

ガタッ

「！！　誰だ」

海斗は少量の殺気を放ちながら音のした方をみる

「か、海斗……」

「涼子いつから其処にいた？」

警戒しながら涼子をみる

「え、えっと……。海斗が『向こうの世界の事気にならないの？』って言ったところから……ごめんなさい」

海斗は冥茄　皐月と言う存在がばれていないことに安堵した

「あ、あの！海斗って異世界の人間……何ですか？」

海斗はしまったと言う顔をする。そして話しをどうにかはぐらかそうとする

「何でここに来たの？」

「海斗は異世界の人間何ですか？」

「飯はどうしたんだ？今は夕食の時間だろ？」

「海斗は異世界の人間何でよね？」

「どうやって上がってきたんだ？」

「海斗は…異世界の人間ですよね？」

「外に出るなら先生に許可貰わないと」

「お願いします。教えてください。海斗は異世界の人間何ですか？」

頻りに聞いてくる涼子に諦めて話すことにした。勿論、皐月の事は伏せる

「ではそのイリヤちゃんが私達をこの世界に連れてきたんですか？」

「ああ、そうなるな。理由はわからないけどね」

「何か安心しました。同じ境遇の人が海斗で……」

「何で？」

「え！あ、あの、それは……／／／」

涼子は顔を赤くして俯く

「ま、別にいいけど。涼子は戻れるなら戻りたい？」

「あ、はい！いや、えっと……しょ、正直、わかりません」

おたおたしながら答える

「此方には私を育ててくれたお父様、お母様がいます。あちらにも私を育ててくれたお父様、お母様がいます。ですからわかりません。それに、恵美さんやシャルロット、ラウラ達と分かれたくありません」

「だよな。俺もあいつ等とは別れたくはないな。けど、向こうにも行きたい」

『私はこの世界でもいいかな』

皐月が会話に入る

（何で？）

『うーん、海君がいるからかな』

（俺もさっちゃんが目を覚ますまではこの世界にいなくきゃいけないしな）

「海斗聞いてますか？」

「……悪い、聞いてなかった」

涼子は睨んでからはぁとため息をつき、先程話したと思われる話しをする

「ですから、海斗はどう思ってるんですか？」

「俺はやることを終わらせてから向こうに戻りたい」

「やることって、あの黒羽　耕造っていう人を倒すことですか？」

「……倒すんじゃない、殺すんだ」

海斗は静かに殺気を出しながらハッキリ言う

「海斗、それは……「俺は部屋に戻る」……海斗」

涼子が何か言おうとしたが、海斗はそれを止めた

「わかりました。私も戻ります」

「んじゃ、戻るか」

「はい」

海斗と涼子は旅館の中に戻っていった

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても四二パーセントかぁ。まあ、こんなところかな？」

空中投影のディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺めながら、その女性は無邪気にほほえむ

「んー……ん、ん～」

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを呼び出す。そこでは白式

第二形態の戦闘映像が流れていた

「は～。それにしても白式には驚くなぁ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで――」

「――まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー〇〇一にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を現す

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

ふたりは互いの方を向かない。背中を向けたまま、束はぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける

どんな顔をしているのか、別に見なくてもわかる――

そんな確かな信頼が、ふたりの間にはあった

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行ったんでしょうか？」

「……白式を『しろしき』と呼べば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん。さすがはちーちゃん。白騎士を乗りこなしただけのことはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、そのコアを残して解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そしてそのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方がわからなくなり、いつしか『白式』と呼ばれ

る機体に組み込まれていた

「それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報をやり取りしていたとするよね。ちーちゃんの一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティーを開発したとしても、不思議じゃないよねぇ」

「……」

千冬は、答えない

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでだろうねー。私がしたから、確実にあのコアは初期化されたはずなんだけどね」

「不思議なこともあるものだな」

確かにそれについては、わからないというのが本当のことである
それは、束にとっても同じ。しかし、束は別にわからなくても問題はない

「……そうだな。私もたとえ話をしてやろう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねぇ」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることができるとする。そこで使われるＩＳを、その時だけ動けるようにする。そうすると、本来男が使えないはずのＩＳが使える、と言うことになるな」

「ん～？それだと継続的に動かないよねぇ」

「そうだな。お前は、そこまで長い間同じものに手を加えることはしないからな」

「えへへ。飽きるからね」

「……で、どうなんだ？とある天才」

「どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねぇ。いっくんはＩＳ開発に関わってないはずなのにね」

「ふん……。まあいい。次のたとえ話だ」

「多いねぇ」

「嬉しいだろう？」

違いないね、と返して束は千冬の話に耳を傾ける

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのＩＳの暴走事件だ」

束は答えない。そして千冬も言葉を続ける

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。さらに新しく現れたふたりの新たなＩＳの性能を見るために同じ炎を使用し

た」

「へえ、不思議なたとえ話だねぇ。すごい天才がいたものだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、十二ヶ国の軍事コンピューターを同時にハッキングするという歴史的大事件を自作した、天才がな」

「でも珍しいねぇ、ちーちゃんが間違えるなんて」

「何？」

「福音のに纏っていた……死ぬ気の炎、だっけ？アレに関してはなにも知らないよ」

千冬は考え込む
束もその事に関しては何も言わない

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ」
岬に吹き上げる風が、一度強くうなりをあげた

「――――――」

その風の中、何かをつぶやいて……束は消えた
忽然と。突然と。

「……」

千冬は息を吐き出して、後頭部を押しつけるように木に寄りかかる

その口から漏れる声は、潮風に流れて消えた

「……黒羽様に報告。跳ね馬にも一応報告しとく」

そして二人は気付かなかった、会話を聞いていた人物がいたことに……

休息（後書き）

海斗気を抜いてましたね～
『海君にしては珍しいよね』
さ、皐月さん！？どうしたんですか！？
『何となく来ちゃった』
はぁ、そうですか。ですが喋ることなどなにもありませんよ
『あるよ。海君の愛おしさや、かっこよさ、それに……』

えっと皐月さんが微妙に暴走してるので此処までです。感想・指摘あればお願いします
『海君の良さは全部伝わるかな～？』
皐月さん！戻ってきてーーー！！！

臨海学校終わり（前書き）

今回は早めに投稿できました

福音の操縦者が来ます

臨海学校終わり

第３８話　臨海学校終わり

翌朝。朝食を終えて、すぐにＩＳ及び専用装備の撤収作業に当たる
作業は十時を過ぎて終了。全員がバスに乗り込む。昼食は帰りの
サービスエリアで取るらしい

「あ～……」

通路を挟んで二つ斜め前に座っている一夏はボロボロだった

「どうした一夏」

「何でもない……」

何でもないなら何故ボロボロなんだ。と思ってると

「海斗様、これ……」

恵美があるものを渡してきた

「……昨日砕けたリング」

「集めておきました。全部揃ってるかわかりませんが……」

「ありがとう。後で処分しとく」

海斗は恵美からリングの破片を受け取る

『傷は大丈夫？』

（特に問題はない。心配かけて悪かった）

『朝食も殆ど取らなかったよね？』

（疲れが出て来てるからな……精神的な）

『無理しないでね』

（わかってるよ）

「ねえ、織斑　一夏君と黒羽　海斗君はいるかしら？」

皐月と話してると見知らぬ女性が入ってきた

「あ、はい。俺ですけど」

「……」

一夏は素直に返事をし、海斗は顔だけ向ける。年は二十歳くらいで、鮮やかな金髪が輝いてい

「君が織斑　一夏君かそうなんだ。へぇ」

「あ、あの、あなたは……？」

一夏は見られてるのに落ち着きがなくなっている

「私はナターシャ・ファイルス。＞銀の福音＜の操縦者よ」

「え――」

「ちゅっ……。これはお礼。ありがとう、白いナイトさん。それと君が＞ボンゴレ＜操縦者黒羽　海斗君か……」

一夏が困惑してると、一夏とは違う視線を此方に向ける

「あの子を助けてくれてありがとう」

あの子とは福音を指していると海斗は察した

「身体は大丈夫？」

初めてでしかも無理矢理死ぬ気の炎を出されて平気でいられる人間はあまりいない

「私は問題ないわ。あの子が守ってくれたから……」

「それはよか……っん」

一夏とは違いナターシャ・ファイルスは海斗の唇と自分の唇を合わせた

「ボンゴレ入りたかったら言ってくださいね。歓迎します」

「……。本当にありがとう。じゃあ、あたね。バーイ」

海斗は耳元で勧誘する。ナターシャは少し驚いた後、二つの意味でお礼を言う。
ひらひらと手を振ってバスから降りるナターシャ・ファイルスを一夏は手を振り返して、海斗は見守るようにバスから降りるのを見ていた

「浮気者め」

「海斗ってモテるねえ」

「……馬鹿」

「……女の子の目の前でキスなんて」

『海君に幻滅する』

「いきなりなんだからしょうがない」

「それにしては抵抗もしませんでしたよね」

ラウラ、シャルロット、涼子、は怒ってますオーラを出している。
恵美何かはリングに炎を少しだけ灯している

「落ち着け、話せばわかる」

『「「「「最っ低！！！」」」」』

五人に耳元でそう言われる。海斗は理不尽だと思った
一夏の方を見ると、ペットボトルを思いっきり投げつけられていた

「……」

バスから降りたナターシャは、目的の人物を見つけてそちらへ向かう

「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ。ガキの相手は大変なんだ」

そう言ってきたのは、千冬だった

ナターシャはその言葉に少しだけはにかんで見せる

「思っていたよりもずっと素敵な男性だったから、つい。特に、黒羽　海斗君の方はね……」

「やれやれ……。それより、昨日の今日でもう動いて平気なのか？」

「あの子と同じ事聞くんですね。それは問題なく、とは言い切れませんね。――けどあの子に私は守られていましたから、この程度ですみました」

「――やはり、そうなのか？」

「ええ。あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト、それにコア・ネットワークの切断……あの子は私のために、自分の世界を捨てた」

ナターシャはさっきまでの陽気な雰囲気など微塵も残さず、その身体に鋭い気配を纏っていく

「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、ありもしない兵器を使って全てのＩＳを敵に見せかけた元凶を――必ず追って、報いを受けさせる」

福音はコアこそ無事であったが、暴走事故を招いたことから今日未明に凍結処理が決定された

「……何よりも飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であろうと、私は許しはしない」

「あまり無茶はするなよ。この後も、査問委員会があるんだろ？しばらくはおとなしくしておいたほうがいい」

「それは忠告ですか、ブリュンヒルデ」

「アドバイスさ。ただのな」

「そうですか。それでは、おとなしくしていましょう。……しばらくは、ね」

一度だけ鋭い視線を交わしあった二人は、それ以上の言葉なく互いの帰路に就く。――またいずれ

そんな言葉が、二人の背中にはあった

臨海学校終わり（後書き）

イヤー早めに投稿できて良かった
「それでも三日は過ぎてるけどね」
今日はシャルロットさんですか。初めましてホリです
「シャルロット・デュノアです。此方こそ宜しくお願いします」
礼儀正しくていい子だね～
「そう思うなら海斗僕をくっつけて欲しいな」
可愛いからそうしよう！
「本当に！？」
あはは、冗談
「……」
ま、今後のてん…ガゴン…ちょ、ちょっと待った。それって……
「シールドピアース♪」
待て待て待て！それはマジで死ぬぅぅぅーーー！！！！
ズガン！ズガン！ズガン！
「ああ、スッキリした。それじゃあ感想・指摘あったらお願いします」
こ、こうなったら、違う人と……
「まだ生きてたんだ」
うぎゃあぁぁぁーーー！！！

毒サソリからの贈り物（前書き）

今回は臨海学校が終わり、夏休みに入る前の話しです

毒サソリからの贈り物

第３９話　毒サソリからの贈り物

『く～ろ～ば～く～ん／／／』

『おねぇ～さま～～／／／』

「海斗様～！どうするんですか～！？……」

「とりあえずは生き残りを探し出す。超直感が頼りだからな！」

「わ、わかりました！」

現在の状況

ＩＳ学園の殆ど（他学年、教師含む）が危険な状態になっていたこうなった経緯……時間を遡ってみよう

昼休み、それは起こった

「織斑先生、生徒の親から届け物です」

「何だ？」

「えっと、ですね……『いつも娘がお世話になってます。これは

ほんのお礼です。学園の皆で食べてください』だそうです。中身は……パイみたいですね」

手紙を読み終えた山田先生は中身を確認した

「律儀な親だな。生徒全員分とは」

「いえ、私たちの分も入ってるみたいですよ」

「そうか。では、有り難く受け取ろう」

「皆さんにも配ってきますね」

山田先生は職員室から出て行く

「あ、いました。黒羽君！星野さん！」

「「はい？」」

何故か少し疲れ気味の山田先生が走ってきた

「黒羽君、星野さん、生徒の親からの差し入れですよ」

山田先生はパイを包んだ袋を渡してきた

海斗と恵美はそれを見て顔を青くした。海斗達が見たのは紫色で食べたら死ぬんじゃないかと思われるものだった

「山田先生、それって……」

「パイですよ。美味しそうですよね、実際には美味しかったですよ」

（海斗様、あれって）

（ああ、多分…いや、確実にポイズンクッキングだ）

（山田先生食べちゃいましたよ。それにあの見た目で美味しそうってどう言うことですか？）

（多分ポイズンクッキング？、または？だろう……）

解説

ポイズンクッキング？とは見た目は少し失敗した料理に見えて、実はかなり危険。なにが起こるかわからない食べ物なのだ

ポイズンクッキング？とは？より完成度が上で見た目、味は一般の料理と変わらず皆がおいしく食べられる物なのだ

危険度は？と対して変わらない

？、？共に見た目（それを知っているもの以外）は美味しく見えるため、効果が出るのは少し遅めなのだ。だが、？よりも危険度が上なので意識があるうちに解毒剤を飲ませなければ、解毒するのも困難になる

「山田先生、何分くらい前に食べました？正確にお願いします」

恵美は山田先生の意識があるうちに聞き出せるだけの情報を聞き出す

「七分前ですね」

「何人くらいに渡しました？」

「ある程度全員に渡しましたけど……何か？」

「時間だ。離れるぞ！」

時計を見た海斗は恵美の手を引きその場から離れる

『黒羽君～～～～！／／／』

『星野お姉さま～～～～／／／』

「はわわわ。海斗様今回のはどんな効果なんですか？」

「見た目からすると……食べたら発情する、だろう」

「では今の女の子って……」

「見境なく襲ってくるだろうな」

『海君を襲おうとするなんて許せない』

（しょうがないだろ？今は……）

『そりゃあ食べたものは仕方がないけど……。海君を狙うのが許せないの！』

「海斗様、前方数三十、二年生と三年生です！」

「くっ！挟まれた……よし！飛び降りるぞ！」

海斗は窓を開け、恵美をお姫様抱っこして三階から飛び降りる

「ちょっ！海斗様！？さすがにそれは……！？」

飛び降りる瞬間に恵美が何か言ったが気にせず飛び降りた

「恵美、俺は解毒剤を持ってきて貰う電話をする。ここからは別行動だ」

「な、何でですか！？二人一緒の方が安全じゃないですか！」

「二人お陀仏になったら誰が解毒するんだ？」

「あ、そうですね。わかりました」

恵美は納得した

「んじゃ、後でな捕まるなよ」

「海斗様こそお気をつけて」

海斗と恵美は別々に別れた

海斗は携帯をとりだし電話をかける

「もしもし、海斗だ」

『じゅ、十一代目！どうしました？』

「ジャンニーニ、オペレーション・ＰＣ発動！」

『え！？あ、はい。分かりました。四十分…いえ、三十分ください』

「わかった。なるべく早く頼むな」

『お任せください！』

海斗は電話を切り携帯をポッケにしまう

「黒羽君、見ぃ～～っけ！／／／」

「しまった！？」

女子の言葉を聞きつけてほかの女子が群がってくる

「あ、やべ。こんなに人数いると……咬み殺したくなってきた」

周りに四十人位の生徒に囲まれた海斗はトンファーを出す

「さて、群れすぎだから咬み殺そう」

「掛かれぇーーー！！！」

「黒羽君！私を抱いて～～～／／／」

「一緒に快感を楽しもう／／／」

「やだ。君達大人しくしてなよ」

ぽちっ

海斗はあるボタンを押した

「や、なにこれ～～」

「黒羽君こう言うのが趣味なのね／／／」

上から網が降ってきて女子たちを一網打尽にする。が……

「海斗」

「お、一夏！大丈夫か！？」

一夏が来た。海斗は男だからと言うことで油断していた

「海斗、好きだ！」

「はい？」

海斗は一夏の言葉に言葉を失った

「俺と一緒に……！」

「駄目だよ。海斗は僕が貰うから」

何処からかシャルロットが現れた

「行こう？海斗、僕と一緒に……！」

「ふざけるな！海斗は俺のだ！」

「一夏こそなに言ってるの？海斗は僕と一緒の方が幸せなんだよ」

「なら海斗に選んで貰おうぜ」

「いいよ。選ばれるのは僕だけどね」

二人が海斗の居た方を向くが、その場に海斗は居なかった。海斗は逃げたしたのだ

「あぁーー！シャルロットの所為で海斗が……！」

「男なのに海斗に告白するからだよ！これは一夏の所為だよ！」

「同性愛のなにが悪い！愛に性別は関係ない！」

二人はしばらくその場で言い争っていた

～～ディーノｓｉｄｅ～～

「どうなってんだ？これ」

「ディーノ先生～～／／／」

「うわっ！どうするかな。紳士はレディを大切にするものだと、師から教わったからな……とりあえずは海斗と――っ！」」

ディーノは何かに手を引っ張られて近くの教室に入ってしまった

「ディーノ先生／／／」

「お、織斑先生……」

ディーノを引き込んだのは織斑先生だった

「ディーノ先生、私は貴方が……！」

「え？まじ？織斑先生までも？」

「この場には私たちしか居ません」

織斑先生はスーツを脱ぎ始めた

「ちょっ！待て！……ちっ！しゃーねぇ！」

ディーノは鞭を取り出し織斑先生の身体を縛る

「ディーノ先生さすがにこれは恥ずかしい／／／」

「わ、悪いけどしばらくこのままで居て貰うぜ」

織斑先生の上目遣いにディーノは一瞬たじろぐが、頭を左右に振り教室から出て行った

～～バジルｓｉｄｅ～～

「これは一体……！」

「バジルくん～～～。一緒に遊ぼー／／／」

「申し訳ないですが、お断りします！」

バジルは全速力でその場を後にする

「とりあえず、海斗殿とディーノ殿と合流しなくては！」

『バジル君～～～～！／／／』

「！？前から！」

『見つけた！バジル君／／／』

「追い付かれた！？」

「バジル君逃げ場はないよ？だ・か・ら、一緒に……／／／」

「ぜ、全力でお断りします！」

バジルは寒気がしてその場から逃げ出そうとする

「アルフィン！」

バジルは匣から雨イルカを出し、背中に跨り進行方向にいた女子をなるべく当てないように突っ切っていった

毒サソリからの贈り物（後書き）

どうでしたか？

一夏が海斗に告る。シャルロットがそれを邪魔する。自分的にはおもしろくできたと思うんですが……

最初はラウラでも良いかなと思ったんです。が、ラウラなら一夏を殺しかねないと思い止めました

ディーノと織斑先生とのくだりは即興です。もしかしたらこれを機にみたいな

バジルを襲おうとする人は次でわかります

そして次で収拾をつけます

ではまた次回

毒サソリからの贈り物　後編（前書き）

遅くなりましたがポイズンクッキング後編です！
書くのが疲れてきた……。けど諦めない！

では本文へ

毒サソリからの贈り物　後編

第４０話　毒サソリからの贈り物　後編

～～恵美ｓｉｄｅ～～

「こ、これは、困りましたねぇ～……」

恵美は周りを女子で囲まれていた

「お姉さま」
「逃げ場は」
「どこにも」
「ありません！」

囲んでいた全員が一斉に襲いかかった

「……やらせません」

何かが恵美の前に立ち、女子数人を倒した

「りょ、涼子ちゃん、助かりました～」

恵美は涼子が助けてくれてホッとしたが

「恵美さんは私が貰います……／／／」

「え？……んっ！」

ポイズン化した涼子が恵美を襲った

「……ふ、ふふふ、海斗様、待っててくださいね」

海斗の行動をある程度理解している恵美がポイズン化してしまった

～～海斗ｓｉｄｅ～～

『黒羽く～～～ん／／／』

「うざい！果てろ！」

海斗はダイナマイト（煙幕）を投げた

「さて、どうするか。……ディーノとバジルの二人は大丈夫だろうけど」

『海君！何か来る！』

その時海斗の前に何かが立ちはだかる

「見つけたぞ、海斗／／／」

その人物はラウラだった

「ラウラ……悪いけど先に行かせて貰うよ」

「行くなら私と一つになってからに……！／／／」

「お断り！」

海斗はダイナマイト（煙幕）をラウラに投げる

「私は軍人だぞ？」

ラウラは投げたダイナマイト（煙幕）を跳ね返そうとする

「甘い！行け！」

ダイナマイトは方向を変えて壁に当たり、煙幕を張る

「な、何……！？」

「残念だったな、ラウラ」

「ま、待ってくれ！私は……／／／」

海斗はラウラの言葉を聞かず逃げ出した、が――

「解毒剤が来るまで後二十分……。先はなが……うわっ！」

「キャッ！」

走ってたら誰かにぶつかった

『海君、チェックメイトだね』

（……みたいだな）

海斗はぶつかった時点でほかの女子が襲いかかってくると思ってたが、前を見ると誰もいなかった

「……」

ぶつかった女の子は驚いた顔で此方を見る

「あれ？君は……」

そして海斗は誰なのか解り、不機嫌な顔になる

「……貴方、黒羽くん……」

「失せろ」

海斗はドスのきいた声で相手を睨む

「……！」

「更識家がボンゴレに近づくな」

「……違う」

少女は小さな声で言う

「……私は」

『海君！』

「もう追いついたのか！？」

海斗は耳を澄ませると微かに足音が聞こえる

「お前はポイズン化してないんだな！」

「……し、してない」

少女はビクッと反応し答える

「なら来い！」

海斗は手を掴んで走り出す

「どこが安全だ？理科室に行きたいが、絶対に奴らと会うからな」

「……ＩＳ整備室……あそこなら、暫くは……安全」

恐る恐る少女は提案する

「……しょうがないな、あそこまで一気に行くか」

海斗は嵐の匣を開匣する

「ＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ」

海斗はさらに匣を開匣し、ＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉのホバーを使用する

「乗れ！」

「……」

「時間を稼がなくちゃいけないんだ！」

少女は戸惑ったが海斗と同じホバーに乗る。すると自然に海斗に抱きつく形になってしまう

「悪いが通らせて貰うぜ！」

海斗は方向転換し、突破を目指す。すると前からアルフィンと天馬（カヴァッロ・アロート）のスクーリアに乗ったバジルとディーノが見える

「「海斗（殿）！」」

「ディーノ！バジル！無事だったか、生き残りは？」

「駄目だ。織斑先生までもポイズン化してる」

「拙者の方も皆ポイズン化してます」

ディーノとバジルは海斗にしがみついてる少女に目を向ける

「海斗、その女の子は……」

「……あ、えっと」

「更識　簪知ってるだろ？」

「いいのか？」

「生き残りだからな、連れてきた」

ディーノとバジルに説明してると

「海斗様～～！／／／」

ポイズン化してる恵美が来た

「恵美！お前まさか……」

「か、海斗様、その女の子は誰ですか！？」

恵美は更識　簪がしがみついてるのを見て怒り出す

「海斗様に抱きつくなんて、海斗様は私の何ですからねー！！／／／」

「海斗、ここは任せろ！」

「拙者も助太刀します」

「お前らありがとな」

海斗はホバーを噴射して整備室を目指す

「行くぞ」

「参ります」

ディーノ達は足止めを始めた

「はぁはぁ、何とかたどり着いた」

「……大丈夫？」

「問題ない」

整備室に着いた海斗は更識　簪に冷たく言うと場所を離れて座る

「……黒羽、くん」

「何だ？」

更識　簪は何でもないと言い黙り込む
海斗は携帯を取り出し電話をかける

「ジャンニーニ、まだか？」

『十一代目！すいません。後五分待っててもらえますか？』

「了解。五分な」

電話を切り海斗は違うところに電話する

『何かしら？』

「おいビアンキ何故あんなことした」

海斗はビアンキと言う女性に電話をかけた

『どう?新しく開発したポイズンクッキングの味は』

「あんたの所為で殆どがポイズン化したじゃねぇか」

『安心しなさい、解毒剤は同じだから』

「安心できるか!」

『ま、せいぜい楽しむのね』

「あ、おい!」

ビアンキは無理矢理電話を切った

「……はぁ~。何なんだよ、全く」

海斗は不意に更識　簪が視線に入り、見ると何か作業をしていた

「何してんだ?」

「……」

『海君の事を無視するなんて、性格悪い』

(気にするなよ、此処からでないなら好きにさせとけ)

海斗はチラッと何してるかを見るとＩＳについてだと解った

「一から作ってんのか?」

「……（コク）」

「俺たちの技術貸してやろうか？」

「……でも、貴方は……私を、嫌ってる」

手が止まり、そう言って再び手を動かす

「更識　簪さっき違うって言ってただろ？」

更識　簪はまた手を止める

「違うなら手を貸してやる。その覚悟があるならな」

「……覚悟……」

自分にとって覚悟とは何か考えていた

「覚悟と言っても家族を捨てる覚悟だ――」

ドーーン！

「な、何だ！？」

いきなり扉が破壊された

「見つけましたよ。海斗様、さあ私と今一つに……！／／／」

「恵美さ～ん／／／」

恵美を先頭に女子が扉に立つ。涼子は恵美に抱きついていた

「海斗、俺と一緒に暮らそうぜ」

「死ね」

「ぐはぁっ！」

海斗はとりあえず一夏を戦闘不能にした

「海斗、誰なのその子！？僕がいるのにそれじゃ不満なの！？／／／」

「……何言ってんだよ」

「お前は私の嫁だろう！浮気は許さん！！／／／」

「……あのなぁ、何か勘違いしてないか？」

シャルロットとラウラが訳解らないことを言うがポイズン化してる所為だと思い、軽く受け流す程度にした

「……か、海斗お前の愛情表現はか――」

「キモい」

「ぐわあぁぁぁっ！」

海斗は一夏だけを確実に無力化した

「すまねぇ。海斗、負けちった」

「海斗殿、拙者が未熟なばかりに……申し訳ありません」

ディーノとバジルはポイズン化されていないが捕まっていた

「まぁいいさ。ちょうど時間だから」

その場にいた全員が?を浮かべる

「何言ってるんですか?強気は止めてください」

恵美は微笑みながら言った。そして一歩二歩と近づいてくる

「チェックメイトです。海斗様／／／」

「お前等がな」

その時煙が入り込んできた。海斗はやっとか、と安堵した

そしてポイズン化してる全員が倒れていった

海斗は直ぐにディーノとバジルの縄をほどき、全員を部屋に戻す作業に取りかかった

「はぁ〜〜、疲れたーー」

海斗達はは全員を部屋に戻した後自室に戻り、すぐにベッドにダイブした

幸いなのがあのポイズンクッキングは記憶が無くなることだった。学園内で匣兵器を使ったことがばれたら大問題に成りかねないので、

そこはビアンキに感謝した

コンコン

『海君、誰か来たよ?』

(誰だよ。疲れてるのに……)

居留守を使おうかと思ったが、織斑先生だったら後が怖いので仕方なく開ける

「……こんばんは」

「来たんだ?まあ、入りなよ」

扉をノックしたのは意外にも更識　簪だった。

海斗が部屋に入れと言って入るのに躊躇っていたが、海斗は何も言わずに部屋の奥に行くと更識　簪も海斗の後に続いた

「好きなところに座ってくれ。ベッドに座るなら奥な、手前は俺が使ってるから」

海斗がベッドに座ると、更識　簪は奥のベッドに腰掛ける

「それで、何しに来たんだ?答えを出すには早い気がするけど?」

「……覚悟の、意味がよくわからない…」

下を俯きながら小さく言った

「そのまんま、更識の家系を捨ててボンゴレに入るかどうかだ」

海斗は軽く言うがその答えは決して軽いものではないと、更識簪は理解していた

「……貴方は、どうして？」

「海斗でいいさ」

「……私も、簪でいい」

「了解。えっと、俺がボンゴレに入った理由だったな。まぁ、簡単に言うと親父を殺す（・・）ため。後は先輩達の恩返しだ」

「……何で？」

「それはいずれ話すさ。でも俺は今の生き方に後悔はしてない」

海斗は何の曇りもない目でハッキリ言った

「……私も、後悔……したくない。私も、力が欲しい……私の中にある覚悟の力が」

『力』その言葉と目は昔の海斗の目と同じだった。そして海斗は簪に最後の確認をとる

「更識を捨てるんだな？」

「……捨てる。暗部も更識も＞打鉄弐式＜も全部」

「後戻りは出来ないぞ」

「……いい。それが、私の覚悟だから」

全てを拒絶した目と何かにすがる目をした簪を見て海斗は本当に自分と同じだと感じた。それと同時にこの子は裏の社会の住人になってしまったと言う自分に対する嫌悪感を感じた

「わかった。覚悟は受け取った。専用機に関しては夏休み中にここに来てくれればいい」

「……ありがとう」

海斗は手紙に地図を書きそれを簪に渡す。簪は海斗にお礼を言う

「姉はどう出るかな？」

「……わからない。けど、気にならない」

「そっか。ま、俺にも関係ないしな。それじゃ、部屋に戻りな。それとも泊まってくか？」

「泊まる」

「え？」

海斗は冗談のつもりだったが、簪は本気で泊まるようだった。海斗は自分の失言にやっちまったと後悔して仕方なく泊めた

毒サソリからの贈り物　後編（後書き）

あー、何か勢いで簪出しちゃった……
それに最後の方も何か色々おかしい
どうしてこうなったのかは作者の自分でも解りません

まあ、次か次の次は夏休み編です。楽しみにしてください

感想・指摘ありましたら遠慮なくどうぞ

夏休み（前書き）

夏休み突入
夏休みにいきなりあの町が出てきます

夏休み

第４１話　夏休み

八月。ＩＳ学園は遅めの夏休みに入った
ほかの生徒は現在殆どが帰省中である
海斗は寮の部屋で山田先生から渡された小包を開けていた

「差出人は書いてないな、ん？手紙？」

小包から最初に出てきたのは手紙だった

「ええっと、『先日はごめんなさいね。新しいポイズンクッキングを試してみたくて送ったの。お詫びと言っては何だけど、ケーキ屋の割引券をあげるわ』……ありがたいな。誰か誘っていこうかな？」

海斗は誰を誘おうか悩んでいた。思いついたのが寮内を歩き回って誰かを誘うことにした
海斗が椅子から立ち上がると、小包の中にまだ何かは言ってるのに気づいた

「これ、雲のヴァリアーリングと霧と雲の匣だ。やっと届いたんだ」

海斗がＩＳ学園に入る前にヴァリアーの連中に予め造ってくれるようにお願いしたのが今やっと届いた

海斗はそれらをポケットに入れ、部屋を出る

「さて、どこ行くかな……」

部屋を出たのはいいが、行く宛もないのでどうしようか迷っていたら

「海斗、どうしたの？」

「悩み事があるなら私に相談したらどうだ？」

シャルロットとラウラが話しかけてきた

「シャルロット、ラウラ、そこまで悩んでないんだが……なあ、ケーキ好きか？」

「うん、好きだよ」

「私も好きだ」

「ならここに行かないか？」

海斗は先程ビアンキから送られた割引券を見せる

「明日なんだが、時間空いてるなら行かないか？無理して空ける必要はないけど」

「い、行く！行くよ！明日だね、うん行く！」

「わ、私も行こう。初めての誘いだからな」

「それじゃ決まりだな。明日の十時、場所はそうだな駅前でいいか？」

「いいよ」

「構わん」

「それじゃ明日な」

海斗は恵美と涼子の部屋に向かう。先程送られた雲のヴァリアーリングと霧と雲の匣を渡すために

コンコン……

「は～い」

ドアが開き、中から涼子が顔を出す

「よっ、恵美いるか？」

「海斗、はい、居ますよ。入ります？」

「それじゃ失礼するよ」

「海斗様！いらっしゃい」

部屋に入ると恵美がいきなり抱きついてきた

「邪魔するよ。そして離してくれない？」

「今日はどうしたんですか？」

「ちょっと渡すものがね」

海斗は恵美に雲のヴァリアーリングと霧と雲の匣を渡す

「これって……ヴァリアーリング！？それに、霧と雲の匣じゃないですか！？何でこれが……」

「あいつ等に頼んでヴァリアーリングは造ってくれるように頼んで、匣はいいのがあれば送ってくれるように頼んだんだ」

「いいんですか？」

「いいよ。使うのは恵美だし。後でＩＳにも量子変換（インストール）しておくから」

「わかりました。お願いします」

海斗は用事を済ませると腰を上げる

「用事はそれだけだから、邪魔したな。涼子もまたな」

「はい、また来てくださいね。お待ちしてます」

「時間があったらな」

そう言って海斗は部屋を出る

『この後はどうするの？』

（う～ん、とりあえず、修行かな）

『さっきもやったのに？』

（あれだけじゃだめなんだよ。もっとやらないと）

『……あまり無理しないでね』

（わかってる）

海斗は修行道具一式を持ち修行に出かけた

翌日

シャルロットとラウラと出かける約束をした海斗は待ち合わせ場所に向かっている

「中学を卒業して以来だな……」

海斗は卒業以来行っていない町を思い出していた

「先輩達のお陰で中学に入れたんだもんな……」

待ち合わせ場所が見えたとき海斗はあるものを見た

「なあ、いいじゃんかよ。俺らと遊ぼうぜ」

「そうそう。楽しいところに連れてってやるからさ」

「お断りします」

「私達は人を待っているのだ」

「そんな奴より俺たちと一緒の方が楽しいって」

シャルロットとラウラは見知らぬ男に話しかけられていた。所謂ナンパというやつだ

「……何あれ？」

『あれはナンパと言うやつだよ』

「難波？難波って船が暴風雨などで破損するって意味だよ」

『違うよ。そっちの事じゃなくて……「軟弱な主張の党派の事？」……違ーう！ナンパとは女性に声をかけて口説くこと！わかった？』

「じゃあアレは口説いてんの？」

『そう！』

「ふ～ん、気にくわないな」

皐月の説明でやっと理解した海斗は少し不機嫌な顔で近づく

「ほら行こうぜ！」

男Ａがラウラの手を掴もうとしたとき

ドカッ

「ぐわぁっ！」

男Ａが吹き飛ばされた

「ねぇ、君達何してんの？」

「海斗！」

「遅いぞ」

シャルロットとラウラは海斗が来て安心し、男Ａは海斗を睨みつける

「な、何すんだてめぇ！」

「お、おい！こいつの着ている服って……！」

「服がなんだよ。ただの学ランじゃねぇか」

「その学ランだよ。こ、こいつ並盛町のふ、風紀委員だ！！」

男Ｂが海斗の学ランを見て青ざめる。男Ａははぁ？と言う顔をしている

「へ、風紀委員だか、なんだか知らねえがやられて黙ってられるかよ！」

男Aは海斗に殴りかかるが

「弱者は地面に這い蹲りなよ」

返り討ちにし、地面に殴りつける

「そっちの君は殺るかい？」

「い、いいえ！失礼しましたぁ！」

男BはAを連れて逃げ出した

「大丈夫だった？」

「うん、ありがとう」

「来るのが遅いぞ」

「悪い。今ので水に流してくれ」

「今回だけだぞ。……ありがとな」

「どう致しまして」

ラウラが許してくれてそろそろ行こうとしたときシャルロットが海斗を見て

「ねぇ、海斗何で学ランなの？それにさっきの男の人その学ランを見て怯えてた見たいだけど……」

「ん？それはこれから行くところでわかるよ」

そう言って海斗は歩き出す。シャルロットとラウラは頭に？を浮かべながら海斗の後をついて行く

夏休み（後書き）

どうでしたか？これは続きます
最近続くものが大息がしますが気にしないでください

感想・指摘ありましたらお願いします

ではまた次回

並盛（前書き）

長らくお待たせしました

言い訳はしません

本文へどうぞ

並盛

第４２話　並盛

電車に乗って並盛に着いた

「海斗はこの町に住んでたの？」

「うん。中学まではこっちで住んでた。卒業してから、向こうに越したんだ」

「それで、これからどうするんだ？」

「そうだな。……母校によっていいか？」

「構わないぞ」

「僕もいいよ」

二人から了承を貰ったので、歩き出す。ラウラ達も後ろから着いてくる

「海斗の母校とはどんなところだ？」

「兎に角風紀に厳しいところ」

「厳しいってどれくらい？」

「どれくらいって言われても……織斑先生が優しく感じるくらい」

「教官より厳しいのか……」

男達がビビってたのは、並盛中学校の風紀が外にまで及んでいた事も教えて、二人は成る程と言う顔をした

「此処？」

「あぁ。並盛中学校懐かしいな」

「中に入っていいのか？」

「大丈夫。俺、風紀委員だったから。それに入るだけで何もしないよ」

そう言って海斗は校門から堂々と入る。ラウラも海斗に続いて同じように堂々と入る。シャルロットはお邪魔しますと小さく言い、海斗達に続く

「誰もいない学校も何か寂しいね」

「同感だ。静かだと何か寂しい」

「夏休みだからしょうがないだろ。……此処が俺が最後に使った教室だ」

海斗は教室のドアを開け中に入る

シャルロットとラウラは海斗を不思議そうな顔で見ている

「どうした？入らないのか？」

「海斗、その……」

「誰かが後を付けてきてる、だろ？」

「気づいてたのか？」

「当たり前。今のところ害がないから放ってるだけ」

海斗は教室を出て再び歩き出す。シャルロットとラウラは後ろを警戒しながら海斗について行く

「うわー、懐かしい。やっぱり変わってないな」

「応接室……？」

「あぁ。風紀委員が使ってた部屋だ。今は誰が風紀委員長かわからないけど……」

「海斗の後は誰もいなかったのか？」

「まぁね。風紀委員に入りたい人なんかいないから」

海斗はソファに座る。シャルロットは海斗の向かい側に座り、ラウラは海斗の隣に座る

「昔は書類整理を此処でしたなぁ」

「海斗は何で風紀委員に入ろうと思ったの？」

「俺も好きで入った訳じゃないんだ。入らされた、と言う表現が一番かな」

「入らされた？」

海斗は頷き思い出すように語る

「俺の前の委員長に目を付けられて、その後風紀委員に入りなよ、そう言われた」

「ＩＳ学園の風紀委員には入らないのか？」

「そうだな。入ろうと思ってるけど、考え中」

「そうか。もし入るなら私も手伝おう」

「僕も手伝うよ」

海斗はありがとうと言い、そろそろ行こうかと声をかけ並中から出る

「もうこんな時間か……どっかで昼飯にするか」

海斗は腕時計の時間を見て昼をどうするか何か食べたいのがないか、二人にきく

「私は何でもいいぞ」

「僕は海斗のおすすめがいいかな？」

「おすすめ……。なら、寿司でいいか？」

別にいいよと言われたので海斗はそれじゃあ行くか、と言って尾行している人物を気にしながら歩く

暫く歩くと店に着いた

「竹寿司。俺のおすすめの寿司屋だ」

そう言いながら海斗は店の中に入る

「剛のおっさん、久しぶり」

「ん？おぉ、海斗君か、いらっしゃい。後ろの嬢ちゃん達は連れかい？」

「まぁね。どうした？座れよ」

「海斗はこの方と仲良いの？」

「この人は山本　剛俺の先輩の親父さんだ」

「シャルロット・デュノアです」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「山本　剛だ、よろしくな。……それで海斗君、本命はどっちだ？」

「「……／／／」」

剛は耳打ちなどせず堂々と訊いてきた

「本命？違う違うただのクラスメートで友達なだけだよ」

「そうか。嬢ちゃん達も頑張れよ」

「は、はい」

「元々そのつもりだ」

海斗は何を頑張るんだ？と思いながら何を頼もうか考えている

「剛のおっさん、とりあえず鮪握ってくれ」

「あいよ、鮪ね」

剛は鮪を握る

「へぇ、此処って目の前で握ってくれるんだ」

「凄いな、流石はプロだ」

「鮪お待ち！」

「「「いただきます」」」

三人は声を揃えて言い、食べ始める

「美味しい」

「これは、刺身で食べるのとはまた違うな」

「あれ？剛のおっさん、鮪変えた？」

シャルロットとラウラは美味しいと絶賛しているが、海斗は今までの鮪とは違うと感じて尋ねる

「やっぱ気づいちまったか。今日だけは違う魚を使ってるんだ。何の魚が変わったか全部当てたら今回はタダにしてやる」

「本当か！？よし、頑張るか」

「味の方も頼むぞ」

「わかってるよ」

海斗は張り切っているが、シャルロットとラウラは何でわかる、みたいな顔をしていた

その後食べながら、三人で喋っていた。時々、剛が話に入ってきてラウラが今度握り方を教えて貰うように頼んでいた

「さて、答え合わせだ」

「よく食べてきたんだ。何が違うかはある程度理解しているつもりだ」

シャルロットとラウラも緊張した顔つきで答えを待つ

「間違いは……一つだ！」

「な、何だと！？一つ間違えた」

「でも凄いよ！一つしか間違わないなんて」

「普通なら出来っこないな」

「此処まで当てられるとは思わなかった。特別に半額だ！」

「え？あ、ありがとうございます！剛のおっさん！」

海斗は御代を払いまた来ると言い、シャルロットとラウラは剛と最後に何か話していたみたいなので先に店を出る

待ってるときに海斗は皐月が此方に来てから一度も話しかけてこないのを不思議に思った

「お待たせ、海斗」

「何話してたんだ？」

「秘密」

「そうか。ま、いいけどな」

どこで時間を潰そうか考えていると、後ろからの気配がいつの間にか消えていることに気づいた

そのことに海斗は訝しげに思うが今はラウラ達を優先にした

「どっか行きたいところあるか？」

「僕たち買いたいものがあるんだけどいいかな？」

「いいよ。どこに行きたい？」

「雑貨屋何だけど」

「了解」

海斗達は雑貨屋に足を向けて歩き出す
暫くすると雑貨屋に着いた

「海斗は此処で待っててくれ？」

ラウラにそう言われて海斗はわかったと言い、ラウラ達は店の中に入っていく

「はぁ、視線がウザい」

海斗が並盛を歩いていると、学ランを着ているので否が応でも視線が集まり、周りの人に視線を向けると目を背けるのでため息を吐いていた
シャルロットとラウラもそれに気づいてるが、海斗の言ってたのはこの事かと納得した

「それにしてもさっちゃんはどうしたんだ？呼び掛けても出て来ないし」

はぁ、と再びため息を吐く

「ため息を吐くと幸せが逃げるよ」

「何かあったのか？」

紙袋を持ったシャルロットとラウラが店から出てきた

「ちょっと、ね……。それより何を買ったんだ？」

「リングだよ。これは海斗の分」

シャルロットが紙袋からリングを取り出し、渡してきた

「……」

「も、もしかして、気に入らなかった？」

「いや、違うよ。ありがとう」

海斗はチェーンを取り出し、リングに通して首にかける。シャルロットとラウラにもチェーンを渡し、海斗と同じ様に首にかける

その後は目的のケーキ屋に足を運ぶ

「いらっしゃいませ。三名様ですね？」

「はい」

「では、此方へどうぞ」

店員に連れられて席に座る

「好きなの選んで良いぞ」

「僕はモンブラン」

「ラウラは？」

「ガトーショコラ」

「了解」

海斗は店員に注文する。因みに海斗はチーズケーキを頼んだ

「お待たせしました」

注文したのが運ばれてきたので、三人でたわいもない話をしながらケーキを食べる

店を出て特に行くところもなかったので、そのままＩＳ学園寮に帰ってきた

「海斗、今日はありがとう」

「偶にはこう言うのも良いだろ？」

「あぁ。楽しかったぞ」

二人は笑顔でそう言った

「そう言えば、いつの間にか気配が消えていたな」

「うん。いったい何が目的だったんだろ？」

「さぁな。あの後結局姿も現さなかったからな」

三人は付けるてきてた人物に疑問に思ったが、考えても仕方がないと考え今日は休むことにした

並盛（後書き）

どうでしたか？楽しんでいただけましたか？
「最近出番がないんだが……」
「同感ね。何で出さないのよ」
「わたくしたちはメインヒロインですのよ」
おやおや、箒さんに、鈴音さん、セシリアさんこんにちは。出番が少なくてすいません
「謝罪はいりませんわ。いつ一夏さんと付き合えますの！」
「ちょっと、何言ってんの？一夏と付き合うのは私よ」
「な、それならば間をとって私が一夏を貰おう」
「「何でそうなるのよ（ですの）！？」」
あー、騒がしいと一夏は違う人とくっつけようかな
「「「……」」」
うぉっ！急に静かになった。単純だな～
「「「……」」」
ちょっと三人ともそれは何かな？
「雨月だ」
「双天牙月よ」
「ブルーティアーズですわ」
ごめんなさい、もういいま…ギャアアァァっ！
「「「感想・指摘あったらよろしくな（ね）（お願いしますわ）」」」

依頼主（前書き）

長らくお待たせしました

短いですがよろしくお願いします

依頼主

第４３話　依頼主

「今日、客人来るから」

「……はい？」

夏休みが始まって一週間経ち、海斗は突然そんな事を言い出した

「はぁ、何でそんな大事なことをもっと早く言わないんですか」

「昨日の夜に電話が来たから」

「どんな用件何ですか？」

「専用ＩＳを造る。まあ、依頼だ」

「……時々、海斗様が何を考えてるのかわからなくなります」

「悪かったな」

恵美が何時頃来るのか訊こうとしたとき、インターホンが鳴る

「誰でしょう？」

「依頼主だろ」

恵美が「もう来たんですか！？」と騒いでる間に海斗は玄関に向かいドアを開ける

「いらっしゃい」

「お邪魔します」

簪が海斗の家に入り、リビングへと向かう

「恵美、客人が来たぞ」

「ふぇ！？あ、ああ、い、いらっしゃいませ？」

「何で疑問系……」

混乱してるところで名前を呼ばれ、驚いて何故か疑問系になってしまった

「紹介する。この子は今回の依頼主更識　簪」

「更識　簪よろしく」

「星野　恵美です。よろしくお願いします」

二人の簡単な自己紹介を終えたので早速ＩＳを造ることにした

「……どこで、造るの？」

「こっちだ」

海斗は二階に上がり一番奥の部屋の物置部屋を開け、隅の壁をコン、ココン、コンとリズムよく叩くと床が動き出し、階段が現れた

「この下だ」

「何で……わざわざ二階に……？」

「一階だと床の下の一部が空洞だと解るからだよ。二階の物置部屋だと好奇心旺盛な奴じゃない限り入らないから」

「何で…壁を叩くの？」

「電子ロックだと解析されるからだ。今の世の中こういう古典的なやり方が一番だと考えたんだ」

更に海斗は「それに一日毎にたたく回数や、リズムが変わるからバレる心配はない」と言い、簪は成る程と感心していた
地下に着くとそこは一つの部屋だった

「……ここは？」

「唯の空き部屋」

そう言って海斗は部屋から出る。簪もそれに続いて部屋を出る
暫く歩くと作戦会議室に着く、扉が開くと中には三人の人間がいた

「依頼主を連れてきたぞ。ジャンニーニ、リボーン、ラル教官」

「意外と早かったな」

その中で赤ん坊位の大きさでおしゃぶりを首から下げているリボーンが口を開く

「今日来ることは伝えたはずだけど？」

「時間は十時だぞ」

「早いに越したことはないだろ」

「まあ、そうだな」

「簪、自己紹介」

海斗が促すと、簪は海斗より一歩前に出て自己紹介をする

「更識　簪です」

「更識って言うと、更識家の人間だな」

リボーンの言葉に今度はラルが続く

「ああ。確か、現在の十七代目当主更識　楯無、ＩＳ学園の生徒会長で自由国籍のロシアの代表操縦者だったな」

「そうだったんだ。ま、俺にはあまり関係ないけどな。……ジャンニーニ、準備はできてるよな？」

「はい。ですが、属性の方は……」

「それなら問題ない。簪の属性は雨だ」

「わかりました。では作業に取り掛かります」

「ほら、簪も行ってこい」

「……海斗は？」

簪は海斗を見て、来ないの？と言いたそうな目をしている

「俺はちょっと話があるからな。早く行かないと迷子になるぞ？」

「……うん。いって、きます……」

「いってらっしゃい」

簪は早歩きでジャンニーニの後を追った

扉が閉まった時にリボーンが口を開いた

「信用できるのか？相手は更識家だぞ？」

「初めて会った頃、あいつの目は何か俺と似てたんだよな。簪は姉と比べられては自分の頑張りを認められない、それを繰り返し比べられてきたから、あんな目をしてしまった」

「それでも演技という可能性もあると思うが？」

「それはないな」

ラルの言葉に海斗は否定する

「何故ならあいつは、最初自分一人でＩＳを組み立てようとしたし、姉のことは気にならないと言った。それに一番確信したのは、簪が全てを捨てると決めたときの目だ」

「成る程な、お前が名前で呼ぶ理由も何となくわかった気がするぞ」

リボーンが納得したので、簪達を追おうとしたらリボーンが再び口を開いた

「そう言えば、海斗が連れてきた女、目を覚ましたぞ」

ピタッと海斗の動きが止まる

「五日ぐらい前だな。誰が入っても、誰の言葉も耳にしなかったぞ。お前に会いたいとは言ってたけどな」

「ほ、本当か……？」

「ああ。一度も部屋から出ていないから海斗の部屋に居るはずだぞ」

海斗は直ぐに作戦会議室から出て行き、自分の部屋に向かった。

彼女が目を覚まして待っていてくれると信じて

依頼主（後書き）

六日経つのに短い……本当に申し訳ございません！

次回は海斗がボンゴレアジトに連れてきていた女とは誰なのか！？

勘がいい人はわかると思います

言い忘れてましたが、アルコバレーノは全員生きてます

では、感想・指摘ありましたらお願いします

P．S．

夏休み中にこういうエピソードが読みたいと言う方は教えてください

なるべく期待に応えるようにはしますので

ではまた次回

目覚め（前書き）

前回に続き彼女が出てきます
新しいＩＳも……

目覚め

第４４話　目覚め

海斗は自分の部屋の扉を開ける

「……誰ですか？私は今誰とも会わないと言ったんだけどな」

中にいた人物は扉の方を見てないので、入ってきたのが海斗だとは知らない

「心配したよ。一週間も話しかけても返事がないから」

「え？」

海斗が喋り出したところで中にいた人物は入ってきたのが海斗だったと今気づいた

「まさか目が覚めてたとは、何でイリヤは教えてくれなかったんだろうな……」

「あ、え？な、なん……で」

海斗はベッドの上に座っていた人物に近づき、目の前に来ると海斗は頭に手を乗せ撫でながら言葉をかける

「おはよう、さっちゃん」

「海君……おはよう！」

今此処に海斗の仲間冥茄　皐月の目が覚めた

「やべ、簪の所に行かないと」

皐月の目が覚めて、海斗の部屋で暫くの間話をしていたら、海斗は簪のことを思い出した

「もう行くの？」

「なら、一緒に行くか」

「うん、行く！」

皐月はベッドから降り、海斗の腕に自分の腕を絡ませる
暫く歩いてると漸く簪達の居る部屋にたどり着く

「簪、ジャンニーニ、正一、スパナ進んでるか～？」

「……そこまで、進んで……誰？」

簪が進んでないと言おうとしたら、海斗の隣で腕を組んでいる皐月を見る。と言うか睨んでいる

「冥茄　皐月。海君の仲間だよ♪」

「ズルい……」

皐月が自己紹介しても簪は睨んでいる

「……腕、組んでる……」

「ん？ああ、さっちゃんもう着いたから腕放していいだろ」

「え～！後少し……」

「駄目だ。迷わないと思ってやったんだから」

「わかった。じゃあ見てる」

皐月は腕を放すとＩＳの設計図を見て少し羨ましそうな顔をしている

「リングと匣は俺が何とかするから後は頼んだよ」

「お任せください」

「夏休みが明けるまでには完成させとくよ」

「大丈夫。ウチ達に任せろ」

ジャンニーニ、正一、スパナが夏休み中に仕上げると言っているので大丈夫だろうと判断した海斗は、一度家に戻ろうかと考えていたら正一が何かを思い出したように話しかけてくる

「そうだ。海斗君に言われてたＩＳが完成したよ」

「本当か！？」

「うん。リングと匣の方の量子変換（インストール）は任せたよ」

「ああ。サンキューな。さっちゃん、ちょっと来て」

正一にお礼を言うと皐月を連れて部屋を出ようとするが一度立ち止まり

「簪も来るか？大体の希望は言ってあるんだろ？」

「じゃあ、行く」

簪も部屋を出るために海斗達の方に向かう

「じゃ、後は頼んだよ」

そう言って海斗達は部屋を出る

「海君、新しいＩＳって？」

「見てからのお楽しみ」

「……誰の？」

「それもお楽しみ」

海斗はとある部屋の前で立ち止まる

「？この、部屋が…どうしたの？」

「え？いや、何でもない。ほら、行くぞ」

海斗は歩き出し、皐月と簪も慌てて海斗について行く
漸くＩＳのある部屋に着いた

「此処？」

「ああ。暗いから気をつけろよ」

海斗が扉を開くと其処には、一体のＩＳがあった
扉が閉まると真っ暗になり、明かりをつけると今度は黒と白のＩＳがあった

「これが、新しいＩＳ……」

海斗も完成したものを見るのは初めてだったので、少しだけ驚いている

「これ、誰が乗るの？」

「さっちゃん、君が乗るんだ」

「そうなんだ。……って、わ、私！？」

「これはさっちゃんがいつ目を覚ましても良いように造って貰ったんだ」

皐月はじっとＩＳを見つめていた

「私のＩＳ……でも、大丈夫かな」

「何が？」

「このＩＳ私に応えてくれるかなって……ちょっと心配になっちゃった」

「さっちゃんが信じていれば大丈夫だよ。初期化、最適化を始めよう」

「うん！」

皐月の嬉しそうな声に海斗は一瞬だけ顔を曇らした

「……手伝うこと、ある……？」

「ん～、そうだな。隣の部屋に上から二段目、右から三番目の引き出しに橙色と紫色それと緑色の匣と三つのリングが入ってるはずだから持ってきてくれないか？これが鍵」

「わかった」

簪は部屋を出る

「海君、ありがとう」

「どう致しまして。さて、後五分はこのままな」

「りょ～かい」

扉が開き、そちらを向くと簪が匣とリングを持ってきた

「持ってきた」

「ありがとな。えっと＞リズヴェッリョ＜に使う属性大空、雷、雲に設定。それ以外の属性は責任者の許可により使えるものとする。リングは精製度Ａの大空×１、雷×２、雲×２リングを使用、匣は大空、雷、雲を一つずつ使用。……これ位かな」

海斗はリングと匣を＞リズヴェッリョ＜に量子変換すると海斗は後三分か、と呟いた

三分後……

「一次移行終了。それじゃあ、試運転行こうか。場所移動するよ」

＞リズヴェッリョ＜を待機状態にし、別の部屋に移る

「広い…」

「此処なら十二分に動かせるから」

皐月にＩＳを展開するように言い、はじめにトレーニングルームで飛ぶことから始める

暫くして匣の開匣もし、漸く全ての試運転が終わり、家に戻る

「ただいま」

「海斗様、簪ちゃん、おかえりな…さ……い……」

「ん？どうした？」

恵美が目を見開き海斗の後ろを指さす

「ああ、彼女は冥茄　皐月この家のもう一人の同居人」

「冥茄　皐月よろしくね」

「えぇ～～～！？」

「うるさい」

海斗が紹介し、その後自分で自己紹介すると、恵美が驚きの声を上げ簪がうるさいと言いソファに座る

「海斗様、お昼はどうしますか？」

「そうだな。夕飯の買い出しとかもあるから今から行って昼と夕を買っとくか」

そう言って海斗は一人で行こうと考えていたが

「ついて行って良い？」

「別にかまわないけど」

「そ、それなら私も行きます！」

「どうせなら皆で行くか。簪も来るだろ？」

「……（コク）」

皆で行く事が決まり、準備を始める。と言っても海斗は学ランを着ていく

「……学ラン？」

簪は不思議そうな顔で此方をみる

「変か？」

「……変、じゃない……ちょっと、不思議に…思っただけ」

皆の準備が終わったので、家に鍵をかけて近くのデパートに向かった

目覚め（後書き）

どうでしたか？冥茄　皐月目覚めました
リズヴェッリョはイタリア語で目覚めと言う意味です。皐月が使うにはちょうど良い名前だと思い使いました

それと入江　正一、スパナは既に仲間です。よってメローネ基地突入はありません

では感想・指摘ありましたらお願いします

和服の少女（前書き）

お待たせしました
何とか書けました……
前話の続きです

和服の少女

第４５話　和服の少女

みんなで買い物に近くのデパートまで来た

「簪は泊まってくのか？」

「……泊まる」

四人分合わせるから海斗は金は足りるかな、と考え皆に何が食べたいかを訊く

「今日何が食べたい？昼と夜別々で」

「昼はパスタで夜は肉じゃががいいな」

と皐月

「オムライスとゴーヤチャンプルが食べたいです」

と恵美

「うどんと、カレー…」

と簪

「見事にバラバラだな……」

海斗が何にしようか迷っていると

「さっきの女の子すっげー可愛かったよな」

「本当、本当マジやばいわ。話しかければよかった」

すれ違う人たちが何故か騒がしかった

「何かあったのかな？」

「さあ？兎に角、昼と夜を決めよう」

「パスタと肉じゃが！」

「オムライスとゴーヤチャンプルがいいです！」

「うどんとカレー……」

三人は何にするか揉めている

「なぁ、あの子めっちゃ可愛くね」

「うぉっ！本当だ。モデルか何かか？」

男達の見ている方を見ると赤い布地に所々蝶のような模様が入った和服を着た女の子がいた

「海君、何見てるのかな？こっちは真剣に考えてるのに」

何でもないと言い、とりあえず昼だけでも決めてくれと言うと再び口論になる

「じゃんけんで決めろよ……」

海斗はあきれた口調でそう言うと、三人はじゃんけんを始める、が

――

「もしかして、海斗……？」

さっきの和服少女が話しかけてきた

振り返ると見覚えのある顔だった

「…海斗、知り合い……？」

「どっかで見たことある気がする」

簪が少しだけ怪訝な顔で相手をみる。皐月は少女の顔をじっと見る

「海斗誰ですか？」

「彼女は更識　簪。こっちの彼女は冥茄　皐月」

「……初めまして」

「思い出した！会うのは二回目だね！」

簪は挨拶をする。皐月は会うのは二度目だと言う

「彼女は柊　涼子。名前、聞いたことあるだろ？」

「柊研究所で第五世代ＩＳ所持者……聞いたことは、ある」

「更識　簪と言うと、更識家の妹さんですね、初めまして」

「こちらこそ」

涼子と簪は普通の挨拶をする。涼子は今度は皐月の方を向き

「冥茄さんとは福音事件で会ってますね。久しぶり、でいいんでしょうか？」

「うん。えっと、柊さんでいいのかな？」

「涼子でいいですよ。更識さんも」

「……なら…私も簪で、いい……」

「皐月って呼んでね。涼ちゃん」

「涼ちゃん？」

「涼子だから涼ちゃん」

涼子成る程と納得し、あだ名を許した　二人は握手して挨拶をする
そこで海斗は涼子の意見も聞こうと考えた

「なぁ、涼子。昼飯食べたか？」

「いいえ、まだですけど……」

「ならさ俺の家で昼食べていかないか？」

「行きます！」

涼子は即答で行くと答えた

「何か食べたいのはあるか？」

「なら焼きそばにしませんか？私材料買ってるんで」

かごの中を見ると人参、キャベツ、玉ねぎ、ピーマン、もやし、豚肉、ネギ、焼きそば麺が入っている

「もしかして家族と食べる予定だった？」

「違いますよ。お父様とお母様は旅行で出かけてるので家で一人だったんです。ですから気にしないでください」

「それじゃあ夕飯も食べていくか？」

「良いのですか？」

「構わないよ。出来れば夕飯の献立も考えてくれると助かるな」

あの三人ではいつまで経っても決まらないと思い涼子に決めてもらうことにした

「いいですよ。では行きましょうか」

涼子が歩き出し、海斗達は涼子について行く。因みにかごは海斗が先程受け取った

「それで何にする予定だったんですか？」

「肉じゃが！」

「ゴーヤチャンプル！」

「カレー……」

昼は決定しているので夕飯に食べたいものを言う

「海斗は？」

「何でもいいよ」

それが困るんですよね～。と呟きながら店の中を見て回る

「海斗、失礼ですがお金いくら位持ってきてますか？」

「そこそこ持ってきてるよ。金なら気にしなくていい」

「では今日は海鮮丼にしましょう」

「涼子ちゃん、決めるの早いですね」

「悩むと何も決まりませんから」

そう言って涼子は刺身をかごに入れていく

「これ位ですかね」

ある程度入れるとレジに向かい、お会計をする
家に着き早速料理を始めようとするが――

「海斗、私が作りますよ」

「いいよ。自分で作るから、それに折角の着物汚したら勿体ないだろ？」

「私料理よくするんですよ。着物を汚さない自信はあります。それに折角呼んでいただいたので……」

海斗は悩む仕草をして一つの提案を出す

「なら夕飯を作ってくれないか？海鮮丼なら油を使ったりしないし」

「わかりました。ではお夕飯で」

そう言って涼子は居間に戻っていく

海斗が料理している間に女子達は涼子をじっと見ている

「な、何ですか？」

「料理スキルって必要なんだね」

皐月がそう言うと恵美と簪はうんうんと頷く

「えっとこれは女の嗜みだと思ってますから」

「涼子ちゃん今度料理教えてください」

「はい、いいですよ」

恵美が料理を教えてくれるように頼むと涼子はそれを了承した
其処で簪はふと思ったことを皆に訊く

「……何で……海斗が、好きなの…？」

「え！？そ、それは……／／／」

「わ、私は…その……／／／」

「海君は、凄いから……／／／」

「俺が何が凄いんだ？」

「「「「ひゃあぁぁっ！！！」」」」

簪が唐突に聞き、涼子、恵美が顔を真っ赤にし皐月は少し恥ずかしそうに言うと、海斗が突然会話に入り四人は驚きの声を上げる

「そんなに驚くことはないだろ……」

海斗が呆れ気味に言いながら料理を並べてく

「あ、言ってくれれば運びましたのに」

「運ぶだけだからね。一人で出来るよ」

海斗が席につき、恵美達も座り直す

「「「「「いただきます」」」」」

「美味しいです」

「海君腕上げたね」

「海斗は料理が上手なんですね」

「…美味しい……」

食事を始めると皆が美味しいと言ってくれて海斗はうれしく思った
海斗は先程の話を聞くが涼子、恵美、皐月が顔を赤らめるが箸だけは何でもないと言い、海斗は無理に聞こうとしなかった

「あ～、涼子後で話があるからいいか？」

海斗は思い出したように言う

「いいですけど。何ですか？」

「だから後で話すって。ごちそうさま」

海斗は食器を下げる

「海斗様私が洗います」

「それじゃあお願いしようかな。少し仮眠取るけど何かあったら

起こして」

そう言って海斗は自室に戻り、恵美と皐月は海斗の行動が不思議に感じた

和服の少女（後書き）

涼子の普段着は和服です
学園内では和服は着ていません
理由は咄嗟に思いついたからです

感想・指摘ありましたらお願いします
ではまた次回～

初対面（前書き）

何とか書けた……
お待たせしました
それではどうぞ

初対面

第４６話　初対面

「……何か、疲れたな……」

海斗はベッドに入るなり呟く

「簪が来て、さっちゃんが目を覚まして、ＩＳを見て、渡して、量子変換して……他にも色々……」

海斗は意識を手放し、眠りについた

「――――！――――！」

誰かの声が聞こえるが海斗は目が覚めない

「――――！――――！」

「……誰……？」

「目が覚めた？」

目を開けると目の前に人がいた

「顔色が悪い」

「だったら起こすなよ……」

起こした人物を睨みながら言う

「迷惑だった？」

「どっちかと言うと迷惑」

「ごめんなさい。けど無視した黒羽様が悪い」

「仕方ないだろ？疲れてるんだから」

誰にもバレてないよなと聞くと頷いて答えた

「顔色が悪い」

「そんなに悪いか？」

「いつもと違うからすぐわかる」

「海斗起きてますか？」

涼子がドアをノックしてきた。海斗はとりあえずリディアをクローゼットに隠すことにした

「どうしたの」

「随分お疲れだったみたいですから」

「大丈夫。問題ないよ」

「そうやってまた無理するんですか？」

涼子は少し睨みながら言ってきた

「今回は本当に大丈夫だから」

海斗は大丈夫だと言うのを突き通すつもりで居るが

「顔色が悪いです」

「そんなに悪いか？」

（リディアと同じ事言うなよ）

海斗は苦笑しながら思った

「恵美さん達も心配してましたよ。海斗の調子が悪そうだと。……？」

涼子は少し部屋に違和感を感じた

そして部屋をキョロキョロし始める

「何？」

「女の人の匂いがします」

こいつは犬か、と思いながら誤魔化そうとする

「恵美だって入ってるんだから」

「恵美さんとは違う匂いです。皐月さんの匂いでも、簪さんの匂いでもありません」

「この一日で匂い覚えたんだ」

海斗は感心するが冷や汗を掻いていた
そして涼子は海斗のクローゼットに目を付ける

「怪しいです。あれ位の大きさなら人一人入れますよね？」

クローゼットをじっと見つめ海斗に訊く

「そうだな。入るな」

海斗は諦めたように言うと、クローゼットが開き中からリディアが出てくる

「ごめんなさい。気配を消せなかった」

「……誰ですか？海斗は女の人をこっそり連れ込むような人だったんですか」

疑いの眼差しで海斗を見る

「誤解だ。リディアが勝手に入ったんだ」

「その通り。黒羽様を責めるのは筋違い」

「悪いがこの事は黙っててもらえないか？こっちにも事情がある

んだ」

海斗は涼子に頼み込み、リディアも何も言わないが頼み込んでいる涼子はため息を吐き

「わかりました。彼女が勝手に入ってるなら海斗は悪くないですから」

了承し、海斗とリディアはありがとう、と言うがリディアは一つ条件を出した

「その代わり、いつか事情を話してくださいね」

「ああ。約束する」

その後は涼子は海斗と一緒にリビングに戻り、リディアは部屋から外に出ていった

リビングに入ると恵美、簪、皐月が海斗のことを凄く心配していた

海斗は大丈夫だと言い、涼子は夕飯の支度をし始めた。時刻は７：３０だった

２１：００頃

夕飯を食べ終わり、家で少しくつろいでいたら何時の間にか時間が遅くなっていたので、海斗は涼子を家まで送っていた

「すいません。送っていただいて」

帰り道に涼子が突然そんなことを言ってきた

「気にしなくていい。こんな時間になったのは俺の所為でもある

から」

「ですが……」

「夕飯まで作って貰ったんだ。これは俺からの厚意だ」

「好意…ですか……／／／」

「ん？」

涼子は顔を赤くした。海斗は何故かはわからなかった

「あ、い、いいえ。そ、それより、海斗の家って恵美さんだけだったんじゃ……」

誤魔化すように話を変える

「さっちゃんは色々あって一緒に住めなかったんだ。簪は今日は泊まって行くらしい」

「そうだったんですか」

その時涼子の顔が少しだけ沈んだ

「涼子の親はいつ帰ってくるんだ？」

「わかりません。旅行と言っていましたが、研究が主でしょう。色んな資料持って行きましたから」

「そっか。偶に、と言うかまた遊びに来いよな。待ってるから」

「はい！」

海斗は涼子にまた来るように誘い、涼子はその約束に乗った

「……」

「な、何ですか？」

海斗はじっと涼子を見つめていた

「いや、今更ながら着物きれいだなって。こう、月に照らされてると昼間とは違う魅力があるなと思ったから」

「……／／／。も、もう、何いってるんですか！！冗談は止めてください！！／／／……恥ずかしいです／／／」

「俺は嘘は言うけど、冗談は言わないよ」

突然の言葉に涼子は顔をボッと朱くして下を向きながら海斗に言う。更なる海斗の追い打ちに涼子は益々顔を朱くする

「い、意地悪です／／／」

「そうか？俺は自分の言いたいことを言っただけだが」

「本当に……意地悪です／／／」

海斗はあはは、と笑いながら

「まあ、ハッキリ言うと着物を着ている人とは出会えないかと思ってたから嬉しいんだ」

その後暫く何も喋らずに歩いてれとやがて涼子の家にたどり着いた

「きょ、今日は本当にありがとうございました」

「どう致しまして。じゃあな。お休み、涼子」

「はい。お休みなさい」

海斗は涼子の家から自分の家へと引き返し、涼子その背中を見えなくなるまで見つめていた

初対面（後書き）

改めて遅れてすいません

書いてて思うのですが、出てくるキャラが偏ってる気がします。気のせいだといいんですが……

そして今回は涼子がメインでした。自分の中では涼子と言うキャラは好きです

次回はなるべく早く更新するように頑張ります

感想・指摘ありましたらお願いします

ではまた次回～

喫茶店と強盗（前書き）

今日は喫茶店で強盗が来る話です
意外な時間解決です

喫茶店と強盗

第４７話　喫茶店と強盗

「正一、そっちの調子はどうだ？」

「ダメだ、こっちも出来ない」

「「はぁ～～」」

朝　９：００

海斗は昨日の朝７：００位からアジトのとある一室に技術者入江正一と一緒に一日と二時間はいた

二人は何をしているかと言うと、海斗は匣制作、正一はリングの制作に取り掛かっているのだがなかなか完成しないのである

更に三十分後、海斗の携帯が鳴る

「はい。もしもし」

少し不機嫌そうに電話にでる

『も、もしもし？海斗、だよね。どうしたの？』

電話をかけてきたのはシャルロットだった

「どうしたのって、電話をかけてきたのはそっちでしょ」

『あ、いや、何か海斗機嫌悪そうだから』

ズバリ言うと海斗はそれを誤魔化すように言う

「気のせい。それで何？」

『うん。これから買い物に行くんだけど、暇なら一緒にどうかなって』

「悪い。今忙しい、今日は無理そうだ。次の機会に頼むよ」

『そ、そう。わかった。それじゃ、また今度ね』

電話を切ると正一が話しかけてくる

「行ってくればよかったのに」

「こっちを優先しないといけないから。シャルロット達には悪いけど遊んでる暇はないんだ」

「分かってるけど、流石に辛いよね」

ずっと部屋にいて疲労がたまっていた。正一の場合は簪のＩＳ造りもやっているので結構疲れている

「正一は少し寝てていいぞ。それで怪我されたら俺も辛いから」

「わかった。ありがとう」

正一は部屋を出ていく。一人になった海斗は気合いを入れ直し、

匣制作を再開した

それから三時間が過ぎ１２：３０頃正一が戻ってきた

「どう？作業の方は」

「全然だめ」

海斗は頭から煙を出して机に突っ伏していた

「散歩でもしてきたらどうだ？こんな所にずっと居ると気が滅入るだけだぞ」

「リボーン、居たんだ」

入ってきたのが正一だけじゃないとわかっても疲労で驚いた反応を見せない

「さっさと外に行ってこい」

リボーンが海斗の頭を蹴り、突っ伏していた状態から起きあがろうとしたが蹴られた反動で机に顔を思いっきりぶつける

「何すんだよ。馬鹿やろう」

「のろのろしてるからだぞ」

「分かったよ。外の空気吸ってくる」

そして海斗は部屋から外に出ていった

「あれでよかったのかな？」

「よかったぞ。海斗は根を詰めすぎだからな。少しくらいリラックスさせないと、いざって時にへばっちまうからな」

そう言ってリボーンも部屋から出て行き、残された正一はリングの制作に取りかかる

「今更シャルロットに電話しても仕方がないし、誰かを誘う気にもなれないからな」

ぶつぶつ独り言を言いながら歩いていると――

「喫茶店にでも行って、落ち着くかな」

――この暑い中を歩いてるのがイヤになった海斗は近くの喫茶店に足を運んだ

そこがメイド（&執事）喫茶とは知らずに

「いらっしゃ……か、海斗！！？？」

「シャルロット……いや、それともシャルルと呼んだ方がいいか？」

店に入るとシャルロットではなくシャルルがいた

「もしかして海斗ってこういう店に興味があったの？」

「こういう？」

「ここ、メイド喫茶だよ」

「あ、そうなんだ。別にいいじゃん。それに今、少しだけ機嫌が悪いから変なこと言わないでね」

匣制作が終わらない海斗は現在イライラしている

「あ、うん。えっと……一名様ですね。こちらへどうぞ」

「ちょっと待て」

シャルルが案内するが海斗は待ったを掛け

「お客様の前でこれは失礼だぞ」

シャルルのタイが少し曲がっていたので直し、肩に手を押いて注意する

「あ、ありがとう」

お礼を言い、再び席に案内され、そこに座る

「それでは何かありましたら、何なりとお申し付けください」

そう言うとシャルルは他のテーブルに向かった

（でも以外だったな。まさか、シャルロットが働いてるなんて、でも学園に申請したのか？）

そんな事を思いながら何にするか決めていると

「全員、動くんじゃねえ！」

男が三人ドアを破らんばかりの勢いで雪崩れ込んできた
一瞬、店内が静まったが、威嚇と思われる銃声で客が悲鳴を上げた

「きゃあああっ！？」

「騒ぐんじゃねえ！静かにしろ！」

海斗は男達の方を見ると、背負っているバッグから紙幣が飛び出していたので、銀行強盗だと判断するが、興味がないようですぐに目をそらした

（並盛だったらすぐに咬み殺していたんだけど）

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちはすでに包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す――」

警察機関の動きは迅速で、窓を見ると数台のパトカーによる道路封鎖とライオットシールドを構えた警官が包囲網を作っていた

「……なんか」

「……警察の対応も」

「……古……」

緊張感のない呟きが聞こえたが海斗は気にしない

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺たち全員――」
「うろたえるんじゃねえっ！焦ることはねえ。こっちには人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」
リーダー格とおぼしき体格のいい男がそう告げると、逃げ腰だった他の二人も自信を取り戻す
「へ、へへ、そうですよね。俺たちには高い金払って手に入れたコイツが――」
「すいません。そこの銀髪のメイドさん。注文いいですか？」
男がショットガンを天井に向けたときこの場に合わない、注文する客がいた
「御注文は？」
それを指名されたメイド、ラウラが対応する
「エスプレッソ。それと抹茶を三つ」
注文すると、ラウラはすたすたと奥にいく
「てめえ、大人しくしやがれ！」
「とりあえず座ろうか？」
男が威嚇とばかりにハンドガンを注文した客、海斗に向ける
「俺たちはそんな暇なんて――」

「エスプレッソと抹茶三つだ」

ラウラが戻ってきて、注文した品を置く

「飲め。そして、こんな事をしたわけを話せ」

そう言って無理矢理座らせ、理由を聞く

数十分が経ち、男達から理由をどうにか聞き出した

理由はこの女性優遇の時代で会社をクビにされ、他に雇ってくれるところも無かったから、仕方なくやってしまったとのことだった

「そんな事したら両親泣くよ、田舎の祖父、祖母にも迷惑がかかるんだ。自首した方がいい」

リーダー格の男に言うと、泣きながら

「うぅ……ほんの出来心だったんだ。やる前は躊躇ってたんだ。コイツ等だって俺が無理矢理……」

「兄貴！俺は兄貴だから此処までやったんです。兄貴だけが悪いんじゃない」

「俺も同じ気持ちです。兄貴」

「お、お前たち……」

「自首、するよな……？」

「「「はい……」」」

そう言って男達は店の外に出て投降し、捕まった
店内を見ると客の中では貰い泣きしていた奴がいた

「お疲れ様、海斗」

「流石私の嫁だ。戦わずして勝つ、見事だった」

シャルロットとラウラがそう言うと海斗は疲れた調子で――

「久しぶりに人を諭すのは疲れるな。あのまま、咬み殺してもよかったんだけど、下手したら今は殺しそうだから」

平然という海斗にシャルロットとラウラは海斗の恐ろしさを今一度知った

「じゃあ、俺は行くわ。裏口は？」

「あ、待って。僕たちも行くよ。代表候補生でＩＳ学園の生徒だってバレたら、無断バイトをしたこともバレちゃうから」

「それもそうだな。私もここら辺で失敬するとしよう」

海斗達は@クルーズを出て、気づかれないように警察の後ろを通っていった

海斗はシャルロット、ラウラと別れ家に戻っていった

そして夜、海斗は今日一緒に買い物に行けなかったお詫びをする

ためにシャルロットとラウラの寮の部屋の前に来ていた

コンコン

「はーい、どうぞ～」

上機嫌な声で許可をもらい、不思議に思いながらドアを開ける

「失礼するよ。今日は悪かっ……」

悪かった、と言おうとしたが海斗は部屋の中にいる、黒猫と白猫に黙って目を向けていた

（えええええっ!?か、海斗!?だって今は家に帰ってるって、何で今日に限って!?――うあああっ、猫パジャマ着てるのにっ。ち、違うよ?こ、これはね、今日ショッピングで見つけて可愛かったから買ったんでね、そのね、いつもはもっと大人っぽいの着てるんだよ?ち、違うんだよ!?）

来客が海斗と思わなかったのでシャルロットの頭の中はパニックになっていた

「か、海斗。いったいどうしたんだ?」

シャルロットに捕まっていたラウラが恥ずかしそうに訊いてくるが海斗はそれを聞いておらず、いきなりラウラとシャルロットを抱き締めた

「ふぇっ!?か、海斗!?な、何!?え!?」

「な、何だいきなり、私にも心の準備が……！？」

「可愛い、すげー可愛い」

（可愛い、可愛いって僕が？て言うか何で抱きしめてるの！？あぁっ！？）

（こ、これは、着ていて良かったのか？そ、それに、可愛いか……）

シャルロットとラウラは頭の中で先程よりも混乱していた

海斗はそんな事お構いなしにシャルロットとラウラの肉球に触り出した

「いやあ。いいな。可愛いな、ラウラの黒猫もシャルロットの白猫も可愛いよ」

「そ、そそ、それより海斗、な、ななな、何しに来たの？」

「ん～？あ、そうだった。悪い、悪い、ついやっちまった」

謝りながらも、二人を離さない海斗は部屋に来た理由を話す

「今日は一緒に買い物にいけなかったからそのお詫びと言っちゃ何だけど、今度並盛で夏祭りがあるんだ。よかったら、行かないかと思って」

「「ま、祭り……？」」

海斗が頷くと、シャルロットとラウラは少しだけ考え

「だ、誰が行くの？」

シャルロットがおずおずと訊いてくる

「涼子と恵美、後知り合いが二人で、五人だな」

「そ、それは、女か……？」

今度はラウラが訊いてくる

「ん？女だけど。それがどうかしたか？」

「い、いや、何でもない。ふむ。私も行こう」

「僕も行くよ。……負けるわけにはいかないから……」

最後にシャルロットが何か言ったが、聞くのも野暮と思いやめた

「全員で七人だな。日にちは来週の日曜、時間は１７：００までには並盛駅に居てくれ迎えに行くから」

二人はわかったと言うと、疑問に思ったことを恥ずかしそうに聞いてくる

「な、何で抱きしめてるの？」

「可愛いから」

「ミミは触らないのか？」

「俺は肉球が好きなんだよ。……このまま、持ち帰りたい」

海斗が何気なく言うと、ラウラは

「私は別に構わないぞ。持って帰って貰っても」

嬉しそうな口調で堂々という。シャルロットは

「ぼ、僕は、その……うぅ」

恥ずかしそうに顔を赤くしながら、下を向く
二人の反応は海斗にとっては嬉しい反応だった

「気丈な猫と恥ずかしがり屋の猫もまたいい」

海斗は更に強く、優しく抱き締める。シャルロットとラウラは顔を見合わせて、クスッと笑い出した
海斗は嬉しさの余りに、二人が笑うのを気にしていなかった
しばらくすると海斗は家に帰り、シャルロットとラウラは寝るときまで、顔を赤くしていた

喫茶店と強盗（後書き）

どうでしたか？
まず、強盗の方は海斗が意外な片づけ方をしました
猫パジャマについては海斗は余りにも可愛いので、暴走してしまったと言うことです。書いてて少し羨ましいと感じてしまった

では、感想・指摘ありましたらお願いします

次回もお楽しみに～

ヒロインとＩＳ設定３（前書き）

今回はヒロインとＩＳ設定第三弾です！

では、どうぞ～

ヒロインとＩＳ設定３

ヒロイン

名前　冥茄　皐月【めいな　さつき】

髪の色　赤みがかった茶髪

瞳の色　茶色

性格　妙に海斗に似ているところがある。　悩みは訊かれても海斗以外には話さない

好きなもの　海斗　仲間　小動物　御守り

嫌いなもの　危険と感じたもの　海斗（自分の命を安く見ている）

　昔から海斗と一緒にいた所謂幼なじみ。
ある日、海斗の力が暴走してしまった所為で永らく眠りについていた。海斗はそれを悔やんでいた
今まではイリヤの力で海斗の魂と皐月の魂を繋いでいた。そのお陰で海斗から色々な知識を抜き出していた。更にイリヤの力を使い身体を入れ替えることが出来るようになった
夏休みに入ってから本体（皐月自信の体）が目を覚めた。原因は未だ不明。本人は気にしていない様子
彼女も海斗、涼子と同じく異世界の人間
海斗の全ての秘密を知る唯一人の人物

所持品　専用ＩＳ　御守り　伸縮自在の薙刀

ＩＳ説明

専用機リズヴェッリョ（第６世代型）

武装　薙刀　鉄扇

リング　大空×１　雷×２　雲×２の精製度Ａのリング

匣　大空　青空狼名前はルー（ルーポ・アッズッロ）
　　雷　雷虎名前はティール（ティーグレ・フールミネ）
　　雲　雲鹿名前はチェル（チェルビオ・ヌーヴォラ）

単一仕様（ワンオフ・アビリティー）

疾風迅雷

名前　イリヤ

髪の色　白

瞳の色　翡翠

性格　神で無口　海斗、涼子、皐月を見守っている

好きなもの　???

嫌いなもの　黒羽　耕造

海斗、涼子、皐月をこの世界に送った張本人。その際に海斗達の記憶が失っているのに驚いている。皐月は本来この世界に来るべき人物ではなかった。此方に飛ばした理由はまだ話さない気でいる
海斗達が危なくなっても干渉はしないが、命の危険があれば現れると思われる
海斗が創る精神世界にも干渉できたり、?世を連れてきたりと並の神ではない

名前　リディア・スティール

髪の色　黒

瞳の色　深紅

性格　無口ではないが、余り喋らない

好きなもの　レガーメファミリー　ボンゴレファミリー

嫌いなもの　???

隠密行動を得意とするレガーメファミリーの若きボス。部下からも慕われている

海斗とは同盟を結んだときに知り合った（十代目の代で同盟）。その頃から海斗の事を「黒羽様」と呼んで慕っている（好意があるとも思われる）。因みにディーノは「跳ね馬」

リディアの存在を恵美、皐月は知らない。涼子とは「第４６話　初対面」で初めて会っている

今は篠ノ之　束の行方を追っている

ヒロインとＩＳ設定３（後書き）

どうでしたか？
皐月のＩＳはワンオフでは形態変化しません
イリヤは忘れられない内にまた出そうと思ってます

感想・指摘ありましたらお願いします

ではまた次回～

夏祭り（前書き）

ギリギリ一週間以内に投稿……
すいませんでした！！！
理由は後書きでします

では本文へどうぞ

夏祭り

第４８話　夏祭り

日曜日。１６：５０海斗は早めに駅に向かったが、既にシャルロットとラウラは駅に着いていた

「悪い。待たせたな」

「ううん、そんなことないよ。僕達も今来たところだから」

「何を言っている？既に此処に来てから海斗が来る二十分前には既に此処にいたぞ」

「ちょ、ラ、ラウラ！」

ラウラが包み隠さず証す

「そうか。悪かった」

「え！？あ、ううん。別に大丈夫だから」

「まあ、何人かに声を掛けられたがな」

「ラ、ラウラ～！……そ、それより海斗一人だけ？恵美と涼子達は？」

「ああ。他はまだ支度してるよ。並盛神社で集合だから、行くよ」

海斗が歩き出すと、後ろから二人も付いてくる

神社に着いたが、恵美達はまだ来ていなかった

「まだ来てないみたいだな」

「だが、此処で待ち合わせてるなら、待っていればいずれ来るだろう」

「それもそうだな」

海斗は嬉しそうにしているシャルロットとラウラを横目で見ている

（連れてきて正解かな？）

と考えてたら視線に気づいたラウラが

「何だ？どこか変か……？」

自分に変なところがないか確認する。隣にいるシャルロットも慌てて変なところがないか確認する

「いや、変な所はないよ。浴衣も似合ってるし」

「ほ、本当！？似合ってる？」

「私はこういうのは着慣れないのだが……似合ってるならば問題ないな」

「二人共よく似合ってるよ」

二人の浴衣はシャルロットはオレンジ色でハイビスカスの花が描かれた浴衣で、ラウラは黒色で紫陽花が描かれた丈の短い所謂ミニ浴衣だった

シャルロットは先程よりか嬉しそうにしている。ラウラは丈が短いのが少し気になっているようだった

「海斗様」

「海斗」

恵美と簪が神社にたどり着き、海斗に声を掛ける

「来たか、少し遅かったな」

「すいません。準備に手間取ってしまって」

「……」

恵美が理由を話すが簪は恵美の後ろにいて出て来ようとしない

「簪ちゃん」

「……恥ずかしい」

「何のための浴衣ですか？」

恵美が体を横に動かすと簪の浴衣姿が出て来た

「おぉ、似合ってる」

簪の浴衣は水色で金魚が描かれた爽やかな浴衣だった

「海斗様私の浴衣は似合ってますか？」

「去年とは違うんだな。でもそっちの方が似合う」

恵美の浴衣は白で薔薇と蝶が描かれた浴衣だった

因みに去年のは若草色のイラストが描かれていないシンプルな浴衣だった

「後は涼子と――」

「海君～～！」

海斗が来ていない人たちの名前を挙げようとしたら、後ろから抱きつかれた

「さっちゃん、いきなり抱きつかないでくれる？」

「遅くなったお詫び」

海斗は心の中で「そう言うお詫びはいらない」と思いながらため息を吐いた

「皐月さん、いきなり危ないですよ」

「涼子も来たか。これで全員だな」

「はい。遅れてすみません」

「えへへ。ねえ、海君、浴衣似合う？」

「見えないからわからない」

そう言うと皐月は海斗から降りて浴衣姿を見せる

皐月の浴衣は恵美と同じ白だが、イラストは赤色の紅葉が描かれた浴衣だった

「私は、どう…ですか？」

「大人しい感じがしていいと思うよ」

涼子の浴衣は藍色で椿のイラストが右足にしか描かれていない控えめで大人しい浴衣だった

「シャルロットとラウラには自己紹介してなかったよな。この子は冥茄　皐月。そしてこっちの子が更識　簪。簪は日本代表候補生兼ＩＳ学園の四組のクラス代表」

「こんばんは。よろしくね」

「……こんばんは」

皐月は普通に簪は控えめに挨拶する

「こっちはＩＳ学園一組、フランス代表候補生シャルロット・デュノア。こっちがＩＳ学園一組、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒ」

「よろしくね」

「よろしく頼む」

シャルロットとラウラは普通に挨拶する

「自己紹介も済ませたし、行くか」

海斗が歩き出すと、真ん中に道が……出来なかった
それをシャルロットとラウラは不思議に思った

「海斗、どうして道が出来ないの？」

「普通なら、海斗を恐れて道が出来るんではないか？」

初めて並盛に来たことを思い出した二人はその疑問を海斗に訊く

「一々道を空けたら皆が祭りを楽しめないから」

「一昨年くらいから『気にしないで楽しんでくれ』って言ったんですよね」

海斗に続くように恵美が言う

「ま、そんな事より楽しもうか？」

皆が頷き、先ずは一番定番の金魚すくいをやることにした

「誰やる？」

「私がやろう」

「私もやります」

ラウラと恵美がやることになった

屋台のおじさんからポイと器を受け取り、始めようとするが海斗は念の為ラウラにアドバイスしておく

「ラウラ先ずは手まで水に浸けてポイ全体を濡らすんだ。そしてポイは水中で平行移動させ、水中から出し入れする際は斜めにする方がいい。金魚をすくった際も、真上に上げずゆっくり枠に引っかけるように斜めに持ち上げた方が破れ難いからな」

ポイを水全体に浸けるのは自殺行為に見えるが、実際は水の抵抗を受けなくなるので取りやすくなる

ラウラはアドバイス通りにやると、簡単に金魚を掬って見せた

その後も二匹取りなどで周りの見物人は歓声をあげる。隣の恵美もそれなりにとってはいたが、すでに破れていた。中には八匹ほどいる

ラウラもたった今破け、中は十一匹ほどいる。二人は金魚を水槽にリリースする

「それじゃあ、次はどうする？」

「……かき氷」

「いいですね。定番です」

「了解」

簪がかき氷を食べたいと言い皆意見を言わないので決定した

「味は何がいい？」

「私はブルーハワイで」

「私はメロンを」

「マンゴーかな」

「レモン」

「僕は練乳」

「私は宇治時雨」

「俺はコーヒーかな。練乳入りで」

上から恵美、涼子、皐月、簪、シャルロット、ラウラ、海斗の順番で頼む

因みに宇治時雨は宇治にミルクをかけたもの

全員がそれぞれ頼んだものを受け取り、歩きながら食べる

「ねえ、海斗コーヒーは美味しい？」

「美味いよ。食べるか？」

海斗はスプーンをシャルロットに向ける

「い、いただきます」

シャルロットは口に運ばれたスプーンを食べると何かを思い顔を赤くする

（な、何か自然な流れで言っちゃったけど、これって…あれだよね…？……か、間接キス！？わ、わあ！ど、どどど、どうしよう！？か、海斗が自然すぎるから……つ、つい……！）

「美味しいだろ？」

「う、うん。お、美味しいね」

海斗は別に気にしていなかった、と言うよりそんな事すら考えていなかった

「あれ、他の皆は？」

「は、はぐれちゃったね」

海斗が周りを見渡すとシャルロットと二人だけになっていた

「はぐれたときの集合場所決めとくんだったな」

「決めてなかったの？」

「ああ。いつも道が開くから」

その内見つかるだろうと考えてシャルロットと一緒に祭りを楽しむことを決めた

～～涼子・皐月ｓｉｄｅ～～

「涼ちゃん、皆とはぐれちゃったね」

皐月は周りを見渡し、涼子に教える

「みたいですね。どうします？」

涼子も言われた後に周りを見渡すが慌てた様子はなかった

「２０：００に花火が始まるから、その時に穴場に行けばあえると思う」

「じゃあそれまで時間を潰しましょう。もしかしたらどこかで会えるかもしれませんからね」

二人は時間になるまで祭りを楽しむことに決めた

～～恵美・簪・ラウラｓｉｄｅ～～

「……皆は？」

簪が周りを見て恵美とラウラに訊く

「ふむ。プライベートチャンネルで確かめるか」

「駄目ですよ。私達がＩＳ学園の生徒だって公にしない方がいいですよ」

恵美が部分展開使用とするラウラを止める

「ならばどうする？携帯は気づかないだろう」

「２０：００まで待ちましょう。その時間になれば皆集まりますから」

「……どこに…？」

簪が首を傾げて訊く

「秘密です。時間まで祭りを楽しみましょう。皆さんと合流するかもしれません」

恵美の意見でラウラと簪は反対しなかったので祭りを楽しむことにした

～～海斗・シャルロットｓｉｄｅ～～

「どうする？」

「花火の穴場があるから、恵美とさっちゃんがいるならそこに行くと思うよ」

シャルロットは海斗に一つ質問をする

「海斗は、その……冥茄さんの事が好きなの？」

「好きだけど？」

その言葉にシャルロットは一気に気分が沈んだ

「そ、そうなんだ。ごめんね。僕なんかで」

泣きそうな顔で謝るシャルロットに海斗は理由が分からなかった

「何で謝るんだよ」

「だ、だって、二人は付き合ってるんでしょ」

「誰がそんなこと言ったんだ？俺とさっちゃんはそんな関係じゃないぞ」

海斗は更に理由がわからなくなった

「だ、だって愛称で呼んでるし、祭りを回ってるときだって楽しそうにしてたから」

「もしかしてシャルロットも愛称で呼ばれたいの？」

「そ、そんな事……」

無いとは言い切れないから段々と声が小さくなる

「そうだな。シャルはどうだ？短くしただけだが俺は良いと思うけど」

「シャル……。うんいいよ！凄く良い！」

どんっ！

誰かがシャルにぶつかり、よろける

「大丈夫か、シャル？」

「う、うん、ありがとう。／／／……あれ？」

シャルと言われて顔を赤くしたが違和感があり手を見た後足下を見る

「どうしたの？」

「き、巾着袋が無い……」

シャルは手に提げていた巾着が無くなり酷く困った顔をしている

海斗は顎に手を当て、よく思い出すと先程ぶつかった三人組の男を思いだし、シャルの手を引き歩き出す

「か、海斗、いきなりどうしたの！？」

「もしかしたらさっきぶつかった男共が取ったのかもしれない」

「でも証拠は何も……」

海斗は何か考えがあるみたいなので、シャルは何も言わなくなった

漸く先程ぶつかった男共を見つけた

「ねえ、君達」

「あ？何だよ」

海斗が肩をたたくと反応した

「彼女から袋取ったよね」

「知らねーよ。変な言いがかりつけんなよ」

「おかしいな。他の人も見てたんだよね。アンタらが盗ったのを」

「ならそいつを連れてこいよ。巾着袋何て盗ってねぇんだから」

海斗はニヤリと笑い

「何故彼女が巾着袋を盗られたのを知ってるんだ？」

「アンタが言って……」

「無いよ。俺は袋と言ったんだ」

男は海斗を突き飛ばし、残りの二人を連れて逃げ出した

「追うぞシャル！」

「うん！」

海斗達は男を追うために走り出す

そして神社の境内まで逃げ込んだ男共を追い詰めた

「さて、返して貰おうか」

海斗が一歩歩き出すと、海斗の肩を何かが掠める

「それ以上近づくと撃つぞ」

今、祭りの中で発砲しても祭りの騒ぎでかき消されると踏んでいる

「なら、撃ってみて下さい。撃たせませんけどね」

いきなり声のした方を向くとナイフが男の手に当たり、拳銃を離す

「海斗様大丈夫ですか？」

「め、恵美……！」

「私達もいるよ」

恵美の後ろから皐月、涼子、ラウラ、簪が出てくる

「さっちゃん！それに、みんな！」

「手前ら袋の鼠だな」

リーダー格の男が言うと拳銃や鈍器、刀を持った奴らが囲んでいた

「もう直ぐ花火の時間だ。その音になら、拳銃の音など誰も気にしない」

「そうか。アンタら有名なヤクザ一味か。まさかこんな所で会えるなんてな」

海斗は臨戦態勢に入る。他の皆も臨戦態勢に入り、合図をなしに一斉に駆け出し、倒していく
いきなりの不意打ちに相手は戸惑い、銃を持ってる奴らから倒し、次に刀を持ってる奴を倒し、鈍器を持つ奴を倒す
ＩＳの代表候補生ならこの程度雑作も無いことだった

「これで、最後！」

海斗はリーダー格の奴を気絶させ、シャルに巾着袋を返す

「ありがとう」

「気にするな。それよりお前らよくわかったな」

「……走ってるのが……見えた」

「此方でも見えましたから、何かあったんではないかと思って追いかけてきたんです」

「そっか。ありがとな」

簪と涼子が言うと海斗は素直に礼を言い林の奥に行く
恵美と皐月も慌てて追いかけようとする

「三人ともどこに行くんだ？」

「もうすぐ花火か始まるから、穴場に行くんだよ。皆も早く」

皐月が促すと全員が歩き出し、木が開けた場所にでる

「始まる」

海斗が呟くと、ドオオォォォォン！と花火が打ち上げられた

「……綺麗…」

その言葉に皆が何も言わなくても同じ気持ちだとわかる

「海君、写真撮ろう」

「写真？」

皐月が言うには思い出作りで花火をバックに写真を撮りたいみたいで、みんなに訊いたら了承したので写真を撮ることにした

「それじゃあ撮るぞ」

海斗はタイマーをセットし、端に並ぼうとするが、誰かが腕を引っ張り真ん中に入りシャッターが切られた

その写真はひと夏の思い出として残された

夏祭り（後書き）

どうも、一週間以内に投稿しようと頑張っているホリです

今回は夏祭りです
遅くなった理由は皆さんの浴衣をどうしようか考えていました
そしたらいつの間にか一週間……本っ当に申し訳ありません！
あ、後次回からシャルロットではなくシャルと呼ぶようになります。
いつシャルと呼ばせようか考えたら今回のを切っ掛けに愛称で呼ばせることにしました

次回はレギュラーメンバーを海斗の家に招きます。やっとリングを渡せる長かった……

では、感想・指摘ありましたらお願いします

ではまた次回～～

風紀財団（前書き）

徹夜したらギリギリ間に合った……
最近ギリギリなのが多い

では本文へどうぞ～

風紀財団

第４９話　風紀財団

夏休み終了まで、残り十日今日は皆に集まってもらう日
時間は９：３０、皆が集まるのは１０：００場所は予め教えてある

「なのに、さっちゃんは未だに起きてこない」

「後三十分で皆さん来ますのに」

織斑　千冬、織斑　一夏、篠ノ之　束、篠ノ之　箒、セシリア・オルコット、凰　鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ、更識　簪、柊　涼子このメンバーが五分ごとに二人ずつ家に来る。理由は一辺に来ては周りの人に怪しまれたり、国の諜報員に探られる可能性があるからだ。山田先生は都合により来れず、後日織斑先生から話すそうだ。因みにディーノ、バジル、リディアはもう家に来ている。リディアを家に入れたとき恵美は驚いていたが、互いに自己紹介をし今はディーノ達と同じ待遇をしている

時間が来て最初に織斑姉弟が家に来た、その後は篠ノ之姉妹が、凰　鈴音　セシリア・オルコット、シャルロット・デュノア　ラウラ・ボーデヴィッヒ、更識　簪　柊　涼子、と順に来て、全員が集まり１０：００になった

「恵美、さっちゃんを叩き起こすことを許可する」

「分かりました」

１０：００までは待ってやろうと海斗は思ったがそれでも起きてこないので、叩き起こすことを決断した

数分後

「手こずりましたが何とか起こすことができました……」

疲れた顔をした恵美と顔を洗い眠気の覚めた皐月が座る

「とりあえずは自己紹介から始めよう」

「はーい。この家に住んでいる冥茄　皐月です。よろしく」

「更識　簪」

「リディア・スティール」

「織斑　千冬だ。ＩＳ学園で教師をしている」

「織斑　一夏です。よろしく」

「篠ノ之　箒だ」

「セシリア・オルコットですわ」

「凰　鈴音よ」

皐月が返事をし、自己紹介をする。簡単な自己紹介だが、唯一人名前を挙げない人物がいる

「自己紹介しろ束」

篠ノ之　束はきょろきょろ部屋を見ているが織斑先生からの注意で自己紹介を始める

「私が天才科学者篠ノ之　束だよ」

臨海学校の時より短くなってるのには指摘しなかった

「さて、自己紹介は済ましたし、本題に入ろうか」

恵美が麦茶を人数分持ってきて、テーブルに並べる

「まず訊くが、『風紀財団』を知ってるか？」

この質問にセシリア・オルコットが答える

「当たり前ですわ。風紀財団はその名を世界に轟かせている大きな財団ですもの」

それに続くように凰　鈴音が言う

「聞くところによれば、風紀財団はどの国よりも発言力が大きいみたいね」

更にラウラが付け足す

「軍事の方でもかなり影響力はある。武器や情報提供は必要最低限しかしないみたいだしな。軍のトップも頭が上がらないと聞いた」

シャルロットが思い出したように言う

「確か、風紀財団のリーダーは姿を人前には現さないみたいだよね。デュノア社にも来たけど、その時は代わりの人だったから」

「女尊男卑の世界なのに、リーダーは男、女性の方も特に不満を持った人間は居ないらしいな」

織斑先生も言い、一夏は「詳しすぎないか？」と小さい声で呟いた

「ま、大方そんなものだ。ついでに言うと俺はその二代目だ」

「「「「「「「えええぇ～～～～！！！！！」」」」」」」

一夏達はかなり驚いていた。織斑先生と簪は声には出していないが、驚いているのはよくわかった

「ちょっと、そんなの初めて聞いたわよ！？」

「今言ったからね」

「ニュースでもそんなこと言ってませんでしたわよ！？」

「俺、今学生だから。偶にしか仕事しないんだ」

「それまではいったい誰が……」

「前社長」

「そんな事が世間にバレたら」

「問題だよ。だから他言無用で」

「何故私たちに話すんだ？」

「君達に仕事を手伝ってもらいたいんだ」

皆の質問に淡々と答えていく

一通り質問に答えた海斗は一つの箱を取り出す

「何だこれ？」

一夏が不思議そうな顔で聞いてくる

「これはアレニーレリング。君達に受け取ってほしい」

「その前に黒羽が何をやっているのか聞きたいものだな」

織斑先生が鋭い目つきで此方を見る。まるで嘘やごまかしをすれば容赦しないとでも言うような目つきだった

「表向きは風紀財団だが、裏ではマフィアをやっている。一応、ボスってことになってる」

「「「「「「「「「！！！！！？？？？？」」」」」」」」」

これには全員が驚いた。織斑先生も涼子も予想の上を行っていたのでかなり驚いている。篠ノ之　束は知っていたので余り興味を示さなかったがリングの方には興味を示していた。簪は更識の情報網

で少しだが知っていた

「そのマフィアが力を貸せ、か？」

「力を貸せ、だ。嫌なら拒否しても構わない」

皆は悩んでいる。マフィアという犯罪組織に力を貸すことがどういうことか分かるから、下手すれば”死”があるのだから。だから海斗は選ばせる、強制はさせない

「何で海斗はマフィアに入ったんだ？」

一夏が恐る恐る聞いてくる

海斗は絶対に聞いて来るであろう質問に答えた

風紀財団（後書き）

改めてギリギリですみません

やっと、海斗の過去について証されます。どこまで証すのかは秘密です

風紀財団の前社長は皆さんも想像が付きますよね？

あの人達が海斗の過去に出てきます。楽しみにしてください

感想・指摘ありましたらお願いします

ではまた次回～

海斗江　憎しみを込めて（前書き）

今回は海斗が秘密の一部を皆に証します

レギュラーメンバーも勢揃いです。勿論あの科学者も来ますよ

では本文へどうぞ～

海斗江　憎しみを込めて

第５０話　海斗江　憎しみを込めて

「俺はこの家の人間じゃない。養子として来た」

海斗が喋り出す。誰も口を挟んだりはしない

「お袋は体が弱くて子供が産めない身体だったらしい。でも子供が欲しかったみたいで俺を二歳の時に養子として招き入れたんだ。黒羽　耕造の奴は俺を嫌っていたがな」

海斗は、嫌々黒羽　耕造の名を口にした

「それから二年、お袋は死んだ。黒羽　耕造はお袋が死んだのは俺の所為だと言った」

誰もが何か言いたかったが、何も言えなかった。どんな言葉も海斗にしてみれば同情にしか聞こえないとわかっているから

「俺も自分の所為だと思っていた。更に一年が経って、俺はある日黒羽　耕造が家にいないことに気づいた」

その時、海斗は手を握りしめ僅かに血を出していた。隣に座っていた皐月が海斗の手に自分の手を重ねて落ち着かせる

「置き手紙があって、それを読むと信じられないことが書いてあっ

た」

海斗は席を立ち一度自室に行き、戻ってきてそれをテーブルに置く

織斑先生が最初に読むと顔を驚愕の色に変え、紙の端を握り締めた

「千冬姉？」

一夏が呼ぶとハッとして手紙を読み上げる

「『憎悪なる黒羽　海斗江』」

最初の文から皆は顔を歪めた

「『今まで、貴様は非常に厄介な存在だった。私の材料であった黒羽　美津は貴様が来てから研究には一切関わらなくなった』」

黒羽　美津それが海斗の義母の名前だった

「『黒羽　美津が貧弱なのは私が色々身体を弄くったからさ。だが身体と私の研究と相性が合わなくてな、貴様を研究材料にと考えたのだが、奴が邪魔したんだ』」

奴、それが海斗の義母だとここにいる誰もが理解した

「『私は研究の邪魔をした黒羽　美津を殺した。どうせ、後数週間の命なのだからな』」

そこで織斑先生の声に僅かに怒気が入っているのを一夏が気づいたが指摘しなかった

「『奴を殺し、私は貴様の身体を日に日に弄くり回した。貴様が寝てる間にな、私からの配慮だありがたく思え』」

手紙はそこで終わっていた。織斑先生が読み終わると皆が一斉に此方を見る

海斗は眼帯を外し目を開ける

「「「「「「「「「!!??」」」」」」」」」

織斑先生、一夏、篠ノ之　箒、セシリア・オルコット、凰　鈴音、更識　簪、柊　涼子そして篠ノ之　束までも海斗の持つ目に驚きを隠せなかった。シャルロットとラウラは反射的に目を背けた

「これが弄くり回された結果だ」

海斗の発言に対し海斗の目を見た皆は思った

（何故、笑っていられるのだろう）

そう、海斗は笑っていた。自分を嘲笑うかのように、もう人間では無いと割り切ってしまったから。だから海斗は笑っていた

「何で、笑っていられんだ……」

一夏が口にした。誰も言わなかったことを、言えなかったことを……

「ならどうしろと?泣けってか?無理に決まってるだろ……俺は

先輩みたいに強くないから……」

最後の方は声が小さすぎて誰にも聞こえなかった

「それにしても、何故黒羽は手紙を捨てなかったんだ……」

篠ノ之　箒が海斗に聞きずらそうに訊く

「捨てたよ。それだけ残してたのは、お袋の名前が書いてあるから。お袋の名前を忘れないようにするために残した」

海斗は母親の形見を持っていなかった。血の繋がりもないので、似ているところもない。だからこの手紙を残した

「じゃあ、海斗がマフィアに入ったのはまさか……」

「そう、親を黒羽　耕造を……殺すため」

最後の言葉には殺気が含まれていて、全員が有り得ないものを見るような顔をした

「なあ、六道輪廻って知ってるか……？」

海斗が唐突に訊くと、織斑先生と篠ノ之　束が答える

「ああ、人は死ぬと必ず地獄道　餓鬼道　畜生道　修羅道　人間道　天界道の六つの迷いのある世界に行くという奴だな」

「加えれば、心の状態を表してるんだよね～。例えば天界道に行く人は心が天道、地獄道に行く人は心が地獄って」

皆は感心して聞く。海斗は話を続ける

「詳しいな。俺はその六つを廻った記憶を呼び起こされた。簡単に言えば前世の記憶が存在するんだ」

皆はなぜ海斗がそんな事を話してるか分からなかった

「お前等はそんな俺が怖いか?前世の記憶を持ち、六道の目を持った化物を怖れるか?」

パンッ!

海斗が殴られた。殴った人物を見て、かなり驚いた。海斗を殴ったのは真剣に聞いてないように見えた篠ノ之　束だった

「束さんは他人に興味はないけど、君には興味がある」

今の言葉に一番長く付き合いのある織斑先生が驚いていた。他人に興味を示さない束が何故黒羽　海斗という人間に興味を持ったのか、と深く考えたが答えは分からなかった

「君は化物じゃないよ。私はちーちゃんやいっくん、箒ちゃんにしか興味を持たなかった。けど、初めて他人(ひと)に興味を持った。それが君だよ、黒羽　海斗君。私はマフィアボンゴレにそして、黒羽海斗に全面的に協力する」

珍しく、真面目な顔で篠ノ之　束は言ってきた。だがそこを篠ノ之　束を探していたリディアが止める

「黒羽様、そうなると此方の技術を全て証すことになる。それに

篠ノ之博士の真意も未だに……」

「そうだな。まだ答えを出すのは早いかもしれないが、黒羽　耕造は既にＩＳをコアから作り出している。一戦交えたが相手は強い。涼子も一度戦っている」

涼子は深く頷く。戦ったのは、福音事件の時現れた不明のＩＳ
海斗からでた言葉に何度目になるか分からないぐらい驚いていた。
篠ノ之　束以外にコアを作れる人間、それを既に実戦に投入した事実、余程前から準備してなければ出来ないことだ

「束さん以外にもコアを作れる人がいるなんて……」

「それも海斗を倒した相手でしょ？僕たちに勝ち目なんて……」

一夏が呟き、シャルが海斗が負けた相手では勝ち目がない。そう言うと皆が自信をなくした

「だから俺はこのリングを――」

『海斗！！！ディーノ！！！恵美！！！バジル！！！』

海斗が説明してるときに通信が入る
通信してきたのはリボーンだった

「リボーン、こっちは今――」

『んなことより、来い！！厄介なことになった！！！』

通信を聞いた四人は直ぐにボンゴレアジトに向かうことにした

海斗江　憎しみを込めて（後書き）

今回は早めに出来た。マジ嬉しい！

どうでしたか？
ちょっと分かり難いところがあったかも知れませんが、すいません

束さんあんなキャラだっけ？書いてたらこんなキャラになっちゃいました

さて次回はボンゴレアジトにレギュラーメンバーも行きます。ボンゴレアジトではいったい何があったのか！？海斗は束の技術協力を申し受けるのか！？

乞うご期待！！

感想・指摘ありましたらお願いします

（本音は余り期待しないでほしいです）

暴走匣と答え（前書き）

今回は匣が暴走します。そして一夏達の決断は！？

気になる方は本文へどうぞ

暴走匣と答え

第５１話　暴走匣と答え

リボーンの通信でただ事ではないと感じ、ディーノ、恵美、バジル達と共にアジトに入ったが海斗は後ろに織斑　千冬、織斑　一夏、篠ノ之　束、篠ノ之　箒、セシリア・オルコット、凰　鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ、更識　簪、柊　涼子、リディア・スティールが待つように言わなかったので付いてきている

ドォォォォン！

と大きな音がし、音のした方に向かい、扉を開けると其処には一匹の獣と、リボーンが戦っていた

「リボーン！！……ラル教官！？」

「海斗！！コイツは何だ！？」

リボーンは戦いながら海斗に訊いてくる。ラルは負傷で気絶している。ディーノ達が直ぐにラルをその場から遠ざける

獣は頭が猿のような顔で、足は虎のように鋭く、尻尾は蛇であるその獣の名は――

「鵺だ」

海斗が告げるとリボーンを加勢するためＩＳを展開するが、その

巨体からは考えられない速さで海斗から距離を取る

「これは……」

「骨が折れるな……」

二人は呟き、臨戦態勢に入る

～～涼子ｓｉｄｅ～～

（あの獣……何か変な感じがします……）

涼子は海斗とリボーンの戦いを見ながら、鵺に何かあると感じる

「リボーン、何であいつは、うおっ！？……此処にいるんだ！？」

「大きな音がして駆けつけたら、くっ！……この鵺がいた」

「おかしいだろ！？鵺はどんなリングでも開かなかった！！ちっ！それなのに勝手に匣から出るなんて」

「匣の暴走と考えるのが、自然だな」

会話を聞き、涼子はもしかして、と何かの推測にたどり着く。それを確かめるためにＩＳを展開するが、恵美とシャル、ラウラが止める

「涼子ちゃん、何やってるんですか！？」

「そうだよ！まさか、援護に行くつもりなの！？」

「止めておけ！匣兵器を持っていないのに行っても足手纏いになるだけだ！」

「いえ、行きます。あの子、寂しそうな目をしている」

涼子が言うと、三人は鵺に視線を向けもう一度涼子を見ると既に海斗達のところに向かっていた

～～海斗ｓｉｄｅ～～

（どうする……。このままじゃ、ジリ貧だ……！）

海斗は頭をフル回転させるが、中々良い案が出てこず焦っていた

「海斗！」

「涼子！？馬鹿、来るな！」

「海斗、余所見をするな！！」

涼子が来ているのに驚き隙を見せたが、リボーンの注意によりギリギリで避ける

「海斗！攻撃してはいけません！其方の子も攻撃をやめてください！」

涼子は海斗とリボーンに攻撃をやめるように言い

「あの子は私に任せてください」

「な、何言ってんだ！そんな事――」

「いいぞ」

「――リボーン！！……もし涼子が危ないときは攻撃するからな」

「分かりました」

涼子の発言に反対しようとするが、リボーンが勝手に了承し海斗もやむを得ず了承し涼子の後ろに下がる

「グヴゥゥッ！」

鵺は涼子を警戒するが、涼子は鵺に向かって話す

「大丈夫です。怖くない（・・・・）ですよ」

涼子の言葉に鵺は少しずつ攻撃の意志を無くす。鵺の行動に対して誰もが頭を傾げる、いったい何があったのか、と

「大丈夫です。私達は敵ではありません（・・・・・・・）」

鵺は涼子に近づく、海斗が動こうとしたがリボーンに止められ大人しくなる

涼子は＞フリーダム＜の右腕を部分解除し、顔に触れる。一瞬鵺は牙を剥きそうになったが、気持ちよさそうに大人しくなる

「海斗、あの女は誰だ？」

リボーンの質問には答えず、海斗はじっと見ていた

「海斗、もう大丈夫です。この子寂しかったみたいですよ」

そうか、と海斗は言い、鵺の匣を渡すが涼子は首を傾げる

「えっと、何ですか？」

「涼子が鵺を匣に戻してくれ」

「いいんですか？」

海斗が頷くと、涼子は鵺に戻るように頼み、匣に戻る

「おめぇ、何者だ……。さっきのは何だ？」

リボーンが警戒しながら訊く

「私は柊　涼子です。先程のは言葉を交わしただけです」

「言葉……まさか、言霊か……？」

織斑先生が顎に手を当て、涼子に尋ねる

「言霊？使ってませんよ。使い方も分かりません」

涼子は首を振り、否定する

「そんな事より、何故篠ノ之　束がいるんだ?それに部外者も勝手に入ってる見てえだし」

「すまねえ……俺の後を勝手について来たみたいだ」

リボーンが海斗を睨みつけ、海斗は謝る

「これが匣か～。どんな仕組みなのか、解体してみようかな～」

篠ノ之　束が涼子の手元にある、真っ白な匣を見ながらとんでもないことを言う

「そう言えば海斗様、何故この匣は白いんですか?」

「さあな。でもこの匣はどんな属性でも開かなかった。……大空でもな」

その時海斗は何かを思いだしたように慌てた様子でリボーンに訊く

「リボーン鵺はいつの間にかこの部屋にいたんだよな!?」

「ああ、そうだぞ」

「他の匣達は!?」

「それなら、ジャンニーニ達が確認に向かってるぞ」

そう言われてとりあえず戻ってくるのを待つことにした

「お待たせしました。十一代目ご無事みたいで何よりです」

「それより匣は!?」

「大丈夫。どれも無事だったよ」

「俺達のこと忘れてないか?」

匣が無事だったことに安心した海斗は胸を撫で下ろす
そして、今更になって一夏達は蚊帳の外だったのに気づいた

「悪い悪い。忘れてた。ようこそ、ボンゴレアジトへ」

「スパナあそこに居るのって……」

「篠ノ之　束……」

正一とスパナが篠ノ之　束を見て驚いている

「それに、『ブリュンヒルデ』の称号を持つ織斑　千冬……」

「更には各国の代表候補生と織斑　一夏……。これほどのメンバーがボンゴレに……」

一夏達を見て、これほどの人材が、と呟き海斗に話しかける

「海斗君。彼等はボンゴレに加入するのかい?」

「まだ分からない。ジャンニーニ、一応イタリアから先輩方にアジトに来るように伝えてくれないか?」

「わかりました」

ジャンニーニは部屋を出ていく

「正一、スパナＩＳの完成度は？」

「８９．７６％完成してる。後一日待ってくれ」

「わかった」

「黒羽さん、何をしているのですか？」

ＩＳの完成度等を訊いてると、セシリア・オルコットが話しかけてきた

「ちょっとな……。お前らちょっと来てくれ！」

皆が海斗の呼びかけに集まり、別の部屋へと場所を移す。ディーノとバジルはラルを医務室に運んでから、此方と合流する。リボーンは海斗の方に乗っている

「あいつ等をボンゴレに引き込むのか？」

「そのつもりだが、あいつ等次第さ。強要はしない。自分自身の道、だからな」

「それと、柊　涼子だが、ボンゴレには欲しいぞ」

「同感。でもやっぱり強要は出来ない」

「お前らしいな」

海斗は別の部屋にたどり着き、部屋に入る。
後に皆が続き、海斗が適当に座るように促し、各々自由に座る

「さて、話の続きだが――」

「待ってくれ海斗」

一夏が海斗の言葉を止める

「俺は海斗に協力するぜ。海斗は友達だからな」

「一夏が言うなら私も協力しよう」

「アタシも手伝ってあげるわ」

「わたくしも、一夏さん達と同じ答えですわ」

「僕も、海斗を手伝うよ」

「ふむ。なら私も協力しよう。妻を支えるのは夫の役目だ」

「全く、本物の馬鹿共だな」

織斑　一夏、篠ノ之　箒、凰　鈴音、セシリア・オルコット、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒが協力を了承してくれた。織斑　千冬は一応、協力と言うことでいいみたいだった

「海斗、それは死と隣り合わせ何ですよね？」

唯一了解していない涼子が訊いてくる

「当たり前だ。だから無理強いはしない」

「私が協力してその後に裏切ったら……どうします？」

まるで、試すような物言いに海斗は少し可笑しくなった

「そりゃ普通なら殺すしかないだろう」

「海斗に殺せるんですか？」

「普通なら、と言っただろ？俺は涼子を殺せないかも知れない」

「それはいったいどういう意味ですか？」

「特別な存在、と言うことだ」

その言葉にシャル、ラウラ、簪、恵美が何かを言おうとするが、皐月がそれを止める

「意地悪ですね。わかりました、私も協力します」

「ありがとう」

海斗は皆に礼を言い、リングを懐から取り出しリングを渡す。

涼子には真っ白な鵺の匣を預けている。鵺はリングではなく、声によって開匣されると予測される、故に沈めることのできた涼子に匣を渡す

いつの間にか時刻は１６：００を過ぎていた、昼飯を食べずにずっと話しとトラブルがあった

今日は解散とし、明日にはまた、同じ時間に集合することを伝えた

暴走匣と答え（後書き）

皆さんどうもホリです

夏休み編も終盤です。長かった、とは言ってもまだ続くんですが……
暴走した匣は鵺にしてみました。所持者は涼子さんです

次回は皆のリングと海斗の先輩が登場します！

感想・指摘ありましたらお願いします

ではまた次回お会いしましょう

P．S．

感想があればやる気が向上します

ボンゴレ十世（前書き）

とうとうあの方々が登場！！！

本文へどうぞ！！

ギリギリ今日中に終わった……

ボンゴレ十世

第５２話　ボンゴレ十世

「それじゃあ、リングに炎を灯すやり方はディーノ達に訊いてくれ。涼子と簪は俺と一緒に付いてきてくれないか？」

「……何で？」

「簪はＩＳが完成したんだ。涼子はＩＳを死ぬ気の炎使用に改良しないといけないから。リングについては後で教えるから」

朝１０：００

一夏達はボンゴレアジトに来て、早速リングを灯す。因みに現在ボンゴレアジトに居る面々とは自己紹介をしてある

簪はとうとうＩＳが完成し、簪に合う匣等を決めるために付いてきてもらう

涼子はリングだけなら平気だが、匣を使うとなるとＩＳ事態がそれに耐えられる可能性はかなり低いので、少しばかり改良しないといけない

「ですが私の場合はお父さんとお母さんに許可をもらわないと……」

涼子のＩＳは柊研究所で造られたことになっているので、一応許可は必要なのである

「大丈夫。すでに許可は取ってあるから」

「用意周到、と言うわけですか」

海斗は事前に連絡していてすでに許可をもらっており、それを聞いた涼子は感心半分呆れ半分をした顔になり、とりあえず部屋を出ることにした

「スパナいるか？」

「海斗、ウチに何かようか？」

「涼子のＩＳ、＞フリーダム＜を死ぬ気の炎使用にしてほしいんだ」

「わかった。時間は三時間待ってくれ」

「了解」

涼子を残し、海斗と簪は別の部屋に行く

「ジャンニーニ、正一連れてきた」

「うん。こっちも最終確認が今終わったところ」

「これが私たちが開発した新しいＩＳ＞キアリタ＜です！」

ジャンニーニが勢いよく名前を口にし、簪はジッとＩＳを見つめる

「キアリタ……イタリア語で清澄、か……」

海斗はぼそりと呟き簪の肩に手を置き

「簪、これを受け取るか？」

最後の意思確認をする

「ありがとう」

簪はそう言い、新しいＩＳ＜キアリタ＜に触れ、優しくなぞるように手を動かす

「このＩＳには他とは違う特徴があるんだ」

正一が海斗だけに聞こえるように言う

「それは――」

「久しぶりのアジトだ」

正一が説明しようとしたら誰かが部屋に入ってきた

「ん？お、海斗久しぶりだな」

「せ、先輩！？」

入ってきたのは七人。七人とも海斗とは知り合いだった

「一々、イタリアから呼び出したんだ。つまらねえ用事じゃ――。何で更識がここにいるんだ！！」

海斗に文句言おうとした人物とは別の人が簪に襲いかかろうとする

ガギン！

「やめてください」

「邪魔するんだ、なら君も一緒に――」

「構いません」

簪に向けられた攻撃を防ぎ、海斗は簪を守るためなら自分もやられるのも構わないという

「リボーンはこの事知ってるの？」

一番最初に部屋に入ってきた人が海斗に訊く

「はい」

「小僧が言いって言ったんならいいんじゃないか？」

海斗が頷いて答えると、リボーンの事を小僧と呼ぶ人物が皆に聞くが

「ふざけんな！！更識は九代目を手に掛けたんだ！それを赦しておけるか！！！」

「極寺君、落ち着いて！」

「ですが、十代目！！」

極寺、そう呼ばれた人物は止めようとした人物を十代目と呼ぶ

「綱吉先輩、話を聞いてもらえますか？」

十代目、綱吉と呼ばれた人物は頷き、形だけの自己紹介をする

「ボンゴレ十代目　沢田　綱吉です」

「ボンゴレ嵐の守護者　極寺　隼人お前と仲良くするつもりはねぇ」

「ボンゴレ雨の守護者　山本　武よろしくな」

「ボンゴレ晴の守護者　笹川　了平極限によろしく頼むぞ」

「ボンゴレ雷の守護者　ランボ　よろしくお願いします」

「雲雀　恭弥僕の前で群れたら咬み殺す」

「霧の守護者　六道　骸とは言ってもボンゴレに入る気はありませんが」

「……さ、更識　簪、です……」

一番敵意を感じてるのは極寺　隼人であった。簪は海斗の後ろに隠れながら自己紹介する。

因みに雲雀　恭弥は雲の守護者だと教えた

「久しぶりだな」

「リボーン！！」

自己紹介がすむとタイミングを計ったみたいにちょうどリボーンが入ってきた

「リボーンさん何で更識が此処に居るんですか！？」

「海斗に聞け」

「海斗どういうことだ！！」

「今から話しますって。隼人先輩落ち着いて下さい」

海斗は簪が此処にいる経緯を話した。途中で了平が分からないと言ったが、隼人が仕方なく分かり易く説明していた

途中簪は海斗が十代目と守護者を全員先輩と呼んでいる事に気づいた

「と言うことなんですけど……」

「信じ難いですね。もしかしたら、ボンゴレの技術を盗むための演技かも知れませんよ」

骸が簪を見ながら、海斗に訊く。簪は海斗の袖を掴み震えていたが、海斗は優しく頭に手を置き

「簪は暗くて、悲しそうな目をしてました。だから……」

「クハハハッ！一生懸命ですね。いいでしょう其処まで言うなら

賭けてあげましょう」

骸は笑いながら海斗にそう言い、海斗は他の人たちを見る

「ツナどうするんだ？」

「更識さん一つ聞いて良いかな？」

「……はい。あと、簪で…いいです」

「簪さん、海斗は君を本当に守りたいと思ってる。君は何のために海斗の側にいるの？」

「海斗に助けってもらった恩を返したい！だから、海斗と一緒にいる」

力強く、そう答えると綱吉は優しく微笑み

「まあ、合格かな」

「十代目！？」

「いいんだよ、極寺君。彼女は今海斗に恩を返したいと思ってるのは本当みたいだから」

「十代目がそう仰るのでしたら」

隼人は大人しく引き下がった。他の守護者も特に何も言わないので簪はボンゴレに置くことになった

「それで、海斗俺たちを呼んだ理由は？」
綱吉が海斗が呼んだ理由を訊いてくる
「はい、ご報告が何件か。まず一つ目が、無の匣が開匣されました」
「「「「「「「「！！！」」」」」」」」
この言葉に綱吉とその守護者達はかなり驚いた顔をする
「原因は匣の暴走」
「炎を注入していないのに？」
恭弥が気になることを直ぐに口にする
「おそらくは、ある人物の影響……そう考えています」
「柊　涼子だな」
「うん。彼女は無の匣…鵺を静めた。言霊を使って……」
リボーンがその人物……涼子の名前を言い、海斗は頷き言霊を使って静めた事を言う
そして、彼女の力が何かの影響で匣が暴走したと海斗は考えている
「その柊　涼子に会える？」
「はい。此方です」

海斗はスパナと涼子が居る部屋に皆を案内した

「海斗、そちらの方々は？」

「俺の先輩」

涼子はしばらくジッと見つめていたが、ハッとして目をそらした

「どうした？」

「あの人、海斗と同じ目をしています」

涼子は骸をチラッと見た後海斗の眼帯をみる

「ま、アイツはその噂を聞き呼び覚ましたんだから」

そうですか。と涼子は言った後今度は一人一人見る

（でも、これは不完全だ。使いすぎれば――）

海斗は骸と違って六道輪廻の力が無くても身体に負担が掛かっているので、余り使わないようにしている

そんな事を考えているといつの間にか自己紹介をすましていた

「それじゃあ、早速で悪いんだけど無の匣見せてもらえないかな？」

「無の……匣……？」

「鵺の入ってる匣の事だよ」

涼子は真っ白な匣を出し

「鵺お願いします」

そう言うと、炎を注入していないのに開匣され、戦ったときより小さい鵺が出てくる

「小さいね」

「そうなんですよね。多分ですけど、機嫌がいいからだと思います」

涼子は鵺の頭を撫でながら、そう言い。鵺は気持ちいいのか大人しくなる

「それが……」

「はい。鵺です」

海斗がそう言うと、綱吉は鵺の近くまで行き、触ろうとするが

「!?」

驚いて涼子の後ろに隠れてしまう。人見知りではないのだが、人と接しようとはしない

「あ、鵺！すいません、沢田さん」

綱吉は気にしないでと言いリボーンと戦ったときの話をしている。
涼子は鵺を匣に戻すと、スパナのところに戻り自分のＩＳがどうなっているのか見ている

「……海斗、そろそろ…」

「あ、ああ、そうだな。早く匣決めないとな」

海斗は皆に簪のＩＳの話をし、ＩＳの匣を決めるために部屋を出ていく

ボンゴレ十世（後書き）

いやー出てきました。ボンゴレ十代目と守護者が！！！
合格はもらいましたが簪さんとはまだ和解してません。まあ、その内和解させます

では次回は、一夏達と対面、ボンゴレに何を学ぶのか！？

乞うご期待……？

感想・指摘ありましたらお願いします

ではまた次回～

リングと炎（前書き）

一週間振りか……最近多いな

まあ、書けたから良しとしよう

本文へどうぞ

リングと炎

第５３話　リングと炎

先輩達と別れた海斗と簪はリング、匣が置いてある部屋に向かっている

「簪、悪かった」

「何が？」

「先輩達と合わせてしまったことに……」

「……気に、しないで」

海斗はなるべく合わせないように注意していたのだが、ＩＳの完成で気がゆるんでいた

「希望とかあるか」

「……え、えっと……全距離型が、ほしい」

海斗が武器のタイプを訊くと少し恥ずかしそうに、そして遠慮がちに言ってくるのに対し、海斗はわかったと言った

部屋に入り、簪に再度属性の確認をする。すると、雨の属性が強いのには変わりないが、雷の属性が混ざっているのに気づいた

「簪、お前すごいな……」

「？」

いきなり海斗が褒めるので簪は訳が分からなかった

「普通死ぬ気の炎は一人に一つの波動が流れてるんだ。だが、簪からは二つの波動が流れている」

「それって……すごい、こと……？」

「当たり前だ。俺と恵美、さっちゃんは複数だがそれも珍しいんだ」

海斗は身近にいる人を例に挙げる

「じゃあ早速決めるか。簪、ＩＳ展開してくれ」

「……おいで、＞キアリタ＜」

ＩＳの名前を呼ぶと、＞キアリタ＜が展開される

「えっと……＞キアリタ＜に使う属性は雨と雷に設定。それ以外の属性は責任者の許可により使えるものとする。リングは精製度Ａの雨のリング×２、精製度Ｂの雨のリング×１、精製度Ａの雷のリング×２を使用。匣は雨の匣×２、雷の匣×１を使用。……ま、こんな物だろ」

海斗はリングと匣を＞キアリタ＜に量子変換する

「海斗、ありがとう」

「い、いや、気にするな」

簪が微笑みながらお礼を言われて、海斗は一瞬ドキッとした

「海斗……量子変換、終了……した」

「ん？ああ、わかった。それじゃあ、次は試運転やるか」

簪は頷き、ＩＳを待機状態にし、トレーニングルームへと向かう

「よう。調子はどうだ？」

一夏達に修行の様子を聞くために部屋に入ると、そこには先輩方もいた

「部外者は立ち入り禁止だよ」

「だから何度も言ってるでしょ！！アタシ達は黒羽に呼ばれたの！」

何か言い争っているのでとりあえず事情を聞く――

――内容はトレーニングルームに入った綱吉達が一夏達を見つけ、後から来た恭弥が勝手に入ることに許せないものがあるからしい

「恭弥先輩落ち着いてください」

「僕は冷静だよ。今僕の目の前にいる彼女を咬み殺す事も簡単なほどにね」

「ちょっと待ってください。彼女等を入れたのは自分です。それに此方に協力をしてくださる人達なんです」

恭弥は貴重な戦力を失うわけには行かないね、と言い近くの壁により掛かった

「はぁ～。それで、リングに炎は灯せたのか？」

「一応は、な。まだまだ弱い炎だ」

「最初はそんなものだ。炎が灯せるなら見せてくれ」

弱い炎でも、炎を出すのが今回の及第点となる。

ディーノ達を疑うわけではないが海斗は自分の目で見たいので早速炎を出してもらうことにした

綱吉達も気になるようで、此方を見ている

「俺から行くぜ。……覚悟を、炎に……」（俺は、守りたい。強くなって……この手の届く範囲だけでも、強くなって守りたい……！！）

一夏の覚悟が炎に変わり、黄色の炎、つまり晴の炎が微弱ながらも出る

「よし。とりあえず合格だ。だが、炎になれるために出し続けろ」

海斗は一夏にそう言うと、次の人を呼ぶ

「篠ノ之　箒。やってくれ」

「その前に、その……名前で構わない。壁を作られてる見たいで落ち着かない」

「わたくしも名前でよろしくてよ。理由は、箒さんと同じですわ」

「アタシも名前で呼んで良いわよ。その代わり、こっちも名前で呼ばせてもらうから」

箒、セシリア、鈴音を名前で呼ぶことになり、海斗も名前で呼ばれることになった

「それじゃあ、箒。炎を……」

「ああ、わかった」

（絢爛舞踏を発動したときと、同じ気持ちで……か。あのとき私は……私は、一夏と共に戦いたい。そして、あの背中を守りたい！！）

箒の覚悟に反応して紫色の炎、つまり雲の炎が微弱ながらも出る

「一夏と同じ様に炎を出してろ。次は？」

「わたくしが行きますわ」

（心を静めて、流れを感じる……。ＢＴ兵器を操作するように……流れを……）

セシリアが念じると、青い炎、つまり雨の炎が微弱ながらも出る

「よし。三人とも、よくやるな。次」

「アタシの番ね」

（さっきので、感覚は掴めたから、同じ気持ちになるだけ。……もし、一夏が知らないところで、知らない奴と付き合ったら……殺す）

鈴音のムカツキに応え、緑色の炎、つまり雷の炎が此方も微弱ながら出る

「ふむ。微弱だが、よしとするか。次」

「僕がやろうかな」

（あの時、海斗は僕を闇から救ってくれた。……今度は、僕が……私が、海斗を救いたい！！救える力が欲しい！！）

シャルの覚悟に応え、赤い炎、つまり嵐の炎が微弱だが確かに出ている

「これも微弱……まあ、最初だからな。最後、ラウラ」

「ふむ。行くか」

（軍人であり、兵器である私を、海斗は普通の……一人の女として扱ってくれた。なら、私も海斗がどんな姿になろうと、守り抜いてみせる！！）

ラウラの覚悟が炎に変わり、藍色の炎、つまり霧の炎が微弱だが

出ている

「皆微弱。だが、及第点だな。さて……」

海斗がどうしようか考えてると、今まで見ていた綱吉が海斗に一つ提案する

「海斗、今日は皆を泊めていったら?修行の時間も有効に活用できるし」

「え、いいんですか?迷惑になったりは……」

「そんな事言ってる場合じゃねえだろ。次いつ襲ってくるか分からねえんだ。備えなきゃやられるだけだろーが」

「隼人先輩……そうですね。時間は戻りませんからね」

海斗は納得して、保護者である。織斑先生に泊まることとその趣旨を話すと、織斑先生自身は賛成した。次に一夏達に聞くと、皆ＯＫした

「それじゃあ、一度戻って、荷物を持ってきてくれ。時間は１２：３０までに来ること」

現在時刻、１１：３０なので今から帰して１２：３０に集まれば、後三十分で＞フリーダム＜の対死ぬ気の炎に出来るので、それなら簪の試運転と、修行を考えたら丁度良いと考えた
念の為ＩＳを必ず持ってくるのを伝え、一度帰した

リングと炎（後書き）

皆さんお久しぶりです

今回は一夏達の属性が決まりました

此処でもう一度言います

一夏……晴

箒……雲

セシリア……雨

鈴音……雷

シャル……嵐

ラウラ……霧

こうなりました、もしかしたら複数の炎が使えるかも知れません

感想・指摘ありましたらお願いします

ではまた次回～～

そう言えばディーノ達の会話が少なすぎる気が……

それぞれの家庭教師（前書き）

皆さんメリークリスマス

プレゼントは今回の話です。と言うのは冗談です

では、本文へどうぞ！

それぞれの家庭教師

第５４話　それぞれの家庭教師

一夏達が一度荷物を取りに帰り、戻ってくると海斗が全員の本気の実力を確かめるために、マンツーマンで家庭教師を付けることにした

「一夏と箒は剣を更に鍛えてもらうために武先輩に家庭教師をやってもらいます」

「二人とも剣士なのか？」

「はい。俺は白式の武器は雪片がメイン武器です」

「私は空裂と雨月がメイン武器です」

一夏と箒は武に自分の得意武器を話すとそれを理解し、早速実力を見ることにした

「武先輩、これを！」

「久しぶりに思いっきり、振ってみるか！」

海斗は時雨金時と雨の匣を渡し、それを受け取った武は意気込みながら別の部屋に移った

「鈴音は恭弥先輩……ってあれ？恭弥先輩は？それに骸先輩も…

…」

「あの二人なら闘士を燃やしながら出て行ったぞ」

「またですか。帰ってきて、鉢合わせすると直ぐに戦い出すからな……」

海斗はしょうがないと言い

「鈴音には了平先輩お願いします」

「うむ！極限に任せろ！」

「……何か苦手なタイプ……」

了平はやる気十分だが、鈴音はそのやる気に付いていけないみたいだ

海斗は苦笑しながら了平に晴の匣を渡す

「先ずは、アジトを一周だ！極限ついて来い！」

「え！？ちょっと、待ちなさいよ！！」

了平と鈴音は走りながら部屋を出て行った

「まあ、頑張れ。……セシリアとシャルは隼人先輩お願いします」

「何で俺が二人も指導しないとならねえんだ！」

「そんな事言われても、射撃武器は隼人先輩だけだし……。頼り

にしてるんですが」

海斗は綱吉を一度見て、視線で「綱吉先輩からも何か言ってください」と送ると、それを理解した綱吉は隼人に

「極寺君、俺からも頼むよ。この中で適任なのは極寺君だけなんだ」

綱吉がそう言うと

（じゅ、十代目が俺に頭を……）

「わかりました。極寺　隼人精一杯やらせていただきます！」

敬礼しながらそう言いセシリア、シャルの方を向き

「いいか、これから俺が教え込むからな！途中で逃げ出すのは許さねえからな！」

「このセシリア・オルコット、途中で逃げ出すなんて事しませんわ」

「僕も、強くなれるならお願いします」

凄い意気込みだな、と感心しながら嵐の匣を隼人に渡すセシリアとシャルは隼人共に部屋を出て行った

「ラウラは骸先輩に家庭教師をやってほしかったけど……いないからな。……クローム先輩も疲れてるし。……よし、恵美頼んだ」

「私ですか？まあ、構いませんけど」

「よろしく頼む」

いきなり指名されてびっくりしていたが、別に構わないと言い。ラウラも特に文句無しみたいなので、二人は別の部屋に移った

「簪には俺がついてた方がいいんだろうけど、涼子が戻ってこないからな」

悶々と考えていると綱吉が海斗に一つ提案をする

「海斗、彼女は？」

綱吉が皐月を見ながら聞いてくる

「さっちゃんは綱吉先輩にお願いしたいんです。でもそうするとランボが……」

「海斗さん俺も、強くなりましたよ」

海斗が心配そうな目でランボを見る

因みに海斗がランボを先輩と呼ばないのは、ランボは十五歳。海斗は十六歳だからで年下だからである

「そ、そんな目で見なくても……」

「ならこうしよう。綱吉先輩とランボはさっちゃんと簪の相手をしてください」

「海斗はどうするの？」

「涼子を待ちます。後十分で来るはずですので」

「わかった。それじゃ、行こうか」

「「はい」」

綱吉に大空の匣を、ランボには雷の匣を渡し、別の部屋に移動する。皐月と簪はその後をついて行く

海斗が一緒にしたのはランボが力不足なだけではなく、もしかしたら簪が抹殺されかねないので、皐月と一緒にする事にした

（頼んだよ。さっちゃん）

「織斑先生、一つお願いが……」

「何だ？」

現在この場に居るのは、織斑先生とリディアだけ、ディーノとバジルはいつの間にか居なくなっていた束を探すために、アジト内を走り回っている

「言われなくても、手続きならしてある」

「ありがとうございます」

海斗は礼を言うが織斑先生は一夏達が出た扉を見ながら

「もし、あいつ等に何かあったら……赦さないからな」

承知してます、と言い海斗はその目に必ず守ると言う目をしていた

三人でその場に居ると漸く＞フリーダム＜の対死ぬ気の炎が終わったみたいで涼子が部屋に入ってきた

「お待たせしました。って皆さんは？」

「とっくに修行を開始してるよ。涼子も早く始めるよ」

「はい。私は何をすれば良いのですか？」

「ああ。それは……」

「僕が相手になるよ」

「恭弥先輩……終わったんですか？」

涼子に修行内容を伝えようとしたら、恭弥が不機嫌な顔で部屋に入ってきて、自分がやると言い出した

「骸先輩と勝負できなかったみたいですね」

「いつでも勝負できるから、気にしてないよ」

（顔は滅茶苦茶不機嫌そうだけど……）

「涼子相手をしてもらったら？」

「わかりました。よろしくお願いします」

海斗が恭弥に雲の匣を渡すと、匣を開匣させ、ロールが高速で回転しながら涼子に向かっていく

「鵺！」

涼子は名前を呼ぶと匣が開匣され、鵺が姿を現しロールの攻撃を防いだ

「ワォ。雷でもないのに防ぐなんて……。でも、気を抜けば死ぬよ」

リングの炎を更に大きくすると、鵺が痛み声を上げる

「君達の才能をこじ開ける」

「才……能？」

鵺は蛇の尻尾でロールを弾く

「なる程、一度死を味わった方がいいね」

「恭弥先輩……？」

海斗は恭弥が何を考えているのか分からなかった

恭弥はニヤリと笑みを浮かべ、ロールが急速に増殖していき、涼子と鵺を閉じ込めた

それぞれの家庭教師（後書き）

改めまして、メリークリスマスです

まさかのクリスマスに投稿とはタイミング良かった見たいですね～

さて、次回の話
それぞれについた家庭教師、ボンゴレは皆の実力をどう評価するのか？そしてロールに閉じ込められた涼子と鵺は！？

では、また次回～～

感想・指摘ありましたらお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2451u/

ISインフィニット・ストラトス ボンゴレを受け継ぎし者

2011年12月24日00時47分発行